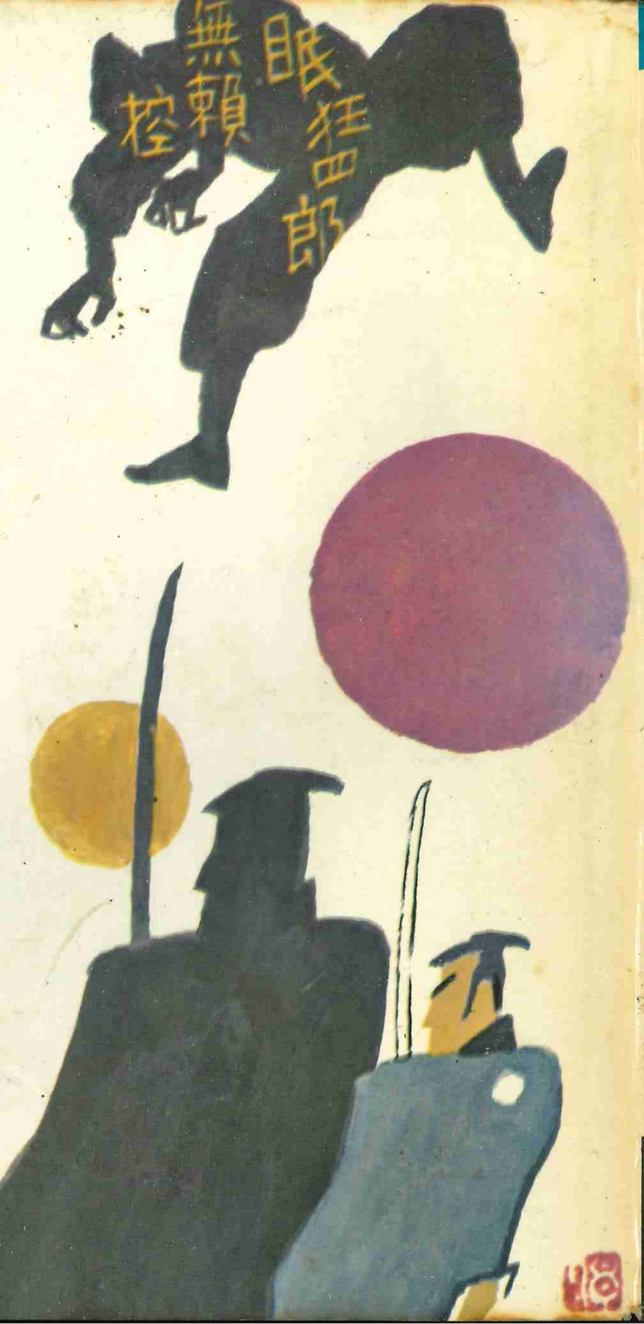
甲賀忍組

柴田錬三郎



POPULAR BOOKS



甲賀忍組

柴田錬三郎

POPULAR BOOKS

甲賀忍組

柴田錬三郎

眠狂四郎
無頼控

映画化・テレビ好評連続放送

野心に燃える幕府の重臣・土方縫殿助が、次々企らむ謀計は、遂に天皇御璽を狙い、その命をうけた甲賀の忍者と対決する眠狂四郎の円月殺法地摺りの剣と、狂四郎に影の如くにつき従う神出鬼没の快盗・鼠小僧次郎吉……テレビに、映画に、益々好評の眠狂四郎シリーズ。異妖時代長編。

桃源社刊　360円
0293－071122－5180

POPULAR BOOKS

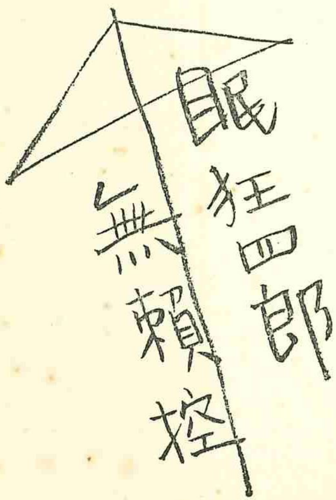
甲賀忍組

柴田錬三郎

甲賀忍組

柴田錬三郎

〈ポピュラー・ブックス〉



目次

装幀　御正伸
挿絵　鴨下晁湖

甲賀忍組

眠狂四郎無頼控

奇跡くずれ

一

「……船人これを見るよりも、よい慰みと、たわむれの、気違いよ気違いよと手を打叩き、囃すにぞ、狂女は聞いて振返り、アア気違いとは、曲もなや、物に狂うは我ばかりかは、鐘に桜の物狂い、嵐に波の物狂い、菜種に蝶の物狂い……」

　つい二年あまり前、山王祭礼のおりの踊地として杵屋三郎助（後の十代六左衛門）のつくった「賤機」が、日傘の下から流れ出ていた。

　ここ——呉服橋御門から鍛冶橋御門への、堀端で、奉行所につづいて、松平丹波守、林肥後守、松平越後守と、広壮な上屋敷の高い塀がつづいていた。

　雲も溶けて流れたかと思われるくらい、ぎらぎらと煌く日輪の下で、往還には、日傘をかざして、うたって行く老人とそのつれの、ふたつの影しかとどめぬまひるであった。

　老人は、六十がらみであろうか、鼻梁の異常に高く張ったのが目立つ、みごとな風貌であった。蟬の羽に似た紗の羽織をまとって、白足袋をはき、雪駄を涼しげに鳴らして、一向に、この炎暑が苦にならぬうたいぶりであった。

　つれは、まだ三十前の平凡な顔だちの男で、これはひどく地味な木綿ものを着て、渋手拭いで吉原被りをしているのも、粋ではなく、暑さを避けるためであったろう。

「……三つの模様を、刺繍にして、愛しわが子に着せばやな、子を綾瀬川名にも似ず、心関屋の里はなれ、縁の橋場の土手伝い、行きつ戻りつ、此処かしこ……」

　ふと、うたうのを止めた老人は、傘をあげて、堀から飛び立った水鳥の群の行方を、目で追った。

「放仙——」

「はい」

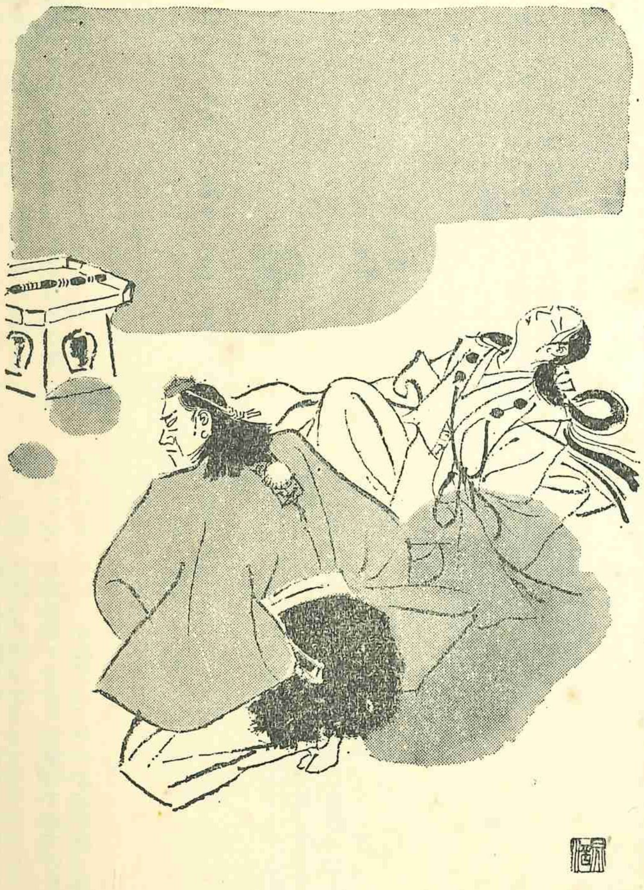
「いま飛んだ鳥は水面に何羽いたな？」

「十三羽ではございませんか」

　若者は、即座にこたえてみせた。

「ちごうたな。十五羽だった。むこうへ翔けたのは、たしかに十三羽じゃが、うしろのかたへ、二羽が、群を離れ居ったぞ。うしろも見えぬようでは、一人前にならん

の」
「お言葉ではございますが、うしろも見て居ります。どうやら、わたくしどもを尾けている男が居ります」
「ふふふ、お前は、左手に、平賀源内のうぬぼれ鏡をかくし持って居ろうが——。それに、尾け人を写して見なくては、尾けられているのが判らんとは心細いの」
「どうも、お師匠の目は八方睨みです」
若者は、苦笑した。
半町ばかりうしろの地点を辿っているおり、若者は、なにげなさそうに、右手をひたいにかざすしぐさをしめしたのだが、その瞬間、左のてのひらにひそめた鏡をつかったのである。右手を挙げて、それに自分の目を注ぎ、他人の目や神経をこちらへひき寄せる。実とみせての虚である。同時に、左手がどんな働きをするかは、自分の右手にさえも、知らせてはならぬ。眸子（ひとみ）は、動くともなしに動いて、鏡に映ったものを見てとっているのである。
……この二人は、手妻遣い（奇術師）であった。
師匠は、胡蝶斎といった。その名は、上方までひびいていて、軽妙洒脱な芸風は、西両国の高小屋で、他の軽業や曲独楽や手裏剣打ちに比して、水際立っていたものである。いまは、隠居して、弟子のこの若者に、舞台をゆずっていた。曽つて、前将軍家の御前で演じた「胡蝶夢」の神技は、いまだに語り草になっている。
大奥の御座所二の間の中央に、繚乱と咲きほこる牡丹を、大鉢に植えて、据えておき、胡蝶斎は、一折の白扇と一枚の白紙を持ってあらわれ、まず白紙のうらおもてをあらためて、指さきで蝶のかたちに截るや、白扇をぱっとひらいて、さわさわと、その作り蝶を煽いだ。すると、それは、翅をゆるやかに上下させつつ、宙に舞いあがったとおもうや、花から花へ、飛びかよい、つと、花びらにとまって翅をやすめる風情も真を写した。のみならず、ふたたび、舞い立つや、いならぶ侍女たちの脂粉の香に迷うごとくに、その座へ近づいた。侍女のひとりが、思わず、袂で払おうとすると、たくみに、ひらっと躱（かわ）して、円弧を描き、片はずし髪の笄（こうがい）の端へ、ちょんととまった。手をのばしてつまみとろうとするや、ふわりと逃げて、やがて、お上段の公方の前へ、落ちた。把りあげてみると、やはり、白紙を截ったものにすぎなかった。この時、胡蝶斎の名を賜わったのである。
弟子の若者は放仙といい、手妻のほかに、その柔軟な弾力性のある肢軀を利用して、大胆な抜け業を得意としていた。（いたるところの関節を外すことも、元へ戻すことも自由自在であるのが秘訣であった）さき頃、演じ



た「百両賭」の放れ業は、これを目撃した人々のまぶたのうちにまだ奇跡のように鮮かである。
　日本橋小網町の料亭へ招かれて、手妻をみせた時、客の一人の浅草御蔵の札差が、
「本縄をかけて、川へ投げ込んでも、おぬしは抜けてみせるか。百両賭けるがどうだ？」
　と、云い出したのである。
　本縄というのは、獄屋で使う縄のことで、五尋ある。
「やってみましょう」
　放仙は、承知して、自分の方から、晒縄にしばってくれとたのんだ。これは、晒者にかける方法で、いちばん厳重に、結び玉を多くする。手足が、びくともできないくらいのしばりかたをされた放仙は、平然として、料亭の前の思案橋から、川の中へ、抛り込まれたのであった。
ところが——。
　ものの三分も経たないうちに、放仙は、落ちた同じ場所へぽっかり浮きあがるや、小面憎くも、立泳ぎつつ、いつの間に酒席から掠めていたか、銚子と猪口をとり出して、一杯やってみせて、一同を唖然とさせたのであった。その銚子をしらべてみると、ちゃんと酒が入っていたという。
　これから、どこへ赴こうとするのか——この稀代の名人主従は、鍛冶橋御門の前を、馬場先御門へ抜ける往還へ、つと、まがって行った。
　すると、十間あまり後方から歩いて来ていた黒塗桶を担いだ油売りが、大急ぎで、そのあとを追った。
　ところが——。
「おっ！」
　と、瞠った目のとどくかぎりの視野から、主従の姿は、煙のように消えうせていたのである。
「畜生っ！」
　いまいましげに舌うちした油売りは、次の瞬間、間抜けたおのれの姿を、どこからかあざ笑い乍ら見まもっている主従の視線を感じて、ぶるっと身顫いしたことだった。

二

　それと同じ時刻——。
　金八は、くるっと尻をまくって、威勢よく、とっとと両国橋を渡り乍ら、大声で、世話言葉のいの字つらねを、やっていた。
「いろはのいの字は、いのちのいの字、とくらあ——一番がけに一目散、一生一代一心不乱に、一部始終を一から十まで、一々吟味で一生懸命、一生の想いだ、いまが

いまこそ一家一門、一身一生の一大事、一寸さきはまっ暗闇、一事が万事、一粒万倍、一度あること二度起る、いでや一念祈りをこめて、一寸の虫にも五分の魂、活かしつ殺しつ、生き身は死に身、いのちあっての物種と、いわしの頭も信心から、いわぬはいうにいやまさる、いすかのはしとくいちがい、石部金吉、色には無縁で、いんぐりっしゅじゃいんぽてんつだ、いたしかゆしは犬の蚤、鼬の道切いまわしや、いやでも応でも、祝い言して、いやいや三杯、犬死同然、いやはや一切、いんらん女は、以後いらんというとるばい——おうっ、ごめんよっ！」
　とび込んでいったのは、並び茶屋「東屋」であった。
「あら、金八つぁん、おなつかしゅう——」
「と来るなら、もそっと、袂でもくわえて、もじもじしてみろ。いろはのはの字は、はずかしながら、って知っているか」
「鼻毛を抜かれて、鼻もちならぬ、腹をかかえて、はっはっは——っていうんでしょう」
「おきゃがれ。はじめの ささやき、あとは闇、ってんだ。恥をかくごで、はだけたものを、思わせぶりな空寝入り、奥の座敷の爪弾きが、つい仲立ちでそれなりに、乱れし鬢の黄楊の櫛、八幡鐘のきぬぎぬに、はっと目ざめてくちおしや、テナ風情を、おめえなんざ、わからねえだろう、鼻べちゃ」
　女をおしのけて、金八は奥に入った。
　衝立の陰に、寝そべっていたのは、眠狂四郎であった。
「先生、幽霊ってしろものは、芝居小屋にだけ出るものだと思っていましたら、おどろいたね、ほんとにこの世の鼻っ先にいやがるんでさあ」
　狂四郎は、目蓋をふさいだまま、
「ほんとにいたら、さしずめ、指折りかぞえきれぬくらい人を殺めているおれの枕元などには、毎晩あらわれるはずだが——。あらわれたい奴がいたら、百万遍をとなえて、鉦をたたいてやってもいい」
「ところが、正真正銘、いるんでさ。知らぬは先生ばかりなり。吉野からやって来た念々堂という山伏が、ちゃんと、幽霊を呼び出していますぜ。昨夜も、浅草の猿屋町の町年寄の屋敷で、やらかしましたぜ、あっしも、こっそり、見物衆の中へもぐり込んでみましたがね」
「お岩のように、蛇山の提灯ぬけの趣向でもみせたか。それとも、流れ灌頂の上へ、姑獲鳥の格好で、出たか」
「いいや、提灯も行燈もへちまも使やがらねえ。ぬば玉の闇の手枕、ついうとうとと、夢の浮橋あと絶えて、渡

りもやらぬ心のもつれ、アレ笛が鳴る笛の音が、たずねて仏が来るわいな、てえやつでさ」

「まっ暗闇の中での仕掛なら、どんな真似でもできるだろう」

「だけど、どうにも、仕掛にしちゃア奇妙奇天烈すぎますぜ」

昨夜の霊魂呼び出しでは——。

座敷の中に幕を張りめぐらし、その内へ、水を入れたのと、蠟を溶かしたのと、二つのぎやまん鉢を置き、幕を閉じて念々堂は、印を結んで、幽霊を呼び出した。もとより、声も物音もきこえなかった。

やがて、幕を開いてみると、水鉢の中には、人間の手のかたちをした蠟の手袋が浮いていたという。

「どうです、先生。よしんば生きた人間が、こっそりやった細工にしても、蠟を毀さずに手首が抜けますかい」

「その幽霊は、どうやら、前世は、お前と同業だったようだな。お前も、死んだら、手くびだけが幽霊になって、人の懐中物をねらうか」

「先生は、見ねえから、はなっから信じねえで、そう仰言いますがね。あっしは、この目で、ちゃあんと見とどけて来たんだから——」

「お前は、闇に目がきくのか？」

「いえね、ちょいと踏める面相の巫女がいて、そいつが厳重に縄でふんじばられると思いなせえ。前に笛が置いてある。まわりを、見物衆が、手をつなぐ。念々堂は、もちろん、外っ側にいまさあ。……灯を消して、しばらくすると、笛が鳴り出し、巫女に幽霊がのりうつって、ぶつくさ、迷い言をほざくんですぜ」

「笛が自然に鳴る？」

狂四郎は、目をひらいて、じっと宙を瞶めた。

「でさあ、不思議じゃげせんか。百聞は一見にしかず。今夜は、大目付の小笠原帯刀ってえお方のお屋敷で、お亡くなりになった奥方の魂寄せをやらかすって、ききましたぜ。ごらんなすっちゃ、いかがです？」

小笠原帯刀という人物のことなら、武部仙十郎から、きいたことがある。水野忠邦が、信頼している一人で、清廉質実の人柄で、泰平の世における武士道の吟味に努めて、江戸城内富士見櫓の文庫におさめた鎌倉以来の武家典章を殆ど諳んじているといわれるくらいの学識の所有者であった。

先年、佐渡の金山で、奉行が江戸の回船問屋と結託して、多量の金を隠匿した事件があったが、これは、あきらかに林肥後守や土方縫殿助がかげで糸をあやつっていることがたしかにも拘わらず、帯刀は、敢然として、佐

渡奉行所へおもむいて、この不正を摘発したのであった。奉行は、切腹し、これをとりまく一味の金山役人は悉く捕縛されたが、帯刀自身もこのため、屢々暗殺されかかったといわれていた。ぶじに、江戸へ帰って来たのが奇跡とさえ、後日噂されたものである。

佐渡一国は、治外法権的な、奉行独裁の幕府直轄地だったのである。

——小笠原帯刀ともあろう者が、何故に、まやかし修験道などをまねくのか？　耄碌したのか？　それとも何者かがしくんだ罠か？

むっくり起きあがった狂四郎は、

「武部老人のところへ行って、小笠原屋敷へ、眠狂四郎が、同道させて頂く、と云って来い」

「合点！　そう来なくちゃ、今夜の舞台に、役者がそろわねえ」

三

三十畳敷きの広間は、襖、障子がたてきられていて、むうっと暑気が罩っていた。

あるじの帯刀は、上座を空けて、二の間との仕切襖の前に、一人、坐っていた。その反対側に、武部仙十郎と眠狂四郎が、広縁の障子を背にしていた。

中廊下の襖の前には、十余名の使用人や出入商人たちが、隙間なくぎっしりと詰めていた。

そして、中央には——。

密行如法の有髪という総髪を肩に散らした顔半面熟柿をたたきつけたような焼けただれた痕をのこす醜怪な風貌の山伏が、どっしりと巨軀に威厳をつくっていた。

そのわきに、うら若い、いかにも影うすい、色白な巫女が、首を垂れていた。それから、一間をへだてて、山伏の下級者度衆らしいなりをした男がひかえていたが、その顔は、昼間、胡蝶斎とその弟子放仙を尾行した油売りのものにまぎれもなかった。

そういえば、下座に詰めた人々の中に、何気ない神妙そうな無表情のふたつの顔が、交っていたのである。胡蝶斎と放仙をこっそりまねいておいたことは、帯刀が、決して耄碌していない証拠であった。

さて——。

やおら、鈴掛の袖をはらって、ぬっと立った念々堂は、大玉百八珠の伊良多数珠を揉み乍ら、

「それ、修験道とは、諸仏已証の法曼荼羅にして、緗絹に識せず、筆墨に載せざるところ——すなわち、大日如来意密の顕現、風は樹頭に吟じ、波は砂石を打つ、法界の音声皆ことごとく梵音にして、依正の二法とこしなえ

に妙法を説く……曰く、六大無碍にして常に瑜伽なり、四種曼荼各々離れず、三密加持すれば速疾に顕る、重々帝綱なるを即身と名づく……」

と、一同にはさっぱりわからぬ教義を説いて、次いで、高音朗々として、普賢経をとなえた。

一切業障海　皆従妄想生

若欲懺悔者　端座思実相

それから、ずうっと広間へ、炯々たる眼光をまわして、

「これより、それがしが、三十年前、吉野山発心門をくぐってより、修行門、等覚門、妙覚門を入峰修業し尽して、仏界に達し、自身即仏たるを身を以て体験認得したる成果を御覧に入れる次第でござるが、なかには、伴天連の邪法と誹り、あるいは手妻のたぐいと同一視される御仁なしとせず、はたして、これが仕掛あるいは小手先の業か否か、まず灯下に明らかにいたす」

念々堂が、あごで命ずるや、度衆は、縁笈の中から、片面に玻璃を張り、片面に木板を張った四脚の五寸四方の台をとり出して、木板を底にして据えた。ついで白布でくるんだ品を、念々堂に渡した。

念々堂が、白布を抜くと、黒いしなびた怪しげな物があらわれた。

「これは、役の行者に、葛木山で仕えた大猿の右手にまぎれもござらぬ。それがし、印を結んで、霊気を呼べば、宛然生けるがごとく、動き申す――」

役の行者とは、修験道の祖と仰がれている神秘的存在であった。呪術に長じていて、文武帝が詔して捕えようとしたが、空に騰って逃げたとか、諸神を喝して葛木山と金峯山との間に橋を架したとか、「続日本紀文武紀」に記されている。しかし、伝説上の架空人物でないことは、韓国連広兄が師事したことで明らかであり、特殊勝れた知識と技能の所有者であったようである。

ともあれ、役の小角の従者大猿の右手と称する不気味な木乃伊は、玻璃板の上へ置かれた。

念々堂が、印を結ぶや、奇怪、その手が、きわめて自然に、コトコトと玻璃をたたいた。つづいて、念々堂は、手は、質問に対して、諾を二つ、否を三つ叩いてこたえるであろうと云い、はたして、「山伏は妻を持つか？」に対して三つ、「錫杖の輪は六輪か？」に対して二つ、の応答がなされた。

武部仙十郎は、終始にこにこし乍ら眺めていたが、つと、狂四郎の耳もとに口を寄せて、

「わかるかの？」

と、ささやいた。

「わからぬ」

「木乃伊の指先に鉄が入れてあり、木板の中に磁石がかくしてある。磁石に電流を通せば、鉄をひきつけて、指先が玻璃を叩く理屈じゃ」

かつて、長崎にあって、洋学を勉強した仙十郎は、この程度の科学的知識はそなえていたのである。

この時、念々堂が、かっと目を瞠いて、下座を睥睨した。

「そこに在られるは、栄誉の手妻遣い胡蝶斎殿と見受けた。只今、御覧の法力に疑念ありや？　絹糸などをたぐるのとちがい、これは、虚空に満ち満ちた霊気に感応してのことでござるぞ」

威丈高に、云いはなった。

すると、帯刀が、すかさず、

「胡蝶斎、どうだな、木乃伊を動かす呪術に対抗する手妻術をみせぬか？」

と、すすめた。

四

胡蝶斎は、にこやかな顔つきで、中央へ立ち出た。その右手には、斑竹に烏銅の金具をつけた凝った釣竿を携えていた。（この時代は、釣がさかんで、その道具の豪奢は非常なものであった。穂先には鯨の鬚をもちい、釣糸はただの菅糸では面白くないというので、白馬の尻尾の毛をつかったり、洒落者になると、柳橋の芸者の美しい髪の毛を所望し、根元へ鋏を容れて、切ったという）

「てまえは、とうてい人間の幽霊など呼び出す念力はございませぬ故、空中から金魚でも釣ってごらんに入れましょう」

そう云って、胡蝶斎は、竿に巻いた釣糸を、くるくると解くや、掛声ひとつ、びゅっと、宙を一回転させた。

不思議――針には、ひらひらと赤い小魚が食いついていた。

放仙が水を盛ったぎやまん鉢をささげて寄る。胡蝶斎が、針からはずして、その中へぽんと投げ込むや、金魚は、うれしげに尾鰭をゆすって泳ぎはじめた。

下座から、嘆声が、もらされた。

胡蝶斎は、こんどは、針を、大衝立に描かれた月に吼える虎の口のところへ垂れて、ゆっくりと竿を上下させていたが、一瞬、ぱっと刎ねあげるや、みごと金魚が、ひっかかっていた。人々の目には、どうしても、画中の虎の口から釣りあげたとしか映らなかった。

そうして床の間の香炉から、障子の桟から、女中の高島田から、つぎつぎと生きた金魚を、胡蝶斎は、釣りあ

げてみせたのであった。
　狂四郎が仙十郎の耳もとでささやいた。
「ご老人、おわかりか？」
「とんとわからぬ」
「針にかかった金魚は、絹でつくったしろものです。針のすぐ上についた錘の中から、とび出すしかけになっている」
「しかし、あのように泳いでいるではないか」
「竿の根元の、胡蝶斎が握っているところが、ばかに太いのが曲者。絹の金魚をつかんで、針からはずすとみせて、実は、また錘の中へ匿す。と同時に、竿にひそめた生きたやつを出して、鉢に泳がせる。見物の目は、作りものの方へ集中されているから、生きたやつを竿からとり出す隙は、いくらもある。金魚の種類によっては、水がなくても、半刻ぐらい平気で生きているときいています」
「成程――」
　仙十郎は、胡蝶斎の手妻ぶりと狂四郎の慧眼に、今更乍ら、舌をまいた。
　余興が終って、帯刀の亡妻の魂寄せとなった。
　燭台を一灯のみのこして、念々堂は、下座にさがると、両手を、小笠原家の侍につかませて、坐った。白衣の巫女は、帯刀にたのんで、両手を厳重に縛ってもらって、中央の座に就く。膝の前に、一管の笛が、三方にのせられてある。周囲を、下座にいた奉公人や、出入商人たちが、手をつないで、円をつくった。
「では、よろしゅうござるな。如法闇夜と化せば、たちまち、妄執の地獄、修羅瞋恚の業火燃えて、畜生愚痴の身根甦る。餓鬼の飢念生じ、人執の品惑起る。……いざ！」
　念々堂が、のこり一灯を吹き消そうとしたとたん、
「ちょっと、お待ち下さいまし」
　円座をつくった一人である放仙が、声をかけて、なにげない口調で、
「縄目が、すこし、ゆるんで居ります」
　と云い乍ら、手をのばして、巫女の後手のところの結び玉を、ちょっとやりかえた。
　灯は、消された。
　狂四郎は、腕ぐみをして、闇に大きく眸子（ひとみ）をひらき、全神経を鋭くとぎすましていたが、念々堂のとなえる呪文の声が徐々に狂おしく昂ぶるのをきいているうちに、ゆくりなくも、曽つて、松平主水正邸内でおこなわれたころび伴天連の陰惨残虐な黒弥撒の光景を思い泛べた。
　……妙なことに、いつまでたっても、笛も鳴らず、

巫女の口から、霊魂の声が発しなかった。
「不埒っ！」
　突如として、念々堂が、呪文をすてて怒号した。
「この法座に、霊魂の懺悔滅罪をさまたげる三悪道の餓鬼畜生が忍び込んだぞ！　灯をつけられい！」
　広間が、あかるくなると、巫女は、膝を折ったままで、仰のけに倒れ、悶絶していた。
　念々堂は、急いで、巫女をかかえおこして、大声で、心地観経をとなえた。
　狂四郎は、胡蝶斎と放仙が顔見あわせて、にやっとするのを見てとって、自身もうすら笑った。縄抜けの達人たる放仙が、巫女に縄抜けをさせないように、結び玉に細工をほどこしたのを、狂四郎は知っていた。
「されば……いまいちどの十界一如の法力を――」
　念々堂は、呻くように云いすてて、もとの下座へ戻った。
　再び、広間は、墨を流したような暗闇になった。
　念々堂の呪文が、ものの数分もつづいたろうか、しずかに笛の音が、起った。
　と同時に、陰欝な、しわがれた声が、
「……小笠原帯刀、われこそは……先きの年、汝に殺された佐渡奉行……等々力主税……無明煩悩の中有にあって……汝にのろいをかけ……うらみをはらすべく……いまこそ！」
　と、さいごの一句を凄じい絶叫にしたかと思うや、しゅっ！　と空気を截る異様な音を発した。
　同時に、かちっと燧石を打つ音がした。
　満ち汐のように明りがひろがった広間は、光景一変していた。
　すっくと立った巫女は、笛を口にあてて、吹矢の構えをとっていたし――。
　帯刀の坐っていた場所には、狂四郎が在り、射られた吹矢を左手に掴んでいたし――。
　胡蝶斎は念々堂へ、放仙は度衆へ、それぞれ、匕首をつきつけていた。
「念々堂、所詮、詐術というものは破れる。おぬしも、曽つては、棒術をもって天下にきこえた神馬将斎ではないか。……この上は、金剛杖をとって、堂々と、そこの眠狂四郎とたたかうがよかろうて」
　燭台のそばで、仙十郎が、例の好々爺然としたにこやかな表情で、云った。あかりをつけたのは、この老人であった。

五

松明の炎で白砂を赤く染めた平庭上におこなわれた狂四郎と念々堂こと神馬将斎の試合は、固唾をのんで見まもる人々にとって、半刻の時間が、無限とさえ感じられるくらい、おそろしく長いものだった。

無想正宗の地摺り下段の構えと、金剛杖の右青眼の構えは、そのまま、絵に入ったごとく、微動もしなかったのである。

狂四郎は、金剛杖に対して、円月殺法を使うことの不利をさとったのであった。杖というものは、剣とちがって、そのどの部分をも、刀と化し得る千変万化の武器であった。すなわち、剣には、変化自在の組太刀があるとしても、刃を敵にあてなければ斬れぬという制限をもっているが、杖には、棟も平も柄もなく、打ち、薙ぎ、突く可能性をその五尺の長さのすべてにひそめているのであった。いわば、剣と薙刀と槍の特質をそなえていた。

絶妙の技をもって、縦横無礙に、襲いかかって来られれば、これを防御するのは、非常に面倒であるとさとった狂四郎は、円月殺法が攻撃を誘う手段である以上、これを使わずして、勝負を決しようと肚をきめたのである。

将斎がまた、その姿勢を固着してしまったのは、狂四郎が、一瞬一颯をねらっていると看破したからである。そうなると、一打一突の唸りを生むことに、全生命を賭けなければならなかった。

完全に半刻が、経過した。

「勝った！」

その叫びが、将斎の口からほとばしるとともに、杖は、夜気を唸って、狂四郎の左肩を搏った。

——剣が敗れた！

すべての視線が、それを認めた。

しかし——。

狂四郎の五体が、前へのめったからである。

人々は、まっすぐに突き出された狂四郎の剣が、吸い込まれるように、白い閃光となって、将斎の下肢を走り過ぎるのを、不思議な光景として見なければならなかった。

両者は、ともに、氷上をすべるが如く、傾斜して、行き交った。

ちがっていたのは、距離三間をへだてて、狂四郎は倒れずに姿勢をとりなおしたし、将斎は、どうっと大地へのめり伏したことであった。

将斎の隻脚は、両者の中間にころがっていたのである。

追慕小路

一

「四つで、ござあい……」

遠くで、番太の告げる時の声と、拍子木の音が、涼しい夜気に乗って、つたわって来た。

御成街道をすこし横へそれた新黒門町の小路だが、まわりは大きな武家屋敷がならんでいて、夜の更けるのが早く、こうして、二階に、じっとしていると、静寂そのものが、じーんと底鳴りしているほど深いものに感じられるのであった。

経机にむかって写本の筆を走らせていた女は、番太の声に、ふと、顔をあげて、簾ごしに、夜空を見あげた。

月は、ちょうど、簾のまん中にかかって、美しく冴えていた。宵にはいちめんに掩うていた雲がのこりなく散って、澄みきった海という感じだった。月だけが、たったひとつ、ぽっかりと浮かんでいるのが、いかにも、神秘なものに眺められる……。

今夜は、二十六夜といい、月の出は三尊の姿に上天する、といいつたえられて、その三光を拝さんものと、江戸の町の高台や浜辺には、人が蝟集するならわしであった。

もとより、それを名目にして、妓楼茶屋が景気を粧うて、客足をひき寄せていることはいうまでもなかったし、武家屋敷や寺院では、月の出汐を待って、詩歌俳句の座がひらかれている筈であった。

そして——。

それらの賑わいからとりのこされた人々が、ひとり、それぞれの感慨を抱いて仰ぐ月こそ、実は、三光と名づけられるにふさわしい美しさを湛えているといえるのであったろう。

この女は、とりわけて、そうした孤独な観月が似つかわしい風情であった。

齢はもう二十七、八になろうか、沈んだ翳を刷いた優しい面差には、病いを胸に持つ者特有の不透明な青白さがあった。切れ長な眸子が湛えている、やさしい光は、この齢まで、身をきよらかに保って来たためかと思われる。

一度会っただけで、長く目に残る気品のある綺麗さは、顔のつくりの美しさだけではない。心も身も、ほん

のすこしも、みにくい力でゆがめられなかったことが、相手に感銘を与えるのである。
　そうした数寡い女のひとりのようであった。ほっと、微かな溜息をもらしたおり、階下で、格子の開く音とともに、雇い婆やの声がした。
　すぐに階段をのぼって来て、襖の外で、
「只今、もどりましてございます」
　と、挨拶して、入って来た。
「月の出は、拝めましたか？」
「はい。おかげさまで、拝ませて頂きましたが、なにしろもう、大変な人出で……有難いよりは、突きころがされまいと、そちらへ気をとられて居りまして――」
　婆やは、築地の海手のありさまを語り、帰途立寄った神田の娘の嫁ぎ先の様子を報告した。それから、ふと、経机の上の写本に気づいて、
「あ――いけませんねえ。また、そのような、おからだにさわることを――。旦那様に知れましたら、この婆やが叱られるではございませんか」と、たしなめた。
　写本は、近年出版されて評判をとっている柳亭種彦の「修紫田舎源氏」であった。退屈をまぎらわすために、近所の子供たちを呼んで、手習いさせていたこの女の筆跡の見事さを、偶然、貸本屋が知って、写本をたのんで来たのである。
　当時、貸本屋は、版本などをいちいち買って来ては引合わぬから、写本したのである。ひとつの理由として、版本の細かい字の一冊を四十八文で貸すよりも、十冊に写しとって、一冊八文で貸した方が、割がよかったからでもある。得意場としては、諸大名の勤番長屋、旗本御家人の次、三男、町家の楽隠居、吉原、深川のくるわや芸者屋、および四宿の遊女屋などであった。
　大名の勤番長屋では、一年交代で、国元に妻子をのこして出て来ていて、別にこれという勤務はなかったから、朝起きて食事を摂ったあとは、ごろごろとしていて、雑談するか、貸本でも読むよりほかに、ひまをつぶす方法がなかった。屋敷を出るには、許可が必要だったし、盛り場で遊ぶには、懐中が乏しかったのである。
　したがって、貸本の閙がしさは、文字通り、羽根が生えて飛ぶようであった。
　女は、たのまれるままに、これまで、幾冊か写して来たのであった。もとより、ばかばかしい写本料なので、婆やは、しきりに止めているのであった。
　女は、午後になると微熱を出して、牀に就かなければならないからであった。

二

　半刻あまりお喋りして、婆やが、階下へひきとって行ったあと、女は、なおしばらく、同じ場所に、ひっそり坐って、夜空へ、淋しいまなざしを送っていた。
　と――急に、ふっと俯向いた女は、写本の上へ、ぽとりとしたたるじぶんの泪を見た。
　遠い追憶が、こうして、この女を、時おり、しずかに泣かせていたのである。
　紅絹の袖口で、泪をぬぐって、牀に入るべく、女が立ちあがった時――。
「失礼でござんすが……、お園――さんと仰言いますんで？」
　姿をみせぬ声が、きこえて来た。
「どなたです？」
　女は、顔をこわばらせて、行燈のそばへ寄った。いざとなれば、ふき消して、逃れる処置を考えたのである。
「ごめんなすって――」
　北側の、下屋の屋根へすぐつづく高窓の障子が、するっと開けられて、一人の男が、とんと飛び降りて来た。
　木綿ものに、花色繻子の帯を甲斐の口に結んだお店者ていの男であった。目つきの鋭い、頬の殺げた、色艶のわるい貌は――この物語がはじまってからの読者ならば、すでにお馴染の筈である。
　小春吉五郎であった。
　眠狂四郎のために、幾度か生命がけの働きをみせたこの男は、一昨年、狂四郎が旅へ出るとともに、自分も、江戸を離れて、何処かへ行っていたのである。
　女の顔を見ようともせず、膝を折って、かるく頭を下げた吉五郎は、自分の名を告げて、押込みの無礼を詫びてから、
「なにね、江戸へ舞い戻ったとたんに、むかしの仲間に尾けられて、こいつをまくのにひと苦労したものでござんすから……、ひょっとして、この家の格子をひらくのを見つけられて迷惑をおかけしてはと……万が一の要心に、こんな真似をいたしやした」
「なんのご用でしょう？」
　女は、きちんと坐って、膝で両手をかさねていた。
「相模屋さんの使いでさ」
　吉五郎は、うすく笑って、はじめて、女を見た。
「相模屋さんは、江戸へもどられましたか？」
　女は、思わず身をのり出して、訊ねた。
　この十年間、なんの代償ももとめずに、この家に、そっと住まわせてくれたのが、相模屋という男であった。

不思議な慈善行為であったといわなければならなかった。相模屋が、この家へ立寄るのは、一年のうちに二、三度をかぞえるだけであった。しかも、泊らずに、夜に入って去るのを常とした。そのたびに女と婆やのふたりぐらしには使いきれない金をのこして行くのであった。

女は、瀬戸内海の波の中を漂うている時、五百石積ぐらいの船にすくいあげられたのだが、その船主が、相模屋であった。江戸にも大阪にも、家を持っていないことはたしかで、どんな仕事をしているのか、家族を持っているのかどうかも、いっさい知らされてはいなかったのである。

吉五郎は、ちょっとためらっていたが、

「たぶん、もう、二度と会えないだろう、と言づけてくれ、ということでござんした」と、云った。

女——お園は、息を引いて、茫然と、吉五郎を見やった。

吉五郎は、懐中から、油紙に包んだものをとり出して、お園の前にさし出した。

「相模屋さんから、お預りいたしました。おあらためなすって——」

お園が、ひらいてみると、それは、振出手形であっ



た。

覚

一金参千両也

右之金子慥ニ請取申候　此手形ヲ以テ相渡可申候、

以上

年　月　日　　本両替　駿河屋

相模屋殿

いわば、これは、今日の銀行通帳であった。この手形は、何時でも両替屋へ持参すれば正金になるので、兌換券同様に流通した。尤も、当時は、利子はつかず、その目的は安全なる保管であって、利殖ではなかった。主としては、商人が、多額の預金をして、両替屋の信用を買い、他日資金借入の便宜を得ようとするためであった。

しかし、この振出手形は、あきらかに、相模屋が、お園のために預金しておいてくれたものに相違なかった。

「あの……相模屋さんに、もう一度、お目にかかるわけには、参りませんでしょうか？」

お園は、必死の面持で、たのんだ。

吉五郎は、いたましげに、かぶりをふった。

「そいつは、もう……たぶん、叶えられますまい」

「な、なぜですか？」

「おききにならねえでおくんなさい。相模屋さんからも、口どめされて居りやす。それよりも、明日、駿河屋へ行きなすって、金を受取っておいでになることだ。早い方がいい。どうかすると、敵方が、かぎつけねえとも限りません。お前さんが、受けとりなさるぶんには、誰も疑う奴は居りますまい。あっしだとか、敵方に顔をおぼえられている相模屋の身内の者は、ここしばらくは、白昼、まともに町はあるけない危険がありやすんでね。……さいわい、駿河屋じゃ、相模屋の正体はまだわかってはいない筈でござんす」
「え？　正体——と申しますと？」
ききかえされて、吉五郎の方が、不審げに、お園をまじまじと見かえしたことだった。
——この女は、相模屋が、どんな男か、知らなかったのか？　あきれて……、口をすべらした悔いが来た。
「なに、あれだけの大きな仕事をしたお人だから、敵を大勢持ったということでござんすがね」
苦しい云いのがれをして、吉五郎は、腰をあげた。
「それじゃ、これで、あっしはごめんを蒙ります」
また、高窓から出ようとする様子に、お園は、あわてて、とめた。

三

翌朝六つ過ぎに、お園は、近所の駕籠をやとって、駿河屋へ出向いて行った。
吉五郎は、階下の茶の間で、ぼんやりと、莨をふかしていた。
妙な行きがかりの因縁であった。
二年ぶりに江戸へまい戻るべく、富士川を渡って、左富士で有名な中吉原の登り道中の街道をひろっている時、役人数名に護衛された唐丸駕籠が追い越して行った。
その駕籠から、ぽんとなげすてられた品を、吉五郎は、本能の素迅さで、草鞋で踏んで、役人の目にとまらせなかった。駕籠の中の囚人が、かたぎのいでたちの吉五郎を、自分と同部類の人間と睨み、且つ信頼するに足りると見ぬいてやった仕業に、吉五郎は、こたえたのである。
やり過ごして、何気ないふりでひろいあげてみると、油紙の中には、昨夜お園に渡した振出手形に、これを届けてくれるなら、うち五百両を礼金とする走り書きが添えてあったのである。
吉五郎の気質として、それだけでは、すませられなかった。
その夜、沼津で、唐丸駕籠が送り込まれた脇本陣へ、吉五郎は、忍び入って、夜明けをねらって、囚人に近づき、短い私語を交したのであった。
相模屋という菱垣回船の居船頭（船主）として世間の目をごまかして来た者だが、実は、呂宋作兵衛という倭寇であった。
自分を捕えたのは、どうやら公儀役人とみせかけてはいるが、これは、どうやら、これまで、さんざん自分を利用して、甘い汁を吸って来た備前屋という商人の肚ひとつできめられた処置らしい。つまり、自分を監禁しておいて、隠匿している財物をそっくりまきあげようというこんたんとみえた。しかし、どっこい、そうは問屋がおろさない。たとえ、生爪を剝がれ、目玉をくりぬかれても、備前屋へ、鐚一文くれることではない。ただ、気がかりなのは、自分が養女ぶんとして面倒をみてやっている女がひとりいる。その行末を不安のないものにしてやりたいので、唐丸駕籠で送られて来る道中、俠気ありそうな仁を物色していたのだが、お前さんのような誠意の持主に出会ってうれしい。呂宋作兵衛の、そう語る目は、潤んでいた。
その時、吉五郎は、駕籠を切り破ろうとしたのだが、作兵衛の方が、無駄な真似をして、お前さんまで生命をすてることはない、とたしなめたのである。護衛しているのは捕方幕吏とみせかけているが、備前屋にたのまれた親不知組という公儀庭番連だから、とうていのがれられない、というのであった。
吉五郎も、曾ては、備前屋にやとわれて、眠狂四郎の懐中にある小直衣雛の首をねらったおぼえのある男であった。備前屋のおそるべき隠然たる力を、百も承知していた。
次の日から——唐丸駕籠が江戸へ入るまで、吉五郎は、ずうっと尾行したのであった。
はたして、それは、伝馬町の牢獄へは、つれて行かれなかった。本丸老中水野出羽守の元の中屋敷——いまは、若年寄林肥後守の所有に帰している屋敷へ、裏門から、こっそりかつぎ込まれて行ったのである。
——呂宋作兵衛は、あの女を、養女ぶんだと云っていたが……。
吉五郎は、小首をかしげて、茶の間を見わたしていたが、つと立って、襖をひらき、次の間を覗いてみた。
二階といい、階下といい、調度ひとつひとつが吟味され、たたずまいに、おのずからなる品位がそなわっていて、普通の妾宅とは、まったく趣きを異にしている。お

園という女が町家の出ではないことは、吉五郎にも、これは、はっきりと判っていたことである。

ふと――。

小さな仏壇へ目をとめた吉五郎は、一瞬、悸(ぎょ)っと顔色を変えた。

ただ一基、まつられている位牌に記されているのは、

「眠狂四郎霊」

これだったのである。

――冗談じゃねえ！

吉五郎は、憤然となった。

「眠の旦那が、お亡くなりになったって、そんな虚仮(こけ)があるか！」

思わず、語気烈しい独語になった。

このおり、勝手の戸が開いて、使いに出ていた婆やが、戻って来た。

吉五郎は、ずかずかと、台所へ行くと、

「おい、婆さん、あの位牌は、いってえ、なんだってんだ？」

と、あびせた。婆やは、吉五郎の殺気立った剣幕に、怯え乍ら、

「位牌と申しますと？」

「眠狂四郎霊とは、なんだ、ときいているんだ？」

「は、はい……それは、わたしにも、よくわかりませんが――なんでも、十年前に、御新造さまの身がわりになって、海でお果てなされたおかたとかで……」

「ふざけちゃいけねえ！　眠狂四郎の旦那は、まだ、この世で、小気味のいい、胸のすくような生きかたをしてなさるんだ。くそおもしろくもねえ。お園さんは、いってえ、目と耳をあけて、この江戸で十年もくらしていたのか。間抜けも、程があるぜ」

いまいましげに、吉五郎が吐きすてた時――。

おもての格子が開いて、ものものしい口調で、案内を乞う者があった。

婆やが、あわてて、出て行くと、まだ若い侍が、険しい表情で、

「お園殿は、御在宅か？」

と、きめつけるように訊ねた。

「ただいま、ちょっと留守いたして居りますが……どなた様でございましょう？　戻りましたなら、つたえておきますが――」

すると、おもてに立っていた者が、

「居留守をつかいおっても、このばばの目はくらませぬぞ！」

と、憎々しげに云いはなって、ずかずかと入って来

た。

先の日――四万六千日でにぎわう、浅草金竜山境内で、眠狂四郎に斬りかけた老婆にまぎれもなかった。

そのうしろから、怯ず怯ずと、首をのぞけたのは、貸本屋であった。

貸本屋が、昨日の夕刻、三田の薩摩屋敷へ、新しい写本を届けに行くと、この老婆が、あらわれて、このまえ置いて行った写本をつきつけて、

「この写し手は、誰じゃ？」

と、訊ね、お園という名の御新造さんだという返答を得るや、みるみる陰惨な歓喜の色をあふらせて、

「生きて居ったぞい！　不義者め！　天網恢々疎にして漏らさずじゃ、……このばばが手にとって手習わせた筆ぐせを、わざわざ、当屋敷まで見せに来おったのも、因果応報と申すものじゃ」

と、うそぶいたのであった。

そして、そのまま、貸本屋を長屋へ留め置いて、今朝、案内にたてて、出向いて来たわけである。

「う、うそは申しませぬ。御新造さんは、ほんとうに、留守でございます」

おろおろする婆やをしり目にかけて、

「岡島殿、ここで見はって下されよ」

と、云いのこすや、曲った腰をぬっと立てて、仕込杖も、草鞋もそのままに、畳へ、ふみ込んだ。

薩摩側頭役小森内膳妻辰野――それがこのおばばの素姓であった。いまは、良人にも一人息子にも先立たれて、天涯孤独の境遇であり、眠狂四郎を討つのをあの世への土産にしようとの一念にその痩軀をこりかためているのであった。

狂四郎が、つれて逃げた息子の許嫁お園は、もうすでにこの世にないものとばかり思っていたところ、これもまた、この十年を生きのびていたと知って、辰野おばばの、あの世への土産首は、また一個増えたわけであった。

がらっと障子をひきあけた辰野おばばは、茶の間の長火鉢の前にあぐらをかいている町人を見出して、

「お前が、お園の現在の亭主であろうがや？」

と、睨みつけた。

吉五郎は、じろっと、その威丈高な格好へ、目をくれて、

「どこのお年寄か知らねえが、おめえさんの国じゃ、部屋の中へ杖をついて草鞋であがるしきたりでござんすかい」

と、やりかえした。

「不倶戴天の不義者のけがれはてた家へ土足であがるのに、なんの不埒があろうぞい。お前が、お園の亭主なら、神妙に平伏してこそ、見のがしてもやろうものぞ」
と、あびせておいて、眼光凄じく、次の間へ、首をつき入れた。
とたん——。
「しゃっ！　なんぞや、あの位牌めは——」
と、ひと喚きして、仏壇へ馳せ寄るや、いきなり、位牌をつかみとって、畳へ、たたきつけた。
それだけでは足りずに、草鞋で、ふみにじり、
「くそ！　たわけ！　くそ！　くそ！」
と——もはや、その形相、振舞いは、狂気の発作に駆られたものとしか思えなかった。
「なにをしやがるんだ！　生きたお人のものだとはいえ、位牌は位牌だぞ！　この腐れ婆あめ！」
血相かえた吉五郎が、とび込んで行きざま、その背中をつきとばした。
だだっ、とたたらをふんだ辰野おばばは、しかし、ただの老婆とはちがい、
「うむ！」
と、ふんばった姿勢を、くるっと向きなおらせる動作に、杖に仕込んだ白刃をぬきはなつ仕業を加えた。
「けっ！　畜生っ！」
のどもと紙一重で、その鋭い横薙ぎをまぬがれた吉五郎は、一間をとびすさって、総身に冷汗をかいた。
「気ちげえに刃物とは、このことだ」
「黙れ、素町人！　この古稀のばばが、亡きせがれに代って、姦夫姦婦を成敗いたしてくれる——これぞ、弓馬の家に生れたる者の金鉄の志じゃ。汝ら下種下郎に、身を漆し炭を含んで、この志をつらぬく武士道の気概が、一毫たりともあろうか！」
皺のどをしぼって叱えつつ、辰野おばばは、じりじりと、威嚇の切尖を、つめ寄せて行った。
吉五郎は、油断なく身がまえて、
「死損いの婆婆ふさぎ、とは、ばばめ、てめえのこったとおぼえろ。どんな曰くがあるか知らねえが、位牌を足蹴にしやがるまでに血迷やがって、武士道もはちのあたまもあるもんけえ！　瓜の種に茄子は生えねえんだ。てめえのような業つくばばあのせがれだから、大方、面も根性も、うらなりの瓜みてえにひん曲っていやがったろう。お園さんに振られたのはあたりめえよ。……因果西国、黴毒四国、悪気山七、野良六部といわあ。てめえなんざ、さしずめ悪気山上だ。両国橋からとび込んで、垢離でもとって、大山詣でもして来やがれ——」

凄じい早っ舌の啖呵を、豆鉄砲のようにあびせかけた。
「云わせておけば——おのれ！」
辰野おばば顔皺手皺に、殺気の青筋を走らせると、ぱっと大上段にふりかぶって、
「一刀両断じゃ！」
と、壮者に劣らぬ一喝を、その梅干口からほとばしらせた。
瞬間——。
吉五郎は、長火鉢を、ぱっと蹴倒し、辰野おばばが、もうっと舞いあがる灰神楽にむせて、思わず、二歩あまりひきさがった隙に、身をひるがえして、二階へ駆けあがり、高窓から姿を消してしまった。

四

吉五郎が、備前屋配下と、むかしの仲間黒元結連の二手から追われている身の危険を忘れて、江戸中を捜しまわった挙句、ようやく眠狂四郎の居処をつきとめたのは、それから五日後であった。
狂四郎は、深川の岡場所、大新地の揚屋五明楼の離れで、流連ひさしかった。
しかも、相手にしているのは、やっと十二、三の少女であった。
楼主が変った男で、金も払わずに腰を据えている狂四郎へ、今春ひきとったばかりの御家人の孤児をあてがって、すてているのであった。
「あの大ひねくれの旦那の世話を見ン事やりとげたら、おめえは、深川一の芸者になれる」
楼主が少女に云いきかせたのは、その覚悟だった。
上を鼈甲、回りを総金蒔絵で縁をとり、台の中へ湯を入れた三両もする駒下駄をはく役者がいたり、唐真鍮の中に金で唐人の行列を三十六人象眼で入れた七両余の煙管を持つ町人がいた時世であった。
こうした奢侈の風潮の中で、粋人遊子のめがねに叶う芸者になるのは、なみなみならぬ苦労ではあったろう。
で——。
今日も、少女は、ごろりと仰臥している狂四郎のそばで、いじらしく、けんめいに、三味線をひいて唄っていた。
吉五郎は、そこへ、案内された。
「おひさしゅうございます」
なつかしげにかがやかせる顔へ、目蓋をひらいた狂四郎は、
「吉五郎か——」

むっくり起きて、盃をさした。
吉五郎は、おし頂き、ひと口に飲んで膳へ伏せると、表情をひきしめて、
「旦那は、お園さんというご婦人をご存じでござんすか？」
「お園？　知らぬ」
「十年前、旦那が、九州から船でお帰りになる途中、あらしの海へ、かかえて飛び込みなすったおひとでござんす」
狂四郎は、返答のかわりに、大きく目をひらいて、吉五郎を見据えた。
「お園さんは、この十年間、旦那の位牌をつくって、朝夕祈っておいでござんした」
吉五郎は、そう告げて、狂四郎の顔の、どんな微細な変化をも見のがすまいとした。
狂四郎は、ふっと、視線をそらすと、それを宙に置き、しばらく、黙りこくっていた。
やがて、ぽつりと、
「生きていたのか——」
と、呟いた。
「お会いなさいますか？」
「…………」
「さしでがましいと存じましたが、おもてへ、駕籠で、おつれして居ります。……尤も、旦那が、ここにおいでだと、知らせているわけじゃございません。お園さんは、まだ、旦那が生きていらっしゃることを夢にもご存じありません。……ひょんなことで、お園さんに隠れ家をさがしてあげる役割をふりあてられたものでござんすから、ここにあがっていなさる旦那衆のおひとりにたのんでみるから、といつわって、おつれしたわけでござんす」
吉五郎は、そう云ってから、また、かなり長い間、待たなければならなかった。
狂四郎は、しずかに、吉五郎へ、眼眸（まなざし）をもどすと、
「すまないが、おれは、やはり、死んだことにしておいてもらおう」
「わかりました」
吉五郎は、狂四郎の返辞が、たぶんそうであろうと予測していたのである。
「押上の竜勝寺の離れは、まだ空いているはずだ。住職にたのんでみてくれぬか」
「承知いたしました」
吉五郎が、出て行くと、再び、ごろりと仰臥した狂四郎は、少女へ、小唄をつづけるように促しておいて、目

蓋をとじた。
——そうだったのか、生きていたのか？
あらためて、自分に呟いてみた。しかし、感慨は、なぜか、妙にしめって、胸に重いものだったのである。

悪縁記

一

夕日さす山は見るまにしぐれかな

旅の草鞋をしめらせた村時雨も、やがてはれわたって、西の空に、茜を染めた雲影が、薄く漏れて、望まれる。

と思うまもなく、またもや、中空に雷鳴をともなって、ざあっと落ちて来る驟雨に、あわてて、旅人たちは、膝栗毛を急がせることになる。

当時の街道の旅景色については、これまで、折にふれて描いて来たが――。

人生の世渡りをそのままに――晴れたり曇ったり、照ったり降ったり、処世境界の吉凶禍福を暗示する旅次といえたのである。

「天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり、浮生は夢の如く、歓を為すこと幾何ぞ」

これは、李太白の詩である。

これを、日本流にやると、

「さても浮世のならいぞと、食べて、はこして、寝て、起きて、見たり、聞いたり、話したり、旅行くさまのおもしろさ――」

ということになるのだが……。

いずれにしても、当時の旅人は、携帯品だけでも大変であった。

草鞋、脚絆、合羽、菅笠、胴巻、手拭い、用心紙、紙入、財布、巾着、頭巾、雨傘、印籠、用心薬、守札、名札、手帳、燧石袋、火口、杖、煙草入、矢立、懐中蠟燭、懐中付木、眼鏡、宿泊帳、小刀、磁石、等々……。

だが――。

その旅立った日のいでたちも、長い行路の風雨にさらされて、いつか悲惨な変りかたをし乍ら、なお、あてもなくさまよわなければならぬ人間が、当時はいたのである。

仇討をしなければならぬ人間であった。

ここ――見付の宿に近い本坂越の道端――気賀の関所を経て、三日市、吹瀬山より御油に出る行路のわきに建った雨乞堂の濡縁に、茫然と腰かけている若い武士が、それであった。

影松庫之助は、国から出てから、もう五年になる。身におびているのは、大刀一本だけである。脇差さえも、

二十日あまり前に売り払ってしまっていた。旅籠一泊代百五十文が、いまはもう、惜しまれてならなかった。なぜ、百姓家や寺などに泊らなかったか、とくやまれる――。

路銀が尽きかけると、赤紙つきの急飛脚で、国許の親戚へたのんでいたのであるが、月日が経つうちに、三度に一度の割になり、しかも、はじめのうちの十分の一にも足りぬ額に減らされていた。それでも、送って来ているあいだは、どうにか、露命をつなぐに足りた。ところが一年ばかり前から、どんなに矢の催促をしても、なしのつぶてになってしまったのである。

――くそ！　不人情な親戚どもめ！　おれが、こうして日本中をあるいているのは、おれの意志ではないのだぞ！　親戚どもが、おれを、無理矢理に、仇討に追い出したからではないか。斬られた親爺の方に、あきらかに非があったのだ。

愚痴をくりかえしているうちに、庫之助は、もはや、仇討などどうでもいい、と自棄的になっていた。斬取り強盗をやってもいいから、幾枚かの小判を掴んで、思いきり、のうのうとした生活を、ただの一月でもいいから、すごしてみたかった。

路銀が尽きて、もう二日間、水ばかり飲んでいる庫之助であった。

時雨は、完全に去ったのに、腰をあげないでいるのは、空腹のせいだった。

たったった……と、威勢のいい速力で、三度飛脚が、通り過ぎて行った。（三度笠という名は、月三度やって来るこの飛脚が被むっていたので起ったのである）

とたん――。

庫之助の目が、急に険しく光った。

――彼奴を斬って、金を！

その衝動で、腰をあげたが、すぐに、自嘲して、肩で息をついた。追いかける体力さえもないのであった。

……あたりがすっかり暗くなってから、庫之助は、目付の宿に入り、通りかかった立場茶屋で、名物蕎麦切を食べている旅姿の女をみとめると、

――どうでもなれ。

と、捨鉢な気持になり、ふらふらと入って行った。

またたくうちに、蕎麦丼が二個と飴餅が三皿、空にされた。

奥の床几の旅女は、煙草をくゆらせ乍ら、庫之助のむさぼり食う有様を切長な目で、時おり、ちらっちらっと眺めていた。

「おやじ――」

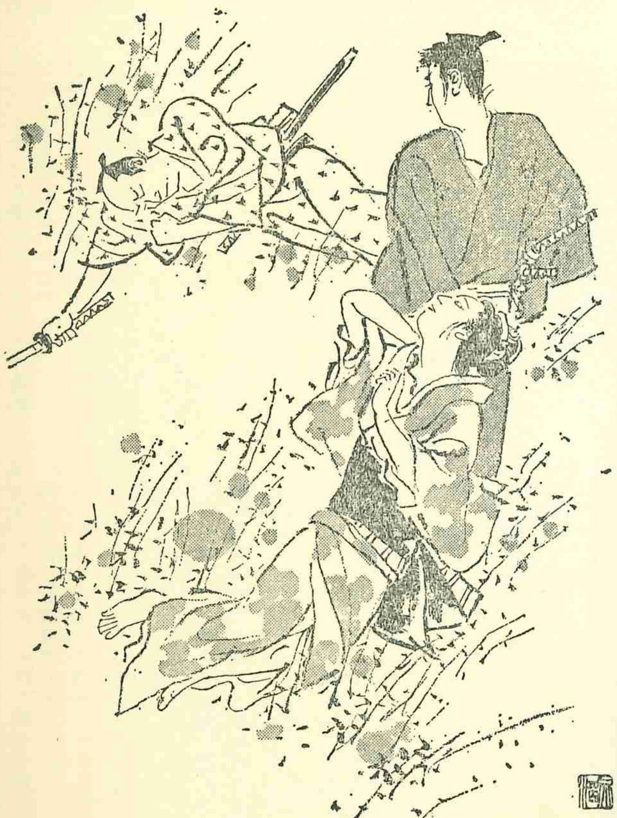
やがて、庫之助は、屈辱と絶望で歪んだ表情を、奥へ向けて、かすれ声を投げた。
「金が一文もないのだ。……食逃げはせぬ。薪割りでも、なんでも、力仕事をさせてもらえぬか」
「冗談じゃない！」
親爺は、苦虫をつぶして、じろじろと睨めまわしていたが、
「その刀を……金にしなさるがええ。そこに、古道具屋がある」
と、云った。
「刀は、こまる」
「そこまでおちぶれたら、さむらいもくそもあるめえ」
「いいや、おれは、仇討をやらねばならん身だ」
「同情をひこうったって、ごまかしにゃ乗らねえ」
「嘘ではない。……こうも惨めになってまで仇討をしなければならぬのが莫迦々々しくはなっては居るが、敵をさがす身であることは、まちがいないのだ」
「そんなことは、おらの知ったこってはねえ。食ったものの代金を払ってもらえばええのだ」
すると、その時――。
「あたしが、払いましょうよ」
歯切れのいい江戸の口調で、旅女が云ったのである。

二

……腹を満たし、微醺をおび、入浴し、鬢を剃り、ぴんと糊の張った浴衣姿になって、庫之助が、部屋へ戻ると、てすりにもたれて、秋葉権現への深夜詣でに賑わう街道を見おろしていた女が、首をまわして、にっこりした。
「やっぱり……あたしが、思った通りだった」
「なにが――？」
「色男。半四郎の白井権八にそっくり――」
たっぷりと媚をこめた眸子(ひとみ)をあてると、膝をかるくたたいて調子をとりつつ、うたった。

白井権八すずが森
井げたに丸を雲助が
アレとりまくを、斬りはらい
若衆すがたのお手のうち

庫之助は、苦笑した。
藩随一の美童として、主君の極端な寵愛をうけたおかげで、父親が増上慢になり、異数の加禄も当然のように振舞ったのが原因で、斬られたのである。
いわば、庫之助が、仇討をしなければならなくなったのも、源(もと)を辿れば、おのれの美貌故なのであった。



思いもかけず、餓死一歩前で、救ってくれたのが、のろうべきものとなっていたこの貌であったという皮肉に、庫之助は、苦笑せざるを得なかったのである。

それにしても、尾羽うち枯らした庫之助の、汚れはてた貌が、女心をそそる魅力をそなえていることを、見てとった相手は、よほどの手練手管に長けた者とみえた。

女の肌をいまだ知らぬ庫之助の目には、堅気ではなさそうだ、と漠然と映っただけであった。

「箱根の関所は、女ひとりじゃ越せないから、つれになって下さいな。小田原へ降りたら、用心棒代として、五両さしあげます」

と云われて、夢でも見てるような心地で、この袋井の旅籠へついて来たのであった。

女は、手すりから、つと離れると、いかにも馴れたしぐさで、両手をさしのべて、庫之助の頸へからめた。

そして、まぶたをとじると、白い顎をすこしつき出して、

「貴方が、好き――」

と、云った。

庫之助は、遽に烈しく高鳴って来た鼓動が、相手にきこえはせぬかと、おそれて、全身をこわばらせた。

女は、その朱唇を、徐々に、庫之助の顔へ近づけて来て、あわや、口へ触れようとした瞬間、ぱっちりと目をあけた。

庫之助は、どぎまぎした。

「ほら、あかくなった！」

云いすてて、すっとはなれた女は、たちまち、冷たい表情にかえって、くるりと背を向けた。

「用心棒さん、肩をもんでおくれな」

立膝になって、赤いものをこぼし乍ら、長煙管を把りあげ、煙草盆へ雁首をひっかけてひき寄せていた。

大井川を渡って、島田の宿で、小里というその女は、はじめて、庫之助に、唇をゆるした。

ひとつ牀に入ったのは、沼津の宿である。

女の方が、するりとすべり込んで来て、

「抱いて――」

と、要求したのである。

庫之助は、無我夢中で、妙にひんやりとした、しなやかな肢体を抱きしめて、その朱唇をむさぼった。

しかし、小里は、決して、最後のものを、ゆるそうとはしなかった。

箱根越えでは、人目がないと、小里は庫之助に、おんぶすることをせがんだ。そして、その背中に乗ると、い

きなりくびすじに吸いついたり、両肢で、胴をぎゅっとしめつけたりした。庫之助は、いくど、山中へわけ入って、女体を完全にわがものにしたい衝動に駆られたか知れなかった。

小田原の宿でも、小里は、庫之助をわが牀に誘い入れ乍ら、ゆるそうとしなかった。

「なぜ、ゆるさんのだ？」

庫之助が、怒気をこめてなじると、小里は甘い声で、

「ゆるすと、貴方は、すぐにあたしのことなんか忘れて、仇討を思い出すから……いや！」

と、云って、耳朶をやんわりと噛んだ。

女を知らぬ庫之助は、小里の思うがままに翻弄され、焦燥し、なかば憑かれたように、もうその白い肉体のことしか、脳裡になかった。

品川の旅籠で、小里は、はじめて、庫之助に、下肢をひらいた。

三

深夜――。

眠狂四郎は、土屋采女正の中間部屋でひらかれた賭場で、儲ける意志もなく五十両あまりを懐中にして、外へ出た。

月があかるく――、踏んで行く影法師が、濡れたように濃かった。

十間あまりうしろから、もうひとつの影が、同じ方角へ歩き出したが、これは跫音を消していた。狂四郎と同じ浪人ていであった。

人通りは、全く絶えた広い往還であった。水気を含んだ夜気は、蒸し暑く、月光も、地上では熱をおびているように、妙に赤い色に感じられた。

表猿楽町を錦小路へそれると、左右の屋敷は、ひとまわり小さくなる。といっても、旗本大身の構えがつづいているのであった。

つきあたりが、神田川で、微風を涼しくおぼえる。

狂四郎は、めずらしく、放心して、歩いていた。うしろから人が来ている気配を知らなくはなかったが、それが自分に対して害意をひそめているものとまで、直感力を働かせていなかった。

いつもの狂四郎ならば、対手が跫音を消しているのをさとっただけで、磨ぎすまされた本能が、すでにそれに対する処置を用意していたに相違ない。並の人間とは、全く異った感覚が、脳裡の働きを待つまでもなく、自然に具わったものとなっている男であることは、すでに以前述べてある。

今宵は、どうしたのか、ひどく、ぼんやりした気持であった。

数町を辿るあいだ、脳裡に泛んだのは、

――暑いな。冷たい井戸水をかぶりたいところだ。

そんな思いだけだった。

だから、突如――背後に迫った殺気に、全神経を備えるいとまもなく、きえーっ、と唸り落ちて来た刃風を、夢中で左肩すれすれにかわして、跳びすさってもまだ、片腕は血が凍ったような感じだった。

青眼にかまえて、じりじりと間合をつめて来る敵を、こちらも、歩幅を小きざんでさがりつつ、

出来る――！

と、見てとった。いつにない油断をねらわれたことに、あらためて、肌寒さを感じた。

尋常一様の使い手ではないのである。

いぶかしいのは、公儀庭番や備前屋の放って来た刺客とはどこかちがって、身なりこそ貧しいが、その構えに、おのずからなる品格があることだった。

「意趣か？」

狂四郎は、鯉口を切り乍ら、ひくく訊ねた。

「ちがう！」

「ではなんだ？」

「おぬしが賭場で儲けた金子が所望――」

この浪人者が、賭場にいたことは、すでに狂四郎は、気づいていた。その時、べつだん気にとめる程の存在には見えなかったのだが……。

「わたしを眠狂四郎と知っての上か？」

「なに？　眠狂四郎！　おぬしがか？」

夜目にもはっきりとおどろきの色をしめした男は、しかし、次の瞬間、ひきさがるかわりに、

「ええいっ！」

凄じい懸声を月空へつんざいて、ぴゅっと、逆袈裟に、斬りあげて来た。

狂四郎は、わずかに、すっと、一歩引いて、なお、無想正宗を抜こうとはしなかった。

男は、大袈につけて、胴を空け乍ら、

「なぜ斬らぬ！　莫迦っ！」

と、叫んだ。

眠狂四郎の腕前ならば、当然、空けた胴を、一閃、横薙いでいるべきだった。

「わざと斬らせようとするのが見えたからには、注文に応ずるのは、こちらの性が合わぬ」

冷やかに、狂四郎は、云いすてた。

「ふん――」

男は、おのれを嗤うように、鼻を鳴らすと、だらんと、刀身を下げた。

「見破られたのは、おれの未熟だ。しいて、殺してくれとは、たのまぬ」

云いすてて、鍔鳴らせると、のそのそと立去りかけた。

「おい――」

狂四郎が、呼びとめた。

「金は要らぬのか？」

男は、首をまわして、

「呉れるというのか？」

「事情によっては、やらぬでもない」

「わけは、簡単だ。一年あまり、無断で家を空けていたので、戻るのに、閾が高くなって居る。女房への土産にする。おれの面より山吹色を見た方が、よろこぶ悪性だ、おれの女房は――」

しかし、その口調は、いっそあかるいものだった。

「だが、いまになって、無駄なことだとわかった。……どうだろう、そこいらの居酒屋で、一杯飲ませてくれぬか？」

「つきあおう」

狂四郎は、四軒町に馴染の小料理屋が一軒あった。

もう寝ていたのを起して、二階の小部屋にあがって、狂四郎と男は、飲みはじめた。

男は、本多武一郎、と名のっただけで、あとは一切口をつぐんでいた。西国訛りがかなりひどく、面貌もどことなくあかぬけしなかった。

酒は強く、小気味いいくらい、茶碗で、ぐいぐいと傾けた。

かなり長い時刻を費して、武一郎が、ふっと、もらしたのは、

「眠狂四郎か――。斬られるには不足はなかったのだがな」

その一語だけであった。

狂四郎は、床柱に凭りかかって、武一郎の表情を、黙って、眺めていた。

たしかに、暗い、すさんだものがある。にも拘わらず、この男のちょっとした目や口のうごかしかたには、素朴な善良な気質があらわれているようだった。口のききかたにも、仕草にも、親しみのもてる風格の持主である――いや、あったらしい片鱗がしめされたのである。

狂四郎は、よほど、わざと生命をすてようとした理由を糺してみようかと思ったが、口をひらくのが億劫なままに、武一郎の飲みっぷりを眺めるだけにとどめた。

やがて、武一郎は、差料を把って、ひょろりと立ちあ

がった。
「御造作になった。失礼する」
狂四郎は、五十両の包みを、卓上へ置いた。
「持って行くがよい」
武一郎は、ちょっと、ためらっていたが、
「いや、御厚志だけを受ける。……先刻の御無礼、あらためてお詫びつかまつる。ゆるされい」
頭を下げてから、はじめて、破顔して、
「この家の内儀は、渋皮がむけた佳い顔立ちであったが、おぬしの色女かな？」
と、訊ねた。
「べつに、そうではない」
「悪性の女に惚れると、男という奴は、われ乍ら見苦しい」
沁々とした述懐をのこして、武一郎は、
「――では、御免」と、去って行った。
始終、黙りこくって、お互いに勝手に飲んだ一刻だったが、武一郎が去ると、狂四郎は、急に、寂寥をおぼえた。
ふしぎな男だったと思う。生きていることが厭気がさしている様子だったにも拘らず、のこした印象は、なんとなく明るいものだったのである。

四

そのまま、その小部屋に、うたた寝をした狂四郎が、ふと、夢を破られたのは、もう障子が白く浮きあがった寅の上刻であった。
薄目をひらいた狂四郎は、昨夜のままに散らかされた食卓のむこうに、うっそりと立っているのが、本多武一郎であるのをみとめて、眉をひそめた。
夜明けの、ひんやりとした空気の中のその貌は、佗しげな翳でくまどられていた。
狂四郎が、起き上ると、武一郎は、坐って頭を下げた。
「こんな時刻に起して申訳ない。……おねがいがある」
「……………」
「これから仇討を行なうが、おぬしに、見とどけて頂きたい」
「お手前が討つのか？」
「いや、討たれる方だ。……討手は、外に待たせてある。家へ戻ったら、女房め、若い男と寝て居った。それが父の敵たる拙者をさがして、五年も全土をうろついていた奴だったのだから、因果車輪とは、よくぞ申したものだ」

「それならば、べつに、わたしが、見とどける必要もなかろうと思うが……」
「いや、是非見とどけて頂きたい」
武一郎の気色が、ひどく厳粛であるのが、狂四郎の目には、かえって、微笑ましいものに映った。
その場ですぐに立会わずに、ここまで、討手をともなって来たのが、いかにも、この男らしいやりかたに思えた。
「おのぞみなら――」
狂四郎は、立ちあがった。
「千万かたじけない」
武一郎は、階段を降りて行き乍ら、ひくく、
「之を戒めよ之を戒めよ、爾に出ずる者は爾に反る――か」
と、独語をもらしていた。
狂四郎は、苦笑した。
この人物にとって、曽子のいましめは、たしかに、痛切なものに相違ない。にも拘らず、そうやって口にしている様子が、いかにも可笑しいのだ。どんなに切羽詰った窮地に立たされても、そして、それを当人としては悲痛無慚な業苦としてあじわってい乍らも、他人の目へ、その挙措振舞いを、かえって、逆な現象に映させてしまうという場合がある。生得の人柄のなせるわざといわなければならなかった。
まだ、なんの雑音にもよごれていない、しらじらと澄んだ往還に、武一郎の云った通り、一人の若い武士が、立っていた。
その顔面は、まったく血の気をうしない、双眸には、陰惨な、苦しげな色を滲ませていた。
「こちらは、眠狂四郎殿だ。……久留米藩有馬上総介馬廻役影松庫之助」
武一郎が引合わせ、狂四郎と庫之助は、目礼した。
三人が、黙々として歩き出したおり、十間あまり離れた路地口から、一人の女があらわれて、そのあとをついて来はじめた。
武一郎が、不意に、首をまわして、女を睨みつけたのは、一町あまり行ってからであった。
「莫迦っ！　ついて来るなっ！」
女は、しかし、その一喝をあびても、白い顔をまっすぐに立てて、ひるむ様子もなかった。
さらにまた一町余を辿ってから、武一郎は、再び、女へ凄じい眼光を送って、
「斬りすてるぞっ！」
と、怒鳴りつけた。

威嚇は、さらになんの効果もなかった。女は、聾唖の白痴のように、じっと彳んで、こちらが歩き出すのを待っていただけである。
　狂四郎は、横にならんだ影松庫之助の蒼白な形相が、堪えがたい懊悩の色を、だんだん沈めて、代りに、虚無の翳を宿らせはじめたのを、見るともなしに見てとっていた。

　仇討は、一つ橋御門を彼方に望む野馬仕込みの馬場で、行われた。
　淡々（あわあわ）とした白色の空の下に、そよとも風がなく、樹木や草が、露をふくんだ緑を、しだいに鮮かに浮きたたせようとしている静かな朝景色であった。
　狂四郎は、対峙した両名から、七、八間へだたった芝土手の上に立って、このすがすがしい夏の朝に、ひとつの生命が去って行くことに、おのれらしくもなく哀れをおぼえていた。すでに、武一郎と庫之助は、白刃を相青眼にとって、睨みあっていたが——これは、あまりにも腕前が段ちがいだったのである。
　いくばくかの時刻を移すうちに、この差は、両者のすがたに、はっきりとあらわれて来た。
　庫之助の小鬢から汗がつたい落ち、鼻腔は喘ぎ、唇は白く褪せて来た。
　それにひきかえて、武一郎の表情は、依然としてなんの変化もなかった。
　ついに——。庫之助の方が膠着の姿勢をすてて、ぱっと大上段にふりかぶった。
「ええいっ！」
　絶望的な跳躍を宙に描いて、斬り下した。刹那——。
「呀（あ）っ！」
　と、狂四郎は、眦を裂いた。
　武一郎が、自身の一刀を下げて、襲い来た刃風へ、自ら望んで、その首をさしのべたのである。ぱっと、頸根から、血飛沫が噴き散った。
　武一郎は、いったん、刀を杖にして、身をささえると、庫之助へ視線をあてて、何か云いかけようとしたが、ささえきれずに、膝を折って、首をがくっと垂れた。
　庫之助は、茫然として、わざと討たれた敵を見おろしていたが、とどめも刺さずに、ふらふらと歩き出していた。
「庫さあん！」
　芝土手の青桐の幹にすがって、始終を見まもっていた小里が、裾をみだして、庫之助を追いかけた。

　しかし、斜面を降りきらぬうちに、そのえりがみを、狂四郎に掴まれていた。
　死にもの狂いにもがく女身を、ずるずると、ひきずって、武一郎のそばに寄った狂四郎は、
「おい。この女を、どうする？」
　と、問いかけた。
　武一郎は、切口へ首をかたむけ、徐々に眼眸（まなざし）をまわして、恐怖をあふらせた小里の顔を見あげた。それから、片手に掴んだ一刀を、前へ移して、切尖を、小里へむかって擬した。
　武一郎が、のこった力をあつめて突き出す切尖へ、狂四郎は、女のからだを、ぐっと押し出した。
　鳩尾から背まで、白刃をつらぬかれた女の、凄惨な絶鳴は、狂四郎の耳底に、後日までのこった。
　狂四郎は、女の死骸を、そっと横たえておいてから、武一郎へ跼みかかって、
「なぜ、お手前は、わざと負けたのだ？」
　と、訊ねかけた。
　武一郎は、もう口をきくのも大儀らしく、わななく指で、はだけた胸の一箇所をしめした。そこには、世人の忌避する業病のしるしが、鮮かに刷かれていたのであった。

鼠小僧参上

一

初秋の陽が足早やに落ちて、お濠の上の白壁や甍や老松の梢にのこっている残照も、ようやく消えかかろうとした頃合、坂下御門を、西丸御簾中御名代らしい紅網代の乗物が、局、添番、たもん（下女）、伊賀者、お小人、ごさい（下男）、など十余名にまもられて、しずしずと、くぐった。

御裏御門を過ぎて、御切手御門へ――。

江戸城大奥の女中の出入は、御切手御門からに限られていた。すなわち、御切手をもって出入するのであった。男たちの方は、腰に携げた革袋から御門札を出して見せることになっていた。

といっても、必ずしも、厳しく、この規則がまもられていたわけではなく、上野寛永寺、芝増上寺の御代参とか、御台所あるいは御簾中の御名代とかの行列は、黙って、通すのが、ならわしだった。

だが、この日、御切手御門番頭の当番にあたっていた志賀源八郎は、何を思ったか、つかつかと、門前へ出て、

「待たれい」

と、声高に、その通過をはばんだ。

これまでに例のないことであったので、お供の列は、色めいた。

「なんの理由で止められる？」

駕籠わきの局が、険しい表情になって、反問した。

志賀源八郎は、父のあとを継いで、御門番頭に就任したばかりの青年であった。御門番頭は、六人交替で、世襲であった。そのいずれもが、女中相手にふさわしい無気力な小旗本ばかりであった。

ところが、志賀父子だけは、ちがっていた。父の源十郎は、融通のきかない頑固者として、女中たちから忌みきらわれていた。たまたま、中山智泉院の一僧が長持にひそんで、大奥へ忍び入ろうとしたのを捕えたのが、逆に職掌の権力を横暴に行使したというお咎めとなって、憤死を余儀なくされたのであった。

智泉院の先住日道は、将軍家斉の寵妾お美代の父であった。ただの日蓮宗の寺ではなかったのである。この寺に、多くの美僧をたくわえて、大奥女中を迎えていることは、公然の秘密であったし、僧の方から大奥へ忍び入

ることも、それまで見て見ぬふりをされていたのである。

智泉院が、美僧をたくわえて、大奥の高級女中を籠絡したのは、将軍家御祈祷所にのしあがろうとしたからであった。だが、智泉院は、中山法華経寺中の子院であるから、本寺を差越して、寺格のないくせに、御祈祷所にはなれぬ。そこで法華経寺の境内に、徳ケ岡八幡を勧請し、法華経寺中の客席となるという段階をふんで、寛永寺、増上寺と同格へ進む策謀をめぐらしている最中だったのである。

智泉院の僧が、大奥へ忍び入ったことが表沙汰になれば、いっぺんに、この野望は水泡に帰す。そこで、あばいた志賀源十郎の方を、乱心ということにして、隠居処分に付したのである。源十郎は、致仕した夜に、割腹して果てた。

その子源八郎は、この憤怒を、大奥女中どもへたたきかえすほぞをきめて、あとを継いだのであった。

――潜入者を捕えたならば、水野越前守殿へつき出して、本丸御老中側を周章てふためかしてやる。

その肚であった。

そのためには、まず、西丸大奥への潜入者を捕える。そして、これを切掛として、これまで、大奥へ男を引入れた女中を片はしから詮議し、事件を拡大させて、ついに、寺社奉行が、智泉院へ手入れせざるを得ないところまで追込む――その計画であった。

で、――源八郎は、昂然として、

「御切手御門番頭として、御切手をおあらため申すのは、当然の職務でござる。戸をひらいて、御切手をしめされたい」

「これは、西丸御簾中様御名代月島殿に相違ありませぬ」

局の方も、必死になって、こばもうとした。門番の一人が、急いで、源八郎のそばへ寄って、

「志賀殿。月島殿は、お顔が……」

と、ささやいた。

源八郎は、西丸の御年寄の中に、疱瘡のために、ふた目と見られぬ醜悪な容貌の持主がいることは、すでにきいていた。

「ほかの御年寄ならばともかく、月島殿は、お見のがしなされてはいかがでござろう」

そうたしなめられるや、源八郎は、かえって、片意地になり、無言で、小者から提灯を奪いとるようにして手にすると、つかつかと、進み寄って、駕籠の戸を、ぱっとひきあけた。

二

「九つにございまする」
　畳廊下を、雪洞（ぼんぼり）をかかげた不寝番の女中が、上草履の竹皮三枚裏のすり音をひびかせて、時刻を告げて、去って行ってから、ややしばらく過ぎて——。
　とある部屋から、年配の局が、どうやら昨日か今日上ったとおぼしい銘仙の振袖をつけた部屋子をつれて出て来た。
　やがて、幾枚かの仕切襖を開け閉めして、ふたりが入ったのは、ひろいお縁座敷であった。ここは、お手つき中﨟のすまいであった。
　局は、襖のむこうの仕舞所（化粧室）にむかって、
「だんなさま。……おつれ申上げました」
　と、呼びかけた。
「おはいり——」
　きれいな声が、応じた。
　局は、部屋子に目くばせすると、しずかに廊下へ去って行った。
　部屋子が、襖をひらくと、有明行燈のあかりに、花模様の絹ちぢみの夜具が、なまめかしく、ひろがっていた。

「御切手を——」
　と、提灯をつきつけた源八郎は、いかりとうらみをみなぎらせて睨みあげる老女の痘痕面を、冷然として見かえした。
　御切手が、わななく手で、さし示された。
「よろしゅうござる」
　戸が閉められたとたん、その中から、のろいをこめて、
「親爺になろうて、いずれ、腹を切ってくたばるがよい！」
　と、憎々しげに吐きすてられた。
　源八郎は、片眉を、びくっと痙攣させたが、これぐらいの罵言は覚悟の上のことだ、と自身に云いきかせて、あとへさがった。
　だが、門をくぐった行列が、彼方の曲り角から消えようとするのを見送った源八郎は、不意に、何を直感したのか、
「しまった！」
　と、口走ったのであった。だが、いったん通してしまったものを、呼びもどすことは、ゆるされていなかった。



するするとすべり入った部屋子は、急に濃い白塗りの顔に、ふてぶてしい微笑をうかべて、

「お方（かた）さま、とうとう参じました」

と、云いかけた。このなやましげな声音は、舞台できたえた女形の一種独特のものにまぎれもなかった。

夜具のかげの、かたはずしの黒髪がうごいて、

「ああ！　粂之助――」

と、嘆声をもらした。

市村座の女形坂東粂之助――それが、この部屋子の正体であった。五世菊之丞、五世半四郎の双美が眩しい舞台にあって、影の薄い存在であったが、妙に退廃的な色気を含む眼眸（まなざし）が、一部の女たちをひどく惹きつけて、茶屋に招かれる度数では屈指であった。

粂之助が、枕元に寄ると、まだ二十歳前とみえる目鼻立ちが整いすぎるくらい整った中﨟が、緋縮緬の袖をすべらせて、白い二の腕あらわに、粂之助の頸をとらえ、

「会いたかった！」と、喘いだ。

その眸子（ひとみ）には、はじめて恋を知った者の、一途に思いつめた情熱が熱っぽくあふれていた。

「御切手御門を通る時は、いのちが十年もちぢむ思いがいたしました。御門番頭が、お乗物の中を、御名代さまのかわりに、男がひそんでいるのではないか、とお疑いなされましてなあ――」

そう云いつつ、粂之助は、もう、中﨟の白羽二重の襟もとから、片手をさし入れて、柔かな隆起をまさぐっていた。

中﨟は、まぶたをとじると、なかばひらいた朱唇に男の口が落ちて来るのを待って、熱い息を喘がせた。

粂之助は、夜具をはねのけると、もう一方の手で、そのしごきを解いてやり乍ら、おのれもまた、八丈の下着を乱して、脛あらわに、片脚を、女の膝のあいだに割り込ませていった。

それから……小半刻も経ったろうか。粂之助は、死んだようにぐったりとなった中﨟の上から、起き上ると、さっきとはうってかわった、小ずるい利己的な面持になって部屋を見わたした。

中﨟のはだけた前をかくしてやるしぐさだけは女形らしく、つと立って、片隅の鷺足の鏡台にいざり寄って、化粧なおしをするとみせかけつつ、そこに置かれた道具を物色した。そっと、櫛笥の蓋をとったとたん、粂之助の目がさもしく光った。

金と鼈甲と真珠でつくった花笄が、その中にあったのである。

「お方さま」

粂之助は、それを把りあげて、

「これを、お借りできませぬか」

と、さし出した。

「あ、――それはいけませぬ」

中﨟は、あわてて、はね起きて、とりかえそうとした。粂之助は、すばやく、うしろにかくして、

「わたくしが、こんどの芝居で、御守殿様になることは、ご存じではございませぬか。おねがいでございます。明後日の初日には、ぜひ、この花笄を挿して、舞台へあがらせて下さいませ。……おねがいでございます」

「でも、それは大納言さま（世子家慶）から拝領した品なのです。このたび催される町入能興行で、髪を飾るようにと、賜ったのですから……そればかりは――」

中﨟は、心から当惑して、かぶりをふった。

「町入能興行は、五日あとではございませぬか。わたくしの方は、初日がすめば、すぐにおかえしいたします。……粂之助、一生のおねがいでございます。お貸し下されませ」

いきなり、中﨟にのしかかった粂之助は、狂おしく、かき抱いて、その目へ、頰へ、脣へ、あごへ、耳朶へ、のどへ、口をおしつけていた。

ついに中﨟は、

「では、初日だけ……」

と、承知しないわけにはいかなかった。

三

次の日の、同じく夕まぐれ、坂下門を出て来たのは、大奥部屋の整え物を弁ずる御用達碇屋藤右衛門の手代と、お使番らしい黒塗りの御切手箱をかかえた女中であった。

門を出て、ものの一町も行かぬうちに、女中は、手代へ、

「お世話になりました」

と、礼をのべて、別れた。坂東粂之助であった。碇屋まで使いに立つとみせかけて、城を抜け出て来たのである。

やがて――。

井伊掃部頭の上屋敷に沿うて、俗に謂うさいかち河岸を辿って、霞ケ関へ抜けようとした。高塀と路面の半分があかあかと夕陽に染められて、長くつづき、人影はさらに見当らなかった。

「待て！」

不意に、背後から、鋭い声がかかり、粂之助は、びくんと肩をすくめて、ふりかえり、あっと息をのんだ。

非番となった志賀源八郎が、らんらんと燃える眼光を射込んで来たのである。
粂之助は、両膝ががくがくとなり、思わず、その場へ、坐り込もうとした。
すると、すばやく、迫った源八郎は、その片腕をとらえて、
「歩け！」
と、命じた。
濠端の低い堤へ、ひきずるようにして、つれて来た源八郎は、芝の上へ突き倒して、
「昨日は、まんまと、拙者の目をごまかしたな。たもんに化けていたと気づいた時は、もうおそかった。今日はまた、非番になり、貴様を御門で捕えることはできなかった。ここで生捕ったところで、もはや、なんの意味もなさぬ。よって、生捕りはせぬ。そのかわりに、斬る！」
「ど、どうか、お、お見のがし、下さいませ！　お金で、す、すむことでございましたら、ど、どんなことをしても、おつくり申します。おねがいでございます！」
「たわけ！」
源八郎は、ただもう、大奥へ忍び入る密通男が、憎かった。八つ裂きにしても足りなかった。
「坊主でないのが、物足りぬが、役者ならば、念仏の真似事はできるであろう。となえろ！」
あびせられて、粂之助は、本能的に跳びあがって、逃げ出そうとした。
その背中へ、一閃、ふり下した源八郎は、腰を蹴って、ぐんと刃を引き抜いた。
「虫けらめ！」
ひくく罵って、そのえりくびをつかんで、ずるずると、堤へひきあげると、濠めがけて、突き落した。
しかし、水音がせず、斜面へひっかかった様子に、源八郎は、苛立たしい様子をしめしたが、人目にふれるのをきらって、そのまま、急ぎ足に、立ち去って行った。
死骸は、何かにひっかかったのではなく、一人の男に、抱きとめられたのである。
源八郎が、粂之助をつかまえて、堤へ来た時から、その男は、松の陰から目撃していたのである。
鼠小僧次郎吉であった。
――ひとつ、年貢納めの仕事に、将軍の屋敷へ忍び込んでやろうか。
そんな大胆な野望を起して、堤に腰を下していたところであった。
敏捷に、斜面を奔って、逆落しにすべって来た死骸を、ひょいと抱きとめた次郎吉は、上の斬手が立ち去る

のを待ってから、苦悶に歪んだ顔をのぞいてみた。
「坂東粂之助じゃねえか。……ふん。可哀そうに、舞台と茶屋でだけ濡れ事をやってりゃ、まちがいはねえのに、大奥へまで、足をのばしゃがるから、このざまだ」
と、独語をもらしつつ、なにげなく、みっともなくはだひらいた下肢へ視線を移した次郎吉は、
「お――」
と、その内股をすかし見た。
そこに、朱彫りで、『於佐久の方いのち』と浮いている。
「於佐久の方――へえ、お手つき中﨟らしいぜ。公方の妾を情婦にしやがったとは、いい腕前だ。こうなる因果も、しかたがあるめえ」
首をふった次郎吉は、死骸を、そうっと、水面へすべり落してやっておいて、堤の上へあがった。
ふと、そこに落ちている御切手箱を見つけて、なんとなくひろいあげて、次郎吉は、持って行ったが……これが、あとで大いに役に立った。

四

「桑乃弓蓬の矢の功は、誠にめでたかりけり。あら有難や、有難や。いざや我らも大来目の命にいのりてな。ゆみはりつきのやさしくも、雲の上まで名をあぐる弓矢の家を守らん。守らん。武士のやそ宇治川の流れまで水上清しや弓張の月……」
大納言家慶は、西丸大広間の能舞台で、ひとり、弓矢立合の稽古をしていた。
見物しているのは、御入側の薄縁敷に坐っている観世、宝生、喜多の能役者七、八名と、その背後の二之間に御殿女中が数名、そして、猿頭塀や法眼溜りや声掛櫓などに、二、三名ずつ、警護の黒鍬がひかえているだけであった。
このうち、御殿女中の一人――於佐久の方だけが、青ざめたおもてを俯向けて、家慶の舞いぶりを見ていなかった。
愛人粂之助が斬殺された事件は、次の朝、もう於佐久の方の耳にとどいていた。その悲嘆とともに、粂之助に渡した花笄の行方についての不安で、彼女は、生きている心地もないか、と思われる。
本丸大広間で催される町入能興行は、明日の夜に迫っているのである。於佐久の方は、その見物の座に、花笄をつけて出なければならないのだが……。
町入能興行とは――。
御謡初め（正月三日夜）、嘉祥御祝儀（六月十六日）、

玄猪御祝儀（十月初の亥の日の夜）の三祝典、及び御大礼の後に臨時に挙行される能であった。これは、祝儀能であって、将軍上覧、諸大名諸役人のみならず町人にも陪覧せしめられるのである。町人が露地に入って拝見するので、町入能の称があった。

能を拝見する資格を与えられた町人は当日大手門より城へ入って、中之門で、役人から、一人毎に雨傘を一本宛渡されるならわしであったという。この傘は、いただいて帰ることができて、街では、大変な貴重品あつかいをされた模様である。

このたびは、家斉の官位昇進の祝儀であった。

かねて、世子家慶は、この日のために、弓矢立合を習っていて、一興に舞うことを願い出ていたのである。弓矢立合は、観世、宝生、喜多の三人の相舞で、別に申合せもなし、俗にいうツカミ合う舞いであったが、家慶が加わることになったので、特に三座の大夫が工夫して、家慶を中心とした舞いをつくったのである。

そして、家慶だけは、童子の面をつけることになった。それは、ただの童子ではなく、室町時代上期に作られた面で、神秘と夢幻の、永遠なる生命力を表現した貌として、徳川家宝のひとつにかぞえられていた。

「釈尊は、釈尊の弓に、知恵の矢をつまよって、三どくの眠をおどろかし、愛染明王は弓矢をもって、陰陽の姿をあらわせり。されば五十明王の文珠は、ゆうゆうと現じて……」

ふと、家慶は舞うのを中止して、

「面がなくては、技に心が乗らぬ……。だれか、童子を取って参れ」と、命じた。

面の位をとる——という言葉がある。面が持っている品位を心に映しとることである。それをかぶって演じようとする者は、数日前から、絶えず面を眺めて、その位を会得しなければならぬ。技がすぐれていても、面が悪ければ位が出ないのと同じく、面がよくても、心がのりうつっていなければ、やはり位負けがする。そこに、能楽では、面の絶対的価値があるのである。

「手前、御持参申上げまする」

答えて立ったのは、喜多左近であった。

この時、はじめて、於佐久の方が、色褪めた顔をあげて、ちらと、喜多左近を見やった。その眸子は、なぜか、非常に烈しい色を湛えていた。

やがて、左近は、蒔絵筥を目八分にささげて、御橋掛りからあらわれると、御後座に置いて、平伏した。

「あけるがよい」

「はっ——」

左近は、淡黄紐を解いて、蓋をとった。

とたん——。

「お、おっ！」

烈しい驚愕の叫びが、左近の口からほとばしったので、家慶は、つかつかと寄って覗いてみて、

「…………？」険しく眉宇をひそめた。

筥の中から、童子の面は、煙のように消えうせていたのである。

そのかわり、——家慶がつまみあげたのは、

『鼠小僧参上』

達筆でそう記された一枚の紙片であった。

「水野越前を呼べ！」

家慶は、あらあらしく侍臣に命じた。

五

「次郎吉！」

闇の中で、わが名を呼ばれて、鼠小僧は、煎餅布団をはねて起き上った。

「あ——旦那。よく、こんなところへ……お使いを下さりゃ、すぐに参りましたのに」

四谷と市ケ谷の間にある低地に、崖へ凭りかかって建っている極貧長屋であった。

次郎吉が、いそいで行燈に火を入れると、腕を組んで坐っていた眠狂四郎は、すぐに、話をきり出した。

「お前は、江戸城へ忍び込んだか？」

「え？　いえ——まだでさ」

次郎吉は、怪訝そうに、狂四郎を見かえして、

「年貢納めの仕事に、御金蔵へ——とは、思いやしたが、こいつは、そう、おいそれとはやれる芸当じゃございません」

狂四郎は、懐中から、一枚の紙片をとり出して、

「これが西丸の規式小屋にしまってあった能面筥の中にあった。能面は消えていた」と、云った。

狂四郎は、武部仙十郎から依頼を受けて、次郎吉にたしかめに来たのであった。

「とんでもねえ。あっしゃ、やりませんぜ。第一、あっしゃ、金釘流だ。これは、旦那もご存じの筈じゃござんせんか」

「そうだったな。……お前が、いつ、能筆になったか、ふしぎに思っていた」

狂四郎は、笑った。次郎吉のしわざでないことをあきらかにしておけばよかったのだ。その件には、もうふれずに、狂四郎はほかの話題に移って、やがて、腰をあげようとした。

ふと、次郎吉は、思い出して、
「べつに、そのことに関わりはないかも知れませんが——
——」
とことわって、三日前、濠端で目撃した坂東粂之助斬殺の一条を語り、そのおりひろった御切手箱をさし出した。
御切手箱には、朱で、「西丸」と記してある。中には、御切手のかわりに、花笄が入っていた。見事な造りで、葵の紋も入っている。ちょっと思案していた狂四郎は、
「粂之助の内股には、たしかに、於佐久の方といういれずみがしてあったのだな？」と、念を押した。
「へい、まちがいございません」
狂四郎は、立ちあがって、
「次郎吉、お前も、役者なみに、大奥の女中にまで、名がひびいたな」
「へえ？」
「こんどは、本物が、金釘流をのこして来ることだな」
翌朝、まだ、夜明けの霧が、後苑にのこっている頃合、於佐久の方は、ただ一人で、足早やに、中庭の白洲を横切って行った。
お使番が、そっと、泉水の彼方の築山にある亭で、喜多左近が待っている、と報せて来たのである。喜多左近は、於佐久の方の父親であった。
土橋を渡って、深い樹立の斜面をのぼると、ひとむらの萩、球形の手水鉢、水螢の燈籠をあしらった亭が建っている。峠の休み茶屋という見立である。
於佐久の方は、手水鉢の脇へ立った時、ぎくっとなって、立ちすくんだ。
父の左近は、たしかに、亭の中に待っていた。しかし、その両手は、後にしばりあげられていたのである。
「中へ入って頂こう」
ふいに、背後から、声がかかった。
首をまわすと、黒の着流しの浪人者が、いつの間にか、置石に、うっそりと立っていた。
於佐久の方は、あやつり人形のような足どりで、土間に入った。
「これをおかえししよう」
眠狂四郎は、まず、そう云って、花笄をさし出した。
於佐久の方の血の気のないおもてが、さらに強い衝撃で色をうしなった。
「そのかわりに、童子の面をもどして頂く。父親に盗ませて、どこに匿された？」
「…………」
「白状せぬと、父親の首が飛ぶぞ！」

低いが肺腑をつらぬく狂四郎の叱咤に、びくっとおびえあがった於佐久の方は微かな声音で、自分のすまいの仕舞所の鏡台の抽斗にあることを、告げた。
於佐久の方は、童子の面をかくせば、家慶が、当日急病と称して、能舞台を休むであろうし、したがって、自分もおともをして本丸へ行かずにすむ、と考えたのであった。いわば、自身の小さな過失をかくすために、大きな罪を犯す結果をまねいたのである。
いつの間にか、亭の外に、顔をつつんだお忍びの家慶が来ていた。かたわらにひかえているのは、武部仙十郎であった。
狂四郎は、仙十郎をふりかえって、
「余興をおゆるしねがえるか？」
と、問うた。
仙十郎が頷くや、狂四郎は、於佐久の方へ向きなおりざま、無想正宗を鞘走らせていた。
「呀っ！」
於佐久の方は、全身が、じーんとしびれた。斬られたと感じ、のけぞってゆくからだをささえようと、両手で虚空をつかんだ刹那、まとうていた衣装のすべてが、ぱさっと、前でふたつに割れた。
斬られたのは、胸と胴を締めていた帯としごきと紐であった。
あらわになった白い胸、腹、太腿を、悲鳴とともに、掩いかくして、しゃがみこもうとしたが……それよりも、一瞬はやく、狂四郎がくり出した白刃は、股と股のあいだへ、すーっと挿込まれていたのである。しかも、刃を上にして——。
狂四郎が、冷然として、徐々に刀身を抉るにつれて、ぽってりと柔肉の盈ちた股が、ひらいていった。
その内股には、鮮かな朱で、
『粂之助いのち』
と、いれずみがしてあったのである。

必死刀

一

「なにが可笑しいぞい！」

憤然たる叫びとともに、いきなり、天水桶から、手桶でざぶっと汲みとられた水が、古着屋の店さきへ、ばあっとぶち撒かれたのであった。

古着店といえば、すぐに思い泛べられる牛込改代町の裏通りでの、午さがりの出来事であった。片側に、数十軒の古着屋が檐をつらねていて、この町で、ととのえられぬ衣装はないといってよかった。

当時の地図をみると、古着屋町の周囲は、ことごとく武家地である。武家地というのは、旗本御家人の住宅地のことであって、いわば、武士階級というものが、身にまとうものを悉く剝がれるまでに窮迫した事実を、この地図が証明しているわけである。

したがって、古着店の町人たちは、さむらいを、完全に軽蔑していた。

そこへ――。

たまたま、これはもう当時の江戸の街では滅多に見うけられぬ、前帯へ脇差をおびた武家の老婆が、せかせかと通りかかったので、店者たちが、露骨な嘲笑をあげたのであった。

隠居は、辰野おばばであった。気が短い、というよりも、槍一筋の誇りをその痩軀に満たしている、南の果ての、封建の気概凛乎たる国の老婆であった。すでに、江戸では、農工商の上に立つ士の威風が、堕ちて土と化している時勢の推移を、いささかも理解するところではなかった。

「見居ったか、素町人ども！　将軍家お膝元をかさにかぶり居っての増上慢、断じて容赦できぬわ。水をかけられて口惜しかったら、どやつでも、かかって参れ。この古稀のばばが、歪みくさった土性骨をたたき直してくれようぞ！」

辰野おばばは、すっくと腰をのばして、喚きたてた。

まことに、この江戸という街は、おばばにとって、何から何まで、気に食わなかった。

ふた言めには、江戸っ子の意気だとか通だとか、とほざいて、繊弱きわまる嗜好雑伎にうつつをぬかしている有様は、見るに堪えなかった。町人や職人などの市井の

匹夫が、虚栄に駆られて贅を誇り奢を為すのは、下種根性のはけ口として見のがせるとしても、武家たる身が、直参、陪臣、定府、勤番たるを問わず、町家の風を模して、ぞろりとした縞縮緬を裾長にまとい、細身の大小を落し差して、役者の声色やら言葉ぐせをまねて、「つがもねえ」だの「恐れ入谷の鬼子母神」だの「堪忍信濃の善光寺」だの、と駄洒落ているていたらくは、けがらわしいというもおろかだった。

屋敷町を除けば、往還は、牛馬犬の糞だらけだし、職人どもは、若い女と見れば、聴くに堪えぬ猥雑なからかいをやっているし、立派なさむらいが通っているのにも拘わらず、脇で平気で放尿しているし、大店に入ると、田舎者と見てまるで相手にせぬし、どこの横丁からも、白昼から、三味線の音が流れ出ているのである。下級武士が、貧窮にうちひしがれて、肩をすぼめ、背をまるめて、道端をこそこそとひろっている姿などを見うけると、辰野おばばは、大声で叱咤したい衝動にかられずにはいられなかった。

国許では、武士は武士、町人は町人、百姓は百姓、とそれぞれの身分によって、日常のなりわいは整然たる秩序がたもたれている。町人百姓は、武士と見れば、道をひらいて、丁重に会釈をする。その脇で放尿などとは、想像さえもつかぬことである。大身と雖も、木綿、紬の紋服をまとっているし、まして、町人など、どんなに富有でも、縮緬などもってのほかのことであった。三味線の音なんぞ、武家として、生れていまだ一度もきいたことがないのが、普通とされていたのである。

――まるで、江戸中が、腐りはてた掃溜じゃわい。

辰野おばばは、毎日、臭気に鼻も曲るしかめ面で、歩いていたのである。

しかし、辰野おばばの、杖をしごいて、大股にふまえた姿は、店者たちの、さらなる侮蔑を招くに役立っただけであった。

「乞食芝居や独り相撲よりは、面白そうだぜ。どうだい、お前、口上がたをひきうけてやったら――」

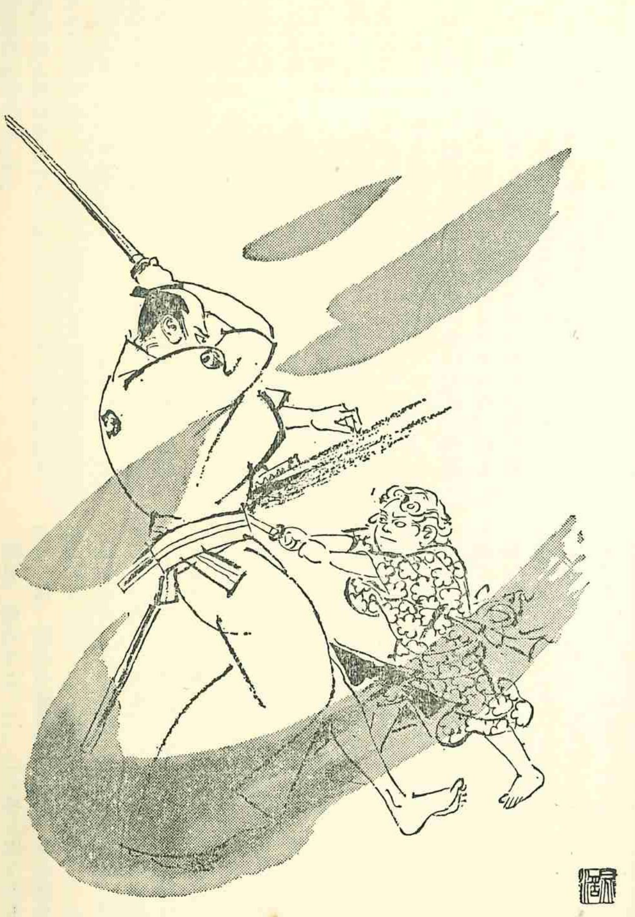
とか、

「番頭さん、投げ銭次第で、あの婆さん、居合抜きもやりそうですぜ」

とか、小僧までが、せせら笑って、退屈しのぎの見物気分であった。

「おのれっ――なにが、江戸っ子の勇み肌じゃ。このばばにむかって参るだけの度胸のある下郎めは、一人も居らぬのか。腰抜けども、汝らの常套句の、糞くらえを、このばばの方から、抛りつけてやろうぞ！」

云いざま、辰野おばばは、足もとの馬糞を、店の中へ、蹴込んだ。
「おい、御隠居！」
背後から、つかつかと寄って来たのは、仕事師らしい風体の男であった。老婆と見て、いかにも無造作に、その肩をとらえようとしたのが、まちがいだった。
いきなり、杖で向う臑を、ぱっとひと薙ぎされた仕事師は、悲鳴をあげて、地べたへ臀もちをついた。
辰野おばばは、それだけではすまさず、
「たわけ！」
と、小意気に刷毛先を散らした丸額をぴしりと、打ち据えた。仕事師は、そのまま頭をかかえて、俯っ伏してしまった。
「次の下郎め、出て参れ！」
ぐるりと、あたりを睥睨した老婆の身構えぶりを、もう嗤う者はいなかった。その眼光、口吻、そして、痩軀から発する気魄は、不気味とさえも受けとれる憎体なものだった。
「くそ婆ア！　袋叩きにしちまえっ！」
一人が、怒鳴ると、群衆は、どっとざわめきたった。その中へ四万六千日に浅草金竜山へ参詣した者が加わって来て、
「おっ！　ありゃア、このあいだ、眠狂四郎に斬りつけた婆さんじゃねえか。ただの婆さんたアちがうぜ。巴御前と板額を合わせて、年をとらせたような女傑だアな。三人や四人たばになって、かかったところでかないっこはねえ」
「おうおう、いやにてめえ、婆さんの肩を持つじゃねえか」
「おらア、女傑が好きでの」
「けつはけつでも、尻の方だろう、てめえの好きなのは——」
「だから、尻押ししているんじゃねえか。なにしろ、板額は醜女(しこめ)だからの、前から攻めたんじゃ、槍切れねえ、てんで、敵の大将藤原清親公におかせられては、ひそかにうしろに忍び寄り、えい、やっ、ぶすりと突き出せば、板額まけたと気前よく、どうとばかりにころびけり、って吾妻鏡に書いてあらあ」
そこへ——。三、四人の若い者が、天秤棒を持って走って来た。
辰野おばばは、ござんなれ、とばかり、杖をひとふりふたふりしてから、天水桶を背にして、ぴたっと青眼にかまえた。
このおり、ゆっくりと、前へ出て来た一人の町人があ



った。
若い者たちにむかって、
「わたしは、備前屋という者だが、ひとつ、この場をまかせて下さらんか。七十すぎた御隠居を袋叩きにしても、江戸っ子の自慢にはなりますまい」
にこにこし乍ら、懐紙に一分銀をひねって、一人に手渡した。眠狂四郎に斬りかけた老婆だ、ときいて、備前屋は、ふと、興味を持ったのである。

二

短夜に、のこる口舌の朝直し
迎いの猪牙は捨小舟
そのまま、けさの居つづけは
たがいにつのる恋なさけ
はれて添い寝を待つわいな

深川の岡場所、大新地の揚屋五明楼の離れでは、今日も、その文句に程遠い少女が、三味線をひき乍ら、けんめいに唄っている。そして、寝そべっている眠狂四郎もまた、惘然として、昨日も明日もない無表情であった。
中野三重塔裏の家に、美保代と幼児を置き放しにしてから、もう久しい。
時おり、帰心が矢となって馳せることがあったが、何故か、足はその方角へ向かなかった。
昨日、帰ろうとして、この楼を出乍らも、狂四郎が行ったのは、渋谷の丘陵であった。母の墓のかたわらにねむる静香には、まだ墓石もなかった。
狂四郎は、その前に、一刻あまりも、虚脱したように佇んでいたのである。
――死んだ者は、何故このようにしずかなのか？
そんなとりとめのない感慨が、脳裡を横切ったほかは、狂四郎の心中は、うつろであった。
突然――、狂四郎が、ぱっと起き上ったので、少女は、思わず、口をつぐんで怯えたまなざしを送った。
なんのいわれもなく、不吉な予感が来て、狂四郎は、そうしたのであったが、……すぐに、苦笑になった。
母の墓の、もう一方のかたわらに、美保代がねむるのではなかろうか――その予感であった。
――莫迦な！　あそこへねむるとすれば、このおれの方だ。
ふたたび、ごろりと仰臥しようとした時、襖がひらいて、
「吉五郎でございます」
と、声がかけられた。
起き直った狂四郎は、

「世話をかける」と、云った。押上の竜勝寺に預けたお園のことであった。
「なんの……。ただ、どうも、旦那の位牌をおがみなさるのだけは、あまりいい気持がいたしません。空然さんがまたお人がわるくて、このあいだの命日に、大真面目で、お経をあげなすったそうで――」
「よかろうではないか。とっくに死んでいるのがあたりまえで、生きているのが不思議なくらいなのだ、わたしという男は――」
「とんでもねえ。旦那には、美保代さまと仰言るかたがいらっしゃいますぜ。せっかく幸せにおなんなすったんだ。あのおひとだけには、もうこの上の不幸な目にお遭わせいたしとうはございません」
「ところが、たったいま、美保代の生命も長くはないような予感がした」
「冗談じゃありませんぜ！」
吉五郎は、目をいからせた。
「わたしという男とかかわりあった女で、幸せになった者は、殆ど居らぬ。わたしは、まず、母親を不幸にするために、この世に生れた。この宿命は、死ぬまでついてまわるような気がする」
「旦那！　止しやしょう。あっしは、そんなことは信じませんぜ。そうでさ、ほかのおひとはどうだか知りませんが、美保代さまにだけは、そんなことがあってはなりませんし、またある筈のものじゃございません。……旦那は、どうも、そういう考え方をなさるのが、たったひとつ、わるいお癖でさあ」
狂四郎は、声なく、うすら笑っただけであった。
「ところで、お前は、このあいだ、呂宋作兵衛という男が、林肥後守の中屋敷へとじこめられていると云っていたな？」
「へい。そのことでございます」
吉五郎は、顔をひきしまったものにして、
「まだ、生きて居るらしいので……ひとつ、あっしにやれるかやれねえか、今夜あたり、忍び込んでみようと存じます」
「好んで死にに行くことはあるまい」
「これは、あっしのわるい癖でござんしてね」
「あの屋敷は、目下、親不知組というえりぬきの庭番たちの巣窟になって居る。そうでなければ、わたしが忍び込んで、お前にそんな決心をさせるまでもなく、作兵衛を救い出している筈だ」
「へえ――」
吉五郎は、戸惑って、目を伏せた。

「わたしにまかせておいてもらおうか。手荒なことをせずに、作兵衛を救い出せるてだてがあるかも知れぬ」
　そう云って、狂四郎は、吉五郎へ、盃をさした。

三

　辰野おばばは、料亭升屋の、寝殿造りの亭に、およそ不釣合な仏頂面で坐っていた。
　しかし、居心地は、わるくないのであった。世話をしてくれる女中たちも、きちんとした作法を身につけていて、文句のつけようはなかったし、出される料理も美味しかったし、三味線の音もここまではとどかなかった。
　障子をあけはなつと、幽邃な池泉回遊式の結構は、市井にあることを忘れさせてくれるのである。
　――こんな方図もない料亭をかまえているあの備前屋は、ただの町人ではあるまいの。何者であろ？
　辰野おばばは、古着屋町で、仕事師の乾分どもを抑えて、ぐうの音も出させなかった備前屋の貫禄が気に入って、さそわれるままについて来たのである。この料亭へ入ろうとした時、やくざらしい男が近づいて、小声で何か告げるのをきくや、備前屋の細く切れた目にきらっとひらめいた光は、これはただものでないという直感を、おばばに生ませたのである。
　――まあ、何者であろうとかまわぬぞい。冠（かんむり）古しといえども猶頭にすえ、履（くつ）新しといえども尚地を踏むじゃ。その心得のある男なればこそ、あれだけの貫禄もそなわったと申すものであろうて。
　自分に都合よく合点したおばばは、池畔にしんとして佇む一羽の白鳥を眺めているうちに、流石に連日の街あるきの疲れが出たか、肱枕になった。
　とろとろとまどろんでいるうちに、
「おばば……おばば……」
　と呼ぶ声に、不覚の姿を見られた屈辱で、かっと目を剝いて、起き上った。
　いつの間にか、中仕切の襖をひらいて、一人の浪人者が、敷居に立っていた。
「お忘れか――おばば、紋部じゃ。紋部三郎太じゃ」
「おう――」
　おばばは、唖然とした顔つきでじろじろと見まわしていたが、
「おぬしが、この料亭の用心棒かや？　竹刀の持ちかたも知らぬおぬしが――」
　と、吐き出した。
「まあ、そうさげすまんでくれい」
　紋部三郎太は、卑屈な追従笑いを泛べると、座につい

た。
　紋部は、薩藩でも名門に属する家柄で、勘定方三百石をもらっていたが、数年前、大阪の菱垣船を利用して蘭旗を掲揚して長崎港に入っていたイギリスの密輸船と大きな取引をやろうと企てたことが発覚して、逐電した男であった。
「やれ、なさけなや。紋部家の当主たる者が、料理屋の居候になりさがろうとはの。ご先祖様が、嘆き余ってござろうて」
　辰野おばばは、そっぽを向いて、いまいましげに毒づいた。
「おばば――。拙者も、いつまでも、このままで朽ち果てようとは思うては居らぬ。実はな、おばば、備前屋は、御勝手掛の若年寄林肥後守様や、御納戸頭取美濃部筑前守様と、直接膝をつきあわせて、江戸大阪の大町人に御用金申渡しの相談にあずかる勢力を持った男だ。拙者は、近く、備前屋の周旋で、勘定吟味方の見習に就けるかも知れぬのだ。これは、嘘ではない」
「おぬしが、鹿児島から逐電した罪は、消えては居らぬぞ。なんで、そんな前科者めを、公儀が登用するものか。このばばを云いくるめようなどと、小ずるい腹黒は止めにせい」
「いや、信じてもらえぬのは、むりもない。しかし、今更、拙者が、おばばに嘘をついてみたところで、はじまらぬではないか。……おばば、拙者は、この際、備前屋の知遇にこたえるひと働きをしようと思うのだ。これは、おばばに目的をとげさせることにもなる」
「なんと云うたぞい？」
「おばばに、眠狂四郎を討たせようというのだ」
「おぬしの助太刀でか。莫迦もやすみやすみに申すがよい。帳尻ごまかしの筆しか持ったことのないその細腕で、眠狂四郎にたちむかえると思うてか。笑止千万な――」
「策があるぞ、おばば」
「小ざかしい猿知恵が、おのれを鹿児島に居られぬようにしたのではないか」
「ならば、おばば――。おばばこそ、その痩腕で、眠狂四郎が討てると思っているのか。それこそ、笑止と申すものだ」
「わしには、神明の御加護があるぞい。天より之を祐（たす）く、吉、利あらざるなしじゃ」
「それは、勿論、そうであろうが、魔剣にひとしい凶刃をふるう眠狂四郎を討つには、策をねって、ねりすぎるということはなかろうが――。おばば、拙者には、それ

がある。必ず狂四郎が討てる！」
「その策は、なんぞい？」
「まあ、拙者の胸三寸を信頼してくれい」
紋部三郎太は、にやりとした。

四

その日の暮れがた――。
同じ升屋の、奥まった一室で、ひとり、部厚い帳面をひろげて、算盤を入れるのに余念のなかった備前屋は、ふと、背後に人がいるような気がして、何気なくふりかえり、愕っとなった。
しかし、すぐ、大様な笑顔をつくって、
「これは、ようこそ――さ、さ、どうぞ」
と、上座をすすめた。
眠狂四郎は、膝を折って、腕を組むと、
「備前屋、お互いに、悪運つよく、生きのびているものだな」
その言葉を、ひさしぶりの対面の挨拶とした。
「左様で――。ときどきは、敵意ぬきでお目にかかりたいものでございますな。口はばったい申分でございますが、上杉謙信が武田信玄へ塩を贈った気持は、よくわかりますでございます。お会いして、笑って話しあって、次の日から、貴方様のお生命をつけねらう――こりゃア、他人様には、ちょっとわからぬ心意気でございましょうな」
「そう云ってくれると、こちらも話がきり出しやすい。……おぬしは、呂宋作兵衛という海賊を捕えて、林肥後邸へ拘禁しているそうだな？」
「よくご存じでございますな。いかにも仰言る通りでございます」
「その男を、おれにくれぬか？」
狂四郎は、ずばりと申出た。
「作兵衛に、どんな御用が、おありなさる？」
「べつに用はない」
「と仰言いますと？」
「おれは、十年前、長崎帰りの船から、ある娘をひきさらって、あらしの海へ投じた。その娘は、病気であったし、当然、死んだものと思っていた。ところが、たすかって、今日まで生きのびていた。その救い主が呂宋作兵衛だったのだ。……作兵衛は、どうやら、十年間、女をやしない乍ら、指一本ふれずにいたらしい。その寛大な慈悲心に対して、心中のかたわれであるおれが、いささか酬いるところがあってもよかろうと思う」
備前屋は、ややしばしの沈黙を置いてから、静かな口

調で、
「てまえが、商人であることをお忘れになっているわけではございますまい」
「心得て居る」
「いくらで、作兵衛を引取ろうと仰言います？」
狂四郎は、微笑して、
「兵堂掃部が、松平信明に命じられて隠匿した輸入金六十貫は、根岸の御行の松の根かたにねむっている」
「ほう――」
流石に、備前屋は、おどろきの色を顔から掩い難く、細い目を底光らせた。掃部の娘百合枝の双眸に嵌めてあった玻璃二枚に、その場所が記してあったと気づいた時には、すでに狂四郎からそれを奪い去られていた無念は、いまだに、なまなましい。
「掘り出すのが面倒なので、そのまま、すててある。おぬしが、掘り出すがいい」
「かまわぬと仰言る？」
「但し、掘り出したあとで、こちらから貰いに行くかも知れぬ。せいぜい要心することだな」
「それは、そうして頂いた方が、こちらも、掘り出し甲斐がありましょう。……よろしゅうございます。作兵衛を自由にしてやりましょう。お約束いたします」
交渉が成ると、備前屋は、卓上の銀の鈴を鳴らした。
酒が来てから、備前屋は、
「ところで、貴方様を敵とねらって居る薩摩の御隠居がございますな？」
と、云い出した。
「わたしが船からつれて逃げた女の許婚者の母親にあたる」
「ふむ。これは、偶然でございます。てまえが、今日、ここへおつれして居りますよ。離れにおいでございます」
これをきくと、狂四郎は、ちょっと考えていてから、
「会わせてもらおうか」と、云った。
「よろしゅうございます」
備前屋が頷くと、酌をしていた女中が、
「あの御隠居様は、八つ半ごろ紋部さんとご一緒にお出かけになりました」
と、告げた。
「紋部と？　何処へ行ったのだ？」
「はあ？……玄関をお出になる時、中野まではよほどの道程か、と紋部さんにおたずねになって居りましたから、たぶん――」
みなまできかずに、狂四郎は、もう立ちあがってい

た。
「備前屋！　馬をたのむ！」

五

　辰野おばばと紋部三郎太が、中野三重塔裏にある眠狂四郎の隠れ家へふみ込んだのは、美保代が、混血児新太郎に日課の手習いをさせている七つ下刻であった。
　案内を乞う声に、出て行った下僕が、急に大きな悲鳴をあげたので、はっとなった美保代は、すばやく、新太郎を、奥の間へつれて行き、
「ここをうごいてはなりませぬぞ」
と、云いきかせておいて座敷へ戻った。
　その時、もう廊下で荒々しく鳴らす跫音がそこまで近づいていた。美保代は、床を背にして正座すると、現われた見知らぬ浪人と老婆へ、澄んだ眼眸（まなざし）をあてた。
「眠狂四郎の内儀だな？」
「そうです」
「同道してもらおう」
「主人の許可なくして、家を出ることはできませぬ」
「抵抗を承知の上で参ったのだ！」
　怒鳴って、三郎太は、いきなり、刀を抜きはなつと、ずかずかと迫った。
　辰野おばばは、美保代の態度を見まもりつつ、「ふむ――」と、ひくく鼻を鳴らした。おばばは、これまで、かくも静かな気色を湛え乍ら、みじんの隙もみせずに端然と膝へ手を置いた女性を見たおぼえがなかった。
　――三郎太ごときが歯のたつ対手ではないわい。
　それだからこそ、気性烈しいこの老婆は、おのれの腕前をぞんぶんにふるってみせる闘志を沸かせて、思わず、鼻を鳴らしたのであった。
「立てい！」
　三郎太は、美保代の胸もとへ、切先をつきつけて、威嚇した。美保代は、能面のごとく色をかえず、微動もしなかった。
「立たぬかっ！」
　怒号をさらに大きなものにして、三郎太が、切先をつめた瞬間、左方の襖をひきあけて、
「ばか！　ばか！」と、可愛い叫び声を放って、白刃をひらめかした者があった。
　おろかにも、紋部三郎太は、武芸の修得のないかなしさで、刀を抜いていることだけでもうひどく興奮していた。
　そのために――白刃のひらめきが、視野の片隅にとび込むや、それをかざしたのが四歳あまりの幼児であるこ

とをたしかめる余裕もなく、夢中で、ぴゅっと、一刀をふり下げた。
　美保代は、よもや大の男が、そんな無慚な振舞いに出ようとは思っていなかったので、その手もとへとび込むいとまもなく、反射的に、新太郎をかばって、みずからの背中で、その凶刃を受けとめたのであった。
「しゃっ！　たわけがっ！」
　辰野おばばは、意外な事態に唸り声をたてたし、三郎太は、したたかな手ごたえに、愕然とわれにかえって、
「し、しまった！」
と、ほぞを噛んで、茫然と棒立った。
　この時、新太郎が、ちょこちょこと走り寄ったかとみるや、だまって、三郎太の脾腹めがけて、小脇差を、ぐんと、突き出したのであった。
　幼児の力とも思われず、怒りのこもった切先は、ぶっつりと、二寸あまりも臓腑へ嚙み入った。
「う、うっ！……お、おのれっ！」
　形相を悪鬼と化して、三郎太が、刀をふりかざしたなり、どどっとよろめくや、新太郎も小さな両手でしっかと柄をつかんだまま、ずるずるとひきずられた。
　三郎太と新太郎をひきはなしたのは、辰野おばばであった。
　おばばは、三歩前に、血まみれの小脇差をかまえなおし、つぶらな眸子（ひとみ）に敵意を燃やして、にらみあげる異相の幼児を、じっと見まもっていたが、
「けなげな面魂よの。感服したぞい」
と、云いのこして、ぶざまにうずくまって呻く三郎太を、あしざまに罵り乍ら、ひきずりあげると、そのまま、つれ去った。
　美保代は、苦しいからだを起して、両手をさしのべ、小脇差をすててとびこんで来た新太郎を、ひしと抱きとめると、
「ああ……」
と、ひと声ひくくしぼって、目蓋をとじた。睫毛のあいだに湧きあがった泪は、あとからあとから、血の気の失せてゆく頬をつたった。
　――この子が、わたくしのかたきを討ってくれた！　母を斬ったにくい敵を、この子は、ゆるさなかった！
　深傷の疼痛も、この大きな感動で、消えていた。
　徐々にうすれてゆく意識は、甘美とさえ云える幸福感にひたっていた。
　狂四郎が、馬を駆って、戻りついたのは、それから小半刻ののちのことであった。

火焔船

一

道のべの木槿(むくげ)は、馬に喰われけり——芭蕉。

風もなく、美しく澄んだ静かな秋の真昼、眠狂四郎のひろって行く街道に、この生命短い花が、咲いていた。

——朝生暮死か。

狂四郎の胸中の感慨は、なんとなく湿っていた。このあたりに出て来ると、武蔵野も、広野のおもかげをとどめている。

楢櫟や竹の林が、冬を待つ色に移りつつあるのが感じられるし、萩や旗薄の繊細な、しかも茫々たるひろがりの中に、そのむかし、新田義貞が骰子(とうし)を投げ打って多摩川を渡って以来、この野をわけて奔馳して行った千軍万馬が、まぼろしとなって掠めるかのごとくである。

そして——。

はるかに、野末にかすむ連山の蜿蜒起伏が、回顧の幻想を、さらにひろげてくれる。山の峡から細く、まっすぐに立ち昇っている白い煙を、武蔵七党武士の烽火かと疑うのも、自然である。

ここ——石神井の、石神井城趾をぬけて、三宝寺池の北岸へ出て、丘陵の峰づたいに池をひとまわりした狂四郎は、やがて、楓樹にかこまれた閑寂な屋敷を、むこうに見出した。

——ただの手妻遣いの家とは見えぬ。

樹間にのぞく杮葺きの入母屋の屋根を眺めて、狂四郎は、心で呟いた。

奇術師胡蝶斎の隠宅であった。

ふたつの丘陵に挟まれたこの低い窪地は、いずれ名ある武蔵武士の末裔が隠れ住むにふさわしい場所であった。

なんという種類なのか、半間おきに、整然と並んで生えている太い角竹の藪をすすんで近づくと、冠木門には、いちめんに茸がついているのであった。

扉は開いていた。玄関に入った狂四郎を苦笑させたのは、衝立の前に、両手をつかえた裃すがたの福助人形が、

「おいでなされませ」

と、明瞭な声で、挨拶したことだった。

顔も手も、生きているような精巧なつくりで、平伏し

た首を擡げる動作も、不自然ではなかった。目蓋もまたたいたし、畳に置いた両手を膝に移すしぐさも小憎いくらいであった。

「胡蝶斎は、在宅か？」

狂四郎は、人間に対するように、その道化顔へ問うた。

「はい。居りまする」

「眠狂四郎がたずねて来たと、取次いでもらいたい」

すると、福助は、顔を上下に、愛想よく振って、

「眠さまなら、存じあげて居りまする。お上り下されませ」

と、こたえた。

式台へ足をかけた狂四郎は、衝立の陰にうずくまる者の気配をさとった。

それは、十七、八歳の色白な、宝来の能面に似た古風な顔だちの娘であった。

みちびかれた座敷の柱も天井も、据えられた調度も、すべてがくすんだ色の調和をしっとりとたもっていた。

ただ、八畳の中央に敷かれた虎皮の、入れ目だけが、強く光っていた。

胡蝶斎は、すぐに姿を見せた。

木賊(とくさ)色の木綿のつつ袖に軽衫(かるさん)をはいていた。そのいでたちが、いかにも、この古めかしい家にふさわしかった。

「ようこそ、おいで下さいました」

胡蝶斎は、狂四郎の訪問が、いかにもうれしそうだった。

狂四郎が、娘の腹話術をほめると、

「あれは、生れついての手妻遣いでございましてな。このてまえを、まんまと一杯食わせたほどのしたたか者でございますわい」

と、笑い乍ら、娘を弟子にしたいきさつを話した。

去年の秋、雑司ケ谷の感応寺の御会式に参詣しての戻り道、小雨に遭って、とある雑木林わきの稲荷堂の廂下へ、身を寄せた胡蝶斎は、一句ものしようと、しきりに、頭をひねっていた。

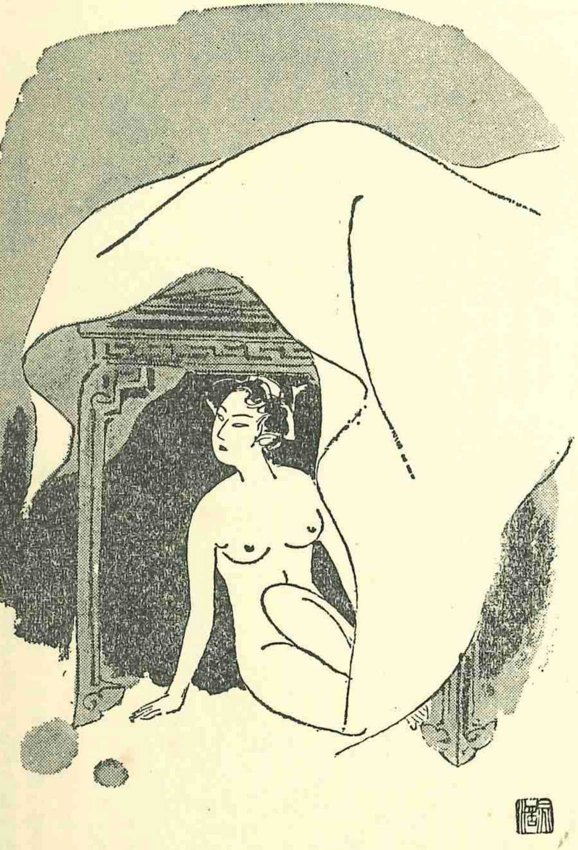
そこへ、一人の小娘が、かけつけて来て、いきなり、敷石へ、ぺったりと坐ると、両手をあわせて、胡蝶斎を、ふし拝んだ。

「どうしたのだえ？」

訊ねてみたが、哀しげに、眸子(ひとみ)にいっぱい泪をためて、見かえすばかりで、口もきかず、ひたすら、何か救いを乞う様子をしめしたのである。

胡蝶斎が、近よろうと一歩ふみ出すや、小娘は、はじ

かれたように立ちあがって、いっさんに駆け去ってしまった。
ほどなく、雨があがって、胡蝶斎が、畔途を辿ろうとしかけると、林の中から百姓が四、五人、細長い菰包みをかついで出て来た。
ふと見ると、菰の端から、けものの足がのぞいている。瞬間、胡蝶斎の脳裡を、さっきの小娘のすがたが掠めた。
「それは、狐かね？」
と、訊ねると、百姓たちは、野良荒しをやっとつかまえたところだ、とこたえた。
「わたしに売ってもらえぬか？」
たのんで、胡蝶斎は、気前よく、二分金を一人へにぎらせた。百姓なら、これで三月は暮らせる大金だった。
百姓たちは、狂喜して、菰包みをそこへなげすてて、去った。
「開いてみたら、なんと、それは、赤犬でございましてね。見事にしてやられたものでございます。……狐に化けたのがあの娘であったことは、もう申上げるまでもございませんが、てまえが胡蝶斎と知って、誑してやろうと云い出したのも、当人だとわかって、てまえは、ひと唸りしないわけには参りませんでしたな」



そう語って、胡蝶斎は、愉快そうに声をあげて笑った。
それから――、胡蝶斎は、生涯をかけた手妻の苦心について、いろいろと狂四郎にきかせた。もともと手妻は、傀儡、放下師などの卑しい軽業から生れたものだが、胡蝶斎は、それに品格のある花を咲かせたい、と念願して来た。愛弟子の放仙のわざが、とかく人目を派手に眩惑する軽業にもどろうとするのを、顰蹙（ひんしゅく）しているのである。
目下、娘に腹話術をしこむことに、非常に興味をもっているが、あれには天稟があり、上達が目ざましく、若いうちは芸に自然の花があって美しい、と世阿弥の「花伝書」の一節を引用したりして、胡蝶斎の話は、つきなかった。

二

狂四郎は、老爺の口がようやくつぐむのを待って、
「おぬし、外国の手妻を見る気はないか？」
と、きり出した。
「そりゃア勿論、ねがってもない幸いでございますが――」
「ところが、乗込むには、生命がけの覚悟を必要とするようだ」

「と仰言いますと？」
「どうやら、ただの手妻遣いではないとみている」
と、ことわって、狂四郎は、今日の訪問の用件を告げた。
　狂四郎は、重傷をうけた美保代のために、外国の特効薬を手に入れるべく、一昨日、神奈川港まで馬をとばして行ったのである。神奈川港は、南方本牧浦より、神奈川の出崎までの間、ななめにくり入った入海であった。船路一里余。西北に山があるので、風の憂いがなく、理想的な船がかりであったが、陸路が不便なので、わずかに肥料や雑穀などの陸揚地になっていて、諸国の大きな商船は、入って来ていなかった。
　彼方此方に網干高くかけた磯馴松、銅色の半裸の漁民たちが漁具の修理に余念のない浜辺、三々五々たちならぶ苫屋の背戸につづく表圃菜園、入江を越えた新田の笠簑のすがた――そうした名所図絵の景色が、当時の神奈川の海辺だったのである。ここへ、一艘の朝鮮船が、しばらく前から錨をおろしていた。
　朝鮮の聘使が、やって来たのは、前年の春であったが、それに扈従した一艘であった。九州まで、帰って行き乍ら、何の用件であったのか、またひきかえして来て、神奈川港に入るや、そのままのんびりとかまえてしまったのである。
　いったい、朝鮮から聘使の渡来は、慶長十二年からはじまって、ずうっとつづいているのであった。
　天下統一をした家康が、朝鮮と和解の事を計らうように、宗対馬守義智へ命じ、数年間の交渉がようやくまとまって、朝鮮正使通政太夫昌祐吉、副使通訓太夫慶暹、従事通訓太夫妙憲の三使が、対馬守にともなわれて京師に上って来た時、その款待ぶりは非常なものであった。
　家康は、それを前例として、
「これからは、朝鮮および琉球よりの使者に対しては、最大の礼をつくすように――」
と、遺訓のひとつにしたのであった。
　爾来、柳営における祝儀にあたっては必ず、朝鮮からは、賀使が海を渡って来ていた。しかし、朝鮮との交易は、わずかに船員数五十艘に限られ、それも、諸国から朝鮮へ遣す船は、必ず対馬に寄って、宗家の手形を請い、これを験とする手続きをとらねばならなかった。これが、大変厳重をきわめていたので、しだいに、船員が減じ、近年にいたっては、交易は、殆どなきにひとしかった。
　そのかわりに、抜荷買いの船が跳梁していたが――。
　いわば、国賓の一行に、密輸目的の連中がもぐり込む

ことは、当時としては、最も安全な手段であったろう。そして、それは、朝鮮政府そのものが、黙許したふしがなくはない。
　当時の記録をみると、正副使の随員は、夥しい頭数である。
　たとえば、文化八年に来た一行をみると――。
　正使通政太夫吏曹参議知製 散金履喬に付く上々官十名、上官二十四名、ほかに、船将をはじめとする使員が合計三百三十六名である。一艘や二艘の海賊が参加することは、きわめて容易だったのである。
　狂四郎は、神奈川港に居残った一艘を、それだとさとって、乗り込んで行ったのであった。
　船将は、李相玄という男で、こころよく狂四郎を引見したが、どういうこんたんか、特効薬のことはかんたんに承諾し乍ら、
「胡蝶斎という日本一の奇術師と、貴方はご懇意らしいが、実は、自分も、奇術には大層興味を持っているので、是非会って、手合わせがしてみたいと思っていた矢先故、近いうちに、おつれ願えまいか」
　と、たのみ、その時、特効薬もお渡ししよう、と云ったのである。
「この手合わせには、陰でたくらむ者がいるに相違ない。それと知りつつ、おぬしを誘うのだが――」
「面白うございますな」
　胡蝶斎は、こともなげな調子で受けた。
「参ろうではございませんか。後学のために、娘もつれて行ってやりましょうわい」

三

　二日後の、曇り日の午後、狂四郎と胡蝶斎とおせんという娘の三人は、横浜村の北方青木村の浜辺から、伝馬をのり出していた。行く手に、どっしりとした千石積ぐらいの船が、よこたわっていた。
「奇妙なかたちをいたして居りますな」
　胡蝶斎が云うと、おせんが、
「隠元豆のような小舟をいっぱい積んでいる」
　と、呟いた。
「あれは、アメリカから買った鯨捕の親船らしい。海賊船には、速力のある鯨船がいちばんいいようだ」
　と、狂四郎が、説明した。
　ほどなく――。
　狂四郎たちは、ひろい胴の間で、船将李相玄と、卓子をへだてて、曲彔に就いていた。
　李相玄は、ぶっくりとふくれた目蓋を、欝陶しげに眸

子へ垂らし、えぐられたように、頬をおち窪ませた、風采のあがらぬ男であった。年齢は三十がらみであろうか、大耳の人物らしく見せかける落着きをつくっているが、ひきむすんだ厚い唇の赤さや、ちょっとした身ごなしに、精悍な若々しさがあふれていた。白の木綿の頭巾、衣服ぱっちも白木綿、剣は帯びず、黒い革の沓を履いていた。

日本語は、流暢であった。

しばらくの雑談ののち、李相玄は、

「では、さっそくですが、わたしの奇術、お見せします」

と云って、使奴に、ぎやまん茶碗二個へ、それぞれ、赤い酒と水を盛らせると、ほかの器をつかわずに、これを入れ替えてみせると明言した。

白紙一枚を水の茶碗にあてて、これを逆立てて、ぴたりと、酒の茶碗にかさねた。そして、その紙をほんのすこしずらせて、片隅に、わずかな隙間をつくった。すると、その隙間をつたって、重い水が下へ、軽い酒が上へ——交ることなしに移ってゆくのであった。種も仕掛もないことだった。

かわって、胡蝶斎は、茶碗五個と豆五粒を借りて、その豆を一粒ずつ茶碗へ入れて、卓上へ伏せた。それから、端から、ひらいてゆくと、四個の茶碗は空になり、さいごの茶碗の中に、豆は五粒とも入っていた。

李相玄は、大袈裟な感服の身振りをみせておいて、おもむろに立ちあがると、片隅に据えてある大きな丸い棕梠製の籠に近より、蓋をとって、中をあらためてみせてから、その中へ使奴を入れた。一尺四、五寸あまりの両刃剣が、つぎつぎと、八方から籠の中へ突き刺されるたびに、使奴の凄じい悲鳴が噴きあがった。しかし、剣を抜きとって、蓋をとると、使奴は、けろりとした顔つきで、ごそごそと匍い出て来たものだった。

「されば……てまえの方も、少々危険なわざをつかいまするかな」

胡蝶斎は、細引をとり出して、おせんの手足を、曲彔にしばりつけた。

「短筒をご用意ねがいましょうか」

李相玄は、頷いて、白衣のかくしから、金銀の象嵌をほどこした短筒をとり出した。

「この娘の胸を狙って下さいまし」

胡蝶斎が、おせんの心臓をしめすや、銃口は、卓子をへだてて、ぴたっと据えられた。

なにかひどく愉しそうに、にこにこし乍ら、胡蝶斎は、両のてのひらを、目の高さで、しきりにもみ合わせていたが、ぱっと、大きな白絹の布を振り拡げて、おせ

んを、頭からすっぽりと掩い包んだ。

「お撃ち下さい」

と、促されて、李相玄は、無表情のままで、撃鉄を引いた。

轟然たる銃声とともに、ふわっと、宙に舞いたった白絹の下に、すでに、おせんのすがたはなく、卓子の下から、

「ほほほほほ」

と、明るい笑い声がおこった。

「おっ！」

卓子の下を覗いた李相玄は、思わず、異様な呻きをもらした。

一糸まとわぬ、月下の聚雪と形容するに足りる白い裸形が、そこに在った。温潤なその肌膚は、内に熱した烈しい気性にはげまされて、おしげもなく、なまめかしい陰翳を織って、李相玄の視野に、その前を曝していたのである。

李相玄は、しかし、その清純な豊肌に悩殺されるよりも、水際立った胡蝶斎の神技にむらむらと嫉妬をおぼえ、細目の底にあからさまな敵意を燃やしつつ、じろりと胡蝶斎へ一瞥をくれ、それから、狂四郎へ顔を向けた。

「眠さん、こんどは、貴方が、日本一の腕前を見せて下さる番だ」

狂四郎は、黙然として、腕を組んでいた。

卓上の鉦が叩かれた。

戸が開き、のっそりと出現したのは、全身を黒光りする鋼鉄の甲冑でかためた中世紀の武者であった。右手に濶剣（ブロードソード）、左手に手楯（バックラー）を携えていた。

「眠さん、あれを、貴方は斬れますか？」

李相玄は、微笑し乍ら、訊ねた。

生れてはじめて接する西洋の甲冑武者を、冷やかに眺め乍ら、狂四郎は、抑揚のない低声で、

「魔神でない限り、斬れぬことはなかろう」と、こたえた。

「おやり下さい」

促されて、狂四郎はやおら椅子から立った。

武者は、ずかずかと五歩の距離に迫るや、右足を、ぐっと前へ踏んで、丸い手楯を顔面へ引き、剣（ソード）をまっすぐに水平に突き出して、鋼鉄の中から、低い懸声を発した。その隙だらけな構えを見て、狂四郎は、苦笑した。

成程、並の腕前なら、鋼鉄を両断することは容易ではないかも知れない。狂四郎には、居合抜刀の玄妙なる秘業（わざ）がある。

居合は、敵の動機を瞥て、即ち剣鞘の中ですでに斬っている。八相にふりかぶって、きえーッと空気を鳴らして斬り下す刹那、すでに、心機は、もう斬ってしまった理をおさめている。したがって、いかに、対手がものものしい武具で身をかためていようとも問題にならぬ。巖石を截断すること、空物を摶つ如し——旋風打、虚空来、連架打、すべてこれ一心の至極という、これである。

この西洋甲冑武者は、殆ど、案山子にひとしい。

——どういうのだ、これは？

おのれが端倪すべからざる神速絶妙の気合を有する故に、狂四郎は、この疑惑を抱いた。しかし、この疑惑を、精微の用心に移さなかったのが、結果的に不覚となったとすれば、所詮、狂四郎は、剣術を知らぬ者にひとしかったということになるのであろうか。

狂四郎は、うたがいつつ、敵が、じりじりと、つめ寄るにまかせた。

はっ、と思った瞬間には、無想正宗は、自然に鞘走っていて、敵の手楯へ、ぴたっと吸いついていたのである。手楯には、強烈な磁力が罩められていた。

——しまった！

刀を奪って、一間を軽やかに跳びすさった武者を眺めて、狂四郎は自嘲した。

——ふん。エレキが武器とは、気がつかなかった。

「はっはっは……」

李相玄が、哄笑した。その右手の短銃は、油断なく、狂四郎の次の動きにそなえていた。

「まけましたね、眠さん。わたし、実は、貴方に殺されたフォン・エックの仲間です。この船は、海賊船です。品物だけではなく、人間もさらいます。日本の女をさらって、外国の金持に高く売りつけます。また、日本の芸人はたいへん上手だから、つれて行って、興行師に渡します。胡蝶斎さんも、外国へ行って、いまのような、すばらしい芸を見せるとよろしい。……しかし、眠さん、貴方は、危険なお人だ、外国へつれて行きません。日本国に、貴方のいのち、高く買う人がいます。フォン・エックの仇討をするつもりでしたが、わたし、商人です。貴方を備前屋に売って、儲ける方がよろしい。はっはっは」

すると、胡蝶斎が、穏やかな声音で、

「さあ、それは、どういうものでございましょうかな」

と、とぼけたような云いかたをしたのである。

「文句ありますか、胡蝶斎？」

「お前様は、眠様のことを日本一の腕前、てまえのことを日本一の手妻遣い、と仰言って下さいましたな？」

「云った」

「日本一が二人そろって、めくら鯨にされて、お前様ごとき、たかの知れた朝鮮防人（鍩）にひっかかって、汐ふきならぬ、泡をふいたとあっちゃ、ご先祖の太閤様に申しわけがありませんや。お前様は、たった一丁の短筒をたよりにしていなさる。しかし、そいつは、本当にたよりになる道具でござんしょうかね。お前様が、この卓子の下を覗いて、娘の素裸にあっけにとられなすったあいだ、日本一のてまえの手が、じっとして居りましたろうかね。その短筒の弾を抜きとっておいたとしたら、どうなさる？」

「なにっ?!」

この瞬間——。

狂四郎の五体は、風のような迅さで、甲冑武者を襲っていた。

武者が、宙を一回転して、もの凄い音たてて、床へたたきつけられた時、無想正宗は、すでに、狂四郎の手にもどっていた。

「李相玄！　こんどこそ、手妻なしの堂々の真剣勝負といこうではないか。フォン・エックの兄弟分なら、一流の使い手だろうと敬意をはらった上で、その甲冑を身につけるのを待ってやる寛大さも、こちらは持合わせている」

四

風土記にいう。

「神奈川台は、頗る高き所にして、ここより望めば、東南の方、眼界濶く、殊に勝景の地なり。久良岐郡洲干港より、十二天の森を遠望し、またむこうに横浜の弁天の社など見ゆ。すべて、この辺は、断崖峭壁のところ多くして、屏風を立てたる様なり、ゆえに、騒客など錦屏海と号して、一、二を数ふれば四屏に分てり。その上に古松夥多蟠虬しうんぬん……」

その絶景を望む袖ケ浦のとある峠の断崖ぶちに、狂四郎は、のんびりと、腰を下していた。

眼下の、奇巌の崛起した野毛浦の浜辺に曳き寄せられているのは、例の朝鮮船である。

「おそいな」

呟いて、ゆらりと立ちあがったおり、坂になった街道を、息せききって駆けのぼって来たのは、金八であった。

「先生っ！　来やしたぜ！
金ぴら船船

　　追手に帆かけて
　　　シュラ、シュッシュッ
と、くらあ」

両手を高く揚げて、滑稽に、腰をふり乍ら、

　人買い船かやうらめしや
　とても売らるる身じゃほどに。
　しずかに漕いで下しゃんせ
　濡れるこの身はいとわねど
　かけた仇浪、浮寝の夢が
　思い出されて、ついせきあげる
　ぬぐう泪の袖ケ浦
　　ささ、よいやさ、えっさっさ

と、ひと踊りしてから、ぺたんと、くさむらへ、坐り込んで、ふーっ、と息をついた。

狂四郎は、ゆっくりと街道へ出た。

えいさ、えいほう
えいさ、えいほう

威勢のいい掛声とともに、四枚肩の早駕籠が四丁つらなって、坂をのぼって来た。

無言で、うっそりと、立ちはだかる狂四郎に、先棒が、まきっ舌で、

「退きゃがれ。まごまごしやがると崖っぷちから、蹴落すぞ！」

怒鳴ったが、狂四郎の眸子（ひとみ）にぶっつかると、本能的に不気味な圧迫感で、足をすくませてしまった。

狂四郎は、無表情で、近づくと、

「備前屋」

と、呼びかけた。

しんがりの駕籠から、備前屋が出て来た時、すこしおくれていた護衛の浪人者たちが、血相変えて、走って来た。

それを抑えておいて、備前屋は、微笑し乍ら、

「貴方様に待伏せされようとは、意外でございましたな」

と、云った。

狂四郎も、にやりとして、

「先日、御行の松の根かたからおぬしに掘り出してもらった輸入金六十貫は、いずれ、こちらで貰いに行くと申しておいた筈だ」

「手おくれでございましたな。この駕籠の中は、宝は宝でも、金ではございません」

「知って居る。朝鮮船へ売る女どもだろう。金の方は、もうこちらに頂戴してある」

「なんと云いなさった！」

備前屋の双眼が、蛇のように光った。

「おぬしは、李相玄に、あの金そっくり渡して、外国から、いろいろな珍宝財物をごっそり仕入れる手筈だったらしいな。……あいにく、李相玄は、死んだ」

「やんなすったのか、眠さん！」

備前屋の形相は、名状しがたいものとなった。

この時、断崖上で、金八が、くさむらに突き立てた白煙筒に、火をつけた。

「備前屋、まア、ゆっくり見物しようではないか」

狂四郎が、送る視線を追った備前屋は、ひくく呻いた。

烈しい勢いで宙へ噴きあがる煙柱に対して、眼下の朝鮮船のみよしから、赤い旗がふられた。

それから、今日の時間にして、ものの五分も経たないうちに、朝鮮船は、一大音響とともに、中天高く帆柱を刎ねとばし、みるみる黒煙につつまれてしまった。

もおーっと、黒煙が汐風にあおられるたびに、その下から紅蓮舌が、めらめらと、たち昇り、澄んだ海面を、血のように染めた。

船が、大きく傾いて、波紋を湾いっぱいに拡げたおり、もう備前屋の姿は、峠から消えていた。一語も、無念の捨てぜりふをのこさず、あっさりと引きあげて行ったところに、大悪党らしい鮮かさがあった。

「金八、女たちの縄目を解いてやれ」

狂四郎は、そう命じておいて、ふところ手で、しずかな足どりで、坂をくだって行った。

「へへ、にょご、にょご、にょごの女護ケ島からつれて来られた目正月、どれが梅やら竹じゃやら、松っていましたこの果報。うわあ、うわあ、だ。……えりどり見どりつかみどり、緋鯉に真鯉に錦鯉、かかえて抱いて玉の床ときた。泳がせるぞ泳がせるぞ」

金八は陽気な叫び声をあげ乍ら置きすてられた三丁の駕籠へ近づいて行った。

それらの中には、吉原の花魁が、請出されて、とじこめられていたのである。

猿神異変

一

眠狂四郎は、ひさしぶりに、両国垢離場の寄席で、立川談亭の飄逸な講釈をきいて、からりとした気分になり乍ら、ゆっくりと河岸をひろいはじめた。

秋の午後の、澄んだ空気のせいでもあったろう、その孤独感は、なんとなくさわやかなものになっていた。

といって、この男のことである。むっつりと、口を真一文字にひきむすんだ彫深い面貌は、あいかわらず、近よりがたい暗い翳を刷いていたし、並び茶屋の馴染女が、声をかけても、一瞥もくれようとしなかった。そして、

「あいや——そこの御浪士」

とある曲り角で、大道易者から呼びとめられて、視線をまわした狂四郎が、ふと足をとめたのも、自分を凝視する目が異様に底光っているのをみとめたからであった。そうでなければ、もちろん、行き過ぎてしまった筈である。

「用か？」

「左様、一言御忠告申上げたき儀がある。見料は不要——」

両国に出張る易者は、見識をみせかけるいかめしい口調や態度を装って、田舎者を捉える手段としているのだが、この易者のそれは、ぴたりと身についたおのずからなる威風があった。目のくばりにも筮竹をつかんだ手にも、隙がなかった。そのことに、ふと好奇心がうごいて、狂四郎は、近寄った。

易者は、天眼鏡をかざして、食い入るように、狂四郎の顔を観察した。

狂四郎は、天眼鏡がはずされた時、うすら笑って、

「凶相であることは、自分で承知して居る」と、先手を打った。

「まさしく——」

大きく頷いた易者は、

「江戸をしばらく離れられることだ。……それがしは、斯道に入って三十余年になるが、御貴殿ほど、近い将来の凶事を相にあらわしている仁には めぐり会うたことがない。わるいことは申さぬ。すみやかに旅へ出られるがよい」

「わたしは、これまで、他人の忠告にしたがったことは

一度もない」

「その強い人格が、ついに、かようなおそろしい凶相をつくられたのであろうが……人知能力にも涯がござろう。己を行うに強く、諫を受くるに弱く、禄を待つに怵れ、身を持するに慎しむ——聖人の教えを、いまここで、ふかくかみしめるのは、決して無駄ではござらぬ。御貴殿の相が万人に秀れたるものであると知るが故の忠告とお心得ねがいたい」

「鵠は浴せずして白し、というではないか。わたしの天性は、泥まみれだ。いまさら、五戒をまもって、なんの後生ねがいか——」

狂四郎は、二朱銀を、ぽんと投げておいて、歩き出した。

「もし——御浪士！　きかれい！　それがしは、決して、いい加減なことを申して居らぬ」

易者は、大声をあげた。

「永久に江戸を去れとは申して居らぬ。ただ、一時でよい。遠くへ行くにもおよばぬ。方角は、戌亥がよい」

三間あまり遠ざかってから、狂四郎はふりかえると、冷やかに、

「おぬし、だれかに、それをたのまれたのか？」

「ば、ばかな！　度しがたい仁じゃ」

易者は、憤然として、睨みかえした。

狂四郎は、薬研堀を越えて、さびしい大名小路に入り乍ら、いつになくからりとした気分になった矢先を、いきなり、生命の危機の迫った凶相と指摘されたことに、自嘲をおぼえていた。

——おれはおれ流に、一日を慎しんで世を終えろ、ということか。弦を佩びて自ら急にす……いつでも、刃は受けてやる！

二

それから一刻のち——。

狂四郎は、中野三重塔裏の隠れ家へ帰るべく、市ケ谷の谷町から番衆町へ抜ける往還を辿っていた。

この一郭には、珠宝寺、薬王寺、修行寺、道林寺、善慶寺と寺がならび、つづいて、俗に謂う瘤寺——自証院が、宏壮な山門をそびえさせている閑寂の場所であった。古びた練塀がどこまでもつらなり、そこから拡がり出た巨樹の枝葉が、頭上を掩うて、すでに足もとは暗かった。

残照は、樹冠や堂宇のいただきにあり、むらがって翔ける赤とんぼの羽が、美しかった。塀の裾を流れる溝では、蛙の声がしていたし、叢には虫の音があった。

と――。

狂四郎の足が、はたと停められた。

近くから、横笛の音が起ったのである。

喨々として秋空に、ひろがるその調べに、はっと神経がうごいたのであった。

――はてな？

曾って、その調べをきいた時と場所を記憶に甦らせるより先に、急に、本能的にからだにみなぎった緊張が、殺気を察知した瞬間に似ているのを、狂四郎は、いぶかった。

笛の音は、塀の内側からひびいて来る。

塀といっても、いたるところ崩れていて、自由に跨ぎ越すことができる。

中は、薬王寺と修行寺にはさまれた空地であった。

俗に饅頭谷といい、いつの頃からかすてられてしまっていて、雑草ぼうぼうたる中に、古びた庵室が一宇建っているのみであった。素性菴とよびならされている。けだし、三十六歌仙の素性法師詠歌と何かの因縁があったところであろう。

狂四郎は、数歩ひきかえして、塀の崩れ目から、じっと、庵室を、すかし見た。

ひき潮のようにかげってゆく空地に、ぽつんと建った一宇は、遠いむかしの夢幻的な譚（ものがたり）でも秘めているように風雅なたたずまいであった。

狂四郎は、蔀（しとみ）の陰に、うすぼんやりと浮いた白いものをみとめ、それが吹手と知った。雑草の中へ踏み入って、油断なく近づいて行き、庵室の前を流れる一間あまりの小川のふちに佇んだ狂四郎は、そのまま、ふところ手の痩軀を、うっそりと動かないものにした。

その調べは、すこし横笛に知識を有する者ならば、その序破急の韻律が、名状すべからざる哀傷を罩めていて、これは遠い時代に作られた曲とわかる。

あえて、その主題をさぐれば、

　あわれとも憂しともいわじ陽炎の
　　あるかなきかに消ぬる世なれば

という歌に読まれた悲愁が、妙音に写されたといえようか。

しかし、妙音が、狂四郎を惹きつけて微動だにさせなかったのは、哀傷悲愁のゆえではなかった。

四年前、おのれが出会したひとつの異常な光景が、まざまざと、眼裏に泛びあがっていたからである。

「卒爾乍ら、借問いたしたい」

調べが吹きおさめられるや、狂四郎は、

と、声をかけた。



戸が開けられ、姿をみせたのは、白絹で顔をつつんだ尼僧であった。
　夕闇のなかに、芙蓉のように、ほのかに浮き出たその容子は、いかにも、この古びた庵室に宿を借りるにふさわしい妖しさであった。すでに初老であろうが、﨟たけた匂いがただよう――。
「つたない調べをおきかせいたしまして、おゆるし下さいませ」
　しとやかに、敷居へ片手をついて、頭を下げた。
「その曲は、なんというのか、おうかがいしたい」
「憂喜門、とききおよびまする」
「いずれの時代に作られたものです？」
「平家が、都をすてるおり、とか――」
「貴女は、なぜ、こんな無人の廃宇で、笛の調べをされていたのか？」
「この素性菴には、そのむかし、平重盛どのが建立なされた五重塔がございました由にございます。はるかに落ちのびて来た平家の若武者が、その塔を仰いで、来しかた行くすえを思うて、心がくだけ、とうとう、塔下に、自ら、のどを突いて果てたとつたえられて居ります。その若武者の霊をとむらうために、曲に憂喜門をえらんだ次第にございます」
「そうでしたか」
　狂四郎は、礼をのべて、踵をまわしていた。雑草を踏みわけ乍ら、その口から、ぽつりと洩らしたのは、
「戌亥か――」
　先刻、両国河岸で呼びとめた易者が指示した旅の方角のことであった。その易者が、狂四郎のすがたが塀の外へ消えるのを待って、庵室のうしろから、のっそりと出現したのは、意外であった。
「眠狂四郎め、山へ行くかな？」
　易者が云いかけると、尼僧は、自信ありげに、
「かならず参りましょう」
　と、こたえていた。

三

　四年前の盛夏――。
　眠狂四郎は、身うちに狂う猛気を鎮めかねて、旅へ出て、いつか、浅間山を望む信州の高原にのぼっていた。
　沓掛から追分へ出る一里余の山道を、途中からそれて、あるかないかの樵夫路を、あてどなくひろって、山ふところ深く入って行くうちに、急に眼界がひらけた。
　周囲は、鬱蒼たる唐松の密林であったが、そこだけは、青草の原がひろがり、ちらばる樅の木も、赤い毒実

をつけた接骨木も、みな幼かった。
　前方は、攀じもならぬきりたった絶壁が重畳して、その彼方に、褐色の浅間山が、薄い煙をはいて、蒼空をきりぬいていた。狂四郎は、孔雀歯朶のしげった個所をえらんで、ごろりと仰臥した。
　陽は眩しかったが、風は涼しかった。
　一塵もとどめず、鋼色の光輝に、しーんと冴えかえった虚空に、身も心も溶け入ってゆくひとときがあった。
　風の音のほかにきこえるものといえば、さまざまな小鳥のさえずりだけであった。
　狂四郎は、目蓋をとじて、茫然と、その啼き声を、ききわけていた。
　前夜泊った杣小屋で、樵夫から、それぞれの啼きかたを教えられていた。
　低く、ギイギイと啼くのは小げら（きつつき）である。高く、ピョーピョーと啼くは青げら、早口に澄んだ高声で、ツピンツピンと啼くのが日雀である。山雀は、ツピーンツピーンとひきのばす。キョロッキョロッとせわしく啼きたてるのは、黒つぐみ。高い唐松のてっぺんで、長い尾をふり乍ら、のどかに啼くのが、木雲雀。
　そして、ようやく美音を誇る鶯と、太い濁り声をひびかせる山鳩――。
　人跡絶えた山峡は、まさに鳥たちの自由な世界であった。まだ、武部仙十郎とも、美保代や静香とも知合わぬ、完全に天涯孤独の身の狂四郎であった。
　その孤独の身を、世俗から隔絶した人外境に置いて、およそ小半刻もすごすうちに、不意に、虚脱の後に、堪えがたい寂寥が来た。
　いつの間にか、狂四郎の耳に、小鳥のさえずりにまじって、横笛の音がつたわって来ていたのだが、それを狂四郎の心は、現実のものとしては、受けとっていなかったのである。
　それは、曾っていちどもきいたことのない哀傷悲愁を罩めた古典的な調べだったからである。
　白昼夢の中に身を漂うにまかせた、意識がいくつにも分裂して虚空に散っているような心象状態に在ったことだし、狂四郎は、笛の音を幻聴として耳底に受けていたのである。そして、不意に、全身をしめつけるような寂寥感が、その笛の音によって起ったとは気づかず、かっ、と双眼を瞠いた。
　一瞬――矢のように掠める一羽の鳥かげを、眼上数尺にとらえて、
　――斬った！
　と、全感覚が剣気を閃かした。

とたんに、狂四郎は、笛の音が、鳥の音と同じ現実のものだ、と気がついた。
と同時に——狂四郎の神経は、わが身のそばで起ったある変化をさとって、針のようにぴーんと鋭く研ぎ澄まされた。
そこに投げ出しておいた無想正宗がいつの間にか、生きもののように、鐺（こじり）の方から、動くともなしに、そろそろと叢をすべって、狂四郎から離れ去って行こうとしていたのである。笛の音が、破調から急調へ移るや、刀は、非常な迅さで、灌木の陰へ引き込まれようとした。
その刹那をはずさず、狂四郎の五体は、猛獣のようにしなやかに跳ね躍って、無想正宗の柄を掴んでいた。
鯉口を切って、抜きはなちざま、宙に白光を描く——その一呼吸の迅業を、狂四郎は、充分の余裕をもって、為した。
ぎゃっ！
異様な悲鳴とともに、そこから、陽炎のように血煙が舞い立った。
狂四郎は、ゆっくりと、鞘をひろいあげて、鐺を執念ぶかく握りしめている毛むくじゃらな、皺だらけの小さな手を眺めた。それから、灌木をかきわけてみると、一間あまりむこうに、孔雀歯朶を抱くようにして、いっぴきの大猿が、悶絶していた。切断された手くびから、じくじくと血汐をしたたらせ乍ら——。
鐺の手をはね落し、刀身をおさめて、腰にした狂四郎は、無造作に、猿のえりくびを掴んで、つり携げると、すたすたと、絶壁へむかって、足を運んで行った。
絶壁には、ぽっかりと大きな洞窟が、口をあけて居り、その前に、ひとりの若い娘が、立っていた。片手に、横笛を持って——。
狂四郎は、距離を二間にちぢめて、立ちどまると、娘の貌（かお）へ、鋭い凝視をくれた。
美しかった。
整った目鼻立ちに気品があり、白桃のようにふっくらと白く滑らかな肌理（きめ）は、下界の女たちの持合わせぬものだった。華やかな造りではないが、匂いこぼれる楚々とした清純な野花の美しさは、狂四郎のような虚無の孤独者にとっては、この上もない魅力といえた。
まとっている小袖は、山繭をつむいだものか、染めもせぬままの乳色で、それが、かえって、古風な面差を神秘めかしたものにみせていた。
「笛の音で、猿をあやつって、刀を盗もうとした理由をきこう」
狂四郎は、わざと、険しい語気で問うた。

すると、娘は、目を伏せて、
「貴方様が、そこにおいでになろうとは存じませんでした」
と、こたえた。
「では、猿が勝手に盗もうとしたというのだな？」
「…………」
「笛を吹けば、猿が、刀を、あるいはほかの品物を、盗むように仕込んだのは、そなたなのだろう」
それにこたえるかわりに、娘は、膝を折ると、
「おゆるし下さいませ。その猿は、わたくしどもの守護神でございますよ。いつわりは申しませぬ。何卒、おかえし下さいませ」
と、乞うた。
狂四郎は、ここへ登って来る途中、はるか下方のはざまに、ひとにぎり程の盆地がひらけ、藁屋根の勾配の急な、奇妙なかたちの家が、樹間にちらほらと散らばっているのを見おろして、
——平家の落人部落か？
と、思ったことだった。
——この娘は、あそこの住人だな。
そう直感しつつ、
「人間が猿を守護神にするのか——たわけ！」
と、吐きすてたとたん、ずうっと以前何処かの国の山間では、年に一度の祭礼に、猿に剣の舞いをさせる、という話をきいた記憶があるのを、ゆくりなくも、思い出した。
娘は、屹っとなって、顔を擡げた。
その眸子（ひとみ）に湛えられた冷たい光が、自分たち一族以外には断じて心ゆるさぬ、極度に排他的なものであるのをみとめるや、狂四郎は、むらむらと残忍な反撥をおぼえた。
「是非にも、猿をとりもどしたいなら、条件がある」
「ききまする」
切りかえすように、娘はこたえた。
「そなたの操とひきかえだ」
狂四郎は、ずばりと云ってのけた。
娘は、大きく、眸子（ひとみ）を欹（そばだ）てて、異相の浪人者を見あげて、何か云おうとしたが、すぐに、顔をそむけた。
もし、娘が、悲哀のそぶりか、羞恥のしぐさでもしめしたならば、あるいは、狂四郎は、その酷薄な意志をひるがえしたかも知れぬ。娘の横顔に、ありありと刻まれた軽侮の色は、遽に、狂四郎に、その実行を決意せしめた。

「早くしてもらおう。こちらは、どちらでもいいことだ……。猿を畜生として扱っているのなら、このような条件は出さぬ。神とあがめている以上は、それ相当の貴重なものを交換してもらうまでの話だ。神と名のつくしろものは、わたしの性分にあわぬ。そういう男に出会ったのが不運だとあきらめてもらうほかはない」

そう云いはなった狂四郎を、じっと見あげる娘の黒い瞳孔は、深い憎悪をこめて、ぎらぎらとかわいていた。

息づまる沈黙を、数秒置いてから、娘は、すっと立って、洞窟に入った。

狂四郎は、悶絶したなりの猿を、そこへ抛りすてると、のっそりと、入口に立った。

それは、鍾乳洞であった。数間の奥は、墨を塗りこめたような暗闇であった。

娘は、二間のむこうに、しろじろと仰臥していた。

狂四郎は、無想正宗を鞘ごと抜くと、近づくやいなや、着物の前を、鐺で、ひきはだけた。縹色(はなだいろ)の腰のものも、容赦なくめくった。はっと息をのむ程の絖(ぬめり)さながらの白い柔肌は、ぴったりと合わされて、まろやかな陰翳の落ちた奥に、濡ればんだように濃い未開の土壌が、ふっくらと、いのちの芽を萌していた。

狂四郎が、その芽を、むざんに摘みとって、未練げもなく、すっと身を起すのと、入口から、傷ついたけものが、白い歯をひき剝き、隻手をふりかざして、とびかかって来るのが、同時だった。

身を沈めて、風のように入口へ滑り出た狂四郎は、背後の光景を見とどけようともせず、衂(ちぬ)れた刀身を、青葉でぬぐって、鍔鳴らせると、すたすたと歩き出していた。

血汐は、死んだように仰臥した白い裸身にべっとりとはね散り、けものの首は、遠く暗闇へ飛んでいた。

四

秋風起って白雲飛ぶ――。

易者と尼僧の私語は、当っていた。

狂四郎は、四年ぶりに、忽然として、鍾乳洞を望むこの草原にあらわれた。

曽つて、猿の手くびを斬ってすてた個所に立った狂四郎は、冷気に素肌を刺され乍ら、黙然として、やがて起るべきものを待ちうけた。

熱の乏しい陽ざしをさえぎる薄霧がうごいてやまず、いちめんの芒のうえを渡って行ったあとの、静寂は、鋭いばかりであった。小鳥たちは、すでに、冷気をきらって、何処かへ飛び去ったのであろうか。周囲は、蕭々たる枯景色に変ろうとしていた。

ずうっと霧の中を歩いて来た狂四郎は、じっとりと湿った衣服と同様、心中もまた湿っているのを感じていた。

回想のせいではなく、四年前の孤独感が、いまの孤独感よりも、ずっと鮮烈な鋭気をひそめていたことに、ここに立って、はじめて、気がついたからであった。

――おれも、人間臭くなったものだ。

その感慨が、湿ったものだった。

狂四郎はすでに、江戸を発つ時、おのれが、おびき寄せられていることを看破していた。看破しつつも、敢えて、遠路を倦(もの)うしとせずに、足をはこんで来たのは、

――おれがそうするに相違ない、ときめたかれらの期待にこたえてやらねばなるまい。

と、自分へ云いきかせたからであった。莫迦々々しい、といえばそれまでである。しかし、これまでのおのれの所業で、莫迦々々しくないことが、ひとつでもあったろうか。一切は、志に励む目的からは遠く、節に死ぬ覚悟とは無縁のふるまいであった。ただ、おのれの意志を枉(ま)げぬことにおいて、死地に入るのを避けなかっただけである。

ところが――。

いま、はるばるこの高原をおとずれたのは、狂四郎として、珍しくも、おのれの意志を脇に寄せて、敵意を抱く者たちのはかりごとに、わざとわが身を乗せてみたことなのである。期待にこたえてやろうとする心に、あいまいさがあった。

それを、狂四郎自身、人間臭くなったという感慨にしている……。

洞窟の中から、笛の音が流れ出て来た。

狂四郎は、あやつられるごとく、しずかな歩調で、近づいて行った。

暗闇の中から吹きぬけて来る風は、臓腑にしみわたる冷たさであった。

笛の吹手は、暗闇の中に潜み、狂四郎が進むにつれて、遠ざかって行った。

突然、背後に、――入口に、凄じい音響が起り、ふりかえると、崩れ落ちた岩石で、完全に塞がれていた。

これは、予測していたことであり、狂四郎は、平然として、さらに数間を進んで、鉤の手に曲った角に達した。

この時、すでに、笛の音は絶えて居り、急に、滝の音が、淙々と、高くひびいて来た。角を、つとまわると、十間余のむこうに、ぽっかりと口がひらき、その前を瀑布が落下していた。

出口に立った狂四郎は、瀑布を透かして、二間をへだてるむこう側の断崖上に二個の人影をみとめた。
　なりこそ一変しているが、易者と尼僧にまぎれもなかった。易者は、手槍を、ぴたりとかまえていた。そのうしろにイむ尼僧が、全身濡れているのは、瀑布をくぐり渡ったからである。
　足下は、水煙が噴きあがって、深い淵を掩うている。
　——なるほど、企てたものだな。
　背後から異様な臭気がしのび寄って来ていたが、それが猛毒であることを、すでに、狂四郎は、気がついていた。岩石を崩して入口を塞いだ時、その処置がなされたとおぼしい。
「眠狂四郎！　覚悟せい！」
　滝音をつらぬいて、易者が、叫んだ。
「あの娘は、どうした？」
　狂四郎も、声をはりあげて、問うた。
「なんじに犯されたのを慙じて、猿神を抱いてこの淵へ身を投じたぞ！」
　その讐を復たんために、四年間、狂四郎をさがしもとめて、ついに、ここへおびき寄せることに成功した娘の父母は、狂おしい興奮を、面上にみなぎらせていた。
「跳べっ！　眠狂四郎！」
「贋にもせよ、易断をする貴様が、窮寇は追うべからずということを知らぬ筈はあるまい」
「問答無用っ！　来いっ！」
　狂四郎は、敵の構えを、無辺流裏霞とみた。これは盲人山田無辺斎が編んだ秘術であった。二天一流宮本武蔵との試合において、激闘数十合の後、無辺斎の槍は、武蔵の二刀のうち左剣を払い落した。武蔵は、すかさず、右剣を揮って、槍の半ばを一撃した。槍は、千段巻のあたりから、ぽきっと折れたが、同時に、武蔵の五体は、宙に躍って、背後の四阿の廂上に立っていた。その紺小倉の裾には槍の穂先が突き立っていた。武蔵は槍を打つと同時に、飛鳥のごとく、地を蹴って逃げたから、たすかったのであるが、もし、そのままの姿勢でいたならば腹部をまっ向からつらぬかれていたに相違ない。すなわち、無辺流裏霞とは、槍の柄を切らせておいて、気合によって穂先をあたかも小柄のように飛ばして敵の体内へ突き刺す迅業であった。
　——うむ！
　狂四郎は、肚裡で、唸った。
　まさに、絶体絶命の窮地とは、これをいう。すでに、猛毒の臭気は、芬々として背中を匍いまわりはじめている。

　——無想正宗も、ついに円月殺法を封じられて、鉛刀一割か。よし、無辺流を破るに鞍馬八流をみせてやる！
　悲壮な決意とともに、狂四郎は、抜きはなった無想正宗を、わが身と直線に、頭上へ立てた。八相あるいは青眼にとって瀑布中を跳べば、落下する水の圧力に軽捷の勢いが挫けて、石火の術を用ういとまもなく、槍のえじきとなるのは、あまりにもあきらかである。
　よって、狂四郎は、瀑布そのものを利用する大業をふるうべく、直立大上段に構えたのである。満身の気合を、口腔中に含んで、狂四郎は、ぱっと岩角を蹴った。
「おおっ！」
　易者は、眦を裂いて、呻いた。
　意外にも、狂四郎の黒衣の痩軀は、鯉が跳ね昇るがごとく、まっすぐに飛び立って、瀑布の中へ消えたのである。
　次の瞬間、易者は、おのが頭上六尺余の宙間に、白い水幕を割って出現した狂四郎を見た。狼狽の叫喚もろとも、さっと槍をくり出したが、すでに手おくれであった。
　狂四郎は、瀑布とともに落下しつつ、片足を、その槍のけらくびへ掛けるや、ふりかぶった無想正宗を、易者の頭上へ、きえーッ、と空を唸らせて、斬り下した。脳天から胸もとまで、まっぷたつに割られて、ぱっと血飛沫を噴騰させた敵の上を、狂四郎は、かるがると翔けて、断崖上に移っていた。
　同時に、尼が、何か絶叫して、短剣を突きかけて来たが、かんたんに、狂四郎に、逆手にねじあげられた。
　死にもの狂いにもがいた尼はその手の自由をとりもどすやいなや、良人のあとを慕って、水瀑もうもうとたちこめる空間へ、わが身を躍らせていた。
　しばしの黙祷をささげたのち、歩き出そうとした狂四郎はふと、足もとに落ちている横笛を発見して、ひろいあげた。
　悲劇の原因は、この笛にある。
　ぽーん、と投げすてられた笛は、くるくると舞い乍ら、持主のねむる深潭へ消えて行った。

妖異碓氷峠

一

秋風に送られて、眠狂四郎は、碓氷峠を越えようとして、路にふみ迷った。

小雨をともなう濃霧の中に、ついに一歩も動けなくなり、古びた道祖神の祠の供物石に腰を下して、しばらく、茫然としていた。

やがて、霧が散った時、ふと、狂四郎の目に映ったのは、前方の旗薄の中に建てられた石塔であった。

法界万霊の文字の下に、偈が刻まれている。

浅間山下　渓水津々　若供一杓　便是至仁

——なんの供養か？

深山には、必ず、陰湿な怪異の伝説が生きたものとして信じられている。この供養塔も、妖怪変化の花客となって仆れた人たちのために建てられたのであろうか……。

——人間の怯懦と無能が、怪異の区域を定めて、妖魔をつくりあげ、そいつに畏怖慴伏する。その愚かさが、人間を善良にするものなら、おれも、ひとつ、雀色時の幻覚を起してみたいものだ。

杣道の下方に、誰かが登って来る跫音がしたので、狂四郎は、それを、化物であって欲しい、と期待した。

姿をみせたのは、なんの変哲もない、人の好さそうな貌つきをした初老の樵夫であった。

対手の方が、愕っとなって、足をすくめて、目を据えた。

「爺さん、このあたりに出る化物は、どんな奴だ？」

そう訊ねられて、樵夫は、吻となって、しょぼしょぼと細目をまたたかせた。

「道に迷いなさったか、おさむらいさん？」

「うむ——」

「餓鬼にとり憑かれなさったのう」

「餓鬼？」

「へえ——、山を知りなさらぬお仁にとり憑く悪神でしてのう」

深い山奥を歩いている者が、突如として、烈しい飢渇疲労をおぼえて、一歩も進めなくなることがある。誰かが来合わせて救わねば、そのまま倒れて死ぬ。そして死んだ者がまた餓鬼神となって、次の旅人にとり憑いて殺

す、という。日本全土の山中に伝えられている怨念話である。

狂四郎は、樵夫の訥語に、相変らずの迷信かと失望し乍ら、腰をあげた。

「ここを下れば、何処の里へ出るのだ？」

「発地じゃが、安中の方へ行きなさるのなら、この入山越は、方角が反対じゃ。……したが、もう、こんな日暮では、どっちへ行きなさるのも、無理じゃわい」

自分の杣小屋に泊って行け、とすすめた。

温泉も湧いている、ということなので、狂四郎は、そのあとにしたがった。

杣小屋は、澗水の音が、どうどうとひびく山峡の、唐松の喬木が欝蒼とこもった中にあった。

樵夫は、惣兵衛といい、家は、三里あまり下った沢間の村にあるのだが、宮木挽きに、春から秋まで山にこもっている、という。

囲炉裏に薪をくべ、濁醪をすすめ乍ら、山気に染んで重くなった口をひらいて、惣兵衛は、話題を、妖怪のことへ移した。

渓流で河童の打つ鼓の音のこと、深夜山中で人の来るのを待受けて、その頭上を跳び越える迎え犬のこと、沓掛宿で行われる黙市へ現われた七尺余もある山男のこと。それから、かずかずの山姥の昔語り。

狂四郎は、べつだん相槌もうたず、濁醪の美味に、いつか陶然となって、惣兵衛が、さいごに、これだけは、よく心得ておいて欲しいとことわって告げた話も、ぼんやりとき流した。

その話というのは——。

この山峡には、湯の湧き出る岩間が二個所あるが、上流の屏風岩でかこまれた方には、絶対に入ってはいけない。入ると必ず四肢がしびれ、心気が朦朧とする。それを待ちうけていて、巨大な山神が出現して、禍いをくわえる。下流の河童岩の湯は、ぬるいが、ここへは、嶺むこうの一揆村の妊婦たちが、わざわざ安産をねがって、入りに来るくらいだから、安全である。

狂四郎は、山神の話には一片の興味もおぼえなかったが、一揆村という名称をききとがめた。

「ずうっとむかしのことじゃが……」

惣兵衛は、記憶をたどり乍ら、その由来を語った。

天明三年は、有名な飢饉年であった。

当時、米の自給自足ができていたこの信州でも、松皮や蕨などまぜた餅をつくったり、あらゆる木の葉を食った。それでも、上州の畠の多い土地にくらべて、信州佐久方面の田地の多い地方は、まだ餓死者を出していなか

った。秋に入って、上州碓氷郡方面の一揆が、突如、横川の関所を破って、信州へなだれ込んで来たのも、まだ食糧があると看做されたからであった。

暴徒は、怒涛のごとく、岩村田から、志賀村、内山、平賀、中込、野沢、三塚、桜井と、蹂躙して、ついに小諸城下を突破して、小県に侵入した。腑甲斐なくも、小諸藩は、見て見ぬふりをしたので、一揆団は、さらに、東山つづきで長村方面から、上田を襲撃する気勢をしめした。その総勢は、千八百人であった、という。

伊勢山（神科）の名主庄右衛門は、一刀流の達人としてきこえた郷士で、道場を持って、多くの弟子を擁していたが、暴徒が迫るや、二十余名をひきつれて、加賀川の橋詰に待ちうけた。

八本の梵天をかかげた千八百人が、鯨波をあげ乍ら、長村の曲尾組から川を渡って、伊勢山へ突入しようとするや、庄右衛門は、家宝の一刀をふるって、猛然と斬り込み、またたくうちに、数名を倒した。弟子たちも、死をおそれぬ働きをしめした。そこへ、上田藩の捕吏がかけつけて、浮足立った暴徒を片はしから捕縛したのであった。

岩村田、小諸、上田の各藩よりも、たかが一村の名主が、わずか二十余名を率いて、千八百人の暴徒を撃退した勇猛ぶりは、信州人の誇りとして、語り継がれている。

一揆村というのは、捕縛をまぬがれた暴徒が、いまさら、上州へも戻れず、この高原の狭間に、聚落をつくったために、そう呼びならされたのである。したがって、これは完全に孤立してしまっていて、いわば、平家の残党や八掬脛や悪路王の後裔と同様、里人とは、路で行き交うても、互いに顔をそむける無縁ぶりであった、という。

尤も、近年は、怨恨も薄れて、黙市などで交易する者も出て来たし、里荒らしの不届者も殆どなくなった。それというのも、数年前まで、一揆村の若者たちの中でも、最も凶暴な三人の兄弟がいて、あまりの里荒らしに業をにやした各村で、代表者をたてて、一揆村へ乗込み、目前で、兄弟を捕えて、両の眼球をえぐりとって、山中へ追放する処刑をなさしめたのが契機となって、籠や笠や蓑を黙市で売る約束もできたのであった。

「……信州では、他国者の杣木地屋が住みつくことはでけん土地柄でしてのう、一揆村も、久しいあいだつまはじきされて、苦労をしよりましたわい」

どうやら、樵夫自身も他国者らしく、感慨深げに、それを結句にしたことだった。

二

翌朝は、一片の雲もなく晴れわたって、周囲の嶺の稜線が、くっきりと際立ち、濃淡あざやかな樹林を擁した山容は、清涼の霊気を湛えて、陽に映えていた。

狂四郎は、白い水泡を散らせて淙々と下る渓流に沿うて、断崖を辿って行った。

川がらすが、ピーッと強い啼声をたてて、足もとすれすれに岩を渡って行ったり、頭上の梢で、猿や栗鼠が躁ぎたてたりするのが、狂四郎の孤独感を、のびやかなものに解き放った。

やがて──。

惣兵衛に教えられた河童岩（それが蹲った格好に似た巨岩）に降り立ってみると、三坪あまりの天然風呂から、ほのかな湯気がゆらめきたっている。

湧く湯は豊富で、岩の二方から溢れ落ちて、滝になり、数尺下の瀬では、湯苔に群れる鮠のすばやい動きが見出された。

狂四郎は、片足を、ぬるぬるの岩へ掛けると、手をのばして、つけてみて、がっかりした。

江戸っ子の狂四郎には、到底入る気になれぬ微温湯であった。

と──。

人声がきこえて来たので、狂四郎は、なんとはなしに、岩陰へ、身を寄せた。

孔雀羊歯の繁茂した斜面をくだって来たのは、三人の若い女たちであった。訛りの強い方言で声高に喋りあい乍ら、瀬ぶちの畳岩へ降りると、一斉に、かかえ帯をくるくると解いて、草木染の布子を、するっと脱ぎすてた。いずれも、健康そのものの、四肢の逞しく発達した堅肥りの裸形であった。そして、その下腹は、どれも同じくらい、ぶっくりと脹んでいた。

お互いに、その脹みかたをはかり合って、きゃっきゃっと笑いさざめいたのち、巧みに、ぬるぬる岩を滑り越えて、ざぶんざぶんと、湯の中へつかった。

狂四郎には、彼女たちの会話の半ばは解き難かったが、それでも、しばらくきいているうちに、彼女たちの腹の子が、同一人の男のものであることがわかって来て、唖然となった。

どうやら、その男は、一揆村の長らしかった。

──これは、山猱木客の営みと大差はないことだ[illegible]

彼女たちが、その忌まわしい関係になんの懐疑も抱かずに、いかにも、女の自然な生理に嬉々としておのが裸身をいたわっているさまは、いっそ、素朴で微笑ましい

ものであるのも、狂四郎にとって、驚くに足りた。

左様、彼女たちは、いささかも憚ることなく、おのおの、その男との原始の営みを口にしあって、明るい笑い声をたてているのである。村の長は、まことに、公平に、官能の喜悦を、女たちに配分している模様である。

……娘の閨へ、夜来て暁に帰って行く不思議な聟殿の正体が、山奥の洞穴に棲む大蛇と知った母親が、菖蒲と蓬の葉で堕胎薬をつくって、噉ませて、盥に何ばいかの蛇の子を生ませたとか、山姥が、神の使い（狼）とちぎって白髪童子を生み、さらに幾年かの後、逞しく育った白髪童子に挑まれて、愛撫されているうちに、妊娠して、生んだのが狼の子であったとか、雪女郎が杣人に馴れ昵んで、五十人力の鬼童を生んだとか……素朴な妖魅譚が信じられる深山にあっては、人間の営みも、それに近づくのであったろうか。

ここでもまた、狂四郎は、おのれの陰惨な出生を顧みて、急に、湯の中の裸女たちに烈しい嫌悪をおぼえると、のっそりと岩陰からあゆみ出た。

悲鳴をあげて、首まで沈んだ女たちは、次の瞬間、われがちに、ぶざまな格好で、飛沫をはねとばして、瀬ぶちへ滑り降りると、着物をひっかかえて、逃げ出して行った。

暗い眼眸(まなざし)を送った狂四郎は、

「けだものども！」

と、ひくく吐きすてた。

三

狂四郎が、ふと思いついて、惣兵衛にかたくとめられた上流の屛風岩の湯へ出かけて行ったのは、遠くから来た雨雲が、いちめんに山肌を濃霧で烟らせた黄昏どきであった。

狂四郎は、わざと、逢魔が時をえらんだのである。

その天然風呂は、遠くからでも、それとみとめられる、濛々たる白い湯気をたち昇らせていた。

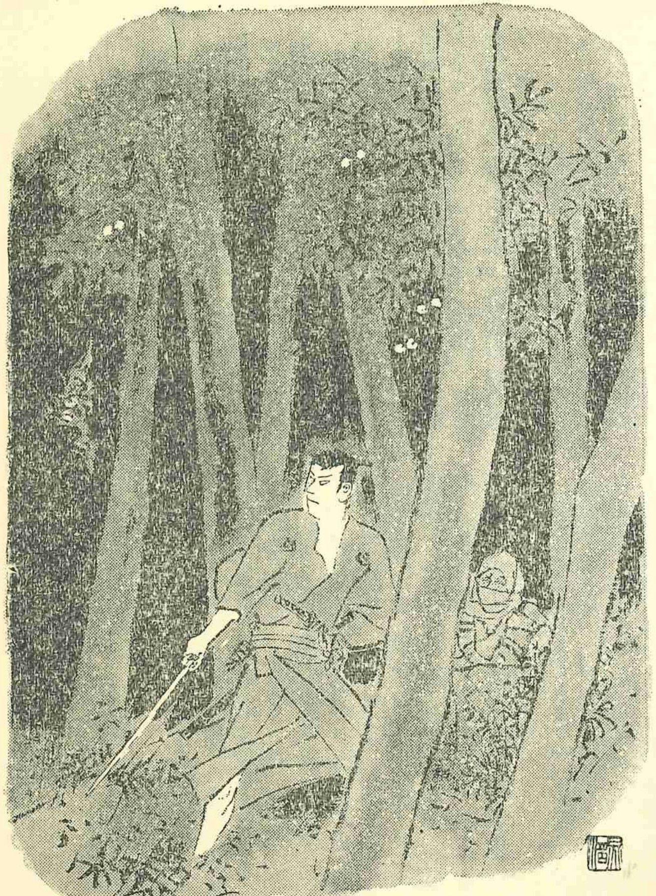
下流の微温湯とちがって、熱湯が、屛風岩の裂け目から、迸り出ているのであった。

——瘴気があるな。

その臭気と、つけた指さきにぴりりっと来る刺激に、そう直感しつつも、狂四郎は、平然として、はだかになると、濛気の中へ入った。

底は浅く、胡座(あぐら)をかいて、胸まであった。そのまま、双眼をとじて、微動もせず……どれ程の時刻が移ったろう。

ふっと、目蓋をひらいた時、あたりは、宵闇につつま



れていた。
　長い年月に積みかさなった疲労が、一時に発したような非常なけだるさがあったが、それは、一種の恍惚感でもあった。
　――この程度の瘴気か。
　剣で鍛えたおのれの五体の強さを納得して、すっと立とうとした途端、愕然としたことだった。
　四肢は、巨大な力でおさえつけられたように、全く自由を奪われている。一指も動かぬのだ。
　――くそ！
　はじめて、狼狽が起り、狂四郎は、切歯して、満身から気合を噴かせようとした。それが、かえって、狂四郎の心気に悪作用となった。くらくらと眩暈が襲って来て、気合は、むなしい呻きになって洩れた。
　がくんと、後頭を、屏風岩へ凭りかけたなり、狂四郎は、すべての筋肉が麻痺するにまかせた。視界が、朦朧として来て、樹木がぐうっとのしかかって来る錯覚の裡に、いっさいは、闇と霧と湯気の中に溶けこんでしまった。
　螢火のような、小さな青い光が、無数に、暗黒の中をとび交うような幻覚が起った。人間をとりこにした魍魎の歓喜の舞いか、とおもわれた。

　そのうち――。
　狂四郎は、前方に、ぬっと出現した三個の、おそろしく丈高い怪物を発見した。七尺余もあろうか。胡桃大の目玉を、爛々と闇に煌かせている。しかも、その目玉は、くるっくるっと、狡猾そうに、迅い動きをしめす――。
　怪物たちが、それぞれ、その腕に、女をかかえているのをおぼろに見わけた狂四郎は、その女たちが、朝がた、河童岩の湯につかった妊婦たちだな、と直感し――直感するとともに、これもまた、衰えた五官がひきおこす、幻覚に相違ない、と思った。意識下に、女たちのことが、脳裡にあったので、自ら幻覚の内へ招き寄せたのだ、と。
　それにしても、怪物たちの行為は、残虐であった。のたうちまわる女を、いきなり、頭から、ずぶりと、湯の中へ浸ける。ひきあげる。もがく、また浸ける……。死んだようにぐったりとなった女たちを小脇にかかえて、怪物たちは、闇の中へ消えた。
　それきり、意識をうしなって、われにかえった時、狂四郎は、覗き込んでいる惣兵衛の不安そうな顔を見出した。
　杣小屋の中に寝かされていた。

「気がつきなさったか」
　あれ程忠告したにも拘わらず、化湯に入った狂四郎を、しかし、咎めようともせず、
「御覧なさったじゃろ、大目玉の山神をの」
「うむ――」
　起き上って、狂四郎は、両の手を握ってみた。力がまるっきりこもらなかった。
「毒気が、からだから消えるのには、四、五日かかりましょうわい。ゆっくりやすまれるがええ」
　しかし、翌日には、すでに、狂四郎の体力は、ほぼ回復していた。
　夕方、囲炉裏ばたに坐った狂四郎は、心配する惣兵衛に、笑って、濁醪を所望した。
　惣兵衛は、ぐいぐいと茶碗をかたむける狂四郎を見まもって、
「不死身じゃわい」
　と、感嘆した。
「親爺さん。すまないが、用をたのまれてくれぬか」
　ふと、思いついたように、狂四郎は、きり出した。
「なんじゃな？」
「一揆村へ行って、村の長の子をはらんだ女が三人、河童岩の湯から戻って来たかどうか、たしかめて来てもらいたい」
「山神が、さらって行ったのを見なさったのかい？」
「うむ――」
　それがはたして幻覚であったか否か、狂四郎には、疑わしくなっていたのである。
　次の朝早く、惣兵衛は、嶺を越えて行き、午すぎ帰って来ると、
「騒いどりますわい」と、告げた。
「そうか、やっぱり、幻覚ではなかったな」
　狂四郎は遽に、闇に消え去った怪物たちに対して烈しい闘志の沸くのをおぼえて、しばらく黙考していたが、
「親爺さんも、あの化物を見たことがあるのだな？」
　と、訊ねた。
「見ましたわい。里でも、見た者が二人ばかりあって、行者をまねいて、厄払いをしてもろうたそうじゃが――」
「近頃、神隠しに遭った女があるかね？」
「去年の春にのう、一人あったそうなが――」
　娘を嫁に遣るために、飾り馬に乗せて、門口に出[illegible]そこで松明へ火をつけようとしている間に、忽然として、馬上から姿を消し去った、という。百方に覓めたが、ついに、行方は知れなかった。ところが、今年の

春、日暮れて、母親が、納屋仕事を終えて、母屋にもどろうとしかけると、門口に、幽霊のように彳んでいる娘の姿を発見して、仰天して、走り寄ったが、あっと思う間に闇へ吸い込まれて跡かたもなかった。

　惣兵衛の村から山ひとつへだてた宿場の旅籠の娘の話であった。

　それから、もう一人、旅の油売りの女房の方が、横川の関所のてまえで、不意に、いなくなった。尤も、これは、次の日、近くの山の熊笹の中で、あられもない格好でしめ殺されているのを、杣人に発見された。

　狂四郎は、ききおわってから、こともなげな口調で、

「ひとつ、化物退治をやるか」

　と、云った。惣兵衛は、途方もないという表情で、かぶりをふった。

「親爺さんには、ご苦労だが、彼奴らのすみかまで、案内してもらおう」

「案内するちゅうて、わかってござってか？」

「この近くに、誰もおそれて近づかぬ山がある筈だ。むかしから、妖怪変化が巣食っているという山が――」

「そ、それは、あることはあるが――」

「そこには、古洞や、枯木の林があろう。木菟のような夜鳥が棲む格好の場所があるに相違ない」

「ようご存じじゃ。たしかに、入らず山には、木菟めが、いっぱい棲みついとる枯木の林がござるわい」

「そこへ、案内たのむ」

「い、いつじゃな？」

「これからだ――」

四

　雲の海の中に、満月があり、その下を、薄い綿のような雲片が流れていた。

　もとより――惣兵衛と狂四郎が灌木をかきわけて登って行く杣道は、墨を流したような木下闇につつまれていて、惣兵衛の携げた小田原提灯が、樹木や草を異様なもののように赤く浮き出して行く。

　先に立った惣兵衛の背には、竹あみの笈がのせられていた。中には、三升あまりの油をつめた壺が入っていた。

　杣道は、尾根をめぐって、一上一下しつつ、入らず山の峰へむかって、うねっていた。といっても惣兵衛自身、いくどもふみ迷いかける程、道は草木に掩われていて、提灯の赤い灯が、生木の折れたのや、草のふみにじられたのや、何者かが通った痕跡をとらえるのをたよりにしなければならなかった。

そうして――およそ、一刻も、黙々として進んだろうか。

　惣兵衛が、曲った腰をのばして、ひと息ついて、ふりかえった。

「くたびれなさらんか？」

「夜道には馴れて居るが、冷えるな」

　単衣を着流した素肌を、刺すような冷気であった。

「山神を退治するちゅうて……でけるもんかのう」

　ここまで来るあいだ、ずうっと考えていたらしく、惣兵衛の声音は、重苦しかった。

「女たちをさらったのは、山神ではない」

「では、何者じゃな？」

「親爺さんは、数年前に、一揆村から、手に負えぬ悪党兄弟が、山奥へ追いはらわれたと話していたろう。そいつらが犯人だな」

「し、しかし、あの兄弟は、目玉をくりぬかれとるが――」

「ところが、親爺さんが見かけた奴らも、わたしが眺めた奴らも、大きな目玉が、光っていた……」

「そ、そうじゃ。あいつらが贋山神とすると、目玉を、どうしたちゅうのじゃろ？」

「そこが、化物の化物たる所以だろう」

　狂四郎は、ひくく笑うにとどめた。

　突如――。

　惣兵衛が「おっ！」と唸って棒立つや、狂四郎は、素迅く、その前へ出た。

　闇中――、立枯れた樹の上に、爛々と煌くふたつの大目玉があった。

　仰いだ視線を移せば――。

　そこにも、ここにも、大目玉は、無数に、宙に、ちらばっている――。

「親爺さん、贋山神の目玉は、これだぜ」

「へえ？」

　惣兵衛は、まだ合点がいかぬ様子だった。

「人間という奴は、片端になると、その不自由をおぎなう工夫をするものだ。目玉が無くなると、ほかの生きものの目玉を利用して、自分のもの同様にする。それが、犬の目であることもあれば、この木菟の目であったりする。辛抱づよい訓練が要るが、自分の目玉をつくるのだ。必死になろうではないか。やってやれないことはない証拠を、わたしたちは、見せてもらったということになる」

　狂四郎は、惣兵衛に、笈をおろさせると、油壺をとり出して、左手に携げ、

「親爺さんは、ここにいて、合図があったら、火をつけるのだぜ」
　と命じておいて、すこしずつ地べたへ垂らし乍ら、進みはじめた。
　ものの二間と歩まぬうちに、樹上から、青白い火玉が、翅音もたてず、顔めがけて、一直線に、翔け降りて来た。
　無想正宗が闇を截る——。
　ばさっ！
　猛禽は足もとへ落ちた。
　一間を行って一羽、五歩出て同時に二羽——といった具合に、鋭い嘴の襲撃があったが、狂四郎は、これらを苦もなく斬りすて乍ら、およそ一町あまり、枯木の林へ、ひとすじの油を撒きつつ、ついに、目ざす敵の栖を、おぼろな月明の中に見出した。
　がっしりと組まれた丸木小屋であった。
　狂四郎は、すたすたと歩み寄るや、まだたっぷりとのこっている油壺を、板戸へ、がん、とたたきつけた。
　これが合図で、林の入口で待ちかまえていた惣兵衛が、提灯の火を、地べたの油に移した。
　めらめらと燃えたった焰が、おそろしい迅さで、狂四郎の辿った跡を追い奔りはじめ、猛禽どもが奇怪な啼声をたてて、恐怖のはばたきをあげた時——。
　小屋から、ぱっと躍り出て来たのは、狂四郎が、屏風岩の湯で、幻覚と信じた三個の怪物だった。
　いまは、冷笑をもって、狂四郎は、その姿を眺める。
　山男たちの頭上には、それぞれ、いっぴきずつ、木菟が、とまっていた。よく訓練した木菟を、おのれの目として、彼らは、夜の山野を、自由自在に、馳廻っていたのである。
「うぬは、なんだっ？」
「一揆の野郎めかっ！」
　山刀をかざして、三方からじりじり肉薄して来る邀撃ぶりに目をくばって、狂四郎は、
　——成程、これは大した訓練だ。
と、感服した。
　炎々と燃えひろがる枯木の林の中のたたかいは、きわめてあっけなかった。
　狂四郎が、無想正宗を一颯、ひらと閃かす毎に、その頭上の目玉は、消えうせた。
　もとの完全な盲目にもどった兄弟が、紛々たる火の粉をあびて滅茶々々に狂舞する酸鼻の光景をしり目にかけて、狂四郎は、すでに紅蓮舌になめられはじめた小屋の中に入ってみた。そこには、双眼をえぐられた三人の妊

婦が、息絶え絶えになって、横たわっていた。
　夜がしらしらと明けそめた頃、狂四郎は、惣兵衛に送られて、入らず山からたちのぼる余燼のうす煙を、はるかに望む碓氷峠の、例の供養塔のかたわらに立っていた。
「お世話になった。……親爺さんの化物話は、ときどき思い出して、なつかしもう」
　と、笑うと、惣兵衛は、細目をしょぼつかせ乍ら、
「お前様のやんなさったことは、いずれ、里では、天狗のしわざじゃった、という話になりましょうわい」
　と、こたえたことだった。

家康騒動

一

「眠様ではございませぬか?」
不意に声をかけられて、振りかえった狂四郎は、
「田嶋屋か――」
と、微笑した。
ここ甲府――城勤番役所の長い築地塀がつらなった錦町の往還であった。
背後に、甲府城の天守が、気遠くなる程澄みきった秋空を截りぬいて、すっきりとそびえている。
「思いがけぬところで、お目にかかります」
「おぬしこそ、どうした? 山流しにされたお咎寄合をなぐさめにでもやって来たのか?」
当時、旗本には、甲府勝手という追放処分があった。江戸で、落度があると、甲府城在番を命じられる。島流しと同じで、まず生きて再び江戸へ帰れる望みはないのである。したがって支配頭から甲府勝手の命を受けると、一家は、悲嘆のどん底におちたものである。これが『山流し』と称せられていた。
「なんの……ちょいと、妙な、競がございましてね」
絽の紋つき羽織に茶宇絹平の袴をつけた正装の田嶋屋は、にやにやしてみせた。うしろにしたがえた手代が、大事そうにかかえている細長い風呂敷包みが、どうやら、その競でおとした品らしい。
自他ともに深川の十八大通をもってゆるしているこの木場の材木問屋とは、狂四郎は、大新地の揚屋五明楼で親しくなった。なんとなくウマが合って、そこで一緒になると、五日も六日も流連の対手をしてくれて、しかも一度も、こちらを不快にさせぬ粋人ぶりは、見事であった。
若い頃のこの男の逸事は、いまだに語り草になっている。ある日、粋人連が寄合った時、田嶋屋は、金の針金で髪を結ってあらわれた。仲間たちが、今日一日だけだろうと云ったので、意地になって後三年も、始終その針金を用いたという。――また、ある日、吉原の引手茶屋で遊んだ時、太鼓持や芸妓が入って行くと、田嶋屋は、夏の暑いさなかにもかかわらず、火鉢をかかえていた。みんな今日は寒いから、火鉢にあたりな、とすすめたが、のこらず、しりごみした。おくれて入って来た年寄

の太鼓持が、心得て、近づいて、手をかざしてみると、灰と見えたは白砂糖で、熾った炭は、小判であった。その太鼓持は、火鉢ごとそっくり貰って、大よろこびしたものだった。
本卦還りをしてからは、そうした派手な莫迦遊びをしたことなどおくびにも出さず、なるべく目立たぬように、枯淡な人柄をみせて、好んで狂四郎のような寄りつきにくい人物を友にえらんで、これをよろこばせる興趣に心を費やすのを自分のよろこびとするようになり、いわば、まことの粋人になりきっていた。
この男が、わざわざ、甲府まで出かけて来たのだから、よほどの珍しい垂涎物が競売りされたのであろう。狂四郎は、しかし、べつだん、その品を見たいとも云い出さずに、田嶋屋と肩をならべて歩き出し乍ら、
「ひさしぶりに、五日ばかり、座禅を組んで来たが、足がしびれただけだったな」
と、云った。信州からの帰途、ふと、この甲府の愛宕山下長禅寺の住職を思い出して、高崎からそれて、三峰山を越えて来たのであった。幾年か前、狂四郎は、名僧としてつとに知られたその住職と、偶然、東海道でみち連れになったことがあったのである。
田嶋屋は、愉しげに、狂四郎の横顔を見やり乍ら、
「てまえの宿へお寄り下さいませぬか」
と、さそった。

二

田嶋屋が、狂四郎をともなったのは、堂々たる構えの脇本陣で、ほかに泊っているのが身分のある人々であることは、玄関わきに寄せられた立派な駕籠でわかった。中には、総蠟色に金紋散らしの唐草蒔絵の豪奢な女乗物も交っていた。おそらく、田嶋屋は、重要な用件で旅している御用達商人の資格でもとって、泊っているのであったろう。
部屋も、築山造りの渓流を象って、夜の岩橋を架けた凝った庭園に面した上等の間であった。
入浴後、しばらく、舌にとろりと甘い地酒の献酬があってから、田嶋屋は、思い出したように、
「ひとつ、お退屈しのぎに、ごらんに入れましょうかな」
と、云って、床に置いた風呂敷包みを解いて、古びた桐箱から、掛物をとり出し、そこの壁の山水をはずして、それを、するするとおろしてみせた。
何気なしに、視線をなげた狂四郎は、
――どういうのだ、これは?

と、眉をひそめずにはいられなかった。

神代の、あきらかに女人とおぼしい下ぶくれの優しい貌をもった武装者が、弓をふりしぼって、あわや、天へ、一矢を射はなとうとしている墨一色の図が描かれてある。

狂四郎は、むかし読んだ神代紀を思い出した。

「田嶋屋、これは、武装した天照大御神ではないのか?」

「さようでございます」

……髪を結びて髻(みずら)となし、裳をしばって袴となし、八坂瓊の五百箇の御統(みすまる)をもって、その髻鬘(かずら)及び腕にまとい、背(そびら)には千箭(のり)の靫(ゆぎ)、腹には五百箭(いおのり)の靫を負い、臂には稜威(みいず)の高鞆を著け、弓彇(ゆはず)ふりたて、剣柄をとりしぼり、堅庭を踏みて、向股にふみおとし、淡雪のごとく蹴散らかして、稜威の男たけび、ふみ建びて詰り玉えり。

とある神代紀の天照大御神のいでたちを、そっくり写しているのだが……。

一瞥しただけで、これはあまりにも稚拙であった。

それはひきかえ、記された一句は、見事な筆跡であった。

「何人三箭定天山」

これは、唐代の驍将薛仁貴が、わずか三箭を放って三虜を斃し、ために虜軍が怖れて降伏したという故事をうたったものである。

武装の女神に、この名句をつけたところに、面白味があったが、それにしてもなんというまずい像であろう。

「失礼だが、田嶋屋、これをいくらでおとしたのだ?」

「千八百両でございます」

「これがか——」

啞然として、まじまじと瞶(みつ)めかえしたことだった。

「ははは、眠様、べつに田嶋屋は、耄碌(もうろく)いたしたわけではございませぬ。この絵が、巧みでございましたら、かえっておかしいのでございますよ」

田嶋屋は、有明行燈を、床の間へ寄せると、

「この落款をごらん下さいまし」

云われて、顔を近づけた狂四郎は、思わず、眸子(ひとみ)を鋭いものにした。

「家康」とある。印は、「静勝軒二代」と読めた。

静勝軒とは、太田道灌が、千代田城紅葉山にかまえた館のことである。

文明八年秋、道灌が、ここで和歌の会をひらくとともに、名高い心敬僧都を招いて、詩作せしめた時、建長寺の竺雲が左のような一詩をのこしている。

静自勝時心自閑。鐘天下秀寸眸間。
滄波倒浸士峰雪。一朶芙蓉百億山。



天正十八年八月一日、江戸入国した家康は、この静勝軒の古館へ、修理もせずに住まって、まず、諸大名、旗本及び町屋の地域割当とその普請を先行せしめたのであった。江戸城普請の縄張を藤堂高虎に命じたのは、ずっと後、慶長十一年春であった。新城経営成ったのは、十九年秋である。家康は、この時、紅葉山に建てた二の丸を、隠居所にすべく、静勝軒の名を、それにとどめておいた。しかし、駿府を隠居所にすることに変更したため、静勝軒の号だけを、そちらへ移したのであった。

したがって、この一幅は、家康が、駿府に隠居してからの、つれづれの手遊びであろう。

成程、絵が稚拙であるのが当然である。千八百両も高いとはいえまい。東照権現の直筆、しかも、天照大御神を描いたのであれば珍中の珍である。粋人田嶋屋が、わざわざこの甲府まで出かけて来るだけのねうちはある。

尤も、これは、公然と売買はできぬ性質の秘宝である。もし、露見すれば、売った方も買った方も、捕えられて、遠島はまぬかれぬ。へたをすれば、獄門になる。

いや、それだからこそ、田嶋屋の十八大通魂をそそったに相違ない。

「ところで、眠様——。これが、真物か贋物か、貴方様ならば、看破なさる目がおありになると存じます。いやしくも、東照権現様は、海道一の弓取りと称(たた)われたお方でございます。絵の技法は拙くとも、真物ならば、天下御統一なされた気魄が、この御像にも、おのずから、こもって居ろうかと存ぜられまするが——。われわれ下賤の遊治郎には、そうした微妙のところは、わかりかねます。貴方様の直感をおきかせ下さいますまいか？」

「ふむ——」

狂四郎は、腕を組んで、あらためて、女神像を凝視した。

三

幾秒かを置いて、狂四郎は、視線を田嶋屋へまわすと、低く、投げ出すように、

「贋だ——と思う」

と、云った。

「そうでございますか」

妙なことに、田嶋屋は、さして落胆した様子もみせず、わずかに苦笑して、かぶりをふった。

いかに粋人とはいえ、千八百両をすてて、平然としているのは、不審だった。

「売手は、だれだ！」

「勤番御支配の松岡大内蔵様でございました」

享保中、柳沢吉里が郡山に転封して以来、甲府城は、勤番支配が守るようになっていた。この衛士統領役は、四、五年で交替していた。

松岡大内蔵は、つい今年の春に、支配となって江戸から来たばかりだという。

「支配も、真贋の程はわからなかったのか？」

「お嗤い下さいまし。御支配様のところには、全く見わけのつかぬ同じ御品が、三点集っていたのでございます」

田嶋屋は、穏やかな口調で語った。

松岡大内蔵の家に、徳川家烈祖が描いた天照大御神の武装像があると、騒人墨客及び富豪連のあいだで噂されてから、すでに十余年になる。幾人かが、入れかわり立ちかわって、一見を乞うたが、大内蔵は、頑として、ゆるさなかった。

ところが、昨年の夏、山形の城主水野大監物の江戸家老が、松岡家をおとずれて、最近、天守閣の修理をしたところ、家康「静勝軒二代」の落款のある天照大御神像があらわれたので、果して、御当家と同じ物かどうか、比べてもらいたい、と置いて行ったという事実がつたわって来て、さらに、好事家たちを、じりじりさせた。

松岡大内蔵が、水野家へ、自分の所蔵になるものと、寸分ちがわぬが、なおよく鑑定するために預っておく旨をつたえたと、ききこんだ好事家たちは、とうとう我慢しきれなくなって、大挙して、松岡邸を訪問して、せがんだのであったが、ついに、主人の首をたてにふらせることは不可能であった。そして、今春、松岡大内蔵は、甲府城支配となって、江戸をはなれてしまったのである。

ところが——。

つい、十日ばかり前、突然甲府から、江戸の富豪連にむかって、同じ内容の手紙が届いたのであった。

実は、先年来、たびたびの所望にも拘わらず、一見をゆるさなかった烈祖直筆の天照大御神像を、思うところあって、競売しようと決意した。だが、この御像について、ここにまた新たなる事実を知らせなければならぬ。

それは、さらに、もう一幅の、寸分ちがわぬ御像が発見されたことである。甲府勤番の宍戸左近という家から出たのである。宍戸家は、曽つて交替寄合五千石の大身であったが、先父が過失によってお咎(とがめ)小普請となり、甲勝手を命じられていたものである。先月、隠居していた先父の逝去によって、家内整理をしたところ、この御像の発見となった。すなわち、これでまったく同じ御像が三点揃ったわけである。この三点のうち、いずれが真な

るか、贋なるか、全く、見当がつかず、当惑している。よって、競売するにあたって、三点ともに同じ値段でおとしてもらいたいこと、これが条件である。承知の通り、水野家も内証逼迫して、すこしでも多くの現金が欲しい状態である。宍戸家も然りである。両家が、これを手離すことを、依頼して来ている以上、当家所蔵の御像だけを除いて、競売するわけにいかぬ。あるいは、当家所蔵の御像が真物であるかも知れぬからである。よって、三点揃えて、公平に、同じ価格で、これをもとめる人々にゆずりたい。すなわち、二点が疑いなく贋物であることを承知の上で、出向いて来てもらいたい。

「お手紙を頂きましたのは、九人でございましたが、一人も、棄権いたしませず、うちそろって、江戸を出て参りました。……まことにおどろいたことでございました。松岡様の書院の床の間にかけられた三つの御像は、どう目を皿にしても、一分一厘のちがいもございませぬ。よくもまあ、これ程、丹念に写したものだと、ほとほと感服し、その努力に対しても、同じねだんを出していいと思われたことでございます。九人とも、その顔つきでございました。松岡様から、あらためてのご説明があり、このうち、どれが当家、どれが水野家のものと教えることは、さしひかえ、右から、一号、二号、三号とつけておく故、ねだんをつけてもらいたいとのお申出でございました。この時、てまえの心中に、三作ともに、自分がおとしたいという野望が起きたのでございます。同時に、ほかの人たちも、てまえと同じ野望を起したことを感じました。そのために、書院には、おそろしく緊張した空気がみなぎったのでございます。……まず、一号に、ずばりと千両の値をつけたのは、佐久間町の大地主和泉屋さんでございました。すかさず、てまえが、二号に、千二百両とつけました。つづけて、三号に、浅草平右衛門町の札差の浜名屋さんが、千三百両とつけました……。千五百両とせりあがった時、三人ばかりがひきさがりましたが、あとの者は、どれだけ騰ろうが、身代限りも辞せぬ肚ぐみを気構えといたして居りました。とうとう、千八百両の高値を呼んだ時、松岡様が、たまりかねて、もうよい、ここらあたりで手をうったらどうか、とおとどめになり、結局、籤びきということになりました。面白いもので、籤にあたったのは、最初に値をつけた和泉屋さんとてまえと浜名屋さんでございました。……つまり、これは、二号の御像というわけでございますが、松岡様は、とうとう、さいごまで、どれがどちらの御所蔵物かはおあかしになりませんでした。……まあ、こちらが半きちがいになって、競落したのでございます

から、贋とわかっても自業自得、あきらめるよりほかはございませぬ」

そう語って、田嶋屋は、平然と笑ってみせた。

「おぬしが、そう思っているのなら、それでもよかろう」

狂四郎は、ひややかにこたえた。

「あとの二作のうち、どちらかが真物ということに相成りましょうが、浜名屋さんは、さしせまった用があるとかで、今日のうちに江戸へ帰って行きましたが、和泉屋さんの方は、ついむこうの宿に泊って居ります。なんでございましたら、ここへ持参いたさせて、くらべてごらんなさいますか？」

「いや、それには、およぶまい」

狂四郎は、興味もなさそうに首をふって、ごろりと仰向けに、寝そべってしまった。

四

突如――。

田嶋屋の部屋から、烈しい物音と叫び声が起った瞬間、別室にやすんでいた狂四郎は、無想正宗を掴んで、風のように庭園に走り出ていた。

築山の麓の木立の中に立った狂四郎は、田嶋屋の部屋から、女神像の包みを小脇にした覆面の曲者が、飛鳥のごとくとび出して来て、一気に岩橋上まで達するや、すっと音もなく、その前をふさいだ。

曲者は、武士だった。

すでに、四更をまわっていたろう。月はなく、降るような満天の星明りであった。

狂四郎も無言、曲者も無言だった。

田嶋屋が、縁側へ出て来て、かけつけて来た人々を制している声がきこえた。

一瞬、曲者は、包みを宙へ投げあげると同時に、抜刀して、ぴたっと青眼にかまえた。

包みは、黒い弧を描いて、渓流の下の滝壺へ高い水音をたてた。

とたんに、

「読めたぜ、おい――同じ絵が三幅もそろった謎が――」

ずばりと、その言葉が、狂四郎の口から発しられた。

「やあぁっ！」

喉いっぱいの気合を虚空につんざいて、斬り込んで[illegible]たのを、ひらっと数尺横へとびかわしてから、狂四郎は、嘲りの言葉を追いかぶせた。

「軽率だったな、お若いの。せっかく奪った品を、未練気もなくすてたのは、贋を承知で奪いに来たことを白状

した証拠になるのだぜ。……貴様が、どうして、田嶋屋のおとしたのが贋だと知っていたかだ。それが問題だし、こちらをにやりとさせることになる」

曲者は、臓腑をねじり、ひきしぼるような唸りを、くいしばった歯の隙間から洩らすと、大きく右足を踏んで、大上段にふりかぶった。

その動作にあわせて、もう、狂四郎の一剣は、地摺り下段に――ひさしぶりに円月殺法の妖気を、その切尖から、濛として漂い出していた。

……儚い、濁った中音を、この世にのこして、曲者が、高野槇の幹へ凭りかかり、ずるずると地べたへ崩れ込むや、狂四郎は、石橋ぎわまで近づいて来た田嶋屋へ、

「和泉屋の泊っている宿へ、手代に様子を見に行かせてくれぬか。そっちへも、賊が忍び込んでいる筈だ」

と、云った。

その通りであった。

息せききって戻って来た手代は、和泉屋が、その品を奪われたのみか、道中差をひき抜いて抵抗したため、肩に重傷を受けている、と報告した。

さらに――。

朝食を摂っているところへ、番頭があわただしくかけ込んで来て、いま夜通しで江戸から戻って来た飛脚が、夜明けがた、笹子峠にさしかかって、裕福な身なりの商人が殺されているのを発見した、と話しているが、もしや浜名屋というお方ではありますまいか、としらせた。

飛脚を呼び寄せて、人相服装をただしてみると、浜名屋にまぎれもなかった。

「こりゃア、いったいどういうことでございましょう？」

流石の田嶋屋も、血の気の失せた、不安な当惑顔になって、狂四郎を見まもった。

「好事も、度がすぎると、こういう羽目にたちいたるのだな。田嶋屋、估券を下げたな」

「仰言る通りでございます」

「飲んだ酒なら酔わずばなるまい」

狂四郎は、笑って、無想正宗を携げると、脇本陣を出て行った。

五

甲府城勤番支配松岡大内蔵は、支配屋敷の南端にある四阿の竹縁に腰をおろしていた。五十なかばを越えた、恰幅のいい、いかにも旗本大身らしい風貌の人物であった。

吟味された樹木が、欝蒼とまわりをつつんでいて、午

後の陽が、葉むらを縫って、しーんとしずまりかえった空気を、明暗のまだらに染めわけている。

この四阿へ通ずる苑路のはしに、人影が動くのを見て、大内蔵は、急に、その立派な風貌に似つかわしくない淫靡な微笑を口もとに刷いた。双眼だけは、血をにごらせて、けもののように光っていた。

あらわれたのは、これは、奇怪にも、王朝時代の壺装束をした女であった。

「源氏孟津抄」に、

つぼ装束とは、きぬをつぼ折る心なり

とあって、当時の女子の外出姿である。

衣（袿）を頭より被り、市女笠をいただき、腰帯をして衣の両褄を折返しからげたいでたちである。唐綾の袿の泥絵が、いかにもそのむかしの風俗をしのばせる古めかしいあでやかさである。笠の赤い紐をむすんだあごの白さが、なまめく……。

太緒の草履を小幅にきざんで、そろそろと歩む風情は、時代がひととびに、その世界にかえったかと錯覚される。苑路をはさむ木立が、数百年を経た喬木であるのも、その風情をつつむにふさわしい幽邃の景趣といえた。

と――。

とある喬木の陰から、ぬっと出たのが、壺装束にあわせた、揉烏帽子をかぶり、水干をまとった牛飼童であった。十五、六歳の美しい顔立ちの少年である。毛抜形の括袖や、小袴から出た腕や脚が、女のように白く、やさしい。

少年は、つかつかと、女に近づくと、両手をひろげて、矢庭に抱きついた。

市女笠が、はねとばされ、袿が舞い落ちると、細おもての綺麗な面差が、迫って来る少年の唇をさけて、仰のいた。

四阿の大内蔵は、いそいで、かたわらに置いてあった画仙紙と絵筆を把りあげて、食い入るように、このみだらな光景を見まもった。

これは、大内蔵の外道趣味であった。

さまざまな風俗に扮装した小姓と侍女に、思うさまな秘戯を演じさせて、これを画仙紙に写しとるのである。

すでに、小姓と侍女は、演技に馴れた動作よろしく抱きあって、路上に倒れ、写しとられるための緩慢な嬌態をしめした。

小姓の片手が、小袿、衵、大帷子などを、順々にめくりひろげ、ついに、ふくよかな白い肉つきの太腿をさらさせて、その密かな柔襞の中へ顔をうずめてゆくや、侍

女は下肢を徐々に拡げ乍ら、さもこの陶酔に堪えぬがごとく顔をのけぞらせ、両の腕をあらわに泳がせて、垂れ枝をつかんだ。

絵筆は、その秘戯をとらえて、画仙紙を、いそがしく走る。

眠狂四郎が、不意に、四阿の陰から出現して、べつだん気配をひそめる程の忍び足もとらずに、背後へ寄って、画仙紙を覗き込んだにも拘わらず、熱中した大内蔵は、それに気づかなかった。

「……天照大御神よりも、こっちの方が、ちっとましなできだな」

青天の霹靂とは、このことであったろう。はじかれたようにつっ立ちあがって、驚愕と戦慄をそのまま凍てつかせた醜い顔面へ、狂四郎は、にやりと皓歯をみせた。

「眠狂四郎と申す。御納戸頭取の下にいた御仁らしいから、わたしの名ぐらいはご存じだろう。贋絵三枚の代金〆めて五千四百両頂戴いたしたく罷り越した。と申上げるのは、挨拶の順序で、すでに、金は、頂戴して、田嶋屋が運び出している」

「…………」

大内蔵は、わななく厚唇をひらいたが、口腔内がひからびて、声が作れなかった。

「ご念の入った詐欺だったなあ。大内蔵氏。企でてから十余年間も、まことしやかな噂だけをふり撒いて来たことは、よほど辛抱づよい御仁だ。……ひどく興奮されて、口がきけないようだから、お手前のやったしわざを、こちらから申上げよう。まちがっていないつもりだ。……お手前は、下手の横好きで、若い頃からなにやらいかがわしいざれ絵をかくのを趣味とされていた。そのうち、この天賦を利して、ひとつ、思いきった金儲けをやろうと思いついた。で――描きあげたのが、東照権現の落款入りの天照大御神像だ。そして、それが、あたかも先祖伝来の家宝であるかの如く、好事家たちの鼻さきで、匂わせた。お手前を、図にあたったと北叟笑ませたのは、好事家たちの方が、おっちょこちょいであったということだ。そうなると、一枚だけでは、儲け足りぬと、欲の袋に底なしの諺通りに、もう二枚描きあげたのは、お手前の方が、おっちょこちょいであったということになる。お手前は、貧乏大名の江戸家老とお咎小普請を抱き込んで、焦らしに焦らした好事家たちのうち、千両箱をたんまり倉にたくわえた九人をえらんで、この甲府へ呼び寄せた。九人のうちには、東照権現が描いた像にしては、気魄がない、と看破るだけの鑑識力を持った者がいなかったわけではなかろう。ところが、三枚な

らべられると、九人ともに、三枚を一人占めしたい欲心にかられた。つまり、三枚ぜんぶが贋だと考えるだけの余裕をうしなった。人間の心というやつは不思議なものだ。競争者がそろって、所有欲をあおられると、買手の気持は、このうちどれが真物か、という焦燥で目晦むのだな。そうして、三枚一人占めすれば、確実に、真物が手に入ると考える。それが叶わぬとなれば、どれをえらぼうかと血眼になる。つまり、さいごまで、三枚ともに贋ではないかという疑惑が起らなかった。……お手前は、うまうまと、五千四百両をふところにすることができた。そこまではよかった。好事家たちを送り出したあとで、ふと、臆病心を起した。それがいけなかった。三枚ともに奪いかえして、証拠を湮滅しておかなければ、町人どもが、とくとくとして、そいつを四方に見せびらかすおそれがあり、どうかしたはずみで、公儀が、これを表沙汰にしないとも限らぬ。贋にもせよ、東照権現の落款のある品を売買したとあれば、ただではすまぬ。ころばぬさきの杖だ。いっそ、奪いかえしてしまえ。奴らは盗まれたからといって、どこへ訴え出ることも出来ぬしろものを手に入れたのだから。というわけで、お手前は、配下の腕ききに、それを命じた。……どうだ、わたしの推量に、まちがった点があるか？　あれば、訂正して、頂こう。飽くを知らぬ鷹は爪を裂くというぜ。お手前の趣味は、左様、せいぜい、小僧と小娘をいちゃつかせて、そいつを写しとる程度にとどめておけば、こういう骨折り損のくたびれ儲けをせずに済んだのだ。これからもあることだ。気をつけるがいい」

云いすてて、ゆっくりと歩き出したふところ手の後姿を、眼球がとび出さんばかりの憤怒と屈辱の形相で睨みつけた大内蔵は、思わず、本能的に脇差へ手をかけた。

とたんに、ひょいとふりかえって、狂四郎が冷笑とともにあびせた皮肉は、鮮かであった。

「お手前は、剣をつかうのよりも、もっと下手だろう」

遺言賭博

一

まことに、ふしぎなご浪人さんでございました。

甲府を出た時から、前になり後になって、江戸への街道をひろって行くうちに、なんとなく、声をおかけしてみたくなったのでございます。いまから考えると、自分の生涯で、二度とはめぐり会えぬふしぎな魅力をお持ちのおさむらいだと――自分で気づかぬうちに、霊感のようなものが、はたらいたからでございましたろうか。

いえ、その時は、じろりと見かえされたとたんに、もう、ぞくっとなって、声をかけたのをくやんでいたのでございます。それ程、冷たい目つきでございました。

勝沼をすぎたあたりでございましたろうか。前後に人影のない山坂の、木立のふかい場所を、えらんだ自分をあきれるくらいでございました。てまえは、こうやって、日本中をあるいている薬売りでございますから、それはもう、千差万別なお人にお目にかかりましたが、あんなに冷たい目つきをなすったお方には、はじめてお会いいたしました。目つきだけではございません。彫のふかいお貌に滲んでいる暗い色は、なんともいえない孤独なものでございました。

声をおかけするまでは、てまえにわかって居りましたのは、黒の着流し姿ぜんたいに、寂しげな翳がつきまとうていたことでございます。

いま、こうして、目蓋をふさぎますと、あの氷のように冴えかえった目や、血の気の沈んだ肌色や、するどい線を截った肩つきなどが、たまらないなつかしさで思い出されてなりませぬ。

ただ、いまも申上げましたように、その時は、じろりと見かえされたとたんに、ぞくっとなって、とんでもないことをしでかしてしまった、とすくみあがってしまいました。自分で自分の了簡がわからず、こわばった顔を、むりにほぐそうとして、かえって、いびつに歪めたことでございます。

しかし、声をおかけしてしまったからには、もういたしかたございません。

「江戸へお帰りでございますなら、おともさせて下さいまし」

そう申上げて、丁重に腰をかがめたのでございますが、べつに否とも応とも、口をひらこうとなさらず、歩み出されて居りました。

息がつまるとは、あのことでございました。二歩ばかりあとから、おともし乍ら、どういうわけか、日頃は商売柄のおしゃべりが、一向に、舌に乗って参らないのでございました。一度思いきってその後ろ姿へ何か話しかけようといたしましたが、そのとたんに肩のあたりから、もやもやと妖気が、たちのぼるように見えて、思わずごくっと生唾をのみこんだものでございました。

ものの二町も、そうやって、過ぎてからやおら、てまえをふり向かれて、

「薬屋。つれになったからには、あまり神経をつかわぬことだな」

と仰言ったではございませんか。

てまえは、あっとなって、大あわてで、

「おそれ入ります」

と、あやまり乍ら、顔の冷汗をぬぐったのでございました。肩をならべて歩くように、無言でおしめしになったしぐさが、別人のようにおやさしかったのも、てまえをどぎまぎさせたことでございました。

それから……てまえが、べらべらと思い泛ぶままに世間話をおきかせいたしましたのに対して、殆ど相槌もおうちになりませんでしたが、そうなってからは、なんともいえぬ親しみが、てまえの方に湧いて居りましたのも、お心の底にお持ちになっているあたたかいものが、知らず知らず、てまえの胸にかよったからではありますまいか。

ふところ手で、すたすたとお歩きになる迅さは、旅馴れたてまえの息をはずませたのも忘れられぬ記憶でございます。

二

笹子峠に、矢立杉という大樹がございますのをご存じでございますか。むかし、武夫どもが、ここを過ぎる際に、みなこの杉に矢を射立てて、山の神に手向けしつつ、通った由にございます。

巨木のかたわらに、

武夫の手向の征箭も跡ふりて神寂び立てる杉のひともと

という歌を刻んだ自然石が建って居ります。

ちょうど、その前を行き過ぎようとしたおり――。

「待てっ！」

鋭い声が、あびせられたのでございます。

ただでさえ暗い木立の中なのに、どんよりとした曇り日でございましたので、その碑の陰から半身をあらわした曲者の姿が、闇を吸って、その風態も、手にしているのが何か、すぐには見わけがつかないのでございました。

よく透かし見ると、遊人らしい、中年の痩せた男で、窪んだまなこをぎらぎらと光らせつつ弓をひきしぼって、こちらのご浪人さんを狙っているのでございました。

ご浪人さんは、平然として、

「なんだ？」

と、問われました。

「てめえのふところに四、五十両はあるとふんだ。そいつが頂きてえ」

その脅しに、うすら笑われて、

「追剝なら、なぜ有無なしに矢を射込んで参らぬのだ？　それとも、威嚇に顫え上る素浪人だとあなどったか？」

と、云いかえされました。

すると、男は、

「まだ、てめえの運が、丁とも半ともきまっていねえからよ」

と、妙なことをうそぶきました。

「どういうのだ、それは？」

「おれが、呼びとめねえで、矢をぶちこんでいれば、てめえの生命は、あの世へ飛んでいたろうぜ。つまり、てめえの生命は、もうおれのものだ。おれは、てめえの生命を賭けるから、てめえは有金のこらず賭けて、丁半の勝負をしろい」

「虫のいい屁理屈だな」

「矢立杉の前の石の上へ、賽ころと壺が置いてあらあ。そいつを、つれの野郎にひろわせて、振らせろ。丁と出たら、有金置いて行け。半と出たら、そのまま立ち去りやがれ」

「細工がすぎるな」

ご浪人さんは、ふところ手で、あくまで、静かな口のききかたをなさいました。

「おれは、賽ころで生きている人間だ。今夜の猿橋の賭場の元手が入用だが、そいつも、丁半できめようというのよ。わかったら、早くしろい！」

「趣向は面白いが、あいにく、わたしは、脅しに屈するのは、性分にあわぬ。……こうしようではないか。わたしが勝ったら、お前の生命をもらう。これなら、五分五分だろう」

「よ、よしっ！」

男は承知しました。

てまえは、もうこれで二十五年も旅をして居りますからにはいつの間にやら、手なぐさみもおぼえて居ります。

ご浪人さんに、やれと命じられて、べつにためらいもせず、提灯に火を入れて、矢立杉の前へ据えておき、壺皿へ賽ころを投げ入れ、見よう見まねの手つきで、くるるっとまわして、ぱっと平石の上へ伏せ、二、三度、ツツツと小ゆすりいたしました。

「勝負っ！」

男の叫びにあわせて、さっと壺皿をあげたてまえは、

「半！」

と、叫びかえしました。

瞬間――。

ぶん、と矢唸りがして、はっと振りかえったてまえの目の前へ、ふたつに切られた矢が落ちました。

同時に、黒い姿が、ツツツ……とくさむらをすべったとみるや、男は、霧のような血飛沫を、碑へ撒き散らせて、ゆっくりと、路上へよろめき出ると、両膝を揃えて、ぺたっと坐り込みました。

ぱちんと鍔鳴らせて、

「行こうか、薬屋――」

と、促されたご浪人さんの、何事もなげなお顔つきを仰いで、てまえは、呆気にとられたかたちでございました。

ご浪人さんが、さきに三間ばかり遠ざかった時、地べたへ顔を俯っ伏させていた男が、痙攣する片手で土をひっかきつつ、

「さ、さむれえ……お、おい――」

と、かすれ声で、呼びました。

しかし、ご浪人さんは、ふり向きもなさらず、歩みも止めようとしなさらぬので、てまえが代って、顔を寄せて、

「遺言があるのかい？」

と、訊いてやりました。

「……こ、こんやの……猿橋の、釜屋の、文蔵の……勝負が、わ、わかる。……丁・丁・半の、丁・丁と、張ったら……ぜったいに、ま、まちがいねえ。……きっと、そう出る、お、おれには、わ、わかる。目――目に、う、うかぶ。……お、おれに、かわって、は、はってくれ。……丁・丁・半の、丁・丁だ……」

そう云いのこして、男は、がっくりと落入りました。

てまえが、いそいで、ご浪人さんに追いついて、それを告げますと、

「執念だな。……遺言賭博も、面白かろう」
と、ひくい声で、呟きすてられました。

三

その夜、猿の群が、桂川に、両岸から巨木を、雁の並んで行くように、つぎつぎとさし継いで桁受けして架けたという有名な猿橋のすぐ近くにある薄穢い旅籠に着きましたのが、六つ刻。

それから、風呂に入り、地酒をゆっくりとたしなんでいるうちに、もう五つ半をまわりましたので、ご浪人さんは、たぶん、あの男の遺言など、真にお受けなさらぬのだろう、と思って居りました。

ところが、急に、手をたたいて、女中をお呼びになり、

「釜屋の文蔵の開帳している賭場は、どこだ?」

と、お訊ねになりましたので、てまえは、――さてはおやんなさるか、と胸をはずませました。

賭場は、すこし下った藤崎の、由緒ありげな旧い屋敷の広間があてられて居りました。

途中で、てまえが、

「人間、ひとつ仕事に熱中いたしますと、死に際には、先のことがわかるものでございましょうかねえ」

と、申しますと、お笑いになって、

「さしずめ、お前さんなら、臨終の牀の中で、不老長寿の薬のつくりかたがわかって、くやしがるところだろう」

と、仰言いました。

釜屋の文蔵というのは、都留郡一帯を縄張りとするかなりの貸元だという、旅籠の主人の話で、賭場につめかけた三十数名の顔ぶれも、裕福そうな御仁ばかりでございました。無職者は、ほんの三、四人しか交って居りませんでした。

入って参りました時、ひとわたりの勝負がついたところとみえて、広間は賑やかな話声で満ちて居りました。

文蔵親分は、まるで、ご浪人さんがおいでになるのを待っていたように、

「ええ、さて――お一統さんに申上げます」

と、声を高めて呼びかけ、座がしずまるのを待って、

「今夜は、あと一番で、きりあげさせて頂くことに相成りますが……、この勝負には、特に、珍しい賭け物を、胴元からさし出させて頂きとうござんす。いま、ここへはこんで参りますから、お気に召したら、ずんとはりこんで頂きたいと、おねげえいたしておきます」

そうことわって、乾分に、顎で合図いたしました。



次の間から、ひき出されて来たのは、思わず、みんな、眩しさにまばたいた程、ぱっと花が咲き出たようにあでやかな女郎だったのでございます。
まるで、たったいま褥から抜け出て来たように、燃えるような緋縮緬の長襦袢いちまいで、それも、胸も裾もみだれて、むっちりと白い肌のあらわな仇姿でございました。
賭け物である証拠は、後手にしばられているのであきらかでございましたが、その不自由さが、崩れるように坐っても、のぞいた内腿をかくすすべもなく、これは、一同に、思いきって賭けさせる利目たっぷりといえたのでございます。
目もとに険があるが、まず、江戸のまん中へつれ出しても、はずかしくない美しい顔だちでございました。
ふと、われにかえって、そっと、ご浪人さんをうかがいますと、その横顔が、そんな女など入って来ようが来まいが、一向に興味もなさそうな、かわらぬ冷たい色を、うかべておいでなのが、てまえを、あらためて、つよくひきつけたものでございました。
文蔵親分は、一同の目色を変えさせたことに満足そうに相好をくずして、
「ごらんの通り、とびきりの上玉でござんす。甲府の渡月楼で、三年間もお職をはった園弥という花魁の名を、おききなすったお方もござんしょう。この女でござんす……ひとつ、話をきいて頂きましょうか。あっしが以前ちょっと面倒みてやったことのある渡り無職で、半三郎という若い奴が居りやして、こいつが、あいてもあろうに、この園弥に夢中になって、身請けの野心を起し、百二十両の大金を工面しようとあせったあげくが、あっしが縄張りのうちでも、一番大切な谷村の賭場で、素人衆の目をちょろまかして鳴針入賽を使やがった。まんまと百五十両あまりまきあげて、その足で、甲府へすっ飛び、この園弥を身請けしたまではよかったが、二人で手をとりあって、身延の方へ抜けようとしたところを、おっとり刀のあっしの乾分どもに追いつかれて、半三郎はなますになり、女はつれもどされたものの、渡月楼では、一度ケチのついた花魁をお職にもどすわけにはいかないから、どこかほかへ売ってくれ、というケンもほろろの挨拶——。しかたがねえから、あっしの家へつれては来たが、ご存じの通り、あっしは先月、若い女房を貰ったばかりで、この齢で、イキのいいのを二人も可愛がると、こっちの生命がたまらねえと、思案の果てが、この賭け物になった次第でござんす。さいわい、今夜お集まりになった旦那衆は、妾の二人や三人はお持ちになっ

てふしぎのねえおひとばかり、ひとつ、うんとはずんでおくんなさい。尤も、いくら小判の山が積まれようとも、あっしの方は、百五十両だけ頂戴すれば結構でござんす。賭場の土産に、柔かくて温い生身の菩薩をおつれなさるのも、ちょいと乙なものでござんす」
この口上のあいだ、女は、一人の若い者に身をあやまらした罪と、曝し者になったはずかしさに、穴あらば入りたげな風情をしめしていたかというと、まるっきり、その反対だったのでございます。
自分のねだんをせいぜいつりあげてやろうといわんばかりに、細い胴をくねらせると、片膝たてて、その白い柔餅のまるいふくらみを、奥ぶかくちらつかせ乍ら、文蔵親分の口上が終るのを待ちかねたように、
「お客さんがた。あたしも、渡月楼のお職をはった女ですからね。安売りされて恥をかくくらいなら、いっそ宿場女郎にたたき売られた方が気持がようござんす。……あたしのために死んで行った半さんの供養のためにも、百五十両、耳をそろえて、親分におかえしいたしとうござんすゆえ、どうぞ、気前のいいところをみせておくんなさいな」
と、すすんで自分を高値に売りつけて来たのには、みんな、少々たじたじのていでございました。

四

不意に、座の静かな空気を破って、チャリンと小判を盆布団に投げたのは、ほかならぬご浪人さんでございました。十枚ございました。
「さあ、はった！」
中盆が、すかさず声をかけました。
つづいて、小判をなげたのは、片肌ぬいで、滝夜叉を浮きあがらせた、いかにもきびきびした身ごなしの、苦味走った若い無職者でございました。
みるみるうちに、盆布団に、山吹色の花が咲いて、三十二人が十両ずつ、〆て三百二十両になりました。
勝ちのこれば、いかにも閨上手らしい餅肌の傾城に添えて、百七十両がふところへころがり込みます。どの顔つきも、異様な緊張をしめしたのは、当然でございます。左様、たった一人だけの冷やかな無表情を除きましてはな——。
中盆の鋭い掛声で、さっと壺振りが、壺皿をあげると、丁と出て、十六人が、後退いたしました。
つづく目も、丁と出て、八人が蹴落されました。
三度目が、半。のこり四人。
もう、この時になりますと、見物しているてまえ自

身、からだ中が高い熱にうかされたようになって居りました。
　まさしく、矢立杉で死んで行ったやくざの遺言は、ぴたりぴたりと的中したのでございます。一生を賽ころに賭けた者の執念のおそろしさが、てまえの胸をわくわくと沸きたてて、どこからか、その幽霊がたちあらわれて、この勝負を見まもっているのではなかろうか、と思わず、あたりを、そっと見まわしたことでございました。
　勝ちすすむご浪人さんのご様子だけは、あいかわらず、もの静かなものでございました。頭をまっすぐに立てて、腕ぐみをして、殆ど身じろぎもなさいませんでした。きまっていることを、その通りにやっている――それだけの話で、大して興味もない、といったように…。
　ついに――最後にのこったのは、ご浪人さんと、滝夜叉の無職者でございました。
　百六十両ずつの山を前に置いて、この両者が対座した光景に、一同は、息をのんで、しわぶきひとつもらしませぬ。
「壺っ！」
　中盆の掛声に、間髪容れず、ご浪人さんが、ひくいがよく透る口調で、
「丁」
と、仰言いました。
「よし！　半だ！」
　無職者は、食いっきそうに、ご浪人さんを睨み据えて、応じました。
　――勝つにきまっているんだ！　勝つに……。
　てまえは、胸のうちで叫び乍らも、もしかすれば、どたん場で、遺言がはずれるのではあるまいか、という烈しい不安もなくはなかったのでございます。
「勝負っ！」
　息づまる空気を裂いて、壺皿は、さっとあげられ、二個の賽の目は、血走った三十余の視線へ曝されました。
　無職者が、悲痛な唸き声を発しました。
出た賽の目は、五三の丁。
「墓場の丁だ！」
　誰かが、空おそろしげに呟きました。
　博奕打ちのあいだでは、五三の丁を、墓場の丁と呼んで居ります。賽の目の、三のましたは四、五の下は二でございます。つまり、三と五の目の下には、四二（死人）がいるというわけでございまして、凶目として忌みきらわれて居ります。勝った方も、時には、勝負のやりなおしを申出ることがあるくらいでございます。

「おさむらいさん、おめでとうございんす。女をおつれなさいまし」
　文蔵親分が、凶目の後味わるさをふりはらうように、陽気な声をかけた時、突如、園弥が、きりさくような、悲鳴にちかい声で、
「時さん！」
　と、呼びかけて、ずるずると、敗れた無職者へ、いざり寄ろうとしました。その顔は、なんともいえないくらい痛ましい絶望の色をあふらせていたのでございます。
　男の方は、まわりの怪訝な視線をはばかって、あわてて、立ちあがると、
「おらあ、負けたんだ！　し、しかたがねえ！」
　と、口走りました。
「時さん！……あ、あたしは、ど、どうなるんだい？　あ、あたしは――」
　園弥が、狂気のように、両膝あらわに、よろめき立って、盆布団をふみ越えようとすると、
「なにをしやがる！」
　と、中盆が、憤然として、ひきずり倒しました。
「時次郎――」
　文蔵親分が、険しい目つきを向けて、
「おめえも、ひとっぱしのやくざなら、きれいにひきあげろよ」
「へい――」
　無職者は、ちらと、女へ一瞥をくれて、踵をまわし「時さん！」と呼びすがる金切声に、ぴくんと、肩をふるわせてから、逃げるように出て行ってしまいました。

五

　それから、小半刻のち――。
　提灯で足もとを照らすてまえを先頭に、園弥、ご浪人さんとならんで、旅籠へひきあげて居りました。
　星空でございましたが、妙にあかるい夜で、提灯はいらないくらいでございました。
　ずうっとおし黙って、猿橋のところまで戻って来た時、ご浪人さんが、はじめて、女へ口をおききになりました。
「おまえは、あの男と、約束があったのか？」
「あい――」
「あの男は、半三郎に、おまえを身請けさせておいて、途中で横取りする積りだった――そうか？」
「その手筈でございんした」
　女のしめった声音は、素直でございました。
「時さんも、あたしを身請けするために、必死になっ

て、お金をつくって居りました。それを、ひと足ちがいで、半さんに先を越されたものでござんすから、打明けてたのんでみたところで、ききわけてくれる半さんではないし、いっそ腕ずくで——と、こっそりしめしあわせたそのすぐあとへ、親分の乾分衆が追いついて来て……とうとう——」

「賽ころに運を託すよりほかに方法がなくなったというわけか」

「あい——」

それきり、また、言葉がとぎれて、ちょうど、猿橋のまん中あたりにさしかかりましたろうか。

突然、園弥が、なにか鋭い声をほとばしらせたかと思うや、だだっと橋板をふみ鳴らしたので……てまえが、愕っとなって、ふりかえった瞬間には、もう、その身を、橋から、宙へ躍らせて居りました。

「呀っ！」

怕さを忘れて、身をのり出してみると、ばあっと舞い翻らせた裾を、こちらの目にのこして、一直線に、吸い込まれてゆきました。流れは闇につつまれ、水音も、むこう岸の中程から轟き落ちる滝のひびきに消されて、きこえませんでした。

「油断なさいましたな」

再び渡りはじめてから、てまえが、そう申しあげても、べつに、なんともおこたえなさいませんでした。

ところが、実は、決して、油断なさっていたわけではなかったのでございます。

旅籠の土間に入った時、てまえは、ふと、そのお手に握られているものを見て、はっとなったのでございました。

それは、ふっさりと長い黒髪でございました。女が、身を躍らせた刹那、ご浪人さんは、抱きとめるかわりに、その黒髪だけを、迅業で、切りのこされたのでございます。

どうして、そうなされたのか——べつにおたずねもいたしませんでしたが、てまえには、いかにも、このお方らしいお振舞いだ、と思われたことでございました。

翌朝は、胸の奥まで澄みきる程すがすがしい秋晴れでございました。

桂川に沿うた甲州街道の眺めは、まことにすばらしく、色づいた樹々をくぐって行くこの身までが、その色に染まるようでございました。

自然、てまえのおしゃべりもはずんで、ご浪人さんの口もとに、いくどか、微笑をよびましたのは、うれしゅ

うございましたな。

小篠をすぎて、立野というところへ入った頃でございました。

木立の陰から、ぱっととび出して来て、行手をふさぎましたのは、あの時次郎という無職者でございました。

ご浪人さんは、わざと無言で、凄じく睨みつけて来る対手を、じっと見かえしておいでになりました。時次郎は、しぼるように、変にしゃがれた声で、

「園弥の髪を、も、もらいてえ！」

と、云いました。ご浪人さんは、ほんのしばしの沈黙を置いてから、

「お前も博徒なら、賭でやろうか」

と、仰言いました。

「おお、合点だ」

「おれは、園弥の髪毛を賭ける。お前は生命を賭けるがいい」

「よおし！」

ご浪人さんは、ゆっくりと、断崖のふちへお寄りになりました。

「下の渓流を見ろ。岩と岩があたまをならべている。その上へ落ちれば、五体が砕けるだろう。だが、岩と岩のあいだの流れへ落ちれば、濡れるだけにとどまろう。こう見たところ、岩と水の面積は、五分と五分だ。おれがいま、この髪毛を投げる。欲しければ、跳んで取るがいい。どうだ？」

時次郎は、はるかな渓流を眺めおろして、こめかみに、いくすじかの血脈をひきつらせて、口をぎゅっとひきむすんでいましたが、屹っとなって、ふりかえると、

「投げろ！」

と、叫びました。

ご浪人さんの右手から、ひとにぎりの黒髪が、断崖から数尺はなれた空中へぽーんと抛られるや、時次郎の若い軀は、それにむかって、むささびのようにとびついていました。

みごと、黒髪をつかんだ——とみとめた次の瞬間には、ご浪人さんは、すっと、街道へ一歩ふみ出しておいでになりました。落下して行った時次郎が、どうなったか、見とどけようとはなさいませんでした。

てまえでございますか？　てまえもまた、大急ぎで、ご浪人さんのあとにしたがって居りました。どうして見とどけなかったのか、てまえ自身いまもっていぶかしく思って居ります。その時は、下をのぞいてはならないと、かたく禁じられているような気持だったのでございます。

奇怪茶屋

一

――はてな？

黒檜の密林の中の杣道を登って来た眠狂四郎は、とあるかなり広い往還に立って、小首をかしげた。

眼前の雑草の中に、新しい道標が建てられていて、「右、高山へ五里八町」と、墨跡あざやかに記されてあるのだが、左への指示がないのである。

一瞥しただけで、この往還が、古いものだとわかるだけに、奇妙な思いをさせられたことだった。

甲府から江戸へ帰る前のことで、ふと思いついて、狂四郎は、諏訪湖をまわって、松本へ出て、この飛騨山中まで足をのばして来たのであった。

気の向くままに、大白川に沿うて、白山の麓へ達し、地獄谷から御母衣へ抜けて、そこから、奥飛騨の山ふところを、彷徨して来たのである。

日本を表と裏にわかつ分水嶺は、飛騨を横断している。南斜面が口飛騨と呼ばれて、峡を落ちる水は益田川となる。北斜面が奥飛騨で、高原川と宮川と庄川の三流を作っている。したがって、いかに、勝手に足の赴くにまかせていても、その川すじを見失わなければ大丈夫だろうときめて、彷徨をつづけて来た狂四郎であった。たしかに、飛騨に入るには、川沿いの道が、三本しかなかったのであるから……。

はたして予測たがわず、いま、高山への往還に出た。瀬音は密林の下方から、きこえているのである。

しかし、狂四郎の眼眸は、その反対の方角にそそがれた。

――何故に、こちらへの指示がないのか？

道標が新しいだけに、故意に、書き落されたという疑惑が湧いた。

陽はまだ朝のものであり、飛騨に入ってから、一度も奇異な出来事に出食わさぬ退屈が、狂四郎の足を、つと、指示なき一方へふみ出させた。

黒檜がきれて、途は、山肌の剝き出された崖の中腹をうねって行く。

いくばくもなくして、松と灌木のまばらにちらばった平地へ出て、狂四郎は、立ちどまった。そこで、往還は、ぽつんと断ちきられていた。

薄と蓬と小花をつけた虎杖がいちめんに生茂って、秋風にゆれている。

しかし、こんどは、狂四郎は、その顔に不審の色を刷くかわりに、皮肉なうすら笑いをうかべた。

往還がつづくものとして、その行手を目測すれば、そのひとすじには、巨樹は一本もないのである。すなわち、これは、人間の手によって、灌木や雑草をもって、途が消されたと考えてまちがいなかった。

狂四郎は、ためらわずに、胸までもある草をわけて、進んで行った。

平地を過ぎると、ふたたび、黒檜の森であった。森の中には、ちゃんと、途が通じていた。

狂四郎をして、ふたたび、立ちどまらせたのは、森を抜け出た時だった。

そこから、凸凹の甚しい岩途になっていたのだが、明るい陽ざしに照らされたそこには、いちめんに、びっしりと、百足の群が匍い出して、じっと動かずにいたのである。数千匹と見てとれた。

さすがに、狂四郎の背すじを、むずむずと悪寒がつたわった。

ゆっくりと、一歩踏み出すと、つぶれた百足の油で、ずるっと滑った。緩慢に、ぞろぞろと蠢きはじめた毒虫の大群は、しかし、岩肌のぬくもりから去り難いのであろう。狂四郎が通り過ぎて行くやすぐさま、もう元の場所へ匍い戻っていた。

ぬるっ、ぬるっ、となんとも名状しがたい不快な触感をあじわいつつ、狂四郎は、褐色の足跡を数間のこした。

二

「ふむ！」

三たび、足をとめた時、狂四郎は、腕を組んで、眼光を鋭いものにした。

旅人の跡を断った峠上で、一軒の掛茶屋が、忽然という形容がふさわしいたたずまいを、狂四郎の視野に出現させたのである。しかも、葺かれた茅も、柱も、壁も、軒下につるされた「お休みどころ」と抜いた紺の旗もすべてがま新しかった。

これは東海道の宿場の棒鼻にある立場茶屋などより、ずっと立派な構えであった。

――わざわざ、途を消しておいて、此処に、茶屋をつくるとは、どうしたことだ？

たとえ、途を消さぬにしても、一里塚もない、街道ともいえぬ往還に、茶屋がなりたつわけがあるまい。

ちなみに、当時、幕府は、街道については、充分の配慮をなし、一里塚、並木、道幅の規定など、整然たらしめていた。大街道はその幅六間、小街道でも三間の幅を持たせていた。
　この往還は、一間にも足らないのである。かつて、通じていた時も、せいぜい、狭間の部落民が、高山へ年貢をはこぶにとどめる交通路にすぎなかったであろう。
　奇怪というほかはなかった。
　狐狸に誑かされる狂四郎ではないことは、ことわるまでもない。ただ、狐狸のしわざとみせかけようとする人間どもの企てとしたら、これは、やって来た甲斐があったというものだ、と自分に云いきかせた。
　茶屋の前に立って、狐狸が化けたと看做すにふさわしい若い女が出て来るや、
　――おあつらえ向きすぎるな。
と、微かな苦笑となった。
　色白の、下ぶくれした、おっとりした顔だちで、紺木綿がよく似合っていた。これは、このまま、どこの宿場へつれて行っても、早速に人気をとるに相違ない。しきたり通りに、赤いたすきと前掛をつけているのも、心得すぎて、怪しいといえる。
「おいでなされませ」
にっこりして、頭をさげると、すぐ奥へ姿を消した。
　床几に腰をおろした狂四郎は、嶮路を目で追い、はるかな下方に、部落を見出した。
　幾色もの濃淡鮮かな密林が重なりあって、その狭間のなかばは、かくれていたが、厚い茅葺きの切妻合掌造りの屋根や、耕地や、川すじなどが、樹間にのぞまれた。
　おどろいたことに、水田に稲は無く、川は水が涸れて砂磧と化し、惨澹たる光景を呈している。
　今年は、決して豊作とはいえぬまでも、狂四郎が通って来た村々は、いずれも、黄金色の実のりをひろげていた。
　この峡谷だけが、水が涸れたとは、いったい、どうしたものであろう？
　稲の殆どが枯れているというのではないのだ。まるで植えてないのだ。わずかに、山の斜面に、小さく蓆をならべたような畠に、青いものがみとめられるのでなかったならば、飢饉のために、部落民は、ことごとく、何処かへ逃散したか、と想像される荒廃ぶりだった。
　狂四郎は、視線をまわして、奥の曲突の前へ蹲んで粗朶を燃やしつけている娘を見やった。
　煙をさける身振りが、あだめいている……。

　――山育ちではないな！
　そう直感された。
　やがて、娘は、お茶と蕎麦饅頭を持って来ると、
「お口に合いませんでしょうが……」
と、狂四郎の前に置いた。
「今年は、気候が不順でもなかったが、あの部落には、災難があったのか？」
「はい――」
　娘は、べつに表情も動かさず、「川の水がとまりましたので……」と、こたえた。
　狂四郎は、水のとまった理由を糺そうとして、急に思いかえした。娘の平気な様子が、不審だったからである。
「そなたは、あの部落の者か？」
「はい、左様でございます」
　それならば、当然、憂いの色が、顔に滲んでいるべきであったろう。
　狂四郎は、あとは何も訊かずに、湯呑みを把りあげた。
　瞬間、娘の眸子が、きらっと鋭く光った。
　それが意味するものを読みとった狂四郎は、あいての緊張をはずす何気ない態度で、軒につるされた菅笠大もある蕈を仰いで、
「これは、なんというのだ？」
と、訊ねた。
　娘は、目をあげて、
「この地方では、革茸と申します。深山で、熊の小用したあとに生えるそうでございます。昼間は陽に乾して、夜は、炉架の上で乾しますので、あのように煤ばんで居りますが、おいしゅうございます」
と、説明しておいて、そっと狂四郎の手元をぬすみ見た。
　湯呑みは、空になって、盆の上へもどされていた。
「もう、一服いかがでございますか？」
「いや――、それよりも、そこで横にならせてもらおう」
「山あるきは、お馴れになりませぬと、お疲れでございましょう。ごゆっくりおやすみなされませ」
　娘は、いそいそとして、押入から、枕と夜着をとり出して、炉端へ招じた。
　ごろりと横になった狂四郎は、すぐに、目蓋をとじた。
　それから、どれくらいの時刻が移ったろう。娘が、忍び足で、裏口から抜け出て行くのを、薄目をひらいて見

送ったほかは、狂四郎は、ずうっと、身じろぎもせず、うとうとまどろみつづけた。娘が、何者かを呼んで来る——それまでの時間が計算されていたのである。

背後一間に、殺気をこめた気配が迫ったとたん、狂四郎の神経は、目ざめて、冴えた。

無言の気合で、一直線に、白刃が、背中へ来た刹那、狂四郎の五体は、翼でもあるかのように飛び立った。

右足で、刀を掴んだ手くびを、左足で、片方の二の腕を、そして、無想正宗の鐺（こじり）で、咽喉の窪みをぐいと押しつける——これだけの動作を、ひと呼吸でやってのけた狂四郎は、それが、まだ二十代の逞しい若者であるのをみとめてから、土間に立ちすくむ娘へ、微笑を投げた。

「湯呑みが空になったのは、必ずしも、飲んだことにならぬのだぜ、娘さん」

そう云って、ひらっと、その前へひと跳びした。

昏倒した若者は、ぶざまに、大の字にひろげた四肢を、びくりともさせなかった。

「どうした？　おびえる柄ではあるまい。おっとりした顔つきをしているが、山育ちでないことは、わかって居る。浮川竹の泥水を、一度はくぐって来て居ろう。わざと訛を使っているが、歯切れのよさは、江戸のものだ。ちがっているかね？」

娘は、険しく眦（まなじり）をひきつらせ、じりじりとあとずさっていたが、一瞬、身を翻すと、ぱっと、おもてへ逃げ出した。

一気に、往還を横切って、林の中へ馳せ込もうとした娘は、臀部に、ひやっと冷たい氷をあてられたような衝撃を感ずると同時に、おのれの意志なくして、一本の松の幹へ、ひしと抱きつかされていた。

あわてて、幹からはなれようとしたとたん、女の秘部に痛みが走った。

あっとなったことだった。

一刀が、刃を上にして、臀部から、股間の柔襞すれすれに縫いつらぬいて、切先を、幹に、ぐさと突き立てていたのである。

若者が掴みしめているやつをもぎとって、冷笑とともに投げた狂四郎の手練の魔技であった。

娘は、つまさき立ちで、幹にしがみついたまま、大きく肩を喘がせた。

すたすたと近づいて来た狂四郎は、笑い乍ら、

「どうだ、松の抱き心地は——。松にもいろいろあってな、一本目には池の松、二本目には庭の松、三本目には下り松、四本目には志賀の松、五本目には五葉の松、六つむかしは高砂の、尾上の松や曽根の松、七本目には姫



小松、八本目には浜の松、九つ小松を植えならべ、十で豊国(とよくに)の伊勢の松――と申してな、さしずめお前が抱いているのは、切れる未練に痛さを怺え、股の逢瀬がせかれてならぬ、主まつケ枝や、白刃(しらは)立ち、ぞっと身にしむ秋風に、吹かれてひろがる末広の松、というやつだ。縁起がよかろう」

　と、からかっておいて、語気を一変すると、

「途を消したり、茶屋を建てたり、眠り薬をのまそうとしたり……なんのための、小細工か、きこうではないか」

「こ、ころせ！」

　娘は、絶叫した。

　それが、茶屋の中で気を失っている若者の耳にとどかせようとするこんたんであるのは、狂四郎にすぐわかった。

　はたして、息をふきかえした若者が、はね起きて、脱兎のように裏口から逃げ出して行くのをみとめたが、狂四郎は、べつに追おうともしなかった。

　のそりと、一歩寄って、いきなり、つまさき立ちの娘の片足を、ぐいと、踏みつけた。

　ひっ、と悲鳴をあげた娘は、無我夢中で、幹をよじのぼろうとした。

　しかし、着物と襦袢と腰巻の、前と後を縫った白刃は、そのもがきをゆるさなかった。

　ついに――。

　娘の口から、絶望的にもらされたのは、

「片脚の行者に、きくがいい」

　その一言であった。

三

　うなだれた娘をさきに立てて、狂四郎が、部落へ降りて行くと、村の入口の道祖神の石祠のある辻には、すでに、名主とおぼしい紋服をまとった老爺が、数人をしたがえて、待ちうけていた。脇に、茶屋から逃げた若者を高手小手にしばりあげて――。

　日輪は、すでに、覆輪をとりはらって西の山へ沈みかかろうとしていた。真紅に煨(や)けた笠雲の下を、夕鴉が数羽舞っていたが、その啼き声が、なんとなく凄味をおびてひびいていた。

　老爺はじめ、人々は、狂四郎が前に立ちどまると、一斉に、土下座した。

　……今年は、ごらんのごとく旱魃のために、当村の困窮はどん底に達し、稗粟すらも、ろくろく口に出来ず、わずかに篦竹筍や蕗や乾蕨(わらび)や狗背(ぜんまい)で、いのちをつないでいる有様。例年ならば、弶(こぶち)にかかる小鳥も、飛んで来ず、猪も鹿もすがたをみせず、たまにあらわれる猿を捕える体力さえも、村の若者はうしなって居ります。そのために、ここな不埒者めが、その娘をそそのかして貴方様の懐中をねらいましたのも、背に腹をかえられぬせっぱつまった挙句の出来心でございます。何卒曲げてご容赦の程を願い上げます。

　こういった意味の弁解を、くどくどと述べて、老爺は、平伏した。見え透いた嘘であることは、いずれの顔も血色がいいという一事のみで、瞭然としていた。すこしも飢えてはいないのだ。

　川の水が涸れたのは、何かの目的があって、人工によって、そうされたに相違ない。その秘密が、他国者にさぐられるのをおそれて、途を消したのだ。さらに、それだけでは不安なので、途なき途を犯して、敢えて、侵入して来る者があることを考慮して、狐狸のしわざともみせかける茶屋をつくり、これを阻む手段を用意しておいたのだ。

　――どうやら、おれを公儀の隠密とみているな。

　狂四郎は、そう思いあたった。

　この飛騨は、元禄五年以来、幕府天領となっている。そのために、年貢米の取立は、寛大になり、代官、郡代の視察も、殆ど行われていなかった。例えば、白川郷にしても、斐太後風土記によれば、

「山の尾通り国界にて、東は本州の内なり、西は越前なりしを、二郡を分ちて加賀国とせられて後、年代不知、彼二国境論ありて決せざるにより、徳川家の処置にて、界を定めず、越前加賀白山麓、十六個村は、越前本保陣屋付、飛騨県令支配なりき」

　とあるくらいだから、公儀も加賀藩も山峡部落など、殆ど見すててしまっていたのである。

　四方に諸岳が聳立して、いずれの岳も山勢険しく、宮川をのぞいて益田川、白川、高原川すべて激流で、舟筏横流しのほかに用に足りず、国中すべて磽确(こうかく)瘠地(せきち)で、砂礫の交らぬ真土は全くないといっていい国なのである。

　公儀が天領としたのは、金森頼時が出羽上山に転封になって以後、どこの大名も、この領土ばかりは引受けようとしなかったからである。

　いわば、支配者から見すてられた峡間のひとつであればこそ、川を涸らして年貢米をとられずにすませることもなし得たのである。

　この村落にとって、唯一の恐怖は、公儀の隠密が、出現することだったのである。

　狂四郎は、あらためて、ずうっと、村を見わたした。

勾配の急な切妻造りの大屋根が、ざっとかぞえて、十余軒ある。盆地の面積に比して、すくないのは、それらの一軒々々が大家族を擁しているからに相違ない。中でも、いちだんと大規模な構えの家が、南の栗林を背負うて、どっしりとわだかまっている。屋根裏が、四階になっている。

「あれが、おぬしの屋敷か？」

狂四郎は、老爺に指さした。

「左様でございます」

「泊めてもらおう」

狂四郎は、歩き出した。

四

文武天皇の時代から、飛騨工（たくみ）の名は、高かった。その建築彫刻の腕の冴えは、百済（くだら）の河成という天才絵師と技をきそって劣らなかったと、今昔物語にもみえて、飛騨工は、その腕ひとつを売物に、日本全土を渡世したものであった。

名主の家へ入って、茶間（おえ）の炉端に坐った狂四郎は、――成程、これは見事だ、と感服した。

手斧（ちょうな）でけずった大黒柱、欄間の透し彫、格天井、扇面をかたどった自在の鈎手、檜の一枚板の衝立の彫刻――どれひとつとして、目をひきつけずにはいない高雅な美を湛えていないものはない。

せいぜい装いをこらした三人の娘によって、はこばれて来た夕食の膳も椀も皿も、木理（あららぎ）、色目の美しい一位でつくられていた。

「お毒味つかまつります」

名主は、おそるおそるの顫え手で、まず酒をふくんでみせておいて、牛蒡、豆腐、湯葉、薯蕷（とろろ）汁、乾狗背（ぜんまい）など、精進料理を、ひとつひとつ、つまんでみせた。

酒も料理も、美味だった。

狂四郎は、終始、黙々として、つがれるままに、飲みつづけた。

ただ、ふと、思い出したように、

「片脚の行者に会いたいのだが――」

と云い出して、

「ただいま、あいにく、高山の方へお行きなされて居りまする」

という返辞に、しいて、その偽言を衝こうともしなかった。

やがて――。

膳をさげた三人の娘が、なんの意味か、再びうち揃って、あらわれると、炉をへだてて、狂四郎のむかい側

へ、つつましく並んで、俯向いた。

「では――」

口のうちで、もぐもぐと、何やら独語をもらした老名主は、曲り腰をのばして、神棚から、白磁の小壺をとりおろして来ると、狂四郎の膝の前へ置いた。

「お召しあがり下されましょう――」

促されて、蓋をとってみると、木ノ葉に包んだものが、三個入っている。木ノ葉は、それぞれ、色がちがっていた。

「毒味をねがおうか」

狂四郎が云うと、老名主は、皺目蓋をせわしげにまたたかせて、

「こればかりは、毒味の儀はおゆるしねがわねばなりませぬ……。決して、怪しい馳走ではございませぬ。棗（なつめ）の実の漬物にございまする。ひとつだけ、おつまみ下されませぬか」と、ねがった。

狂四郎は、ちょっとためらっていたが、つと、片手をさし入れて、一個つまみあげた。すると、三人の娘が、一斉に顔をあげて、吸いつくように、狂四郎の指さきへ、視線を集中させた。

急に、右はしの娘が、頬を染めて、俯向くのを見てとった狂四郎は、

――そうか。

と合点して、木ノ葉を剝いて、無造作にその実を口に入れた。

甘ずっぱい味が、口腔中にひろがった。右はしの娘が、立って、炉をまわって来ると、懐紙をさし出して、種を受けとった。

「……目出度やな、目出度やな」

老名主が、首をふり乍ら、無表情で、呟いた。

その娘が、狂四郎を、奥の寝所へ案内した。

狂四郎は、すでに、このしきたりについての知識をもっていた。

いつの時代からの因習であろうか、たぶん国造が択ばれて、国々の郡の大領小領に任ぜられた頃からであろう、僻村においては、偉い人をもてなす酒肴も歌舞もないままに、奇妙な趣向を考えついたのである。すなわち男子の精を増すという棗の実を、未通女（おぼこ）の陰門で、二十一日間あたためておき、これを並べて、視察吏に選ばせる。自分の実を食べられた娘が、その夜の伽をするという趣向である。

この村でも、もし高山陣屋から、見廻り役がやって来たならば、そうすべく、棗を用意していたのである。

娘は、狂四郎を褥に就かせておいて、裾へさがって帯

を解き、緋の長襦袢いちまいになると、怯ず怯ずと、入って来た。

……娘は、まさしく処女であった。

突如、けたたましい叫び声が、この屋敷の裏手でほとばしったのは、四更も回った頃合であったろうか。

「土蔵が……土蔵が、破られてござるぞっ！……金が、金の袋が、ぬ、ぬ、ぬすまれたぞっ！」

たちまち、屋内は、騒然となった。

奥の寝所で目をさました娘は、いつの間にか、じぶんの傍から、客人の姿が消えうせているのを知って、するどい悲鳴をあげた。

五

夜あけの薄霧が、視界をふさいで、流れるともなく流れる峠の上の、がらんとした仄暗い茶屋の框に、狂四郎は、ぽつねんと、ただ一人、腰を下していた。

肌にしみ入る冷気は、臓腑も凍らせるばかりであった。

視野の彼方の、痩せた尾根のあたりから、夜は明けはじめたかと思うと、高原の朝は足早やにおとずれる。

たちまちに、淡い光の波が、うしおのように、山肌の片面を浸して来た。

狂四郎は、ひとつ、深い呼吸をして、立ちあがった。

発音が、険路をのぼって来たのである。かつん、かつん、と高くひびくのは、隻脚が木で作られているからであろう。

二間の距離をはかって、狂四郎は、ふらりと、路上へ出た。

「うっ！」

ひくく唸って、足をとめたのは、密行如法の有髪を肩に散らした山伏であった。顔半面は、熟柿をたたきつけたように焼けただれた醜怪な痕を浮かせている。山伏のうしろにしたがっているのは、この茶屋にいた女である。

「世間というものは、広いようで、狭いものだな。念々堂」

まず、狂四郎は、微笑とともに、そう云いかけた。

この夏、霊魂をまねく修験道として、江戸で非常な評判をとり、大目付小笠原帯刀邸で、手妻遣い胡蝶斎と術をきそった果てに、ついに、その正体を看破されて、狂四郎と一騎討ちして、一脚を刎ねられた巨漢——念々堂こと神馬将斎は、江戸をはなれて、この飛驒山中にひそんでいたのである。

「うぬが、ここまで、さまよい込もうとは……くそっ！」

将斎は、眼球を、血を噴かんばかりにぎらつかせて、金剛杖を構えた。

狂四郎は、ふところ手のままである。

「因縁だったとあきらめてもらうのだな。……急くな！二本脚で勝てなかった貴様が、どうして、案山子になって、おれに勝てる？……斬るとは云わぬ。おとなしく、その縁笈の中から、砂金の袋を出して、こちらに渡してもらえるならば、だ。……貴様は、あの狭間の川の上流に、砂金があると知って、村人をそそのかせて、流れをとめた。砂金は、たんまり採られて、名主の倉におさめられた。貴様は、そいつを奪って逃亡する機会をねらっていた。そこへ、ひょっこり、おれがあらわれた。貴様の情婦を追いたてて村へ降りて来たおれの姿を物陰から眺めた貴様の仰天面が、目に見えるようだ。猶予はならじと、倉を破って、金袋を盗んで、ようやく、ここまで辿りついたのだったが……」

そこで、いったん、口をつぐんで、狂四郎は、すっと、半間をすすんだ。

「どうだ、将斎、志をあらためて、夫婦で、この茶屋をやらぬか。おれが、江戸へ帰って、砂金の話をひろめてやろう。そうなれば、黄金亡者が、蟻のように、この峠を行列するぜ。商売繁盛うたがいなしだ。ひとつ、やらぬか——」

それに対する返答は、満身から発する凄じい気合だった。そして、それが、遠くこだまして、澄みきった朝空へ消えた時、すでに、その巨軀は、地べたへ俯っ伏して、撒いた血汐をじわじわと土へ吸い込ませていた。

花の長脇差

一

あのふしぎなご浪人さんについて、またなにか話をしてくれと仰言るのでございますね。
そうでございますね、このまえは、遺言賭博の、暗いお話をいたしましたが、こんどは、ひとつ、小意気なあかるいお話をおきかせいたしましょうか。
いま、思い出しましても、なんとなく、くすくすとひとり笑いしたくなる一埒でございます。妖気をただよわせたご浪人さんにも、あんな洒脱な振舞いがおありになったと考えますと、もう一度、旅のお供をしてみたいと——矢も楯もたまらなくなって参ります。
……八王子の宿(しゅく)を朝はやく出て、多摩川を渡って、谷保天満宮の鳥居を、むこうにのぞむあたりへさしかかったおりのことでございました。
「旦那——」
てまえは、すぐ三間ばかり前を歩いて行く、さんど笠に廻し合羽をつけた博奕打らしい小柄な旅にんへ、指を差して、
「あれは、女じゃございませんか？」
「うむ——」
ご浪人さんも、かるくうなずいておいでございました。
その博奕打の姿を、はじめて、見かけたのは、小仏峠を越えようとした時でございました。黄昏のふかまった杉木立の中を、とっと、と急ぎ足に、追い抜いて行きましたので、べつに、気にもとめなかったのでございますが、二度目に、八王子の宿で、旅籠を物色し乍ら、ひょいと、さんど笠をあげたところを、何気なく見やって、
——おや？
と、怪訝に思ったことでございました。
色こそ陽灼けているが、その目もとのすずしさや、口のかたちのやさしさや、あごの丸みなど、これは、あきらかに、若い女のものだったのでございます。
——女の旅博奕打は、いないわけではあるまいが、なりまで野郎に化けるとは、どうしたというのだろう？
あきれて、見まもって居りますと、こちらの視線に気づいたか、ふりかえって、きらっと鋭く眸子(ひとみ)を光らせました。

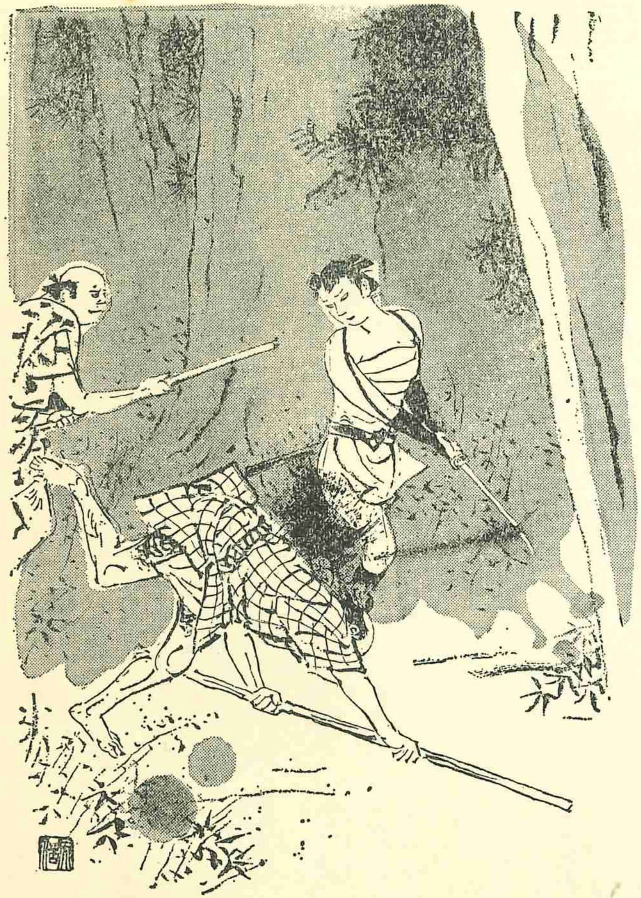
男になりきったつもりでございましょう、殊更に、表情をひきしめて、肩をいからせてみせたものでございました。
その時は、ご浪人さんの方は、すでに旅籠へお着きになっていて、てまえ一人で、この宿(しゅく)のお得意先まわりをして居りましたので、ひと睨みされると、あわてて、顔をそむけて歩き出して居りました。
三度目に出会ったのが、多摩川の堤を越えた直後で、気になるままに、同じ街道をひろって行く後ろ姿を見失うまいとしていたのでございます。
ご浪人さんの方は、小仏峠で、追いぬかれた時にもう、それが女だと見やぶっておいでになったに相違ありませぬ。
「どういうのでございましょうね、ありゃあ——」
てまえが、小首をかしげてみせましても、ご浪人さんは、べつに、なんともおこたえにはなりませんでした。どんなに珍しいものに対しても、無関心を装う冷たい無表情が、このおひとの持ちまえだったのでございます。お心のうちに湧いている興味を、それが、ご自分の身を働かせなければならぬかかわりあいに至るまでは、決して、口にも態度にもしめそうとはなさいませぬ。
は、
鳥居の前を行きすぎる際、ふと、おもらしなされたのは、
「薬屋。神様も、人間の通る街道に遠慮する世の中だ。女が、男の格好をしても、咎めるにはあたるまい」
とのお言葉でございました。
ご存じでもございましょうが、谷保天満宮は、街道の南側にありまして、鳥居をくぐって、丘陵を下り、側面より社殿の前に出るようになって居ります。社殿は南向き、鳥居は北向き——まことに、奇妙なかたちでございます。つまり、甲州街道をつくるために、入口を北方に設けたためでございましたろう。
ご浪人さんは、それに対する皮肉を仰言ったわけでございます。
一町ばかりさきに、うす穢い立場茶屋がありまして、ご浪人さんは、手造り酒を所望なさいました。てまえは、下戸でございますので、黄粉団子を取って、ひと皿たいらげた頃、その旅にんが、近づいて来て、床几に腰を下したのでございます。旅にんが、鳥居をくぐって行くのを見とどけていたてまえは、なんとなく、参詣を終えたなら、この茶屋へ寄るような気がいたして居りました。
笠こそとりませんでしたが、いかにもやくざらしい身

「兄さん、おききの通り、このご浪人さんは、果し合いは苦手だと申されて居ります。……てまえは、どうも、稼業柄、いつも愛想笑いをつくるくせがございますので、お気にさわったら、幾重にもお詫びいたします。ごかんべん下さいまし」
と、平あやまりにあやまったのでございます。内心のおかしさを顔に出すまいと、これが、ひと苦労でございました。

二

それから、てまえが、茶屋の婆さんに、酒を持って来させて、
「おひとつ、お近づきのしるしに――」
とすすめますと、旅にんは、ちょっとためらって居りましたが、これも修業のうちだと肚をきめたものか、黙って、茶碗を受けとって、ひと息に、ぐうっと飲み干してみせたのには、かえって、こちらが、大丈夫かな、と気づかったことでございました。
ふうっ、と熱い息を吐き出した旅にんは、きいた風に胸をはって、
「おい、さむれえ。おめえさんは、まさかあっしを、虚仮にしようとしているんじゃあるめえな」

ごなしよろしく、片脚をあげて、一方の膝へひきつけると、てまえと同じく、黄粉団子を取って、食べはじめました。ところで、ものを食べるしぐさは、やはりどうしても女になってしまいます。それが、微笑ましく、思わず、てまえが、目を細めますと、
「やい！　なにが、おかしい！」
と、いきなり、くってかかって参りましたのには、おどろきました。
てまえが、首をすくめますと、代って、ご浪人さんが、大真面目なお顔つきで、
「べつに、おかしくはない。結構ないでたちだ」と、仰言いました。
「なにおっ！」
つッ立ちあがった旅にんは、痩浪人などになめられてたまるか、と甲高く叫んで、むこうの梅林へ来やがれ、と眉をそびやかしてみせました。
ご浪人さんは、てまえにむかって、首をおふりになり、
「薬屋。この兄さんは、どうやら、刀を抜く修業ができているらしい。おれは、到底かないそうもないな」
「へえ――」
てまえも、せいぜい当惑の面持をつくりまして、



と、笠の下から、猫のように、よく光る視線を送って来ました。

ご浪人さんの冷たく冴えたお顔や、おちつきはらったご様子は、誰がどう見ても、二度や三度は、人を斬っているに相違ないと想像できるものでございました。

「そうだな、三年前なら、莫迦にもしたろうが――」

「いまなら、どうだ、とぬかしゃがるんでえ?」

「なさけないことに、おれは、江戸っ子でな、年中薄着で、熱湯好きがたたって、よいよいになった」

「よいよいたアなんでえ?」

「松平、稲荷、伊勢屋に瘡(かさ)っかき、よいよい、よろけた、吉原俄(にわか)、和唐紙、いさみ、居候、張子の松茸、犬の糞――これが、当今の江戸の名物ということになって居る」

そう仰言って、ご浪人さんが、両手を幽霊の手つきよろしく、さし出して、ぶらんぶらん、と振っておみせになりました。

「ちょっ、埒もねえや」

旅にんは、それでも、ご浪人さんのしぐさが可笑しかったか、険しい気色をおさめると、酔いがからだをめぐったらしく、あくびをひとつ もらしました。その様子が、いかにも、あどけなく、無心げなので、てまえは、笑い声をさそわれかけて、あわてて、目をそらさなければなりませんでした。

その直後のことでございました。

街道を、土煙りをまきあげて、とばして来る一騎があり、ちょうど茶屋の前まで荷車を曳いて来ていた百姓の爺さんが、あわてて、避けようとしたはずみに足をふみすべらせて、膝をついたところを、

「たわけ! 邪魔だっ!」

叱咤とともに、びゅっと、鞭くれて、駆け去る 光景が、起ったのでございます。

まだ二十歳を出たばかりとみえる若ざむらいの横暴ぶりでございました。

まっこうから、鞭をくらった爺さんは、悲鳴とともに、両手で顔を掩うて、のけぞるや、梶棒へ凭りかかって、動かなくなりました。

「畜生っ! ひでえことをしやがる」

旅にんは、いそいで、とび出して行って、爺さんをかかえおこすと、茶屋の中へつれ込みました。

てまえは、近よってみて、片目は完全につぶれるだろうと思いましたが、ともかく、薬をとり出して、手当をしてやりました。茶屋の婆さんが、

「あれは、府中のお代官の次男坊でしてのう、手のつけられぬ乱暴者じゃから、泣き寝入りするよりほかはあるまいがな」

と云うのをきいて、旅にんは、憤然として、

「くそっ! 代官がなんでえ!」

と、口走りました。

すると、すかさず、ご浪人さんが、

「おい、兄(あん)さん、次男坊が、もどって来るぜ」

と、けしかけるように仰言いました。

「よおし! みてろ!」

旅にんは、いきなり、街道のまん中へとび出るや、ぎらっと長脇差を、ひき抜きました。婆さんが、あわてて、とめましたが、きくものではありませぬ。酔いも手つだった血気でございましたろう。

やがて、蹄の音が、急がしく近づいて来るや、旅にんは、白刃をまっすぐに突き出して、

「野郎っ!」

と、叫びました。

その身がまえが、必死であればあるだけ、こちらの目には、いじらしいものに映っているのでございました。

ご浪人さんが、どう処置なさるか――てまえの興味は、そのことにかかって居りましたので、注意して居りますと、足もとの石ころを、ふたつばかりひろい取られました。

傍若無人の勢いで、馬をとばして来た若ざむらいは、前に、白刃をかまえたやくざ者をみとめるや、何か大声で怒号をほとばしらせましたが、歩速を緩めようとしないばかりか、いきなり、おのれも、抜刀いたしました。

瞬間、旅にんは、笠のかげの顔から、道路の土よりも白く、血の気をひかせたとみるや、けだもののように吼えて、まっしぐらに突きかかって行きました。

無謀も甚だしい振舞いでございました。

若ざむらいは、よほど馬責めの術に長(た)けているとみえ、あがきをそのままに、巧みに手綱をさばいて、旅にんの猪突を躱しざまに、斬りすてようとする余裕を、残忍な笑みで予告いたしました。

あっという間に、走る人馬の距離がちぢまった刹那、てまえのかたわらで、ご浪人さんの右手が、ぱっとおどりました。

流れ星のように宙を切った飛礫が、若ざむらいのどこへ当ったのか、目にもとまりませんでしたが、叫喚とともにのけぞった乗手に、馬もまた狂おしくいないて、棹立ちになった――その下腹めがけて、旅にんの盲突きの切尖が、ぶすっと刺し込まれたのでございます。

馬もろとも、とり入れを待つ黄金色の稲田の中へ、ど

おっと転倒した若ざむらいは、それきり、昏倒したものか、起き上っては参りませぬ。
「ざ、ざまアみやがれ」
　肩を喘がせつつ、罵りすてた旅にんのすがたは、颯爽とは、お世辞にも申されませんでしたが、当人は、じぶん一人の力でやっつけた誇りで、興奮しきって居ります。
　ご浪人さんが、つと、路上に出てお行きになりますと、旅にんは、どうだ見たか、とばかり、肩をそびやかしました。
　ご浪人さんは、何も仰言らずに、ふところ手で、すたすたと、歩き出されて居りました。
　追って出たてまえが、
「早いところ、消えようじゃございませんか」
　と、促しますと、旅にんは、
「あわてるねえ。代官が怕くて、博奕打になれるけえ」
　と、いったんは強がってみせたものの、急に不安が来たらしく、あわてて、白刃を腰におさめて、てまえと肩をならべて居りました。

三

　こうしたことで、その旅にんと道連れになったのでございますが、いま申上げた無謀な振舞いでもおわかりのように、まことにきかぬ気の面白い娘でございました。
　道みち、ご浪人さんのお訊ねにこたえたのによりますれば、ふかい仔細があって、そうして男のなりをしているわけではございませんでした。
　江戸しかご存じない貴方様は、助郷ということをご存じではございますまい。まず、それをご説明申上げましょう。お大名の参覲交替の季節が、春と秋の三カ月でございますことは、勿論ご承知の筈。つまり、収穫どきにあたります。この時に、道中の宿駅では、お大名行列のために、助郷と申しまして、宿駅のまわり一里乃至は二里の村々から、人馬を徴発いたすのでございますが、これも、近年にいたりましては、五里以上十里も遠くにある村々にまで、助けをもとめるようになって居ります。
　これを、代助郷と申しまして、お大名道中は、これほどたくさんの人馬を必要とするのでございます。
　百姓と申すものは、「生かさず、殺さず」に治められるようにさだめられて居るときききおよびますが、まさしく、その通りでございまして、こんなむごい課役を、農繁期に、仰せつけられては、たまったものではございませぬ。
　代助郷となりますと、十里の遠方から参るのでございますから、一日のお役目に、往復三日もかかるしまつで、猫の手も借りたい時節に、これは、泣き面に蜂でございます。さりとて、わが身のかわりに、問屋場で、雲助をたのんでもらうとなると、足もとを見込まれて、人一人につき、七百文、馬一匹につき一貫文という法外な金を支払わさせられます。勿論、問屋場では、その金のせいぜい四割あたりで、雲助を雇い、あとは、宿役人と折半いたしてしまいます。
　こういう惨めな助郷の掟に苦しめられて、村々には、かぞえきれぬあわれな話が起って居ります。娘を売りとばす、口べらしに年寄がくびをくくる、夫婦別れ、夜逃げなど、これが飢饉のためならまだしもあきらめもつくことでございましょうが、ただ、お大名が、お国許と江戸を往復なさるための犠牲でございますから、全く、やりきれたものではございませぬ。
　その旅にん――おりょうと申しましたが――の村も、代助郷のために、百年あまりのあいだに、百五十軒もあった家が七十軒に減り、田圃も、本高八百石、新高三百石のところ、たがやすのが二十余町になってしまったと申します。人口は、男女あわせて三百人、そのうち、五十人の壮丁が、伝馬すなわち助郷をつとめるために、毎日宿駅につめきり同様となってしまったのでございますから、そのあわれさは、想像にあまりがございます。もともと、高千石の村には、平均八百人が住んでいなければ、稲作はやれませぬ。それが、五百人も足らないとなると、一人の肩にかかる重荷は言葉にもなにもなりますまい。ましてや、そのうちから、五十人の働き盛りが、取られてしまって居るのでございますから、気が狂わぬ方がどうかして居りますよ。
　課役を勤めるのが不服ならば、金を出さねばならず、人夫の勤め高は、一カ年のべ一万四千人、馬四百匹の勘定になれば、千両という算盤に相成ります。瘦せ村から、とうてい、こんな大金が出せるものではございませぬ。その上に、村内の潰家八十軒と、荒蕪地となった三十町あまりの田圃に課せられた賦役が、のこり七十軒の家にのしかかって参るのでありますから、ついに、むしろ旗をたてて、一揆を起したのも、当然でございます。
　一揆は、宿駅の問屋場を襲って、親方連を一人のこらず、ぶち殺して、金を奪い、主立った者たちは、その足で、道中奉行様へ名のり出て、嘆願書をさし出した由にございます。しかし、結果は、嘆願書は取下げられ、一行十七名は、磔の刑に処せられたのでございました。
　おりょうは、むしろ旗を立てた時に、男支度になり、問屋場を襲った時には、先頭に立って、おどり込んで行

き、親方の一人と雲助二人を、斬ったと申します。そして、その時から、女をすてて、旅博奕打になる決意をしたのだそうでございます。

小意気なあかるいお話を――と申上げ乍ら、悲憤めいた口をききまして申しわけございませぬ。しかし、これは、嘘いつわりのない事実でございますので、百姓の次、三男が、ぐれて、やくざになる者が、近年増して参りましたのも、決して、汗みずくの土仕事をきらって、賽の目に運をまかす長脇差の威勢よさにあこがれる不所存ばかりではないと弁解してやりたくもなるのでございます。

ともあれ――。

おりょうが、ひとっぱしの凶状持ちの心組みで、旅博奕打になってから、実は、その初旅早々を、こちらは、ぶつかったわけでございました。

で――その後、府中番場宿の、神戸の茂兵衛という親分の家で開かれた賭場へ乗り込んで行きましたのも、おりょうにすれば、渡世封切といえたのでございます。

もとより、それは、こちらが、ちらと見やぶったことで、おりょうの方では、さも年季を入れた口ぶりで、

「おめえたちも、ついて来るか」

と云い出したのには、あやうく、噴飯すところでございました。

ご浪人さんの方が、きわめてまじめなお顔つきで、

「こんどは、賭場荒しの鮮かなところを見せてもらえるのか。有難いな。博奕のやりかたを、本職に教えてもらいたいと思っていたところだ」

と、仰言いましたのも、てまえに、あとで、思い出し笑いをさせたことでございます。

その夜の賭場に集まったのは、無職渡世人と問屋場の兄哥たちで、素人衆は一人も交って居りませんでした。

当然、おりょうなどの歯のたつ筈もなく、半刻たたないうちに、すってんてんになってしまいました。度胸だけがありあまって、大きく張りつづけたのが、あやまりでございました。

うしろで見物していたご浪人さんとてまえには、そうなることは、旅籠を出る時からわかって居りましたし、一文無しになって、おりょうがどうするだろうと、それを見とどける肚だったのでございます。

「ちえっ！　くそ！　今夜は、目が出ねえや」

いまいましげに、おりょうが吐き出したおり、

「お若えの――」

と、声をかけたのは、貸元の神戸の茂兵衛でございました。

「つづけてやりたけりゃ、貸すぜ」

「有難てえ。五両ばかり――」

「なアに、十両はずもう」

「へえ――」

「ただし、おめえさんの着物を、抵当にしてもらおう」

申上げるまでもなく、男のなりをしたおりょうが、賭場に入ったとたんに、好奇の注視を受けたのは、当然のことでございまして、ただ、当人が、怖めも臆せもせずに、渡世人として振舞う以上、誰も、からかう余地はなかったのでございます。

貸元が、いきなり、そう云い出したので、連中は、あらためて、好奇の目を、おりょうにあつめたのでございました。

――あまり、たちのよくない親分だな。

てまえが、そう心で呟き乍ら、ちらと、ご浪人さんを見やりますと、何をお考えになったか、すっと立って、賭場を出て行こうとなさるではございませんか。

てまえが、不審の視線で追いますと、ご浪人さんは、廊下へ出がけに、振りかえられて、――お前は、そこで、見とどけて来い、と目くばせなさいました。

四

「は、はっくしょん！」

大きなくさめをして、ぶるっと身顫いするおりょうの裸すがたが、常夜灯のあかりに浮き出て、おかしいやら、あわれっぽいやらで、てまえが、自分の着物を脱いでやろうといたしますと、

「要らねえ」

と、つッぱねました。よほど、強情な気質をもって生れたものとみえます。

「ここから、宿屋までは、明るい通りになりますよ」

「かまわねえ」

なるほど、胸まで、白い晒をきりりと巻きつけては居りますが、肩や脚の、ふっくらとした、肌理こまかな柔肉は、未通女のものであるのをかくすすべもありませぬ。

ここ――闇祭で有名な六所明神の境内を過ぎれば、まだ四つ刻まえの往来は、店の檐の灯を流していて、人影もかなりあるのでございます。

――勝手にするがいい。

匙をなげて、ならんで、随身門の横へ出て鳥居へむかいました。

ちょうど、一町半あまりの参詣道は、左右に、二抱えも三抱えもある松と杉の巨樹が、欝蒼とたちならんで居りまして、深い山ふところに入った観がございます。梢

には、鷺や鴉が棲みついていて、烈しく羽音をたてて、もの寂しさを不気味にいたします。
　ちょうど、鳥居をくぐろうとしたとたんでございました。
　いきなり、ばらばらっ、と物陰からとび出して来た四、五人に、前後をふさがれて、
「な、なんでえ、てめえら——」
　おりょうは、負けぬ気で、身がまえました。てまえは、こうなることがあらかじめわかっていた要心ぶかさで、すばやく、森の中へかけ込みました。
　常夜灯に照らされた其奴らが、神戸の茂兵衛の乾分たちであることは、その身なりであきらかでございました。てまえに、あらかじめわかって居りましたのは、おりょうが、賭場で、威勢よく、ぱっと着物を脱ぎすてた時、茂兵衛のあから顔が、意味ありげににたりとしたのをぬすみ見ていたからでございます。おりょうの裸を品さだめしたからには、ただでは、すまなかったわけでございます。
　乾分どもは、いずれも、手に、太竹や丸太棒を掴んで居りました。
「おいらを、どうしようと云やがるんでえ！」
　おりょうは、腰にぶちこんだ長脇差へ手をかけて、叫びました。
「おめえの度胸っぷりが、親分のお気に召したとよう。おとなしく、おれたちについて来ねえな。姐御にして、あがめたてまつることになるんだぜ」
「うるせえやっ！」
　抜き打ちに、一人へあびせかけましたが、軽く、棒でふりはらわれて、たたらをふみ、あとは、無我夢中で、滅多矢鱈に、白刃をふりまわすばかりでございました。
　袋の鼠を弄ぶように、さんざん、踊り狂わせておいて、へたばったところを、ぎゅっとおさえつける寸法でございましたろう。
　ところが——。
　奇妙なことが起ったのでございます。
「あっ！」
　おりょうの正面から、棒で、股すくいをしかけようとした一人が、突然、どうしたわけか、さも、斬ってくれ、といわんばかりに、前のめりに、首をひょいとつき出したではございませんか。
「こん畜生っ！」
　おりょうは、思いきりの力で、其奴の脳天へ、刀をふりおろしました。
　なにかにつまずいた不覚だ、と——これは、斬った当

人にも敵がたにも思えたに相違ありませぬ。が、——つづいて、また一人、横あいから、おりょうの前へ、どどっと泳ぎ出たのには、あっとなりましたろう。
　勿論、おりょうが、容赦をする筈がございません。
　目の前へさらされた背中を、ざくっと割りつけておいて、血ぶるいすると、
「来やがれ！」
　と、のこり二人へ向かい立った裸身は、なかなかの武者ぶりでございました。
　さすがに、乾分たちは、ちょっと茫然のていでございましたが、たちまち事態の意外さに、かっと逆上して、
「このあまっ！」
「くそっ！」
　と、悪鬼のように躍りかかってゆきました。
　しかし——。
　いずれも、あわや棒を打ちおろそうとした瞬間におりょうの前へ、他愛なくつんのめって、一太刀あびる運命に遭ったのでございました。
　四人を斬ったおりょうは、へたへたと、その場へしりもちをつくと、はっはっはっと、見栄もなく、ふいごのように喘いだことでございます。
「薬屋。たすけて、宿屋へつれて帰ってやれ」
　樹陰で、てまえにささやかれたのは、ご浪人さんでございました。
　いつの間にか、此処に忍んでおいでになって、分銅を結びつけた細引を投げて、乾分たちの足を片はしから掬われたのでございます。
　ご浪人さんは、それから、また、何処かへ姿をお消しになって、旅籠へおもどりになったのは、九つ過ぎでございました。
　翌朝、おりょうが座をはずしたすきに、ご浪人さんは、てまえの膝の前へ、どさっと、金包みを抛り出されました。
「すまないが、おりょうの村まで行って来てくれぬか。その金を、おりょうから、ことづかったと云ってな——」
　把りあげてみると、四、五百両はある重さでございました。神戸の茂兵衛からまきあげた金に相違ございませぬ。
「かしこまりました。……旦那は、おりょうさんをおつれになりますか？」
「うむ。……気がむいたら、女にしてやるかも知れぬ」
　そう仰言って、冷たくお笑いになったお顔が、いままでも忘れられませぬ。

毒と虚無僧

一

菊香晩節、梅は小春に応ず、また斗杓北を指して日影南に回る、などこの月を云いしなり。四方山の紅葉は唐紅を染出し、鹿は初音を鳴く。山路、会式桜の花やさしく咲く小春日和の麗かさ、閑寂々たる茶室には、二、三客、口切の味淡泊にして、月末になるより初しぐれ催し、日脚短きをいぶかる。居職人の夜なべ追々さむさますにしたがい、昼夜火災の数のしげくなるは、江戸の名物というもおかしけれ。

……なんとなく、街々が、淡い晩秋の翳につつまれて、お十夜やら御命講やら恵比須講やら、へんに賑わいも抹香臭くなる――四序のうちでも、いちばん静かな季節。

床屋や湯屋の二階や自身番などに、ひまつぶしの連中の集まりが絶えなくなる。

ここ――深川の、仙台堀に沿うた今川町の、とある床屋の店先にも、四、五人の若い衆が、将棋盤をとりかこんで、さかんにへらず口をたたいていた。

さし手の一人は、金八であった。

あまり形勢はよろしくない。

「逢いはしなんだが、横町の角で、縞の着物に菱の紋――か。へへへ、王手うれしい二人の仲は、ときやした」

「その手でいきなりつまみ食い、とは、どっこい、歩の餌食だ」

「おっと、兄貴、二歩だぜ。貞女、二歩にまみえず、ってな、おれの嬶が口ぐせにしてらあ」

「そのかわり、亭主が生きているうちに、ちょいちょい、近所の若いもんをくわえこんでやがるだろ。あんまり亭主が歩甲斐ねえ、てんでな。角なり果つるも、身の因果たア、どうだ？」

「ちょっ――そこに、飛車がいやがったか」

「毘沙門は、弁財天の防ぎなり」

「よおし！……ここへ、こんどは、ピシャリと――金、金、金の金時が、熊をふまえて、まさかり持って、とくらあ。勝負じゃ勝負、花菖蒲、いとど色ます、紫の、恋という字に、身を堀切の、水に任せているわいな。どうでも、しゃあがれ、てんだ」

「ふうん！」

金八は、あごをなでていたが、桂馬を、パチリと打って、

「桂馬をとめて、駒とめてだ、袖うち払う影もなき、佐野のわたりの雪ならで、と――アレ櫺子にも六つの花、たとえにも云う銀世界。銀だぞ、銀が、こう降って来て――羽織をかくすも初手のうち、可愛いや、よっぽど、つまったか」

このおり――。

おもてを、酔っぱらった職人が、大声で唄い乍ら、ひょろひょろとやって来た。

「……あだな深川、いなせは神田、愚痴はぶつぶつ飯田町、ときやがらあ。こん畜生っ！　なんでえ、べらんめえ――」

一人が、油障子から、のぞいて、

「おう、政の野郎、また飯田町の賭場で、まきあげられやがったらしい」

「てっへんだ、つかいはたして二歩のこりか」

「さしかかったる王手門」

「こっちは、櫓をきずいて、籠城といくか」

「そうはさせじと、櫓落しの香車突きだあ」

往来では、政がよろついたとたん、むこうからやって来た紋服の武士に、どんと、ぶつかっていた。

「とととっ――やいっ、なんでえ。どうしょうってんでえ。家を出がけに嬶に云われて来たんだぞ。わしが亭主にゃ愛想がつきる。酒が過ぎると管をまく、出ると喧嘩か色狂い。やるか、やるか、やるか！」

「政、よせ！」

くるっと尻をまくって、政は、すごんでみせた。

二人ばかりが、とび出して行って、政を抱きとめた。

武士は、鋭い目つきで、政を睨みつけていたが、急に何を思ったか、破顔した。

「いいご機嫌だな。祝儀を出すから、そこで、かっぽれでもやってもらおうか。今日は、目出度い日なのでな」

大様に、小銭を地べたへ投げおいて、連れを促すと、すれちがって行った。

連れは、これもまた黒羽二重の紋付をつけた、当世風の、のっぺりとした若い男であった。

将棋の駒を握って、戸口まで出て来た金八が、その二人を見送って、

――はてな？

と、怪訝そうに小首をかしげた。

「あの野郎、たしか牛込の無量寺門前で、ぼろ道場を開いていやがった増子市之丞じゃねえか？」

三年ばかり前のことである。

金八が加わっていた掏摸組黒元結連の腕ききの一人が、両国の川開きで、裕福そうな町人の懐中をすりとったとたん、一人の武士に発見され、有無を云わせず、手首をへし折られたことがあった。

とびかかって行った仲間は、あっけなく、隅田川へ、抛り込まれていた。

それが、牛込無量寺門前で、町道場をひらいている増子市之丞という浪人とわかって、黒元結連は、復讐をあきらめたのであった。

腕は立つが、おそろしく短気で、稽古に手加減くわえぬために、門前雀羅を張っているという噂であった。事実、それから半年ばかり経って、道場を閉めて、何処かへ消えてしまった、ときいた。

意外にも、尾羽打枯らすどころか、立派な身なりをととのえて、しかも、なんのための発心か、酒徒の暴言をゆるして、小銭までめぐんでみせたのである。

――へっ、変れば変る唐国鳥か。

金八は、しきりに、首をふった。

二

増子市之丞とその連れが、やがて、入って行ったのは、小名木川沿いの、海辺大工町に、豪勢な店構えを誇っている宇野屋であった。

造船問屋といっても、ただの船づくりとはちがい、神田川、竪川通、その他の川筋の茶船持ちと艀下宿仲間の総元締であった。

もともと、この船乗組合は、独立したものであったのを、小名木川開鑿とともに、北武蔵、常陸、下野、上総、下総などの、いわゆる「奥川筋」から江戸へ搬入する物資を、茶船で江戸市中へ配達する多忙な需要が生じたのを機会に、官船安宅丸を繋留している御舟蔵の御用をつとめる宇野屋が、その総元締を命じられたのである。

いわば、競争者のない半官半民的な商売だけに、一代を経ずして、深川屈指の分限者にのしあがってしまったのである。

のみならず、永代島の牡蠣殻を焼いて蠣灰をつくる工場経営も、建築盛んな当世、ますます規模を大きくしていて、宇野屋の身代は、ふくれあがるばかりであった。

大店のつねで、増子市之丞と連れを迎えた店さきは、それきり、しばらく、ひっそりと静かで、人の気配も絶えていた。

と――。

うすよごれた鼠色の無紋服をつけた一人の虚無僧が、

忍び寄るように、店さきに立つと、尺八を口にあてた。

三衣袋をくびにかけ、前巻結びの帯の背に尺八の空嚢を挾み、五枚重ねの草履をはいたいでたちは、京阪のものだった。江戸では、三衣袋をかけず、空嚢も挾まず、黒漆の下駄をはくのを常としていたのである。

江戸で流す虚無僧は、普通、市民の富者あるいは武家の蕩郎の道楽が多く、女用の緋ぢりめんの長襦袢に、藍の羽二重の、裾ふき多く綿厚い衣服をまとって、贅をつくしていたものである。したがって、施米施銭を納める三衣袋など、くびにかける必要はなかった。

いわば、虚無僧といっても、二種類いたわけである。

この虚無僧は、天蓋に、旅の塵を積んでいた。

喨々たる調べが、しばらく、つづいた。

やがて、小僧が出て来て、

「御無用――」

と、ことわっておいて、すぐ、引込んだ。

だが、虚無僧は、そのまま、いつまでも、吹き鳴らしつづけて、いっかな立ち去る気色もなかった。

「今日は、五荷五種の入った日だから、虚無僧さんにも喜捨してあげな」

番頭らしい声が、奥からきこえた。

五荷五種（柳樽、昆布、鯣、鯛、鮑、鰹魚節）は、結納の品である。小袖（紅白二領）と帯に添えて、女の家へ納められる。

どうやら、増子市之丞がともなった若い男が、花婿とみえた。

女中が、下駄を鳴らして小走りにあらわれると、

「はい」

と、白い紙にひねった小銭を渡して、さっさと踵をまわした。

「あいや――卒爾乍ら」

虚無僧は、静かな声音で、呼びとめた。

ふりかえった女中へ、

「この家には、凶相がある。御用心なされい」

もの穏かに、しかし今日の目出度い縁組みに水をあびせる不吉な言葉を投げたのである。

女中は、目をいからせて、

「よしとくれ！　縁起でもない。塩をまくよっ！」

と、かみつくように叫んだ。

「あとで、悔やまれても、追いつかぬ故に、あらかじめ御忠告申上げておくのです。本日の飲食物には、特に気をつけられるがよい」

そう云いのこして、やおら、はなれて行った。

「ふん、いやにもったいぶって、脅しつけてさ。お前さ

んの方が、よっぽど、怪しいや」
女中は、大急ぎで、塩をもって来て、ふりまいた。
それから、ちょっと、迷っていたが、胸におさめて置けずに、奥へ入って、大番頭へ耳うちした。
大番頭は、あわてて、女中をたしなめて、自分の耳までにとどめておいた。

三

竹になりたや、しちく竹
元は尺八、中が笛
末はそもじの筆の軸
思いまいらせ候かしく
てな文(ふみ)もろうて
さて、顔見れば
性根曲りの節だらけ

陽気な唄声とともに、金八が、常磐津文字若の家の格子を開けた。
「師匠、あがるぜ」
と、声をかけたが、しいんとしている。
そっと上って、唐紙の隙間から、茶の間を覗いて、
「へっ、まろび寝の、と来やしたね。裾もみだれて、かくれないに、深山紅葉(みやまもみじ)の、散り散らず――」
文字若が、長火鉢の脇に、手枕で、うたた寝をしていたのである。
「えっへん」
向かい側へ坐って、金八は、咳ばらいした。
うす目をひらいた文字若は、くるっとむこう向きになってしまった。
「起きねえな、師匠」
「ほっといておくれ」
「味なことからつい惚れ過ぎて、そこの神さん仏さん、パン、パン、と――」
柏手を打って、
「願をかけたに、主は来ず、やけ酒のんで、じれ伏して――」
「主は、ちゃあんと二階に来ていらあ」
「おっ、先生、江戸御帰参かい？」
「それさ。美保代さまをすてて、どこをうろつきまわっていなすったんです、と目くじらたてて、かみついたら、憎いやね、よけいな気をまわさずに、お前も、待ちこがれる主をつくったらどうだとさ」
「淀の車は水ゆえまわる、わたしゃ悋気(りんき)で気がまわる」
「なんだって！ 金的、てめえまでも――」
茶碗がとんで来たのを、ひょいとかわして、金八は、



階段をかけのぼって行った。
眠狂四郎もまた、そこに、肱枕で、寝そべっていた。
「お帰んなさいまし」
ぺこんと頭を下げてから、
「先生、早速乍ら、突然乍ら――宇野屋の親爺が、目を落しましたぜ」
「宇野屋が死んだか？」
むっくり起き上った狂四郎は、風邪ひとつひいたことのないのを常々の自慢にしていた懇意な大町人の、恰幅のいい姿を思い泛べた。
「どういうのだ？」
「殺されたんでさあ、毒菓子で――」
金八は、三日前の出来事を、つたえた。
増子市之丞が、花婿の与吉という若者をつれて、宇野屋へのり込み、結納の儀も滞りなく済んでから、離れの茶席に移り――そこで、事件が起った。
永代寺門前の長崎屋からとどいたカステラを食べ乍ら、なごやかな歓談が、小半刻つづいたのち、まず最初に、突如、胸をおさえて、苦悶しはじめたのが、花婿の与吉であった。つづいて、主人の宇野屋数右衛門、増子市之丞、花嫁お静、母親お千加の順序で、一瞬にして、離れは、地獄図絵と化したのであった。
「で――とどのつまり、あの世へ、鞍替えしたのは、宇野屋ひとりで、あとは、どうやら助かりやしたが、まだ、一人も起きあがれねえんでさ」
「どうして、毒殺とわかる？　カステラの中に、石見銀山でも入っていたか？」
「石見銀山だか、なんだか――ともかく、犬に食わせたら、ころりと参ったそうですから、毒が入っていたにちげえねえ」
「カステラを、長崎屋に注文したのは何者だ？」
「三河屋の者だ、とぬかしたそうです。ねえ、先生、三河屋なんざ、東照権現さんの江戸入りに、駿河から、金魚のうんちみてえに、ゾロゾロくっついて来やがったんだから、江戸中に、掃いて捨てる程何百軒もありまさあ。どだい、そいつが臭えんだ」
「お前にしては、慧眼だな」
「鶏眼はこれ魚の目とくらあ。そいつが、あしのうらに出来る程、あっしは、下手人をとっつかまえてやろうと、この三日間、かけずりまわりやしたぜ」
「なぜ、かけずりまわった？」
「それがね……その日、上方装の虚無僧が、宇野屋の門口に立って、この家に凶相がある。特に食いものに気をつけろ、と下女に告げたときき込んだんでさ」

狂四郎は、腕を組んで、しばらく考えていたが、
「増子市之丞というのは、牛込無量寺門前で道場をひらいていた男だったな」
「そのことでさ。奴は、いつの間にか、永代橋ぎわの舟宿の用心棒になっていやがったんでさ」
その舟宿の息子が与吉であった。今年仲秋十五夜、富ケ岡八幡宮の祭礼に、境内に設けられた舞台で、娘たちの手踊と若い衆の神楽囃子が催された。その時、お静と与吉は知合って、お互いに心を寄せるようになったという。
「先生、いっちょう、下手人をとっつかまえておくんなさいますか？」
「気が向けばだな」
「あっしが、虚無僧野郎の居処を、屹度つきとめてみせまさあ」
「べつに、その必要はなかろう」
「へえ？」
「餌が欲しければ、必ず、穴から出て来る。いぶすことはあるまい」

四

深夜――。
うろこ雲を縫って、十三夜の月が足早やに流れ、明暗の場所を移しかえている地上の大気は、かわいて、冷えて、なんとなく、おちつかぬ静寂に、街はつつまれていた。
宇野屋の、溜堀に面した裏手の小路を、黒板塀に影を吸わせて、跫音もなく歩いて来た者があった。
例の虚無僧であった。
急に、足を停めたのは、見越しの松の下であった。
手鈎のついた細引を、ひょーっと投げて、ぴいんとひきしぼった。
よしとはかかって、片足を、塀板へかけた――とたん、
「おい」
と、声が、かかった。
悸っとなって振り向くと、黒の着流しの、ふところ手の孤影が、地から湧き出たように、二間さきに佇んでいた。
天蓋をはねとばして、敵意をあふらせた――その身がまえを、じっと、透かし見て、狂四郎は、
――なんだ、これは……。
と、あきれた。
まるで、だらしのない、隙だらけなのだ。無職者の度胸剣法にも劣る。

「毒カステラをこの家に贈ったのは、おぬしか？」
いきなり、ずばりと訊ねた。
「ち、ちがう！」
「では、どうして、毒カステラが贈られるとわかった？」
「それは……」
ひりひりに乾ききった、咽喉をしぼって、何かこたえようとして、虚無僧の胸は夜目にも荒い喘ぎをしめした。
狂四郎が、こたえを待たずに、ずいと一歩出ると、瞬間、虚無僧は、つきとばされたように、身をひるがえした。
その逃走ぶりは、恐怖の死にもの狂いといえた。
もとより、狂四郎に捕えられぬわけではなかったが、おのが生命をまもろうとする本能的な悲惨を曝す者に対しては、ふしぎに寛大になるのが、この男の性分であった。
狂四郎は、ゆっくりと、塀へ寄って、虚無僧が、掛け垂らした細引をつかむと、身軽く、わが身をつりあげて、ひらりと、音もなく屋敷内へ、跳び降りた。
まず目についたのは、稲荷の祠で、延壇に、かぞえきれぬくらいたくさんの鳥居がたちならんでいた。
——千両箱がひとつふえる毎に、鳥居をつくった、ときいていたがご利益はなかったらしい。
苦笑しつつ、狂四郎は、すたすたと延壇を行き過ぎて行った。
いくばくもなくして、狂四郎が、忍び入ったのは、母屋を渡り廊下でつなぐ離れの、ふみこみであった。
壁に、下地窓が切ってあり、掛障子に小穴をあけて、窺うと——。
緞子の夜具が、こんもりと盛りあがり、結綿をがっくりと仰のけて睡る白い顔が、なかば、そのかげからのぞいていた。
有明行燈の赤いあかりに彩られ乍らも、その肌のやつれが、一瞥でわかる。ただ、甚だ奇異な印象を受けたのは、その唇に、くっきりと、紅が施されていることだった。その色だけが、品のいい顔だちから遊離して、妙に、淫靡なものとして浮きあがっていた。
お静というこの娘だけが、ひとりはなれて、この部屋に寝ていることは、金八が、この家の下婢から、きき出していたのである。
べつになんでもなさそうなその事実が、狂四郎をして、ふと、ある疑惑を抱かせたのである。
——じぶんの意志というものを持たなそうな娘だが……。

そう胸で呟きすてたおり、渡り廊下を忍んで来る跫音がした。
その者が、ふみこみに入って来るや、すでに、そこから狂四郎の姿は、消えていた。
与吉であった。
そーっと、襖をひらいて、部屋に入った与吉は、枕元に寄って、掛具へ手をかけると、
「お静さん——」
と、ゆさぶった。
与吉の表情も、異常にこわばっていたが、目蓋をひらいたお静の顔も、一瞬、名状しがたい当惑の色を滲ませた。
「お静さん！　わたしたちの仲は、あ、あんなことで、だめになる程、いい加減なものじゃない！」
「…………」
「ね？　わかっておくれ！　わたしとおまえは、八幡様に誓ったんだ！……一緒になれなけりゃ、死、死ぬと——」
「…………」
「どうしたんだ？　なぜ、返辞をしないんだ？……お静さん！　逃げよう！　一緒に逃げよう！　こ、このまま、この家にいるのは、あぶないんだ！　わ、わたしは、知っているんだ！　み、みんな知っているんだ！」
与吉は、かきくどいているうちに、我慢ならなくなったか、お静をひき起して、抱きすくめた。
「や、やめて……」
お静は、悲しげに、もがいたが、それは弱々しく、与吉の腕に、ぐったりと身をまかせて、顔だけを、そむけた。
「逃げるんだ！　な、わかってくれ！　逃げなくちゃ、いけないんだ！　そ、それが、一番いい方法なんだ！　いいや、そ、それ以外に、ほかに手段はないんだよ。……お静さん、おまえだって、ちゃんと、気がついている筈だ。……こ、こんどは、おまえが、殺される番だぞ！」
お静は、そうささやかれると、冷水をあびたように、与吉の腕の中で、びくびくっと痙攣すると、のがれるように、もがいた。
「お静さん！　味方は、わたしだけなんだぞ！」
狂おしく叫んだ与吉は、ねじまげられたお静の首を、むりやり向きかえさせると、はげしく忌避しようとするのをおさえつけて、ついに、その朱唇へ、自分の唇をあわせた。
「むっ……む、む、むっ……」
なおも、堪えがたそうに、拒もうとしていたお静は、

与吉のあまりに執拗な力に負けたか、急に、だらりと、両手を、垂らしてしまった。
口づけは、それから、長いあいだ、つづいた。
と——突然、与吉の首が、肩の中へめり込むような、異様な格好をつくった。と思うや、電流でも通されたように、四肢をつッぱらせて、お静をはねのけた。
その顔は、おそろしい苦悶の形相を呈していた。
「ああっ！」
仰のけに倒れたお静は、驚愕の悲鳴をあげて、はね起きると、
「与吉さん！」
と、夢中で、すがりつこうとしたが……。
ひき歪めた唇からひとすじのよだれを引きつつ、眼球がとび出さんばかりにひき剝いた双眸に、あらんかぎりの憎悪の光を燃やしているのをみとめるや、お静は、反射的に、戦慄のあとずさりをした。
どさっ、と俯っ伏した与吉へ、お静は脳裡の働きも、心臓の動きも凍らせてしまった視線をあてて、身じろぎもしなかった。
狂四郎が、襖をひらいて、敷居に立ったのは、この時であった。
お静は、もはや余分の恐怖はのこっていないかのごとく、うつけた面持で、ぼんやりと、見知らぬ人物を仰ぎ見た。
狂四郎は、冷やかな口調で、
「おまえに、毒紅を口に塗れ、とすすめたのは、誰だね？」
と、訊いた。
すると、それまで停止していた思考力が、一時に、音をたてて回転しはじめた衝撃を、お静は、全身でしめした。
「どうした？　紅が毒だと知らなかったことは、おまえの様子が釈明している」
「魔、魔よけだ、と云って……お、おっ母さんが……」
「口に塗らせたか。……母親は、おまえの実母ではないな？」
「は、はい——」
「父親を殺した罪を、与吉になすりつけ、おまえに、仇討をさせたという趣向か。手はこんでいるが、少々、狂気じみて居る……どうせ、そこいらの町方役人どもにはかぎまわされないように、鼻薬をきかせておいての膳立てであろうから、このわたしが、きれいに片づける役目を引受けるのが、宇野屋への回向になろう」

母屋の二階の奥の間で、ひとつ褥に寝ていた増子市之丞とお静の義母お千加の枕を蹴とばした狂四郎は、市之丞へ、刀を把る時間を与え、ふり込んで来た刃の下へ、お千加のからだを突きやった。それから、おもむろに、円月殺法の水際立った腕前をみせておいて、さっさと、庭へ降りた。
すると——。
そこに、いつの間にか忍び入って、石像のように立ちつくしていたのは、虚無僧であった。
狂四郎は、一瞥をくれただけで、黙って、立ち去ろうとした。
「お、お待ち下さいっ！」
呼びとめた虚無僧は、いきなり、地べたへ坐り込むと、両手をついた。
「か、かたじけのうござった。……拙者の父の、か、かたきを討って下された！」
狂四郎は、ふりかえって
「増子市之丞をつけねらってから、幾年におなりだ？」
「足かけ五年でござった。……非力のために、ついに、一太刀も、く、くわえられず——」
そのかわりに、増子市之丞が、宇野屋の内儀と密通しているのを目撃したり、毒カステラを届けたのをさとったりしたものであろう。
「いくら、非力でも、死人の首を斬るぐらいのことはお出来だろう。国許に土産にされるがいい」
云いのこして、狂四郎は、路地をまわって遠ざかって行った。

能面頭巾

一

その夜——南町奉行所の加役（火付盗賊改め）をつとめる同心服部政右衛門が、岡っ引の久蔵をつれて、鍛冶橋を渡って出て来たのは、夜もかなり更けて、四つ半近くになっていたろうか。

夕方から降っていた時雨が、いい塩梅にあがって、夜霧の彼方に、月明りがあった。濡れた往還が、ところどころ光っていた。

それを避け乍ら、ゆっくりと歩き出したふたつの影のほかに、街は森閑として、人の気配を絶やしていた。

「ひどく冷えるな」

「へえ——」

お玉ケ池を過ぎるまでのあいだに、交された会話はそれだけであった。

小柳町に入った時、久蔵が、ふと思い出して、

「旦那……、近々お役御免を願い出られるとうかがいましたが、本当でござんすか？」

「うむ。わしも来年は本卦還りだ。どうせ、両手にあまる頭数を獄門に送ったのだから、後生は望めぬが、せめて、罪ほろぼしの余生を送りたいと考えてな」

息子が、本元服をするのを機会に、政右衛門は、役をゆずって、奉行所前に、茶屋をひらくことを願い出て、許可を得ているのであった。

両奉行所前には、三軒ずつの腰掛茶屋がある。現在の刑務所前の差入屋のような役割をはたしている。公事訴訟人が出頭する時は、まずこの茶屋から、荒莚を借り受けるならわしであった。その損料が一枚につき二十四文。ほかに、茶代が若干文であった。

以前は、昼食を摂る人々へ、風味のいい石焼豆腐などを出したりして、かなり利益をあげていたので、その株を譲り受けようとすると、百両の高値になったという。

寛政度にいたって、この制度があらためられ、荒莚は公儀が給し、腰掛へ、酒肴を持参するのを禁じた。しかし、茶代だけは、依然として、客が置くのを大目に見ていた。

政右衛門は、新しくひらく茶屋では、無料で、茶を出し、貧乏な訴訟人のために、何かと便宜をはかってやる計画であった。

「鬼の目にも泪かの。……鬼といえば、こういうむかし話がある。宝暦の頃だったかに、番町の金田なにがしという与力の家に、主人が子供の時から奉公している乳母が居ってな。七十一になる婆さんで、それが、何か患い出したような様子で、妙なことに、悪阻らしい塩梅なので、医者にみせると、たしかに、みごもっている、という——」

「へえ。おどろきやしたね。七十一になる婆さんが、みごもるとはね」

「婆さんは、身におぼえがないと云いはったが、ほかの医者に診せても、やっぱり、みごもっているという。十月経ったが、生れぬ。二十六カ月目に、大層苦しんで、やっとおのが生命とひきかえに、男の子を生み落したのだな。生れたばかりで、すでに、三、四歳の大きさをもっていたそうだ。……育てあげたら坂田の金時みたいな者になるだろうともっぱらの評判をとった……」

平常寡黙な政右衛門が、珍しく、語りはじめたので、久蔵は、熱心に耳をかたむけて、歩いた。

「三年すぎたら、十歳ぐらいの子供になった。主人の金田も、将来を期待して、秘蔵にして居った。……ところが、ある日、主人が書見をして居ると、その子供が、竹縁を抜き足で忍んで来て、障子の外から内の様子を窺って居る。それが、怪しいので、主人は、立って、障子をひきあけてみた。すると、子供の形相が、絵草紙にある羅生門の鬼そのままに、凄じい。いまにも、食いつきそうな気色をしめすので、主人は、脇差で、抜き討ったのだ。……殺してみると、後頭に、角が生えて居った。……火付盗賊改めをして、大勢の罪人をあの世に送ったので、その祟りで、金田の家へ、鬼っ子が生れた、と江戸中の大評判になったということだ」

「………」

久蔵は、ごくりと、生唾をのみこんで、うそ寒げにかぶりをふった。

「浮説だから、信用はできぬ。たぶん、金田は、多少気がおかしくなって、子供を斬ったのであろうが……。久蔵、どうも、こんなお役を三十年も勤めあげると、祟りを受ける弱気も、年のせいで、出て来るな」

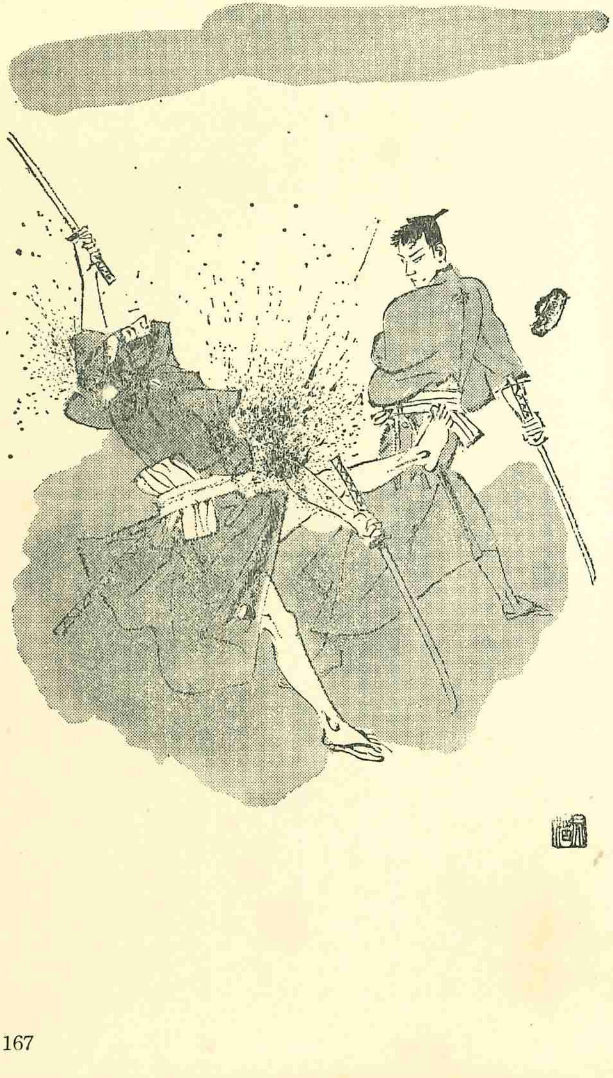
「へえ、ご尤もで——」

いつか、二人は、筋かい御門の前にさしかかっていた。

時雨雲が遠のいて、凍ったような月が、八辻原の南隅の高い杉の梢にかかっていた。

その光が、御門の屋根や、路上を、霜を置いたように白く映し出していた。

提灯の赤いあかりが、むこうから、近づいて来て、二間ばかりの前方で、停められて、すっと、高くかかげられた。
久蔵の方も、提灯をさしあげてみた。
瞬間――。
「おっ！」
烈しい驚愕の唸り声が、久蔵の口から発しられた。半間うしろにいた政右衛門もまた、声こそ洩らさなかったが、月明の中で、眦を裂くばかりに、瞠目していた。
たったいま、奇怪な祟りの話をしていた――その矢先に、二人は、あり得べからざる不可解な現象に直面したのであった。
といって、前方に立った者が、妖怪変化であったわけではない。
頭巾で顔をつつんだ武士であった。
ただ、その頭巾に染め出された能の尉面（笑尉）、黒羽二重の着物に浮き出た大きな三軍配団扇の紋、そして、腰におびた大小の真白なためし鮫鞘――このいでたちについては、あまりにもなまなましい記憶があるのだ。
左様、このいでたちをして、この春から夏にかけて、七名の町人を辻斬った下手人を、苦心して捕縛したのが、ほかならぬ服部政右衛門だったのである。
しかも、つい、三日前のことである。
下手人は、伝馬町の牢に入れられている。もし破牢したとすれば、奉行所に急報がある筈である。それがないし、げんに久蔵の方は、所用あって、夕刻、牢屋敷へ立寄っている。
同一人とは、考えられぬ。とすれば、このいでたちをした者は、もう一人いたことになるのか？　それとも、牢に入れられている者は、下手人ではなかったのか？
三日前、政右衛門が、その家へふみ込んだ時、下手人は、普通の町人の装をしていた。しかし、家さがしすると、辻斬りにあらわれた時の頭巾と着物と大小があらわれて、のがれられぬ証拠品となったのである。
いずれにせよ、こちらの行手をふさいだ対手が、殺気をみなぎらせているのは、復讐を決意しているのだと読めて、政右衛門は、十手を抜きとって身構えた。久蔵も、提灯を抛り出して、鈎縄を掴んだ。
「貴様が、まことの辻斬犯人だと申すのか？」
政右衛門が、鋭くあびせても、対手は、提灯をさし出したなり、無言であった。
「神妙にせい！」
政右衛門は、じりじりと間隔をつめた。久蔵は、横へ



まわって、縄を投げる一瞬を狙った。
「とった！」
一喝して、大きく、政右衛門が一歩ふみ出すのへあわせる一如の呼吸で、久蔵の手から、縄が飛んだ。
鈎が、敵の着物の下前へひっかけられて、ぴーんとひきしぼられた刹那をはずさず、こんどこそ、政右衛門は、本当に躍り込んで、打ちすえる——これが、召捕の業であった。
ところが——。
闇に浮かんでいる提灯の位置が動いたともみえぬのに、敵がどう躱(かわ)したものか、鈎は、宙をはしって、政右衛門の足くびへ、嚙みついていたのである。
武士の腰から、白刃が鞘走ったのは、次の瞬間であった。
政右衛門は、夜空へ、悲痛な絶鳴を撒いて、のけぞった。
斬り手は、血刀をダラリとさげて、二間を逃げた久蔵へ、
「奉行所へもどって、報せておけ。おれは、これから、夜な夜な、どこかの辻にあらわれる筈だ」
そう云いすてて、悠々と、踵をかえしていた。
提灯を揺振りもせずに、政右衛門を一颯で仆した手練は、なみなみならぬ冴えといえた。

二

その頃合——。
浅草御門を彼方にのぞむ柳原同朋町の端(はな)にある居酒屋の、奥の小座敷で、眠狂四郎は、酒に倦んだ身を、汚染(しみ)だらけの壁に凭りかけていた。そのわきで、金八が、酔いつぶれて、鼾をかいていた。
——美保代のところへ帰ろうか。
ぼんやりと、その俤を想い泛べ乍ら、この男の心の底には、どうにもならぬ暗い倦怠が澱んでいる。
暇と力が仮定されている倦怠は、そのふたつが人間にとって見事なねうちがあるだけに、容易に、この男をして、心と行為を一致させないのであろう。これまでが、そうであったし、これからもそうにちがいないのである。
といって、おのれ自身に対して無力であるという次第ではない。
——おれは、人並な幸せには目をそむけてやるのだ。
二十歳の日からそのいまわしい決意によって、この男は、天性の発露をことごとく阻止する術で、おのれを摂制して来た。

いわば、おのれ自身に関する予言が、当るような行為を望まれた時、この男の内には、はじめて、異常な情熱が沸きたって来るのである。
情熱というものの本質が、他のものに対する倦怠を含んでいるのだとすれば、——たとえば、賭博の熱狂が、高度の倦怠が求める治療であるように——この男の、無為にすごしている状態は、あらたな刺激のみを待ちのぞんでいることであり、そのほかの現実は、すべて、倦怠の対象となってしまっているといって、さしつかえはない筈である。
江戸へ帰って来て、狂四郎は、いまだに、美保代のところへ帰ってはいない。
土間に、カタコトと下駄の音がして、衝立の横へ、あいくるしい顔が、のぞいた。
「先生、あとまだ、燗をしますか？」
と、訊ねた。すると、金八が、鼾をぴたりと止めて、むっくり起きあがった。
「おう、お民ちゃん」
「あい——」
「たかが三合で、この金八を酔いつぶすような酒は、下の下だぜ」
よだれを手の甲でこすって、顎をつき出した。目蓋は、まだ満足にひらいていない。
「すみません。……じゃ、金八つぁんひとりは、ほかのお店で、飲み直して下さいな」
「なにをこきゃがる。酔いつぶれたおかげで、おめえに、しりふり踊りをさせられなかったのが、無念残念だってことよ」
金八は、ふらふらと立ちあがると、自分が腰をひねって、踊りはじめた。
「巫女(みこ)は鈴ふる、奴は槍ふる、吉原(なか)の女郎は客をふる、犬は尾をふる、駕籠舁きゃ尻ふる、やんれ、やれやれ、やっこらさあ——」
お民は、小鉢や空銚子を足で蹴とばされるおそれがあるので、いそいで、ひろいとって、料理場へ持って行こうとしかけた。
とたん——どうしたのか、お民の両手から、それらの器物が、三和土(たたき)に落ちて、みじんに砕ける音が立った。
「なんでえ？　びっくりさせるねえ」
衝立から、ひょいと覗いた金八は、顔から血の気を引かせて棒立ちになっているお民の視線を追って、入口にうっそりと佇んでいる客を見やった。
頭巾の能の尉面が、ちょっと異常に目立つが、べつに、持った物をとり落させる程、奇怪な人物ではない。

「酒をくれ」
低い声音で云って、長床几に就いた物腰も、しずかなものであった。
お民は、救いをもとめるように、こちらをふりかえって、金八の怪訝そうな表情にぶっつかると、意味ありげに、目ですがった。
金八が、ぽんと胸をたたいて、
──安心しな。おれたちがついてら。
と、頷いてみせると、やっと心をとりなおして、お民は、料理場へ入って行った。膳をはこんで来て、客の前へ置くお民の手に、金八の目にも、はっきりと、顫えが見てとれた。
お民は、すぐに、小座敷へ逃げて来て、狂四郎の脇にぴたりとより添って坐ると、石のように全身をこわばらせた。
狂四郎は、ちょっと、首をのばして、土間へ視線を走らせたが、微かに眉をひそめただけで、盃をとりあげて口へはこんでいた。
「お民ちゃん、なんだというんだ、あいつは──？　おめえに惚れているにしちゃ、いやにそっけねえ様子をしてやがる」
「しっ！」
お民は、金八の囁きを制して、両手を胸で合わせて、祈る格好をした。
「へっ、よっぽど、こっぴどく振りゃがったな」
「そ、そんなんじゃないってば！」
「苦労させたり気をもむもとは、身から出たさび是非もない、ってな。どうだ、おいらが、かわって、掛合ってやるか」
「ちがうって、云ってるじゃないか」
「露は尾花と寝たと云う、尾花は露と寝ぬと云う──寝たか寝ないか、とっつらまえて、幽霊の、正体みたり枯尾花、穂を出すかわりに尻尾を出した」
「よして！」
金八の駄弁を封じるお民の顔つきは、おそろしく真剣だった。
それから、小半刻。──
土間の客は、銚子を二度ばかりおかわりして、ゆっくりと独酌に時間をかけた。
お民は、銚子をはこぶと、大急ぎで、狂四郎の脇へ、逃げもどった。
やがて──、
「勘定──」

と、呼ばれて、お民は、ほっとして、土間へ降りた。
客が、懐中から、金毛織の財布をとり出すや、お民は、あやうく小さな悲鳴を発しそうになった口を、反射的にわが手でふさいだ。小粒を、台へ投げた客は、この時、はじめて、じろりと、お民へ冷たい一瞥をくれた。
「おんな──」
「あ、あい……」
「これからは、馴染にしてもらおう。せいぜい、贔屓にしてくれ」
意味ありげに、その言葉をのこして、すうっと出て行った。
お民は、崩れるように、床几の端へ腰をおろすと、大きく肩で息をした。
「おうおう、お民ちゃん──いやさ、お民」
金八が、大声で呼んで、ふらふらと降りて来ると、お民の肩をつかまえた。
「なべて世の、人の心はしら糸の、恋にはいとど染めやすき、そのいとしさの濃むらさき、色にいでたる江戸鹿の子、いうにいわれぬ恩と義理、深きなさけにからまれて、憂身をなにと金八が、お民と花の二人づれ……」
清元をうなり乍ら、お民の手をとって、小わきにかい込み、
「……まだ東雲に本町の、糸屋をぬけてほのぼのと、明けるわびしき朝霞、人目いとうて、そこここと、しのぶ小路に時うつし、暮れを待乳に花がたの、渡しを越えて隅田川」
どっこいしょと、上り框へあぐらをかいて、
「さあ、きこうじゃねえか、この世の縁の浅草や、遠目にそれと観音の、塔は五重か三重の、罪ふかき身のざんげ、ざんげ──」
「いや！」
お民は、金八の手をふりはらって、ととっとかけあがると、狂四郎の前へ、べったりと坐った。
「先生、たすけて！」

三

お民が、からからにかわいた口腔中に、生唾をしぼり乍ら、語ったいきさつは──。
五日あまり前の夜更けのこと。店をしまうべく、縄暖簾をおろし、架行燈を消したところへ、不意に、顔を頭巾でつつんだ黒の着流しの武士が、ぬっと入って来て、油障子をぴしゃりと閉める様子にただならぬ険しさをしめしつつ、酒を所望した。もう店じまいだと、居竦みつつことわると、冷酒でもよい、と云って、床几に就いた

が、その時、濡れた袖口を拭いた懐紙が、べっとりと赤く染まるのを見て、お民は、戦慄したものだった。茶碗で、三杯ばかり、息もつかずにあおった武士は、すぐに立ちあがっていた。

ちょっと、鋭く、外の気配を窺っていたが、音もなく戸を開けると、風のように、闇へ消えたのであった。

南町奉行所の火付盗賊改めの同心服部政右衛門が、岡っ引の久蔵をつれて、走って来たのは、それからものの数分と過ぎてはいなかった。

お民から、武士のいでたちをくわしくきき出して、また、あわただしく駆け去ったのであったが、……そのいでたちというのが、能の尉面を染め出した頭巾、三軍配団扇の紋のついた黒羽二重の着物、白なめしの鮫鞘の大小――すなわち、いまの客と全く同じだったのである。

ところが、一昨日、岡っ引の久蔵が、立寄っての話では、

「おめえに、装(なり)を見とどけてもらったおかげで、とうとう、下手人を捕えることができた」

ということだったのである。

下手人は、武士ではなく、本町一丁目にある呉服店「大黒屋」の長男であった。大黒屋は、京の室町に仕入店、大阪今橋筋に両替見世をはる名代の大店で、大奥の御召呉服御用までつとめているくらいであった。

その長男に生れ乍ら、久太郎というその男は、少年時代から、武芸を好み、本所亀沢町の直心影流団野真帆斎道場へかよい、手筋よく、二十歳になった時には、すでに、十指のうちにかぞえられるようになっていた。その腕自慢が昂じて、ついに、武士のいでたちをして、辻斬りをするようになったのである。

久太郎は、服部政右衛門が、捕手十余名をもって、大黒屋を包囲して、召捕ろうとするや、差料を奪いとって、八人までたたき伏せたという。加勢に、あらたに二十余名が、駆けつけなければ、あやうくとりにがすところであった。

ともあれ、久太郎は、すでに、捕えられて、獄入りしているのであった。

お民は、じぶんでじぶんの言葉に怯えて、肩をすぼめた。

「先生。いまのさむらいは、ゆ、ゆうれいだったのでしょうか?」

金八も、奇怪な話に酔いがさめたか、神妙そうに、膝をそろえて、顎をなでていた。

「財布も、同じ品だったというのだな」

狂四郎は、お民に、彫(ほり)のふかい横顔をみせつつ、大し

て興味もなさそうな口調でたしかめた。

「あい、たしかに、金毛織の――」

「いまの男は、それを、わざと、お前に見せたということになるのか」

「ど、どうしてなのでしょうか?」

それにこたえず、狂四郎は、ぽつりと、

「あの目つきには、殺気がのこっていたようだったな」

と、呟きすてていた。

岡っ引の久蔵が、前髪を落したばかりの、まだ八丁堀風がいたにつかぬ若者をつれて、この居酒屋へとび込んで来たのは、このおりだった。

「お民っ! 能面頭巾の野郎が、ここへ来たか?」

いきなり、嚙みつくように叫んだ。

お民は、血相かえた久蔵へ、だまって、大きく、合点してみせた。

「くそっ! 若旦那――しっかりしておくんなせえよ、おとっつぁんの仇討だ!」

若者をはげまし乍ら、久蔵は、胡散臭げに、奥の小座敷へ、鋭い視線をくれた。

「親分! あ、あのさむらいは……こ、このあいだと同じひと?」

「じゃねえ。別の化物だ。畜生っ! 服部の旦那を斬りやがった!」

「えっ?!」

お民は、息をのんだ。

久蔵は、小座敷にいるのが、眠狂四郎だとわかって、

「あ――」

と、意外そうに目を瞠った。

顔見知りであった。

狂四郎は、無想正宗を把って、ふらりと立ちあがった。

「旦那、いまの野郎をごらんなさいやしたか?」

「うむ――贋ものだな」

「え?」

「跟(つ)いて来い。その若いのに仇討をさせてやろう」

四

いわば、それは、狂四郎のもちまえの霊感的な判断力といえたろう。

まっすぐに、めざしたのは、本町一丁目の「大黒屋」であった。

主人があらわれて、頭を下げた――とたん、その髷が、畳につかえた両手のあいだへ、ぽろりと落ちた。

あっとなって、顔を擡げた時には、もう無想正宗は、

鞘におさまっていたし、狂四郎は腕を組んでいた。
「な、なにをなされます？」
　ざんばら髪をおさえて、主人久兵衛が、目をいからせて咎めると、狂四郎は、うすら笑って、
「坊主になって、西国遍路をして来いということだ」
「い、いわれもなく、巡礼などに――」
「と、白ばくれさせないために、問答前に、まず髷を落してやったのだ。伜の罪ほろぼしと、貴様が手を下さずに殺した服部政右衛門の菩提をとむらうためにだ」
「莫、莫迦な……、なんのこんたんがあって、あらぬ云いがかりを――」
「大黒屋。ことわっておくが、わたしは、結果の見え透いたことに、手間どるのを好まぬ。まさか、貴様の方から、すすんで、伜を無罪放免させるたくらみで、どこかの馬の骨を雇って、伜と同じ装(なり)をさせたのではなかろう、と好意の慈悲から、西国遍路をすすめているのだぞ。馬の骨の方から、売り込んで来たしわざだろう。うっかり乗ったが百年目だった。どうだ！」
　むすびの叱咤に、凄じい気合がこめられた。
　次の日の宵――四つをまわった時刻、能面頭巾の武士が、大黒屋の裏口から、そっと忍び出て、大通りを、すたすたとあるきはじめた。
　町家筋で、大通りと呼ばれるのは、本町、石町、大伝馬町などであったが、これらは、暮れ六つになると、店は大戸をおろすし、人通りは殆んどなくなって、昼間の賑わいとうってかわって、ひっそりとしてしまうのであった。筋かい御門内より、みなみ京橋にいたるこの大通りでは、両側の商店で、音曲鳴物の音色のひびくのは山王神田の両祭の時のみであった。もっとも、女子たちに遊芸を習わせていないかというと、その反対で、稽古ごとには、千金をおしまずに、身につけさせていた。ただ、商人というものの礼儀として、世間へ知れないように、土蔵と土蔵にかこまれた奥座敷で、店へひびかぬように温習させているのであった。
　したがって、大通りにひびくのは、犬の遠吠えだけであった。
　はるか、目路(めじ)の果てまで、人影ひとつなく、しろじろと月光に照らし出された深夜の大通りを、厳冬のさきぶれのような冷風が、かすかなうなりをたてて、吹きぬけて行く……。
　頭巾の武士が、前へ長くのびたおのれの影法師を、大股にふみつけ乍ら、ものの一町もすすんだおり、とある路地から、すっと歩み出た黒い影が、行手をさえぎって、三間のむこうに彳んだ。

「…………」
「…………」
　両者は、無言で、数秒をにらみあった。
たたかいは、すでに、この瞬間から、開始されていた。
　先に足をふみ出して、距離をせばめて行ったのは、頭巾の武士の方であった。
　抜きあわせるべき間合に到ってから、頭巾の武士は、低いが、よく透る声音で、
「昨夜の居酒屋にいたな、おぬし――」
と、云った。
「宿縁があったのだろう」
　眠狂四郎は、穏やかにこたえた。
　それからまた、長い沈黙の対峙があった。
　その沈黙の中で、二本の白刃が、目にもとまらぬ迅さで抜きはなたれて、ぴたっと構えられる動きがあったが、それきり、固着状態に入って、深夜の静寂は、いつ破られるともはかり難かった。
と――。
　汐合盈(み)ちて、無想正宗の切尖が、地上三寸の空間から、ゆるやかに、移行しはじめた。切尖が、円の頂点を指したとみえた刹那、敵の一剣は、稲妻に似た白閃を、夜気に唸らせて、躍った。
　同時に、狂四郎の五体は、ひくく沈んで、氷上をすべるがごとく、右足から踵ずりに、一間余奔っていた。
　黒い血飛沫とともに、敵の右腕は、剣を掴んだままで、月へ飛んだ。
　その右腕が地に落ちるよりも早く、敵が、左手で脇差を抜いて、真向から、狂四郎の頭上へ送ったのは、形容を絶する手練であったといわねばならぬ。
　並の剣客ならば、顔面まっぷたつになっていたであろう。これまで無数の修羅場をくぐりぬけて来た狂四郎の磨ぎ澄まされた神経が、本能的に、この猛撃を、額の薄手にとどめ得た。
　刎ねかえした無想正宗によって、敵の左腕もまた、月を慕って翔け昇った。
　久蔵と服部政右衛門の息子が、路地からとび出して、地上にくろぐろと横たわった者のそばへ達した時、狂四郎は、すでに、ふところ手になって、後姿をみせていた。
　――危なかった！
　肚裡がひえびえとする独語があった。名もない素浪人が、舌をまく秀抜の天稟をそなえていたのである。その

ことに、云い知れぬ暗然たる感慨が湧いていた。

——おのれの分身を、斬ったようなものだ。

その惨めな思いが、狂四郎に、今宵も、酒をもとめさせるであろう。

血笑の果て

一

今日も——。

両国広小路の垢離場の高座で、立川談亭は、張扇で、読み台を叩き乍ら、

「さっても、頃はいつなんめり——五代将軍元禄は、十と五年もおしつまる、極月厳冬十四日、雪は巴に降りしきる、屏風が恋の媒介で、蝶と千鳥の三つ布団、にはこれあらで、二つ巴の定紋つき、緞子の紺の臂甲、衣甲、黒羅紗羽織に、浮放しの裁付、黒と白との革縁とったる兜ぐるみの頭巾をば、一天高しとおしいただき、采配片手に、位牌は胸に——半鐘も鳴らぬに火事装束」

「へへ、火事がなくなりゃ半鐘はいらぬ、とかくやけるは色のみち」

と、客の一人が、半畳を入れた。

談亭は、にやりとして、

「野次は半畳、火事半鐘、賄賂繁昌のその果てに、かんにん袋の浅野紐、ぷっつり切れたが一大事、憎さも憎し上野め、この太刀くらってくたばれと、打ちおろされて腰ぬかし、吉良れ損はかなわんと、息絶え絶えの半死半生——松の廊下をまろびつこけつ、やっとこさで生きのびた義央殿の御首級を、いざ頂戴せんと武者ぶるい、今宵一期の晴れ姿。万山重からず君恩重し、一髪軽からず我命軽し——とび込んで手にもとまらぬ霰かな」

ぴしりっと台をたたいて、羽織をぬぎすて、

「淡雪と消ゆるこの身の思い寝に、浮名を厭う恋の中、乱れしままの鬢つきや、義理という字に是非もなや、夢かうつつか明鴉、啼いて渡るを右に見て、めざすは本所松坂町、大川端の河岸づたい、——いろはかぞえて四十と七人、四十八手は閨の技、西国巡りは六十六部、弘法大師は八十八カ所、骨の折れるは九十九折——」

「おうおう師匠、つづらって云やア四十七士は、討入道具を、葛籠に入れて、松坂町まで運んで行ったんだってな」

「左様、大層重かったな。大石の重みは四十七貫匁と申してな。槍に長刀、竹梯子、鉞、玄能、大槌に弓矢、龕灯、松明、鉦、取鍵——えいやっこらさと、ひっかつぎ……」

「ひっかついだのは、だれだと思う、初公？——

「きまってらあな。大石主税だアな。可哀そうに——ちから泣く泣く炬燵にもたれ、癪をやぐらの隅で押す、って小唄にあらあ」
「莫迦野郎、炬燵の話じゃねえぞ、葛籠の話だ」
「さんざ苦労を舌切雀、いまは話の種となり、談亭師匠の米の倉、チュウチュウ、チュウの忠臣蔵ってな」
この時、酔いつぶれて、手枕していた職人が、むくむくっと起きあがって、
「なんでえ、なにがチュウでえ。女の口なら小半刻、酒の口なら小半日、どうせ吸うなら酒買ってチュウ——と、くらあ」
と、どなって、また、ごろんと寝そべってしまった。
三十人あまりの客が、この寝呆けぶりに、げらげらと笑いざわめいた。
だが——。
むっつりと口をつぐんでいる例外者が二人だけ、この講釈場にいたのである。
一人は、眠狂四郎であった。
そして、もう一人は、これは、どこかの大名の色小姓かとおぼしい、前髪立の若者であった。衣服は、流行からおくれた黒七子の紋付、京桟留の袴をつけているのだが、かえってその地味なつくりが、透けるような白い皮膚を浮きたたせ、おっとりとした面差を、匂う花にもたとえたくなる。気品があったし、その美しさに、沈んだ翳をひいているのも、正しい血すじを享けた者の静かな風情と見てとれた。
狂四郎の興味をひいているのは、それよりも、談亭の講釈やこの場の雰囲気から孤立して、能面のように表情を動かさぬその端座ぶりであった。いかなる諧謔も、みじんも、この若者の五官に影響を与えることはできぬもののようであった。
狂四郎が、この若者に注意しはじめてから、すでに一刻。高座のたくみな話術と、客が投げる半畳の呼吸とが、渾然と溶けあった雰囲気はつづいて、爆笑はひっきりなしのありさまだった。にも拘わらず、この若者だけは全く別の世界から、迷い込んで来たように、ついに、ただの一度も、口もとをほころばすことさえしないのであった。
尤も、狂四郎は、それを期待して、今日、この講釈場へやって来たのであり、期待は裏切られなかったのである。
談亭から、水もしたたる綺麗な若ざむらいが、このところ、毎日やって来るが、絶対に笑わない、と告げられていたのを、前を通りかかって、ふと思い出して、狂四郎は、ふらりと、寄ってみたのである。
金八が、つれであった。金八も、そのことをきいていて、時折、陽気な軽口をとばして、場内の笑いを誘っては、若者を注意していたのであったが……。
「先生。あん畜生、聾でなけりゃ、脳の加減が、ちいっとばかり、ござってやがるんですぜ」
いまいましげに、金八は、舌うちした。
しかし、狂四郎は、若者が、痴呆どころか、人々がどっと笑い崩れる瞬間、異常な努力をはらっていると、見ぬいていた。表情も姿勢も固着させていることは、すでに述べた通りだが、狂四郎の磨ぎすまされた神経は、そのすがたが、笑いの渦が起るたびに、それに反抗するための、殺気にも似た鋭い緊張をはなつのを、察知していたのである。
談亭は、狂四郎と若者の様子を、ちらりちらりと見くらべ乍ら、
「……たちまち行き着く吉良屋敷、めざすは上野ただ一人、その白髪っ首をひっこぬき、香漬け、茶づけになしくれん——どうん、と打ち込む三流れ、これぞ山鹿流の陣太鼓、という説は、ありゃ真赤ないつわり、大将内蔵之助が、ばらりと振ったは黒の柄長の金采配。諸説紛紛、雪ふんぷん、さっとわかれる表と裏——表裏二股ある世の中にたったひとすじ忠義の道、赤き心の日の恩や、忽ちくだく厚氷——かたく見えても主ゃ厚氷、とけりゃやっぱり元の水、水の流れと人の身は、明日待たるる宝船。歌にのこせし大高が、源吾に絶する大大槌を、頭の頭上にふりかざし、えいやっ、どしんと、たたきつけたる表門。つづく小野寺、矢田、吉田、神崎、近松、武林、不破のせきやにさす月よりも、かくす恋い路はもれ易い。もらしてなるかと、緋縮緬なる褌を、きりりっしゃんと締めなおす、コウガン可憐の主税をば、たすける吉田忠左衛門、間、潮田、千葉、前原、中村、木村、間瀬、茅野。なかにも目立つ武者ぶりは定紋つきの黒小袖、襟と袖とに白覆輪、さばき髪には浅黄のはちまき、かけた十字の白襷、抜き放ったる業物は、関の孫六一本杉、念流鍛えの腕前は、高田の馬場で十八番、おはこの歌の中山は、いまあらためて堀部安兵衛武庸なりーっ」
いよいよ乱入というところで、談亭が、明晩の前講にて、と頭を下げると、金八が、
「先生。あっしが、ひとつ、あの末成面を笑わせてやらざあ、どうにも今夜の寝つきがわるくていけねえ」
と、気色ばんだ。
「無駄だろう。まかりちがえば、お前の生命にかかわる

ぞ」
「なアに、笑い顔してまた逢う首尾をふっと吹き込むこんどーむ、って、へへ、ふくれたやつをよろこばせる手管は、ちゃあんと心得てまさあ」

二

吾妻橋を渡って左へそれ、堀川に架った源兵衛橋を過ぎて、小梅村へ通じる往還に出ると、もう、殆ど人影もない。
左は、水戸家の下屋敷の高塀がつづき、路上へさしのばされたのはすべて楓で、これに、燃えるような夕陽の火があたっていて、塀や路面が、異様に赤く染まっているのであった。
その中を、しずかな足どりで歩んで行く若者が、稀にみる美しい面差だけに、これは、かえって、絵にしても、あまりにも作りものにみえる景色といえた。
すっかり風の落ちた、空に一斑のくもりもない、明るい秋の夕まぐれであった。
若者は、なにかを考え考え、くれないの路上に、おのが影を移して行く……。
陽気な唄声が、追って来た。

　ちらと見そめし日本橋
　〽ふみをつけ、わたりそめたる恋のみち　コチャエ
　いろよき返辞を品川や
　　アリャエ　コリャエ

豆しぼりで頬かむりして、両袖を奴凧のようにひらひらさせ乍ら、追いぬいた男は、滑稽に、腰をふって、

　かわい川崎めおと橋
　〽わしゃうれし、つもる想いも神奈川で　コチャエ
　ほどケ谷よいのにわしゃ惚れた
　　アリャエ　コリャエ

踊りまわっていたが、ひょいと、ふりかえった。顔には、ヒョットコの面をかぶっていた。
とたんに——。
若者の面貌が、笑いを刷くかわりに、険しくひきしまった。
無言で、つと一歩出る——。
その体勢に、刃物のような鋭いものがみなぎっていると気づかず、ヒョットコは、文字通り間抜けた格好で、

　おひゃり、ひゃり、ひゃり、おひゃりこで
　さっても、この世は赤づくし
　娘の手絡に、女房の蹴出し
　亭主の好きな赤烏帽子
　官女の袴にあずきめし

　月に七日のお客さん
　アレはずかしや、顔の色
　千代のよわいにつむりの赤さ
　丹頂の鶴ではないわいな
　おひゃりこ、ひゃりこで、スチャラカチャン

「たわけっ！」
一喝とともに若者の手がおどった。
ヒョットコの面が、まっぷたつに割れ、その下からあらわれた金八の顔が、恐怖の色をあふらせつつ、のけぞった。
高い水飛沫をあげて、堀川へ落ちた道化者へ、一瞥もくれようとせず、若者は、すたすたと、行き過ぎようとした。
「おい——」
うしろから、呼びとめられて、ふりかえった若者は、ふところ手で、うっそり立つ浪人者へ、すでに、その存在を知っていた冷やかさで、
「無意味な座興は止されるがよい」
と、云った。
狂四郎は、にやりとして、
「座興と知りつつ、笑いすてるかわりに、何故の立腹か——そこが、こちらを疑わせる。その男装にも曰くがあろうし、そこいらの町道場主の比ではない腕のみがきぶりも、目的あってのこととみた」
「…………」
若者は、狂四郎が一歩出るや、一歩引いた。
狂四郎が——これは娘だな、と看破したのは、講釈場へ入って、その姿を一瞥したとたんであった。
「きこうではないか」
狂四郎は、さらに一歩、詰めた。
若者いや、娘は、もう退らず、油断なく、切長の眸子を、しんと澄みきらせていた。
見知らぬ浪人者のふところ手の立姿が、いかにおそるべき鍛えかたをされているかそれを充分にさとっていた。
氷のように冷たいものが、娘の背すじを走っていた。
「きこう」
狂四郎は、重ねてうながした。
「講釈師は、高座が生命だ。笑わせようとする芸に対して、笑いを拒む努力を払われてはやりきれまい。尤も、それを笑わせるのが芸かも知れぬが、そなたの努力は、どうやら、別の意図あってのことらしい。これは、芸人にとって、甚だ迷惑な話だ。理由が明かにされれば、立川談亭も納得しよう。他意はない。それだけのお節介だ

と思ってもらってよい」
穏やかに云いかけているあいだに、ぬれ鼠の金八が、石垣から、匍いあがって来て、大きなくさめをした。
猶、それから、いくばくかの沈黙を置いて、娘は、ようやく口をひらいた。
「笑わぬ修業は、父の仇を討とうがためです」
突飛ときこえる言葉を、こたえにしたのであった。

三

延命寺門前の小料理屋の二階で、娘が狂四郎に語った事情は、次のような経緯であった。
娘は、名を由利といい、父は、越後長岡七万四千石牧野備前守家中、剣道指南役であった。直心影流の達人で、黒辺武太夫といえば、江戸にも、その名がきこえていた。
武太夫は直心影流を一世に鳴らした長沼四郎左衛門の直弟子藤川弥司郎右衛門の道場で、赤石郡司兵衛、井上伝兵衛とともに三羽烏と称せられた高足であった。
ちなみに——。
直心影流は、新陰流が嫡々正伝して、第六世となった時、名称を改めたのである。新影が神影となって、かえって影流の古称の尊厳が没却されるかたちとなったのを遺憾として、六世を嗣いだ山田平左衛門が、これを折中して、直心影流の文字をえらんだのである。この三男が、長沼四郎左衛門であり、面・籠手・撓を装作したのはこの人である。
藤川弥司郎右衛門が、この正統を継ぎ、法定四本の名目をさだめた。一本目を八相、二本目を一刀両断、三本目を右転左転、四本目を長短一味といった。
韜の形には、竜尾、面影、鉄破、松風、早船、曲尺。小太刀に風勢、水勢、切先返し、鍔取り、突非押非、円快。
これらを能く切嗟琢磨したあかつきに、授与される伝書を、雲剣伝、窮理の巻、目録、免許、命剣伝の順序に規定されてあった。
奥義命剣伝をさずかったのは、ほんの数名をかぞえた。由利の父黒辺武太夫はその一人であった。
師の藤川弥司郎右衛門が、天明頃、老中月番牧野備前守の奥向稽古の栄誉を荷うていた関係で、その国許の指南役に、武太夫は、推挙されたのであった。
このように、達人の名をほしいままにした武太夫が、一昨年暮に、意外にも、まだ目録も与えていない内弟子に、妻もろとも、一太刀で殺されたのである。海老名要



という内弟子は、そのまま逐電し、内弟子たちの追跡もおよばなかった。
　由利が、敵をもとめて出府したのは、昨年の春であった。下谷車坂町に広大な道場をかまえている父の朋友井上伝兵衛のもとに身を寄せて、必死の稽古にはげんだ。
　女に生れたのが惜しい、と伝兵衛を嘆息せしめる程の天稟をそなえている娘であった。
　伝兵衛が、専ら教えたのは、法定四本のうち、二本目の一刀両断の極意であった。そして、一年余の研鑽修練を経て、道場中、由利の一撃を躱し得る者は一人もなくなったのである。
　折もよく、敵海老名要が、中仙道の首駅である下板橋中宿の人馬継問屋場の用心棒をしていることが、判明したのであった。
　或日、由利は、井上道場の人々の助太刀申出をかたく拒絶して、単身、下板橋へおもむいた。
　海老名要は、東光寺という古い寺院の離れに、孤独なくらしをしていたが、由利がおとずれるや、すでに予期していたおちつきをみせて、境内平庭で、対峙した。由利が、刀を構えたにも拘わらず、要は、腰の剣に手をかけようともしなかった。由利は、眦を張って、抜き合わせることを叫んだが、要の首は、横に振られただけだった。由利は、要の温厚な人柄を熟知していた。その彼が、あのような無慚な所業におよんだのも、父が唯一の欠点である短気を爆発させて、よほど肚に据えかねる凄じい罵言と打擲をあびせたからに相違ない、と容易に想像し得たところだった。
　由利は、要を憎んではいなかった。
　道場に在った時、要が、じぶんに対して、好意以上の心を抱いてくれていたことも、由利は知っていた。
　だから――要が抵抗もせずに討たれようとしているのだと受けとった由利は、その旨無用、と叫んだ。由利は、要を討つ自信があったのである。
　すると、要は、微笑して、
「貴女に討たれる存念は、毛頭みじんもありませぬぞ！」
と、はねかえしたものだった。
　由利は、全身が、かっと熱くなった。
「覚悟！」
　気合を満身に罩めて、ぱっと上段にふりかぶった。
　要の静止相は、依然として、立木のように微動もしなかった。
　一刀両断の極意は、上段にかざして、受太刀の切尖を見ずにして、無念無想、摩利支天の翔けるに似た鋭さと迅さで、打ちおろすことにある。おのが力をすてる神気

を肝要とする。いわば、打つ力は、蜻蛉が尾をもって水面を打つ軽やかさでいいのであった。
　ところが、対手の手に剣がないとなると由利の前にひろがる空間は、あまりにも広く、さむざむとしたものに思われた。敵が、刹那の一撃をひそめる切尖をつきつけてこそ、これを見まいとする無心の働きを起すのが、業というものであった。
　思いもかけぬ、意外な、要の素手に、由利は、一心から、惑いを払拭することができないままに、修練の一閃を、弧に描こうとした。
　その瞬間であった。
　いままで、蒼白く、陰欝な色を沈めていた要の貌が、石を投じられた水面のようにぱっと波立った。
「はっはっはっは……」
　大きくひらいた口から噴いたのは、高らかな哄笑だった。
　虚を衝く――とは、将に、これをいうのであったろう。
　由利が、はっと自我をとりもどした時には、要の手刀によって、小手を打たれ、刀を取落していた。そして、わが身は、要の逞しい双腕の中にあった。
　由利は、もがく力も抜けて、視野いっぱいにかぶさって来た男の暗い面相を、瞶めかえした。
「由利殿。大した腕前におなりです。手前が心形刀空手の術を学んでいなければ、見事一刀両断にされて居りましたろう。……本日は、貴女がお負けになった。いま一度の工夫を持って、出直されることだ」
　囁きかけて、素早く頬ずりするや、要は、由利をつきはなして、一間を跳び退っていた。
　それから……二人が、再び相見えるまでに、約一月の日が置かれた。
　由利は、文字通り、寝食を忘れて、稽古にはげんだ。おのが油断を慙じて、無刀の術に敗れたことは誰にも告げなかったが、一刀両断の法形をすてて、突きの相気に心身をうち込むさまは、井上伝兵衛に、敵が心形刀の秘伝に達していたのだな、と読みとらせた。
　伝兵衛は、あらためて、由利に、立居合の太刀を教えた。これに、一月の日数を要したのである。
　そのあいだに、道場の門弟が調べたところによれば、海老名要は、用心棒となって、すでに一年余になるが、どんな喧嘩場でも、一度も刀を抜いたことがない、ということだった。腰におびている剣は、外装だけそれと見せかけて、実は中身は木らしい、という噂も、どうやら信じられるふしがあるという。

これをきくや、由利は、烈しい侮辱をおぼえずにはいられなかった。返り討になってもいいから、要に、真剣を構えてもらいたかった。

再度の勝負を通告する手紙にも、その旨を書き添えておいた。

しかし、由利と向い立った要は、木刀すらもおびてはいなかったのである。真剣を、という所望に対して、わざと無腰であらわれた対手に、由利は、みじんも容赦せぬ憤りを沸きたてた。

間合四尺まで詰めて、由利が、居合の呼吸に合わせて、刀の柄へ右手をかけようとした――その間髪をはずさず、要は、

「突けっ！」

と、叫びざま、ぱっと、おのれの胸もとを、両手で、ひきはだけた。

由利の気合は、凍りついた。

要の胸には、珍妙なオカメの面が描かれてあったのである。

次の瞬間、由利は、ふたたび、手刀によって、刀をたたき落され、抱きすくめられていた。

「由利殿。剣の術というものは、如何なる意外の手段を弄されても、平心を喪わぬが、勝負の処を得ることですぞ」

その囁きとともに、由利は、唇をうばわれていた。

翼あるもののごとく、飛び遁げた要は、

「いま一度の機会を、貴女に与えましょう。こんどこそ勝つと心が定まったらお出掛け下さるがよい。但し――」

双眸に、鬼火のような光を煌かせて、

「貴女が、またしても敗れたら、その時は、操をいただく。覚悟なされい」

冷やかに云いすてて、風のごとく去ったのであった。

話をきき終ると、狂四郎は、しばし無言で、由利を、じっと見まもっていた。由利も、はじらわずに、まっすぐに顔をたてていた。

「海老名要が、三度目につかう手段が、そなたには、おわかりか？」

「わかりませぬ」

「教えてもよい」

「いえ――」

由利は、しずかに、かぶりをふった。

「わたくしは、じぶんひとりの力で、討ちたく存じます」

きっぱりと云いはなった。

「そうか……しかし、そなたは、あまりに敵の弄する奇手に対して素直すぎるようだな」

「だから、講釈場に行って、笑いに堪える修業をいたして居ります」

「それが、無駄だというのだ」

「なぜでございます？」

「そなたは、いま、教えて欲しくないと云ったではないか」

「…………」

狂四郎は、微笑し乍ら、云った。

「そなたは、三度目にも敗れるだろう」

由利は、屹となって睨みかえした。

「勝は保す可からず、紂は百たび克てども卒に後なし、と左伝にある。兵法は、謀に欺かれたとみせて、勝機をつかむにある。そなたは、まず敗れるがいい。敗れることによって、最後に勝つがいい。左様、善く勝つ者は、勝ち易きに勝つ――孫子のいましめは、こういう場合に役立つ」

そう云って、狂四郎は、やおら立ちあがって、部屋を去った。

由利は、長いあいだ、畳の一点を凝視して、身じろぎもしないでいた。

四

由利と要が、三度び、東光寺境内で対峙したのは、それから三日後の朝であった。杉木立から斜めにさす、薄ら陽をあびて、ひそとして佇む由利の前に、すたすたと進んで来た要は、こんどは、無腰ではなかった。

乳色の靄が流れる閑寂の地上に、ふたつの影法師が、長く俑って、幾秒間か、そのまま動かなかった。

「勝負っ！」

鋭く、高く、一言発するとともに、由利は、白刃を鞘走らせて、右半身――青眼の構えをとった。要は、両手をダラリとたらしたなりで穏やかに、

「勝負の前に、おきかせしておこう。……由利殿。手前は、自ら進んでお父上を殺めたわけではない」

「この期におよんで……空々しい弁疏はきかぬ！」

「手前が、虚言で繕う男かどうか、貴女の方がご承知の筈ですぞ。公けには申しひらきを封じられた者の独語として、きかれい。……あの日、手前は、貴女の母上から、そっと居間へ来るように命じられた。母上が云われるには、来年上巳佳辰に道場の後継者がえらばれる。その者が由利の婿となる。師の心の中には、青山光次郎とお前の二人を立合わせる意図がおありになる。わたし

は、由利の婿にはお前がえらばれて欲しい。青山光次郎はすでに免許を受けて、法定四本の奥義に達している。これに勝つには、小太刀の極意を得ねばならぬ。三月の余裕があるゆえ、暇をもらって、江戸へ出て、赤石郡司兵衛殿の道場で、修業して参るがよい。と、路銀を下さろうとしたのです。それを頂こうと、膝行したところへ、不意に、先生がふみこんで参られて、不義者め、と一喝、目にもとまらず母上を斬ってすてられ、かえす刀で、手前を討とうとなされた……。血刀を構えられた先生に対して、手前は、まったくの無手。しかも、云いわけを許されぬ不義の汚名を蒙ったなりで殺される。その不合理に手前は、逆上すべきところを、何故か、悪鬼に似た恩師の形相を仰いだとたん、なんともいえぬ、途方もなく間違ったこの世の仕組に、腹の底から莫迦々々しさをおぼえて、大声で、笑い出したのです。手前は、笑い乍ら斬られようとした……。ところが、意外な手前の様子に、先生の構えが、隙を生じた。手前の本能がその隙をのがさなかった。手前は、ひと跳びして、先生の小手を打った。落ちた刀を掴んで、ひとふりで、先生の首を刎ねた……」

　その面貌が、陰惨な翳の中に、自嘲の笑いを刻んだ。

「まっとうにいけば、妻となったひとから、敵として、勝負をいどまれている。莫迦々々しいことだ。はははは」

　その乾いた笑い声が終らぬうちに、由利は、

「えいっ！」と、斬り込んだ。

　同時に、要は、抜き打ちに、腰から白光を噴かせて、由利の一刀を払い落していた。おびていたのは、木刀ではなかった。

　由利は、みたび、からだを、要の双手に捕えられた。要は、熱い息を由利の顔へ吐きかけつつ、囁いた。

「貴女は、手前が、絶対に、刀を抜かぬものときめて居られた。そこに油断があった。貴女は、負けたのだ。手前は、約束通り貴女をわがものにする！」

　由利は、まぶたをとじて、全身から力をぬいた。ぐったりと重心をあずけて来た若い女の、柔軟な、しなやかな肢体に、男の血は、狂おしく波立った。

「由利殿！」

　上ずった声音で、呼んで、力いっぱい抱きしめた刹那——。

「う、う、うっ！」

　歓喜の表情は、苦悶の色に一変して、ずるずると、由利の足もとへ、崩れ落ちた。その脾腹には、ふかぶかと懐剣が突き刺さっていた。狂四郎が与えた暗示を、由利は、みごとに実行したのであった。

酔いどれ名人

一

「ああっ……だ、だれか——お、おたすけ下されっ！」

　悲鳴をあげて、血相かえた一人の青坊主が、落葉集めの竹箒を抛り出して、つッ走った。

　初冬の空に、すっきりと浮き出た感応寺五重塔をむこうにのぞむ谷中墓地でのことだった。

　墓地の裏手は、古びた寺院の土塀のつづく往還となっていて、薄陽をあびて、ひっそりと、塀ごしの松の影を路上に匍わせていた。

　納所は、走り出て、おりよく、通りかかった黒の着流しの浪人者をみとめるや、無我夢中で、

「お、おねがいじゃ！　お、お武家殿っ！　お救い下されっ！」

　と、絶叫して、両手をあわせた。

　眠狂四郎は、黙って、立ちどまり、墓地の方を見やった。

　別に、迫って来る殺気も感じられぬ。

　納所は、おちつきはらった対手の態度に苛立って、その袖をとらえた。

「とどめて下されませ！　せ、せ、切腹されようとしているおひとが、ありますのじゃ！」

　狂四郎は、ちょっと眉宇をひそめたが、

「死にたい者は、死なせてやるがいい。滄海（そうかい）の一粟（ぞく）が消えるだけの話だろう」

　冷やかに、云いすてた。

「そ、そのような、無、無情なことを——」

「引導をわたしてやるのが、お前さんの役目だ。独生独死独去独来——朝の勤行で、誦（とな）えたばかりではないのか」

「お、おねがいでござります！　覚悟の死とは思われませぬ。哭いてござるのじゃ！　哭きながら、刀を——」

「…………？」

　狂四郎の眸子（ひとみ）に、動くものがあった。泪を透しておのれの無力をいたわる人間に対して、この男の感情は、意外に、優しい憐憫を湧かせる——。

　納所が、袖をつかんだ手をふりはらわれて、あわてて、もう一度すがろうとした時、狂四郎の足は、非常な速さで、墓地にふみ入っていた。

　五間の彼方に……すでに、腹をくつろげて杉原紙を逆

巻いた小脇差を右手につかんだ若い武士の端座姿を見出した狂四郎は、間に合わぬとさとって、小柄を抜きとった。
　小柄は、冬陽にきらっと煌いて、墓碑と墓碑のあいだを縫った。
「うっ！」
　手の甲を刺されて、小脇差をとり落した武士は、蒼白な貌をふりむけると眦をひきつらせて、うっそりと佇む狂四郎を、かっと睨みつけた。
「余計な邪魔だてをするなっ！」
　二十代も半ばに達していまい、綺麗な顔立ちで、品もよい。武芸などとは縁が遠そうな、繊細すぎる神経の持主であることが、一瞥で知れる。事実、血汐を噴かせるその手は、白く、細かった。腹を切る力などなさそうに思われる。
　狂四郎は、ゆっくりと歩み寄ると、無造作に手の甲から、小柄を、抜きとってやり、
「その指が使えるまでには、五、六日かかろう。その期間を、わたしが、生命をおあずかりしよう」
と、云った。
　武士は、唇をわななかせたが、かえす言葉が見つからないままに、俯向いた。泪が、膝へ、したたった。
　狂四郎は、武士の前にならんだ墓碑の立派さで、家柄のよさを読んだ。

二

　谷中から根岸へ下る芋坂の中途にある小綺麗な料亭で、その若い武士が、狂四郎に語ったのは、次のような奇怪な事件であった。
　彼は瀬川図書といい、百俵十人扶持の小十人組であった。小十人組は、御番方であり、御目見以上の、立派な家筋の旗本である。しかし、百俵十人扶持は、御番方中最低禄であり、俗に百俵六人泣き暮し、といわれる貧乏旗本であった。（ちなみに、旗本というのは御目見以上、御家人というのは御目見以下をいったのである）
　……われら旗本のくらしが、どのように惨めな逼迫ぶりか、これは、今更に申上げるまでもない。それがしの家も、例にもれるものではなかった。槍一筋の格式のみに亡霊のごとくとり憑かれ——その槍すらも、ひそかに質入れにするくらしは、それがしが物心ついて以来、一度も、好転することはなかった。
　父の一生は、金利に追われる苦しみの連続であったといって過言ではない。それでも、息子のそれがしに、せめて金利の地獄からは、まぬかれさせてやろうとの親心

から、再起おぼつかぬ病牀にあって、親戚一番の富有を誇る大御番頭をつとめる守屋四郎左衛門を招いて、家宝の雪舟「寒江独釣」を引きとってもらった。
　その代金は、六百両であった。しかし乍ら、守屋四郎左衛門は、二条の御城御門番頭時代に、大阪商人と気脈を通じて、禁裏の口向（勝手方）諸役人を籠絡し、御領米を一手にとりしきって、莫大な私腹を肥やしたといわれるだけあって、即座に応諾して、屋敷から金子をとり寄せて、「寒江独釣」を持ち帰って行った。
　それがしが、それを知ったのは、父が、生涯の債鬼であった骨董舗「懐風堂」を呼んで借金を完済した故、安堵するように、と告げてくれた時だった。
　それをきくや、それがしは、目晦むような衝撃を受けたものだった。
　おのれの口から云うのは、面映いが、それがしは、幼少の頃から、聊か画才があるのを頼んで、将来は、このわざをもって、家計を霑す決意であった。現存の絵師に師事せず、支那の古画を研鑽し、これに、西洋絵技たる陰影法、遠近法、傅彩を加えて、気韻を生動せしめる大きな野望を抱いたのも、必ず一流たらんの覚悟をつらぬくためであった。
　したがって、それがしの目下の師は、雪舟であった。
　その雄宕の筆法、秀潤の墨色、剛柔相俟っておりなす配合の美しさ——筆法の奇抜、墨色の蒼古にはおよばずとも、排列布置の妙に、いかに近づくかが、それがしの日夜刻苦の課題であった。
　さいわいに、わが家には、破墨の山水図がある。刻苦のたうちがきわまれば、これを床の間にかけて、心気をしずめることができた。
　その手本を、父は、ついに、処分してしまったのだ。
　もとより、父は、それがしが、如何に、「寒江独釣」に魅せられていたかを知らぬわけではなかった。ただ、息子を債鬼から解放してやり、画道に専念せしめるためには、これはやむを得ぬ仕儀だ、と思いきめたのであったろう。息子が、将来、一流の絵師となったならば、「寒江独釣」を、再び買いもどすことを、守屋四郎左衛門に約束させての上でのことであったが——。
　だが——。それがしは、どのように債鬼に苦しめられようとも、「寒江独釣」を手渡したくはなかった。断腸の無念とは、このことだった。
　とはいえ、死に臨んでの父の慈悲心を恨むわけにはいかず、それがしは、泪をのんだ。
　父の初七日を迎えた朝、骨董舗「懐風堂」がおとずれた、と若党から取次がれたそれがしは、父を間接に殺し

たのは彼奴だ、とあらためておのれに云いきかせ、玄関の式台に立つや、
「何の用だ？　二度と、貴様の顔は見とうない！」
と、きめつけた。
「ところが、そうは参りませぬので――」
ふてぶてしく嗤って、懐風堂が、それがしの前にひろげてみせたのは、意外にも、五百両の借用証文であった。
それがしは、愕然となって、
「父は、完済したと遺言されたぞ！」
と、怒鳴った。
「失礼でございますが、大殿様は、お思いなされてから、お脳の加減も、聊か――」
「無礼な！　父は、葬儀万端遺漏なきように、草鞋をうしろ前に穿かせることまで遺言して逝ったのだぞ。五百両の借金を忘れる筈があるか」
「では、この証文は、てまえが、贋ものを作ったとでも仰せられますか。お父上様の筆蹟かどうかは、貴方様が、一番よくご存じでございます。おあらため下さいまし」
受けとってみて、それがしは、茫然となった。
まさしく、父の筆蹟であったし、わが家の印が捺してある。
しかし、これとそっくり同じ証文を、それがしは、父から受けとって、庭で焼きすてたおぼえがあるのだ。
――父は、五百両の借用証文を、二枚書いたのか？
……そんな莫迦なことはない。七年前、父が五百両借りて来た時のことを、おれは、はっきりと記憶して居る。五百両の金子も、この目で見て居る。それは、その日のうちに、また、わが家から四方へ散ってしまったが……
……。
惑乱の態のそれがしに向って、懐風堂は、殊更にいんぎんに云いかけて来た。
「若殿様、てまえのお願いをききとどけて下さいますならば、この証文は、お返しいたしましょう」
書院に通った懐風堂がきり出した用件というのは、守屋四郎左衛門から、雪舟「寒江独釣」を借りて来て、一分もちがわず模写して欲しい、という頼みであった。
「それをもって、どこかの成上りの分限者でも誑かそうと申すのか？」
「誑かすのではございません。贋を承知でおもとめになるお客様は、これで、なかなか多いのでございます。まだお若い貴方様には、そうした事情にはお疎いと存じますが、書画骨董に贋ものが多いといたしましても、これ



は、一概に、わたくしどものしわざをおとがめなされるわけに参らぬのでございます。古来の名筆名品には、かぎりがございます。それに対して、おもとめなさるお客様は多すぎる。こうなりますと……例えば、どこかの大町人が毛利様のお屋敷で、雪舟の『山水絵巻』を拝見して戻って来たといたします。のどから手が出る程、それが欲しい。したが、『山水絵巻』は、日本に一巻しかない。そうなれば、せめて、贋もので我慢しようということに相成ります。あるいはまた、さるお大名が、雪舟をもとめて参れ、と仰せられます。ご家来は、てまえをお呼びつけになって、雪舟を見せろ、とお命じになります。とんでもない、雪舟はおさまるところにおさまって、余分の作など、鉦と太鼓で捜してもございませぬ、と正直にお答えいたしますと、そのご家来も、それは先刻御承知で、いや、殿のご命令なのだ、雪舟ならば、いかような雪舟でもよい、当家では百両の雪舟を求めて居る、百両の雪舟のうちでも、出来のよい品を吟味して持参するように、という世故にたけたご注文でございます。おもとめの方々が、贋を承知なさる以上、てまえの方でも十両の雪舟から、五十両、百両、三百両と、いろいろの雪舟を用意いたさざるを得ないではございませんか。……とまあ、こういう次第でございます」

しゃあしゃあと、懐風堂は、云ってのけたものだった。

「未熟の拙者には、五百両の雪舟など描けぬ」

それがしが、つッぱねると、懐風堂は、にやりとして、

「ねだんをつけるのは、てまえどもの方でございますよ。若殿様は、ただ、精根を傾けて、模写して下さいますれば、それでよろしいのでございます。これこそ、貴方様としては、この上の勉強はないではございませんか。大殿様には、長らく御贔屓に相成りましたので、せめてものご恩がえし、また貴方様には、絵師としてお立ちあそばすのにはなむけとして、懐風堂の些少乍らの心づくしとおぼしめし下さいまし」

一応筋の通った話であった。

言葉巧みな懐風堂のさそいにそれがしは、つい乗せられてしまった。

三

十日の期限をきって、守屋家より、「寒江独釣」を借り受けて来たそれがしは、文字どおり寝食をわすれて、それととり組んだ。

御承知でもあろう、雪舟は、明に赴いて、大日山麓の

天童寺に入り、禅学を修め、一歳も経ざるうちに、禅班の第一座を占めた人物。いわば、その画の卓絶せる濶さ大いさは、彼が禅人であったからにほかならぬ。

ただ、設色と破墨の技のみをふるって、あのような逸品がなし得るわけはない。その技すらも五里霧中の、たかが二十四歳の若僧たるそれがしに、一分の狂いもなく、臨模(りんぼ)の筆がふるえる道理がなかった。

それがしは、懊悩し、絶望し、筆をたたきつけて、このまま、あてどない放浪の旅に出たい衝動に、幾度び駆られたか知れぬ。

約束の日限が来た一夜、それがしが、数十枚の反古をつくった挙句、一枚だけのこしたのは、これならば自身も我慢できる出来だと考えたからではなく、懐風堂の憤りを招くよりも嘲りを買った方がいい、と後日に備えて屈辱に堪える決意をした故であった。

それがしは、見くらべているうちに、ひき裂きたくなるおそれで、いそいで巻き包んでしまった。

ところが――。

それがしが、懐風堂の家をおとずれて、奥の間に、真贋二幅をかけならべるや、意外にも、懐風堂は、相好をくずして、

「おう、お見事でございます。よくぞ、これだけ、真に逼(せま)られましたわい」

と、感嘆したではないか。

「懐風堂、まこと、左様に思うのか?」

それがしの方が、疑惑に駆られて、念を押さずにはいられなかった。

「まことに、立派なできばえでございます。てまえも商売であるからには、お世辞は申しませぬ」

懐風堂は、きっぱりとこたえて、本心であるあかしをみせるように、ねぎらいのために、それがしを、吉原にさそった。

引手茶屋で、吉原芸者を十人あまりもつらねて、莫迦騒ぎをしたのち、江戸町二丁目の大籬(まがき)玉屋で、呼出し花魁を敵娼(あいかた)につけた懐風堂の散財ぶりに、それがしも、いつの間にか、――懐風堂は、本当におれの天分をみとめて、将来にのぞみをかけたのだな、とおろかしく自惚れていたのであった。

翌日、つれだって、懐風堂の家へもどった時、真贋二幅は、昨日のままに、奥座敷の床の間にかけられてあった。

酔いのさめたそれがしの目には、やはり、おのが模写は、未熟きわまるものに映り、懐風堂ともあろう目ききが、何故に、過褒するのか――瞬間、なぜともなく、不

吉な予感が掠めていた……。

それがしは、真物の方を包んで、逃げるように出て、その足で、守屋家に立寄って、それを返却し、わが家に戻って、懐風堂がもどしてくれた借用証文を焼きすてると、こん後絶対にあの狡猾陰険な骨董屋とは、交際を断とう、とかたく肚に誓ったことだった。

それがしの不吉の予感は正しかった。

それから二月後——一昨日のことであった。

突然、守屋四郎左衛門が、血相変えて、荒々しく乗込んで参って、挨拶も交さずに、

「図書、貴様は、この大伯父を誑(たばか)ったな！」

と、怒鳴りつけて来た。その小脇にかかえられた包みが、「寒江独釣」と見てとったそれがしは、はっとなって、全身をこわばらせた。

「貴様は、修業のためと詐って、わしから雪舟を借り出し、ひそかに模写し、その贋物の方を、何食わぬ顔で、わしに返し居ったな！」

これをきいて、それがしは、啞然となった。とんでもない、それこそ真物にまぎれもないのだ、と云いかえすと、

「おのれがっ、この期におよんで、まだ白々しく空とぼけるかっ！　真物の方は御書院番頭大西惣左衛門殿の書院にかかって居ったぞ！　それとも、『寒江独釣』がこの世に二幅もあると申すのかっ！　たわけっ！　昨日、偶然、大西殿にまねかれたわしは、驚愕して出処を問うたところ、懐風堂とか申す骨董屋より、千三百両で買いうけたという返辞であった。……まさに真物にまぎれもなかったことは、恰度来合わせた田原藩士・江戸城一橋門関頭の渡辺崋山が、保証したところだぞ！」

「…………」

——ちがう！　それは贋に相違ない！

肚裡で絶叫しつつも、口には出せなかった。模写の作品を、懐風堂にたしかに、それがしは売ったのだ。天に吐いたつばきが、おのれにかかったのだ。この罵言は、あまんじて、受けねばならぬ、とうなだれた。

すると、四郎左衛門は、包みを解くのももどかしげに、「寒江独釣」を、ぱっと投げひらくやいなや、

「こんな未熟な贋物をつン返し居って——」

とわめきざま、びりびりっと、ひき裂いた。

あっとなったそれがしは、とどめようと、とびついたが、武芸自慢の大兵の力まかせの一撃をくらって、横転してしまった。

四郎左衛門は、ずたずたに破り散らしておいて、

「図書、五日の猶予をくれる。いかなる工面をいたそうとも、六百両をつくって、返しに参れ。もし違約いたさば、この旨、組頭に届出て、評定所の裁きにかけても、おのれが不届の所業を処断いたすぞ！」

威丈高に、呶号をのこして、立ち去ったのであった。

それがしは、そのあとで、ちぎれたそれを、丹念につなぎあわせてみた。

まさしく——真物に相違ないではないか。それがしは、四郎左衛門の軽率な振舞いに、心底から憤怒した。が、もはや、あとの祭であった。

ただ、念のため、懐風堂に赴いて、大西惣左衛門に、それがしの模写を売ったかどうかを、たしかめた。

懐風堂は、にやにやし乍ら、

「渡辺崋山先生までも、真物とみとめて下さったのでございますよ。貴方様は、これで、充分の自信がお持ちになれるではございませぬか」

と、おだてて来た。

いまはもう、懐風堂だけが、それがしの頼みの綱であった。

それがしは、おそるおそる、六百両貸(か)してもらえまいか、と申出た。

ところが、懐風堂は、そのとたんに、冷淡きわまる顔つきになって、にべもなく、拒絶したのだ。

それがしは、この上、恥をしのんで、懐風堂の前に両手をつくことは、出来なかった……。

四

語り終って、頭をふかくうなだれた瀬川図書に、狂四郎が、微笑し乍ら云ったのは、

「成程——、懐風堂の小ずるい手妻が見破られぬようでは、お手前の画技も大したものでないことが、およそ想像がつくな」

皮肉なその言葉であった。

図書は、蒼白の貌を擡げて、

「手妻といわれると？」

「そいつを、ひとつ、懐風堂に、披露させることになる」

そう云って立ちあがった狂四郎は、

「つなぎあわせの真物をお借りしよう」

と、つけくわえた。

その日の黄昏どき、狂四郎は、半蔵門外にある田原藩邸内の、渡辺崋山をおとずれて、大西惣左衛門所蔵の「寒江独釣」が、まこと、真物であったか、と糺した。

崋山は、確信をもってまちがいないと、こたえた。

「では——」

狂四郎は、にやりとして、持参した、図書が貼り継いだ一幅を、するするとひらいてみせた。
「これもまた、真物に相違ないはずですが、お手前がごらんになった作と、どこかに微塵でもちがいがあるか、うかがいたい」
崋山は、大きな愕きで瞠いた双眸を、まばたきもせずに、食い入るようにそれへあてていたが、やがて、うめくように、
「ちがっているのは、表装のみです」
と、こたえた。

その夜、更けて――熟睡中の懐風堂は、枕を蹴とばされて、はね起きた。
「貴様とは、以前会ったことがあるな、懐風堂」
有明の灯かげを横面に映して、薄ら笑っている異相を仰いで、懐風堂は、生きた心地もなく居竦んだ。
「眠の旦那――」
「今夜は、泥棒になって忍び入った」
「ご、ご冗談を……」
「いや、本当だ。但し、頂戴したいのは、大した品ではない」
「へ？ い、いったい、な、なにが御所望でございます？」
「瀬川図書が模写した雪舟の『寒江独釣』だ」
「あれは、もう……」
「大西惣左衛門に売ったというのか？」
「へ、へい」
「それならば、このわたしが、こうして忍び込んだのは、無駄であったというわけだな」
「左、左様に相成りまするが」
「あいにく、眠狂四郎という男は、無駄な真似はせぬ。絵がないのであれば、お前の首でも貰ってゆくか」
懐風堂は、ぶるっとひと顫いしてから、片隅の厨子棚に寄って、大文箱の中から、掛物をとり出した。
「そこへ、かけろ」
床の間に、ばらりとつるされた「寒江独釣」へ、冷やかな眼眸（まなざし）をくれた狂四郎は、苦笑して、
「真に逼るには、あと三十年はかかろう。こんなしろものを、真顔でほめた貴様は、雪舟をはずかしめた咎で、二千両ばかり損をすることになる」
「旦那、ご、ごかんべんを――」
「あやまる相手がちがうだろう。……冷えて来たな。夜あけまでには、まだ一刻ある。酒をもらおうか。そうだ、貴様が、離れに酒で飼っている気ちがい爺さんも呼

んで来い。たまには、たらふく飲ませてやろうではないか。下手糞な贋物を眺め乍ら、娑婆と別れの宴をはるのも、また乙なものだ」

五

翌日の午さがり――。
大西惣左衛門屋敷の書院には、このたびの事件の関係者たちが、狂四郎によって集められていた。
主人惣左衛門、守屋四郎左衛門、渡辺崋山、瀬川図書、懐風堂。
そして、懐風堂のわきには、うす穢い、六十がらみの爺さんが、うずくまっていた。膝に置いた土色の手が、絶えず、ぶるぶると顫えているのは、酒毒のせいであろう。
床の間には、当家所蔵の「寒江独釣」にならべて、四郎左衛門が破りすてた方も、かけてあった。
狂四郎は、末座に腕を組んで、一同に、しばらく、真物二幅を見くらべさせておいてから、やおら口をきった。
「一幅しかない名作が、二幅に化けた――この謎が、お手前様がたには、お解きになれましょうか？」
惣左衛門も四郎左衛門も崋山も図書も、ただ、狐につままれたような、怪訝の面持で、狂四郎を見かえすばかりだった。
「これより、その手妻をごらんに入れる。……おい、藤兵衛！」
狂四郎は、爺さんへ、鋭い視線を送った。
「貴様の腕前を御一同に披露しろ」
「へ、へい――」
爺さんは、おどおどと、狂四郎を見やって、
「酒をお、おねがい申上げます」
狂四郎は、頷いて、惣左衛門に、所望してやった。
爺さんは、大盃で三杯、息もつかずにあおった。とたんに、顔から、痴呆の表情が消え、手の顫えも、ぴたりととまった。
爺さんが、中央にすすみ出て、緋毛氈の上にひろげたのは、図書が模写した「寒江独釣」であった。
小刀と竹刀を膝の前に置いた爺さんは、しばらく、十指をもみあわせていたが、まず、小刀を把って、表装の上地題と下地題をのこして、中縁を剝ぎ、画地をめくりとった。まことに、鮮かな手つきだった。
ついで、竹刀を把るや、片膝で画地の中程をふみおさえて、上一文字の端をつまみ、ぴーんと張った。
一同は、固唾をのんだ。懐風堂だけが、肩をすぼめ

て、うなだれていた。

爺さんの姿は、鵜毛でついた隙もない剣客の構えに通じる鋭気をみなぎらせていた。双眸は、凄愴といえるまでに、異様な、爛たる光を放っていた。よれよれの縞木綿につつまれた枯木のような五体から、一切の世俗の念はふりすてられ、心気は、これからふるう技のために、くまなく冴えたとみえた。

それから……約半刻。

贋作「寒江独釣」は、竹刀によって、見事に、上下二枚に分離されたのであった。まさに、神技であった。

二枚をならべると、下のほうが、いくらか墨色が薄いかと思われるだけで、まさしく、まったく同じであった。一同の口から、深い嗟嘆の声が、もれるのを待ってから、狂四郎は、明快な解決を下した。

「懐風堂は、前非を悔いて、つぎのように、願い出て居ります。大西殿へは、代金千三百両のほかに、三百両の詫び料を添えて、お返しいたす。よって、あの真物は、瀬川図書殿へお渡し下さるよう――。それから、守屋殿へは、図書殿にかわって六百両に二百両の利子を加えてお返し申上げる。……なあ、懐風堂そうであったな？…………これ、この通り平伏いたして居ります。何卒御承引の程を――。金子は、すでにここに持参いたして居る用意のよさです」

甲賀忍組（しのびぐみ）

一

急に、青空をおしつつんで、降って来た俄雨であった。

西の一角には、明るい陽が照り映えて居り、雨雲のふちは、茜にいろどられて美しいのであったが、ここ下谷広徳寺の寸足らず門の屋根に落ちて来る雨脚は、瀑布のように烈しかった。

背後の上野山内から来て、入谷田圃の方へ抜けるのであったろうが、屋根にかぶさるように降りて来た雨雲は、このまま、夜まで動かぬように、深く厚いものに思われた。

本堂の方から、飛沫をあげる甃石（しき）をいっさんに走って来た一人の武士が、門の下へとび込んで、

「やあ、これはひどい！」

と、明るい声をあげて、そのすさまじい降りかたに、あきれた。

二十歳を越えて、まだ間もなくであろう。きりりっとひきしまった男前で、武技に精を出しているのか、小麦色に日焼けている。袖まくりして、のぞかせた二の腕の筋肉もたくましい。なによりも、気持がいいのは、大きく張った双眸の耀きをはじめとして、いきいきとした活気が、姿ぜんたいに満ちていることである。

青年武士ならば、これは当然のことであろうが、一挙手一投足すべて形式に律せられ儀礼に縛られた当節にあっては、暢達の気、鷹揚の風が全く喪われ、家庭の厳格に過ぎて和楽の愉しさが得られぬのに堪えきれず、きそって遊里に趨る惰弱が蔓延しているさなかに、こうした生気のあふれた爽快な若者は、珍重すべきものとなっているようである。

若者は、目を移して、欄間の海馬を仰ぎ、

「これか、左甚五郎作は――」

と、呟いた。

この山門は、この海馬で有名であった。山門を造ったのは、浅草諏訪町の棟梁政五郎という番匠であったが、その図を引いたのは、弟子の左甚五郎であった。甚五郎が病気で一時郷里へ帰ったあとで、他の弟子が誤って柱を一尺切り過ぎてしまい、甚だ低い格好に出来あがってしまった。政五郎は、これを咎められたが、弟子をかば

って、
「いかなる大火に遭おうとも、必ずこの門だけは焼けのこるように工夫いたしたものでございます」
と、こたえたという。
それから、政五郎は、左甚五郎に命じて、祝融の災除けとして、見事な海馬を彫らせて、かかげたのであった。
事実、この門は、たびたびの火災にも、類焼をまぬかれて、今日にいたっているのであった。享保五年春日本橋箱屋町から出た大火、享保六年春神田三河町から出た大火、元文二年夏下谷八軒町から出た大火に、広徳寺は、本堂、方丈をはじめとして、境内のすべての建物が焼失している。にも拘わらず、この総門だけは、その難からのがれているのである。
「ふうん。わからんな。この海馬の、どこにそんな神秘な力がこもっているのか――。わしには、ただの彫りものにしか思えぬ。名匠の腕が、どういう点で発揮されて居るというのか？」
若者は、正直に、不審の首をかしげたものだった。
このとたん――。
「榊原政之助殿とお見受けいたす」
不意に――まったく、不意に、その声が、背後から、かけられた。
若者は、本能的な警戒の身ごなしで、開きなおった。
この山門内へ、誰かが入って来る気配を、全く感じなかったおのれの不覚を、愧じて、その貌は、赧くなっていた。
若者は、たったいま、この広徳寺にある剣聖柳生宗矩の墓に詣でて、わが剣のさらなる上達を祷って来たばかりであった。
二間むこうの、太柱のわきに彳んでいるのは、どこといって特長のない、風采のあがらぬ、中肉中背の武士であった。傘も持たず、濡れてもいないところをみると、榊原政之助よりさきに、ここにいたものであろうが、それにしては、どうして、気配がなかったのか？
政之助は、もう一度、おのれの不覚を愧じた。
「御用か？」
きつい眸子をあてて、問うた。
「手前は、土方縫殿助の家臣。ほんの少時、おつきあいを願えますまいか」
抑揚のない、ぼそぼそとした声音で、たのんで来た。
「公事ならば屋敷へ参られい。私事ならば、ここでうかがおう」
政之助は、きっぱりと云った。

しかし、対手は、無表情で、
「ほんの少時でよろしいのです」
と、くりかえした。
べつだん、敵意を含んでいる様子でもなかった。ただ、政之助は、そのもっさりとした態度に、なにか、ひどく不純な意図がかくされているような不快な印象を受けたし、その存在に気づかなかったのは、こちらの不覚ではなく、もしかすれば対手に気配を断つ修業が出来ていたのかも知れぬ、と疑惑を抱きはじめていた。

二

しばらくの押問答があった。
政之助が、面倒になって、
「参ろう」
と、承諾したのも、雲がきれて、陽ざしが明るくさし込んで来て、対手の顔の半面を照らしたからであった。どう見ても、甚だつまらぬ人間に思えた。
政之助は、自分から、先に立って、濡れた石段を降りて、樋落ちの水があふれる溝をまたいで、広場へ出た。
雨は、まだ、ぽつぽつと落ちていたが、歩いて行くさきの路上の溜り水は、陽を映して光っていた。
幡随院門前を通って、右へそれると、浅草へまっすぐにのびる広い往還になる。それを途中で、左へ折れて、古びた寺院の土塀に沿うて行くと、ひろびろとした入谷田圃がひらける。
空は、いつの間にか、拭ったように、青く晴れ渡っていた。
とある庚申堂の前に達した時、政之助は、ふりかえって、
「何処へつれて行こうというのだ？」
と、訊ねた。
すると、対手のこたえは、まことに、小莫迦にしたものであった。
「このあたりでよろしいかと存じます」
「なに？」
人影のない場所をえらんだのだな、と咄嗟に頷けた。
前方と右方は野、背後は寺院、そして、左手は、松平出雲守の下屋敷の高塀が長くめぐっているのであった。
「どうしようというのだ？」
政之助は、全身に鋭気をみなぎらせて、睨みつけた。
これに対して、対手は、依然として無表情で、さらに人を食った返答をした。
「貴方を人質にする」
「たわけたことを申すなっ！」

かっとなって、一喝をあびせるのと、庚申堂の裏手から、影のごとくに、音もなく三名の武士が出現するのが、同時だった。

いずれも、政之助をともなって来た男と同様、なんの取柄もなさそうな手合とみえたが……。

無言で、すすっと、おしつつんで来た陣形のとりかたが、実は、なみなみならぬ訓練によると、政之助は、見てとった。殺気もみせず、遠目では、なにか立話をしている光景と受けとらせる静かな様子が、かえっておそろしい敵である証拠となった。

「なんの理由による無法か、云えっ！」

政之助は、刀の鯉口をきって、抜き打ちの構えをとり乍ら、叫んだ。

「問答は、無用といたす。われらは、主命を遂行するだけのことです」

「よし、来いっ！」

血気に猛って、政之助は、一刀を鞘走らせると、ぴたっと青眼にとった。

ところが、敵がたは、一人も、刀を抜かなかった。

ただ、――正面の一人だけ、分銅鎖のついた鎌を、宛然奇術のように、手に生んでみせたのである。

若い政之助には、しかも猶、これらの武士の正体が読みとれなかった。

――小ざかしくも、このわしを手捕えようとは！

恰度、このおりであった。

吉原がよいとも見える二人づれが、一町ばかりむこうの海禅寺と曹源寺の、土塀にはさまれた小路から、ふらりと出た。

「旦那！」

こちらの光景をみとめて、小肥りのお店者態の方が、黒の着流しの浪人者の袂を引いた。頭をまわした眠狂四郎は、ちょっと眼光を鋭いものにしたが、すぐには、動こうとしなかった。

「旦那、ありゃ、甲賀衆でござんすぜ」

鼠小僧次郎吉は、これまで、忍び込んだ大名屋敷から、数度、お付き忍者に追われて、危うく生命を落しそうになったにがい経験を持っている。

「うむ。忍者らしいが、笄町の住人どもとは、すこしちがうようだな」

麻布笄町は、笄橋という小さな橋の名からとったもので、笄橋は甲賀伊賀橋の転化――すなわち、この橋をはさんで、甲賀衆と伊賀衆の忍者たちが、屋敷を与えられていたのである。



忍者が、この時代にいたっても、健在であったことは、蕪村の「甲賀衆の忍びの賭や夜半の秋」という一句であきらかである。

「あの若ざむれえは、できることはできそうだが……ちと、危ねえんじゃござんせんか?」

「生命をねらわれて居るのであれば、もう殺られているだろう」

「へえ?」

「生捕るこんたんだ」

そう云い乍ら、狂四郎は、その場へむかって、ふところ手で、ゆっくりと歩き出した。

この間に、政之助は、二、三度、自身の方から攻撃に出るべく、気合を満身から爆発的に噴かせようとした瞬間を、沈黙の圧力によって、おさえられ、いたずらに、敵方が尋常一様の者どもでないことを思い知らされていた。

機敏にして沈着な心的要素と、強靱にして軽捷な身的要素と、両面の素質を備えた者がえらばれて、心身をあらゆる苦難の場合にも堪え得るようにきたえあげて、頭脳と技術を、忍びと闘いのために、完璧なものにしているのが忍者である。

馬庭念流の免許を有つ政之助と雖も、思いももうけぬ異常の修練を積んだ忍者四人にかこまれてしまっては、目に見えぬ網をしぼられるにまかせて、なす術もなく、五体を凝結させているよりほかはないのであった。

青眼にとったまま、夥しい体力が、急速に消耗し、すでに、その悲惨が、満面の汗となり、肩の喘ぎとなっていた。

といって、忍者たちに容易に躍りかからせぬ反撥力は、まだ、政之助の四肢のうちにひそんでいたが……。

狂四郎は、その凄絶の対峙の場へ、七、八歩の距離に近づいた。

と――一人が、つと、包囲陣から抜けて、狂四郎にむかい立った。

「他事なれば、容喙御無用!」

陰気な低い、しかも刺すような声音で云った。

それに対する狂四郎のこたえは、冷やかな薄ら笑いであった。

瞬間――。

忍者の右手が躍って、銀色に光るものが、唸りをたてて、狂四郎を襲った。

次の刹那、狂四郎の右手には、無想正宗があり、それは、足もとに落ちていた。手のひらに納められる程度の大きさの鉄の円鐶で、まわりに鋭く先の尖った針が植え

てある飛道具であった。鏢という。

目にもとまらずに、打ち落した狂四郎の手練に、忍者は、はじめて、その面上に凄じい殺気を刷いた。

左右の手が、交互に、水車のように目まぐるしく廻りはじめるや、鏢は、二列につらなって、閃光を宙に引いた。

狂四郎は、およそ、十五、六個の兇器を、ことごとく、地べたへ払い落した。

政之助の方は、助け人の出現に新たな気力を得て、猛然と、正面の敵へ、斬りつけていたが、むなしく空を搏ち、

――南無っ!

と、切尖を弾きかえそうとしたところを、右側から弧を描いて飛んで来た分銅鎖に、刀身の中程を、ぐるぐるっと巻かれていた。

「むっ!」

満面を朱にして、奪われまいと、ふんばった一瞬、もう一本の分銅鎖が、左側から飛んで来て、毒蛇のように、足くびに搦みついた。

「くそっ!」

悲痛な呻き声とともに、その片脚を宙にのこして、政之助は、仰のけに、地ひびきをたてた。

それと見た狂四郎が、風のように奔って、まるで藁縄でも切るように、無造作に、ぴいんと張った鎖を断った。

ダラリと無想正宗を下げた狂四郎は、

「忍者は、引上げぶりが鮮かだときいて居るが――」

と、皮肉な言葉を投げた。

「おぬし、眠狂四郎だな」

「われ乍らよく売り込んだものだ。おぬしらの脳中の過去帳に記さねばならぬ名前だ、ときめてくれてかまわぬ」

数秒間の不気味な沈黙の対立があって、

「引けっ!」

一人が、指示した。さっと、数間をしりぞいてから、別の一人が、

「榊原政之助殿、父御におつたえねがおう。近日中に、必ず、天皇御璽を頂戴に参上いたす、と――」

と、云いのこした。

三

「危急をおすくい下され、千万忝う存じます。それがしは、榊原左近将監の嗣子政之助と申す者です」

政之助が、いんぎんに礼を述べると、狂四郎は、もう

ふところ手にかえっていて、
「すると、北町奉行の榊原主計頭殿の甥にあたられるわけですな」
「左様です。伯父をご存じですか？」
「本来ならば、わたしは、白洲で伯父上の裁きを受ける行状を重ねた男だが……妙なめぐり合わせで、無頼の腕がお役に立ったことがある。ところで、天皇御璽をもらいに行く、という捨科白があったが、あの連中を使嗾した人物が何者か、ご承知か？」
「御本丸老中の老臣土方縫殿助殿の家臣だ、と名のりましたが……」
「あ——そうですか」
狂四郎は、微笑して、合点した。
天皇御璽ときいたとたん、狂四郎の脳裡に、ふっとひらめく直感があったが、やはり、あたったようである。
桂離宮から無断で出奔して、江戸へ出て来た桂宮明子内親王を、家斉将軍に与えようと、土方縫殿助が企図し、贋勅状を作成するために、三位権中将久我忠成に天皇御璽を盗ませて、品川宿本陣まで持参させたところを、明子をおのが偶像とする白鳥主膳に奪い去られた——このいきさつを、狂四郎は、武部仙十郎からきいていたのである。
「立入ったお訊ねをするが、貴方のお父上は、天皇御璽を、どこから手に入れられたか、おききおよびですか？」
「それがしは、父が、天皇御璽を持って居ることすらも知らなかったのです。そのそれがしを、何故に、彼奴らは襲って来たのか、ふしぎです」
「貴方を生捕って、御璽と交換しようという計画だったのでしょう。どうやら、貴方が、お父上の秘蔵であると知ってしかけたしわざらしい」
狂四郎には、若竹のようにすくすくと育ったこの青年の爽やかな生気が、この上もなく、好もしく思われた。
——同じ旗本の家に生れ乍ら、このおれと、こうも育ちがちがうものか！
おのれの風姿につきまとう惨めな暗い業念の翳が、こうした明るい美しい、若さにあふれた容子に接すると、いまさらに、堪えがたい嫌悪となるのであった。
「あの忍組は、多分、土方縫殿助が、江州の山峡で、特に極秘裡に訓練した者たちと思われる。並の剣をもってしては、到底叶わぬことです。貴方が不覚をとられたのは、恥とする必要はない。……変化の術に対しては、こちらも、意表の技をふるうよりほかはない。それを忘れずに、彼らの侵入に備える工夫があることです」
穏やかに、狂四郎は、云いきかせた。

塙保己一の「故実叢書・武家名目抄」中「忍見付」の条に、次のように記されている。
「按ずるに忍目付は、常に定めおかるる一職の名にあらず、すべての目付にもあれ、徒士、中間、小人の目付、又は近臣、忍組等の者にもあれ、主家の命を受けて他方に潜行し、その地の形勢を探り得て、返答をなすものを云えり。近臣にても、この役にさるることは、主人より直ちに命ぜらるる便りあればなるべし。もとより人にさとり得られざるを旨とするが故に、商賈のさまにまねび、虚無僧、放下の形をも仮りなどして、他国に赴くならいなり。されば、人にも知られたるなべての目付職たる者の、これを役するは少く、大かたは徒立ちの輩うけ給わりしと見えたり。後の世、隠し目付、又は隠密などと云うもの、みなこの流なり」
とある。
目付またの名横目は、いわでものこと乍ら監察密告を司る役であって、これは大横目、総横目、徒士横目、中間横目、小人横目、忍目付などにわかれている。
土方縫殿助は、江戸に在るこうした職掌の連中を使うかたわら、別に、完全に独立した一党を組ませたに相違ない、と狂四郎は、看破したものであった。
あるいは、これは、これまで狂四郎がたたかって来た公儀隠密団「親不知組」よりも、もっとおそるべき徒党といえそうである。
「では——」
狂四郎は、一揖して、政之助から、はなれた。
政之助は、かさねて、丁重に礼を述べて、ふかい尊敬の念をこめた眼眸を、その後姿へ送った。
十歩あまり遠ざかってから、狂四郎は、ふと気づいて、頭をめぐらすと、
「彼らは、近日中に、御当家へ参上と申していましたが、それは、今夜のうちと解釈されてよい」
と、警告した。
あの忍組は、若年寄支配の庭番とちがい、一種特別の誇りを有っているようであった。
そうでなければ、堂々と、侵入することを表示する筈がない。
——おれに対する挑戦でもあるのだな。
狂四郎は、そう受けとって、
——おれの出番は、後日にいくらもあろう。まず、この若者に、天皇御璽がまもれるかどうか、試させてやろう。
と、考えたのであった。

父親の寵愛を一身にあつめているのであれば、それにこたえる働きをしめすがいい、と、狂四郎は、冷たくつきはなしてみたのである。
「次郎吉――」
野道へ出た時、狂四郎は、前を向いたなりで、その供へ声をかけた。
「榊原の屋敷へ忍び込んで、始末を見とどけて来い」
「仰言られるまでもなく、そいつを考えて居りやした」
次郎吉は、にやっとした。

四

狂四郎が、次郎吉にわかれて、浅草寺護摩堂の裏手を通り過ぎて、北馬道へ出た時、日は、とっぷりと暮れていた。
藪の内へ抜けるこの一帯は、伝法院末下三十余院が、ひしめいている。猿寺は、屋根の瓦に猿の形を挙げ、鳥寺は、屋根下の欄間に木彫で鳳凰を浮かせている。
藪の内の腰掛茶屋で、猿若町の芝居三座の賑わい音を遠いものにきき乍ら、半刻をすごして、ふらりと出た鼻さきへ、女が、すうっと、立った。
「遊んでおくれな」
吹き流しの白手拭のかげの細おもてが、意外に綺麗だったし、黒の石持を着崩したかたちが、なんともいえぬ仇っぽい色気をこぼしている。
夜鷹には、もったいない――というよりも、この艶冶な器量は、すこしも賤業ですさんでいないとみえた。
「うむ――」
狂四郎は、すぐに応じて、歩き出した。
ともなわれたのは、花川戸の戸沢長屋の路地裏であった。
軒もかたむき、格子も折れたぼろ棟割であったが、内部は、女ひとり住いらしく、小ぎれいに片づいていた。
女は、牀をとると、
「おきかえなさいまし」
と、浴衣をもってうしろへまわろうとした。
「酔うた。このままでいい」
大小だけとって横になると、狂四郎は、
「伽羅か。たしなみがいい」
と、呟いた。
ほのかに、牀の中に、その匂いがたきこめてあったのである。
女は、次の間にしりぞいて、しばらく出て来なかったが、あらわれた時、炎が舞い立ったような緋のもの一枚になっていた。

「ごめんなさいまし」
掛具の裾をめくって、そっとすべり込んで来て、狂四郎が何もせぬままに、じっと動かなかった。
当然、女のつつしみぶかい、躾に叶うた所作について、客の言葉があるべきだった。狂四郎は、それを口にせず、手出しもしなかった。
そのうち、女が、じれた動きをみせて、
「旦那――ほんとにお酔いになったんですか」
と、ささやきつつ、片手をとって、襟もとをひろげて、ふっくらと盛りあがった胸を与えようとした。
すると、それをとらえずに、狂四郎のその手は、下へのびた。下肢は、ぴったりとかたく合わされていた。
一瞬――狂四郎の口辺に、冷やかな皮肉な微笑が刻まれた。
すっと抜きとった人差指を、嗅いでみて、
「この臭いを消すために、伽羅をたいたか」
と、云った。
とたんに――みるみる女の顔色が、一変した。
狂四郎は、女を押しのけると、起きあがって、あぐらをかいた。
「おい、そこの御仁――」
しずかに、襖のむこうへ声をかけた。
気配ともいえぬ微かな気配を、そこにひそむ者が、こちらの鋭い神経につたえて来ていたのである。
「眠狂四郎が女色漁りに目がないと考えての小細工であろうが、穴隙を鑽ってうつつをぬかすのは、時と場所をえらんで居る。……陰谷に毒をしのばせて、こちらの五体をしびれさせようとする手段は、考えたものだが、淫行を積んでいると、こういう知識も、いつの間にか得て居る」
ははは、と笑ってから、たちまち語気を鋭いものに変えると、
「甲賀忍組頭領とみたが、どうだ？」
と、きめつけた。
ほんのわずかな沈黙が置かれて、
「見事だ、眠狂四郎！」
ひくい嗄がれ声が、呻くようにこたえた。
「今宵は、たしかに、おぬしに兜をぬがされた。いさぎよく、敗北をみとめる。……と、きまったからには、安んじて、その女体を試すがよい。羽化登仙の境に遊ぶことができるぞ。おぬしの勝利への餞としよう」
云いおわると、もはやその必要がないごとく、畳をみしみしとふんで、出て行った。
狂四郎は、しかし、やおら立ちあがって、無想正宗

を、腰にしていた。

女が、名状しがたい、慚愧と哀願を綯い交ぜた表情で、ふり仰いだ。

狂四郎が、氷のような一瞥をくれて、すっと出て行こうとするや、はじかれたように、

「もしっ――」

と、いざって、裾をとらえようとして、蹴倒された。

格子が開けられ、そして閉められたのち、のろのろと身を起した女は、路地を遠ざかって行く錆のある佳い声の謡を、茫然ときいた。

――色にそみ、花に馴れゆくあだしみは、はかなき物を花に飛ぶ、胡蝶の夢の戯れなり……

血汐歌麿

一

つかの間の茜色の夕空が、その鮮かな彩りを徐々に消そうとして、富士のすがたを、かえって、すっきりと、浮き出した。霊峰は、紫紺色に染まって、神秘といえた。

榊原左近将監は、広縁に彳んで、これを、じっと望んでいた。

榊原一族のうち、最も、始祖榊原式部少輔康政の肖像に似ているといわれている人であった。尤も、榊原家は、康政の嫡子忠政が、二十七歳で若死をしてから、世嗣がなく、外祖大須賀家より一人が入って継いでいるから、直系の苗裔というわけではなかった。

本家は、越後高田十五万石を領し、酒井、本多、井伊とともに、譜代創業の四天王の一として、帝鑑之間の錚錚であった。左近将監も、前年まで、大目付として、政務の得失の検断、全土に対する法令の布告、殿中に於ける諸侯の班席の督正等に関して陰然たる勢力を有った人物であった。

その職務を辞した今も、大目付たちの相談役として、欠くべからざる存在であった。ために、「今康政」の称があった。

始祖康政は、まことに、傑出した智謀の将であった。天正十二年に、家康に従って上洛した時、従五位に叙せられ、式部少輔に任じたが、これは徳川家の家人で任官した嚆矢であった。

慶長四年に、伏見城の家康に、石田三成・小西行長らが、不意討ちをかけようとしているときいた康政は、わずか数百騎を率いて、昼夜兼行で、東海道を趨り、たちまち、京洛の入口に家紋の大幕をはりめぐらして、秀頼公の御下知と布告して、旅人通行を厳禁してしまった。ために、勢多、野路、草津、大角、赤山、野州、土山、石部、水口に足どめをくらった者は万余をかぞえた。神社仏閣はもとより、大樹の陰、軒の下まで、人があふれた。三日目に、康政は、関をひらいて、一挙に、旅人の大群を、雪崩のように押し出してやった。

醍醐、山科、狼谷、大津蹴上から、どっとばかりに、あふれ出た群衆を眺めた京、伏見、大阪の人々は、徳川勢が関東より上って来たので、旅人たちが、あのように

夥しく、あわてふためき乍ら、道を急いで来たのだ、とおびえあがった。
　その噂を裏書きするように、康政は、家紋の水車を二つ重ねた馬印を振りたて、黒糸縅の小具足に猩々緋の陣羽織を夕風に翻し、乱髪に白鉢巻の危急の武者ぶりで、ひきいる数百騎に、咽喉もひき裂けんばかりに鯨波をあげさせて、疾風のごとく、伏見へ駆け入ったのである。
　家康の無事の姿をみとめた康政は、直ちに、御蔵奉行のところへ行って、銭数千貫を取り出させた。そして、城下に出て、下人と見ると、誰彼の差別なく、鳥目を与えて、
「内府様の御人数六万余騎が、関東より上って来たため、御屋敷のみでは兵粮の手当が届かぬ。店屋の品を買い占めなければならぬ。お前らは、大阪方面へ、すみやかに逃散せよ」
　と、命じた。
　下人らは、淀から大阪へ趨るや、物価の騰貴を見越して、片っぱしから、食糧を買いあさった。そして、尾鰭をつけて、雲霞のごとき徳川勢の上洛ぶりを云い触らした。
　石田三成方では、そのために、伏見城奇襲の計画を放棄せざるを得なかった、という。

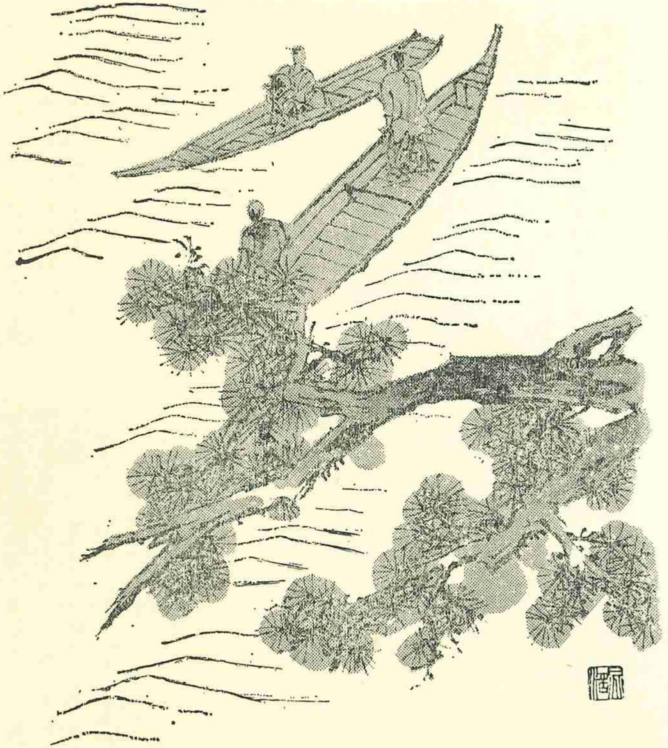
　もし、かりに——。
　いま、江戸にあって、反旗がひるがえったとせんか、これを奇策をもって撃破する武将は、榊原左近将監を措いて他はあるまい。
　こういう会話が、江戸城内でとり交されている程の人望は、しかし、泰平の時世にあっては、かえって、本丸老中の不興を買うこととなり、前年、大目付の役を、自らねがって、しりぞかねばならなかった。毎日が、判で捺すように、無為であった。
　こうして、しずかに暮れてゆく初冬の空を眺め乍ら、左近将監の心中は、空虚であった。
　小半刻も広縁に在って、脳裡に意識がうごいたのは、それだけだった。
　——菊が匂って居るな。
　縁先の地面にならべられた鉢植が、大輪の花をひらいていたのである。
　微かな衣ずれの音が、うしろに近づいて来た。
「若殿様、おもどりにございます」
　そう告げて、侍女は、すぐに、ひきかえして行こうとした。
「小夜——」
　左近将監は、呼びとめた。侍女は、つつましく、膝を

ついて、頭を下げて、御用を待った。
　しかし、主人が口にしたのは、
「そちは、幾歳になる？」
　その質問であった。小夜は、顔をあげて、訝しげに、仰いだ。
「十九歳に相成りまする」
　殆んど、というよりもこれまでただの一度も、召使いたちに、私事についての質問をしたことのない左近将監であった。
「つとめは、つらいか？」
「は？……いえ——」
　俯向いて、頭をふる侍女を、左近将監は、何故か、夕闇の中で、鋭く見据えた。
「父親は、たしか、南町奉行組の同心であったな」
「はい」
「母親も堅固か？」
「はい」
　左近将監は、思いがけない質問にとまどいつつしめす侍女の、どんな微細な反応をも、見のがすまいとして、まばたきもせずにいたが、ふっと、顔をそらすと、穏やかに、
「よい。行け」
　と、云った。

二

　左近将監は、居間に入ると、しばらく、趙子昂の蘭亭十三跋をひらいて、眺めた。書道が、この人の唯一の趣味であった。
　渋い天王寺の壁ぎわには、うず高く、古文書、法帖のたぐいが積まれてあった。
　左近将監の最も愛惜するのは、この十三跋であった。これは趙子昂が、江南から大都（今の北京）に向う時、独孤長老にもらった定武蘭亭の一本に、船中三十二日の徒然のままに十三回に渉って跋を記し、また蘭亭の臨書を添えたものである。
　この帖をひもとく時、左近将監は、いっさいの俗事を忘れ、静かな春昼の夢の境にひたることができた。あえて、形容すれば、この墨蹟は、透明な空と白日を浮べた春湖の微波の旋律をもっていた。高貴な品格と繊細な神経——理智と情趣を溶けあわせた美しさは、眺めれば眺める程、倦くことを知らなかった。
　ところが——。
　今宵は、どうしたのか、左近将監の心は、この帖の中に入ろうとしなかった。

ぱたり、と音たてて帖を閉じた左近将監は、つと立って、違い棚に寄り、そこに置かれた古銅の壺を把った。
これは、堯の時代の酒を入れる方壺で、明代に発掘されて、海を渡って来たとつたえられている。
それを、さかさにすると、畳の上へ、古金襴の小袋が、音もなくすべり落ちた。
小袋の口をひらいて、菊の紋章入りの螺鈿蒔絵の小函をぬき出す。蓋をひらいて、純金製の、竜のつまみの印章をとり出す。
「天皇御璽」
と、彫ってある。
御璽とは、臣下に書を賜わる時にのみ限られて用いられる言葉である。
——あの男は、どこで、これを手に入れたものか？
姫宮さまは、ご存じではなかったようだ。
左近将監の、眼眸が、印章をはなれて、遠いものになった。
今夏のことである——。
あたらしく将軍御座船（三十梃立て）が完成したので、左近将監は、相模湾まで試走させた。
じりじりと肌が灼けつく、ひどく暑い日であった。
追風をいっぱいに帆にはらんで、船足は迅かった。左近将監は、船櫓の上に立って、帆柱の上を掠めている白鳥の群を眺めていた。
そこへ、徒士目付が駆けあがって来て、
「怪しい小舟が見えます」
と、報告した。右方に、ゆるやかな、白い弧線を描いている七里ケ浜を望むあたりであった。眩しい陽光が、きららのように砕けて煌く海上に、船影を、みとめようとするのは、よほど、目を凝らさなければならなかった。
左近将監は、幻影にも似て、波間にただよう小舟が、あきらかに、艪をすてているのを知ると、舳先を向けかえて、近よるように命じた。
適度の距離で、舷から遠眼鏡をかざした左近将監は、
「ふむ——」
と、思わず、おどろきの声をもらした。
小舟の中に坐って、身じろぎもせずにいるのは、総髪に、帷子の着物に紹小紋の羽織をつけた武士であったが、左近将監は、その横顔に見おぼえがあった。
——白鳥主膳！
公儀隠密中随一の使い手であり、若年寄の命令さえも、気が向かねば、にべもなくはねつける人物であった。尤も、もともと身分のひくい庭番の家柄ではなく、布衣以上の大身で、公儀の方でむりやりたのんで隠密の



役をひきうけさせた事情があったので、その気まぐれを咎めるわけにいかなかった。
　いつの間にか、江戸から姿を匿して、杳として消息を絶やしていたのである。
　――ひどう、やつれて居るな。
　左近将監は、こちらからはかくれてよく見えないが、主膳が、女を抱いている様子に、首をかしげた。
　――心中などを企てる男ではないが……。
「橋舟をおろせ」
「は――。こちらへ、ひきつれますか？」
「いや。わしが乗って行こう」
　左近将監は、徒士目付や小人目付が供しようとするのをゆるさず、ただ一人で、口のかたい船頭に漕がせて、その捨小舟へ、近づいて行った。
　主膳は、橋舟が、二間の間近まで艪音をひびかせても、頭をまわそうとしなかった。
「主膳――」
　声をかけられて、ゆるゆるとふりかえったその貌は、やつれたとはいえ、思わずこちらの息をのませる美しさをとどめていた。いや、やつれたために、かえって、凄艶さを増したともみえる。滑石のような白い肌が熱陽をあびて、人間ばなれのした妖しさであった。

「如何いたした？」
　左近将監は、穏やかに、問うた。
　船頭が、気をきかせて、反対側へ漕ぎまわしたので、抱いている女の顔も、はっきりと眺められた。これも若く美しい。どうやら、気を失っている様子である。
　主膳はうすら笑って、
「すておいて頂こう」
と、こたえた。
「心中とは、おぬしに似げない振舞いだが……」
「所詮、人間のなす業は、変りばえはいたさぬ」
「見受けたからには、とどめねばなるまい」
　すると、主膳は、はははは、と爽やかな笑い声をたてた。
「お手前様の自由になるそれがしでないことは、お手前様の方が、ご承知ではないか」
「勿論、知って居る。しいて、とどめようとするのは、おぬしの勝手から、死にたくもない娘を殺す非道が見のがせぬし、そういう無理心中は、生きのびたあとで、おろかであったと、悔いるものだからだ」
「この娘が、どうして、死にたくもない、とおわかりだ？」
　主膳の眸子(ひとみ)が、はじめて、鋭く光った。

「覚悟の道行ならば、なぜ、さきに眠り薬を嚥んで居る？　おぬしが、のませたのではないか？」
　ずばりと、云い当てた。

三

　主膳は、しばらく、左近将監の正視に堪えていたが、ふっと、口もとをゆるめた。
「左近将監殿が、あらわれようとは、夢にも考えなかったことだ」
　その言葉が、妥協を意味した。
　左近将監が、船頭に、小舟を綱で曳くように命じた時、主膳は、
「それには、およばぬ」
と、ことわった。
「では、こちらへ移るがよい」
「いや、この娘だけを引取って頂こう」
「おぬしは、どうするのだ？」
「すておいてもらえば、いずれ、江戸でお目にかかる」
　そう云って、主膳は、ぐったりとなった女のからだをかかえあげると、橋舟を漕ぎ寄せた船頭の手に渡しておいて、

「おねがいがあるが――」
「わしに出来ることなら、約束する」
「この娘を、人目にふれぬ場所に住まわせて頂きたい。その理由は……この娘が、桂宮明子(さや)内親王と心得られたい」
「なに?!」
　流石に、左近将監も、愕然として、顔色を変えたことだった。
　主膳は、東慶寺の塔頭(たっちゅう)へ忍び入って、明子に眠り薬をのませて、かつぎ出したところを、不意に、曾ての仲間であった公儀隠密団「親不知組」の襲撃を受けて、のがれて、海上へ出たのだ、という――。
「幕臣中、信頼出来るのは、お手前様のみとみて、それがしは、姫宮をお預けする。もし違約の節は、斬りますぞ！」
　あでやかに笑って、そう断言した主膳のすがたが、いまも、目蓋のうちに、鮮かにのこっている。
「おぬし、患っているのではないか？」
　舟が、はなれがけに、左近将監は、そう訊ねてみたが、主膳は、こたえず、一揖してから、ふと思い出したらしく、懐中をさぐって、抛って寄越したのが、この「天皇御璽」であった。

明子は、目下、左近将監によって、某処に、無事にかくまわれている。
　――主膳のやつ、まさか、死んでは居るまいが。
　妖しい美貌の剣魔が、ふと、なつかしいものに、思い泛べられていた。
　この時、廊下に、跫音がして、
「父上――」
と、声がかけられた。
　左近将監は、印章を小函におさめて、机の上に置いた。
　入って来た政之助は、全身に切迫した気色をみなぎらせて、いきなり、せき込むように、
「父上、今夜、甲賀者が侵入いたします！」
と、云った。
「おちつけ――」
　たしなめられて、政之助は、素直に、目蓋をふさいで、数秒間じっとしていた。それから、大きく瞠いて、今日、下谷で忍者の群に襲われたこと、眠狂四郎なる浪人者に救われたこと、そして、引上げ際に忍者が、天皇御璽を頂戴に参上する、と高言したことを報告した。
　黙ってきいていた父親は、息子の必死な眼眸(まなざし)へ、きわめて冷静な視線をかえして、
「眠狂四郎は、お前が、御璽をまもり了せるかどうか試してやろうと考えたのであろう」
　いまだ会ったことはないが、眠狂四郎という無頼浪人の行状についてはくわしかったし、一度会ってみたい興味を持っている左近将監であった。
「父上！　私が、必ず、御璽をおまもりいたします！」
「まもれるかの？」
　左近将監は、微笑した。
「一身に代えても！」
　政之助は、眉をあげ、膝の拳に力をこめて誓った。
　そのりきみぶりを、はぐらかすように、父親は、無造作に、机の上の小函から、印章をつまみとると、ぽんと投げた。
「御璽は、これじゃ」
「は――」
　息子に、それを眺めさせておいて、左近将監は、立って、書棚から、巻物を把って来た。そして、象牙づくりの巻軸の片方を、ねじって、はずしにかかり乍ら、
「そこにいるのは、小夜か？」
と、何気なさそうな口調で、声をかけた。
「は、はい。お茶を――」
　襖のむこうでこたえる侍女の声音には、あきらかに、狼狽の色があった。

　政之助が、険しい表情で、立ちかかるのを、左近将監は、無言で、制した。
　小夜が、お茶をささげて入って来た。
　政之助は、父親が、小夜にわざと見せるように、御璽を、巻軸の穴へ入れて、巻物へ嵌めるのを、苛立たしげに見まもった。
「政之助、これを、そちに預ける」
　その言葉をきいて、小夜は、さがって行った。
「父上！」
　政之助が、鋭く咎めると、左近将監は、はじめて、おもてをひきしめて、
「見事、敵の挑戦に応じてみせい！　手段はそちにまかせる――」
と、云った。
　ところで――。
　次の間に忍び寄った小夜の気配を察した左近将監も、もう一人、この部屋の様子を窺っている者がいるのには、気がつかなかった。
　その者は、天井裏にいた。鼠小僧次郎吉であった。

四

　五つ刻をまわって、侍女小夜は、政之助の部屋へ呼ばれた。
　政之助は、すでに寝衣になり、褥の上に坐っていた。
　枕もとに、巻物が置いてあるのを、一瞥してから、小夜は、御用を訊ねた。
「そちに、伽を命ずる」
「…………？」
　政之助は、慍ったような面持と口調で云った。
　小夜は、その意味がよくのみこめぬように、首をかしげてまじまじと瞶めかえした。
「わしが、きらいか？」
　政之助は、睨むように、目を据えていた。
「い、いえ……でも――伽と、申しますと……」
「伽を知らぬのか。よし、教えてつかわす。着物を脱げ！」
「…………」
「脱げっ！」
　小夜は、俯向いて、しばらく、身じろぎもしないでいたが、やがて、そっと立ちあがると、片隅へしりぞいて、帯を解いた。
　京友禅の、花模様の長襦袢すがたになって、肩をすぼめて、むこう向きに、うずくまったのへ、
「ここへ参れ」

と、政之助は、命じた。
もじもじと、しばしのためらいをしめしてから、小夜は、やむなく、政之助のそばへ寄ろうとして、一瞬、はっと、衝撃をうけて、身をこわばらせた。
いつの間にか、政之助は、その巻物を、ひろげていたのである。
喜多川歌麿の描く遊里の秘戯が、絢爛として、そこに、浮きあがっていた。
頰を染めて、視線をそらして立ちすくんだ小夜を、政之助は、立って行って拉致するようにして、褥の上へひき据えた。
「はじらわずに、よく見ておけい」
そう云う政之助自身も、潔癖をすてなければならぬ苦悶の色を眉宇に刻んで、いたずらに、荒々しい力を、小夜を抱いた両腕にみなぎらせていたのだった。
上半身の自由をうばわれた小夜が、掩うこともならずに、緋縮緬二布(ふたの)の湯具のかげにのぞけた内腿のむっちりとした白さが、天井裏にひそむ鼠小僧に、思わず、生唾をのみ込ませていた。
……それから、小半刻。
掛具の下の若いふたつの肢体が、全く微動もせぬままに、その時刻を移した。
有明は消されて、すべては、墨を流したように、黒一色にぬりこめられていたが、その闇に、音もなくうごくものの輪郭が、幻のように浮きあがったのは、いつの間にか、襖が開かれ、そこから、微かな明りが流れ込んでいたからであった。
忍者が、隠身遁形の術をつかうには、まず、無色、無臭、無声の三無の鍛錬をわがものにしていなければならぬ。これは、勿論、兵法者の修業にも欠くべからざる条件であり、鳥獣を狙う猟夫の練習にも似ている。
三無のうち、無声すなわち無足の術が、最も重要であり、至難であろう。無足の術は、調息と整歩を合一させなければならぬ。調息は、平生、呼吸を極めて深く穏やかにするために、鼻頭に鴻毛を掛く、といって、鼻の先に鳥の毛を吊りさげて、息を吐いても揺がない練習を積む。これは、いわゆる丹田呼吸で臍の下で息をする。息を吸う時は、ぐっと下腹を張って、引く息をきわめて短く、吐く場合には、張った腹を、徐々にくぼませて、細く長く、鼻孔から流す。
古代中国の道術家の言葉に「真人は踵を以て息をする」とあるが、同じ意味である。
整歩の口伝としては、次の二法がある。足をすすめる時、指をぐっと反らして、踵を上げ気味に、土ふまずと

指の間の、円味をおびて隆(たか)まった肉を、やんわりと、前辷り加減に、地面へおしつけるようにする。
抜き足さし足の場合は、まず息を吸い乍ら一方の足を進め、それを地面に降して、確(しか)とおちつけてから、息を吐く。次に、また息を吸いつつ、他の一方の足を進める。呼吸と足どりとの完全な一致である。そして、歩き方は、身体を横向きにして、大きく股をひらいて、蟹のように横へ移行する。すなわち、両脚を、X字形に、ぶっちがえて、進むのである。一日に三十里以上を趨るには、この方法でなければならぬ。
いま——。
忍者は、影ものこさず、無足の術をもって、烟のように、枕屏風の陰にかくれた。褥は、ひそとして、政之助と小夜をつつんでいる。
屏風のすそから、一本の腕がのびた。もとより、肉眼で、とらえ難い程の、闇をみだせぬひそやかな、うごくともなくうごく猿臂(えんぴ)であった。半開きの巻物をつかむ。音もなく、そろりと引いて、ひとやすみする。また、そろりと引く。
突如——。衾中から、ひゅーっ、と闇よりも濃い一条の弧線が、閃き出た。
ひくい、にぶい、肉と骨の断たれる音が、刃風の中にあった。
だが——。掛具をはねて、政之助がつッ立ちあがった刹那、奇怪にも、敵影はもう消えうせて、すっと襖をしめる気配だけが感じられた。
有明をつけてみると、血飛沫は、枕屏風にも畳にも散り撒かれていたが、斬って落した片腕も、巻物も、そこにはなかった。

三更をまわった頃合、鼠小僧次郎吉は、深川・大新地の揚屋五明楼の離れに、眠狂四郎をたずねて行き、今夜のいきさつを逐一報告した。
狂四郎は、手枕で仰臥し、ずうっと目蓋をふさいだなり、相槌もうたずにきいていたが、次郎吉が口をつぐむと、
「そうか、やっぱり、奪われたか——」
と、ひくく、なげ出すように、独語をもらした。
「旦那、あっしが感心したのは、斬られた片腕をくわえて逃げた甲賀衆の迅業よりも、襦袢いちまいの若い綺麗な女を牀の中で抱き乍ら、なんにもしなかった若殿様の我慢強さでござんしたよ」
次郎吉が、一服すいつけて、感に堪えたように、かぶりをふってみせると、狂四郎は、暗い苦笑を、寝顔に滲

ませた。
「そこが、育ちのいいのと、わるいのとのちがいだろう」
そう吐きすてる狂四郎の脳裡には、曽つて、武部仙十郎の依頼によって、水野忠邦の上屋敷で、間者たりし美保代を犯した春の夜の光景が、まざまざと甦っていた。

白(しら)珠(たま)賊

一

几上に開かれた書物には、毒々しい赤と青で彩られた人体解剖図が描かれていた。

それらの臓腑筋脈に、矢じるしで、ひとつひとつ名称がつけられてある。肺(ロング)、心臓(ハルト)、胃(マーグ)、脾(ミルト)、神経(センネン)……。

これは、和蘭書「ターヘル・アナトミア」(Tabula anatomica)の翻訳「新訳解体新書」であった。

前野良沢を会主として、杉田玄白、桂川甫周、中川淳庵、石川玄常らが、小塚原で刑死した罪人の屍を、公儀に乞うて解剖腑分けして、「ターヘル・アナトミア」に徴して、完全に符節を合しているのに驚嘆し、感奮して、四年間の苦楚辛酸を経て、なしとげた翻訳であることは、あまりにも、有名である。ダンチヒの中学教科書を蘭訳した「ターヘル・アナトミア」の日本出現によって、それまでの、和漢千載の諸説は、一擲されてしまい、この時代にいたっては、たとえ漢学医師と雖も、五臓六腑の医経を信じている者は一人もいなかった。

食い入るように、この人体解剖図を凝視しているのは、まだ三十前の、一瞥しただけで、学術に没頭して、世事一切を全く顧みない性格の所有者であることがわかる人物であった。総髪は、もう幾日も乱れるにまかせているし、鬚ものび放題、着物も臭気が立っている程よれよれであった。

几辺にちらばっているのは、ことごとく蘭学書であった。杉田玄白の著書が、殆んどを占めている。外科備考、和蘭医学問答、和蘭医説、和蘭事始、養毛七不可、形影夜話、天真楼漫録、後見草。そのほか、高良斎、二宮敬作、石井宗賢の三人共述の「外科シーボルト講義」や「加比丹薬法」など……。

ようやく——血走った眼眸(まなざし)を、絵図からはなして、床の間にころがした粘土でつくった等身大の人体模型へあてると、

「ほんものが見たい！……死んだばかりのからだの腑分けが——」

と、呻くように呟いた。

曽田良介という。天涯孤独の青年医師であった。

……陽が落ちてから、急に、思いたって、良介は、

「新訳解体新書」を懐中にすると、ぶらりと、千駄木坂下町のわが家を出た。
　水野越前守上屋敷に立寄って、武部仙十郎に会い、眠狂四郎の居処をきいた。
「多分、深川の岡場所の、大新地にある五明楼という揚屋で寝そべって居るじゃろう」
　という返辞に、急ぎ足に、表茅場町から南新堀をぬけて、まっすぐに歩いて行ったのは、それから一刻ばかり過ぎた六つ半頃であった。
　豊海橋を渡って、御舟手屋敷わきの、暗い地点へ出た時。
「ちょいと――」
　鼠啼きして、すっと、ひとつの影が寄って来た。
　永代橋をむこうにのぞむこのあたりは、ふつう、夜鷹など、姿をあらわさぬのであった。番所の灯が、すぐ左手に浮きあがっていることだし、捕えられれば、額に墨を入れられて、浅草の非人溜へ送り込まれてしまう。
　それを覚悟で、袖をひきに出て来たのは、定められた区域の本所吉田町や御厩川岸では、商売にならなくなったのであろう。
「寄って行かっし――佳い男」
　ぷーんと、脂粉の香とともにすり寄られるや、良介は、つかまれた袖を、ぱっと振払った。
「いてっ！」
　大袈裟な悲鳴をあげた女は、「畜生っ！　木念仁、ぼけ茄子、かったい、唐変木！」と、おそろしく甲高い声で、ののしった。
　とたんに――良介は、はっとして、振りかえった。ひとっ調子高い声音に、記憶があった。
　じいっと、闇を透かして、こころみに、
「おかやさん――？」
　と、幼馴染の名を呼んでみた。
　本郷のわが家の隣が、大きな麹屋で、そこの同じ年齢の娘が、きかぬ気性のおきゃんで、良介の方が、いつも、ひどい悪戯に泣かされたものだった。十三歳の時に、麹屋がつぶれ、娘は、品川の廓へ売られたときいた。
　良介は、あいてが、はっと立ち竦んだ様子に、
「やっぱり、そうだったのか。……私だ、良介だ」
　と、云って、歩み寄った。
　女は、反射的に身を翻そうとしかけて、ふっと、思いとどまった。幼い頃、さんざ苛めてやった優越感が、まだどこかにのこっていたのだとすれば、堕ちきったもののふてぶてしさが、その優越感を甦らせたといえた。

　吹き流しの手拭いのかげで、白く塗りつぶした顔が、挑発的に、にやりとした。
「良介さんなら、ただでいいよ」
「…………」
「ごらんの通り、もう人間あつかいはされない女になったけど、ねぐらは草莚を垂らした組小屋じゃないんだよ。つい、そこに一軒持っているから、ちょっと、寄ってお行きな」
　誘われて、良介は、つい、ふらふらとついて行った。
　おかやの家は、意外にも、北新堀町のおもて通りに面した、小じんまりした店構えであった。良介が見おぼえのある『麹屋』の古びた看板も、ちゃんとかかげてあった。
　あっけにとられている良介に、おかやは、うそ寒げに両袖を胸で合わせて、
「べつに、麹屋をひらいているわけじゃないのさ。二十四文の定を百文頂くには、これでもただの夜鷹じゃない、元はれっきとした本郷の大店の娘だったんだ、と口で教える代りに、この看板を見せた方が手取り早いんでね。親爺が、草葉のかげで、さぞかし、にが笑いしているこったろうよ。看板につられて、そっちから足を運んで下さる莫迦なお客もできる、とあっちゃ、滅多にはずされまいさ。馬子にも衣裳、夜鷹にも看板か――ははは」
　と、笑い声をたててみせた。
　そのうつろなひびきが、急に、良介をわれにかえらせた。
「私は、さきを急ぐ。今夜は、失礼しよう」
　逃げるように、離れたのを、おかやは、あわてて「ちょいと――」と、つかまえようとしたが、もう間にあわなかった。
　遠ざかる後姿を見おくって、
「ふん――勝手にしやがれ」
　と、いまいましく吐きすてた。

二

　それと、ほぼ同じ時刻――。
　そこからあまり遠くない、富島町一丁目の亀島橋の袂にある小意気な家で、無慚な事件が起っていた。
　われわれにお馴染の備前屋が、最近、吉原芸者を落籍（ひか）してかこった妾宅であった。場所をここにえらんだのは、海から運んで来た抜荷を、すばやく匿すための便を考えてのことであったろう。
　それとかぎつけて、一人の賊が、忍び込んで来たのである。全身黒ずくめで、宗十郎頭巾をかぶっていた。

若い美しい女は、二階で、稽古三味線を、崩し膝へのせて、小唄をさらっていたところを、背後から、風のようにかぶさって来る黒いものに、はっとなった刹那、悲鳴をあげることもゆるされずに、当て落されていた。

意識をとりもどした時には、緋鹿子の長襦袢姿にされて、後手にしばられ、猿ぐつわをかまされていたのであった。まわりには、柳茶唐繻子の帯が、蛇のようにとぐろをまき、投げられた青梅縞の絹裏が、波のようにうねっていた。

賊は、頭巾の二幅錣を、だらりと解き垂らして、肉づきのいい顔をのぞけた。

片膝たてて、銀煙管をくわえ、女のなまめかしい寝乱れ姿を、じっと見おろし乍ら、しずかに、けむりをくゆらせていた。

女が、眦を切らんばかりに瞠いた眸子に、恐怖の色をみなぎらせるや、賊は、ふふふふ、と含み笑いをしてから、煙管の雁首で、煙草盆を引き寄せ、吐月峰へぽんと吸殻をすて、金唐皮の煙草入へおさめて、腰にさした。

そのゆっくりとした動作が、いかにも、これからの残忍な手口を予告するもののごとく、不気味に感じられた。

「ご新造さん。こういう川柳をご存じかね。お妾に歯の立つものは櫛ばかり。……が、どっこい、もうひとつあるんだ」

そう云って、にやっと、大きく口をひらいてみせた。

女の総身が、粟立った。

賊の口は、——上下にならんだ皓い歯は、一歯のこらず、研ぎすまされた鋭利な鑓さながらの牙だったのである。

いきなり——賊が、すっくと立ちあがるや、女は、本能の力で、わが身を撥ねて、俯っ伏しになった。

猿臂がのびて、白繻子の半襟にかかった。

呻きたてる身もだえが、かえって、おのが柔肌を剝ぐ結果になった。

牙は、まず、うっすらと白粉の刷毛あとをひいた項を、がっと嚙んだ。

「ひっ！」

葉から落ちた青虫のように、肢体をひきちぢめて、痙攣させた。

そいつを、無造作に、ごろりと仰向かせた賊は、第二の攻撃個処に、喘ぎにゆれる絖のように透きとおった乳房をえらんだ。

すると、肢体は、堪えがたい疼痛で、ぐらっと反る——。

次の瞬間には、猿臂は、もう長襦袢の前へのび、白縮



細二布の長湯具もろとも、たくしあげておいて、牙が滑石のように美しい光沢をたたえている太腿の血をもとめて、飛び移っている——。

全身いたるところへ、歯型をのこすのが、目的のようであった。

がっ、と柔肌を嚙んで、ぱっと口をはなす。その動作は、おそろしく素迅かった。そして、口をはなすことは、次の個所へ、牙をたてる動作に、継続していた。その個処から、鮮血が滲み出た頃には、すでに、牙は、数個処さきを嚙んでいた。

女が、すべての筋肉の抵抗を解いた時、ようやく、賊は、残忍な所業を止めて、顔を擡げた。

「むごいことであったな」

ぬけぬけと、そんな独語をもらしつつ、猿ぐつわをはずし、両手を自由にしてやった。

女は、死んだようにぐったりして、はだけた前をかくす力も喪っていた。

「姐さん、備前屋が、この家にかくしている伊勢神宮へ奉納の白珠を、これへ出してもらおうか」

再び、煙管をくわえた賊が、きり出したのは、その要求であった。

女は、あっと、烈しい反応をしめして賊を見あげた。

「おどろいたね。礼を云うぜ。こっちはそれが目的で、参上したんだ。備前屋が、公儀の命令で、海のむこうから、鶉の卵ほどもある白珠を手に入れて、伊勢神宮へ奉納するとみせかけ、そっちへは、贋物をたてまつっておいて、真物の方は、てめえのふところへ猫ばばしたことは、ちゃあんと見透しよ」

「…………」

「その白珠が、この家にかくされていることが、おめえのいまの顔色で、わかったぜ。……咽喉を食いちぎられねえうちに、さっさと出したがいい」

と、うそぶいて、賊は、うまそうに、紫煙を吐き出した。

伊勢皇大神宮の文献によれば、皇大神宮御装束についての記録中、延暦皇大神宮儀式帳に、「白玉嚢二口、白玉一両三分を納む」とあり、また長暦送官符にも「白玉八十一丸、重両三分、中分して白絹各二尺につつむ」とあるから、真珠の奉納は、古くからおこなわれていた。白玉が真珠であることは、倭名抄に、「珠、明珠、真珠、之良太麻」と載せられているので明らかである。

以来、二十年毎に行われる式年遷宮にあたっては、時の権力者は、必ず、真珠を奉納していたのである。

ところが、室町時代に至って、国内に内乱が続いて、

京もまた戦乱の巷になったために、真珠の入手も困難を来たしたので、遂に水晶の丸を、真珠に代えて、皇大神宮の御料に充てたのであった。応永の絵巻物に、「白玉八十一果、重一両三分、水精を以て之を作る」とある。

それが、しきたりとなって、代々、水晶が奉納されつづけて来たのであった。

ところが、今年の遷宮にあたって、公儀は、徳川家の勢威の復さんことを祈って、いまだ日本にない大粒の真珠を奉納することに、閣議で決し、これを備前屋に命じたのである。

備前屋は、それにこたえて、直径六分、重量三匁六分の茄子形の逸品を、イギリス船から入手したのであった。

そして、それは、無事に、神宮へ奉納された——ということになっていたのだが。

賊は、備前屋の秘密のからくりを、どこで、どうしてかぎつけたか、匿してある真物を奪取すべく、出現したのであった。

「この牙がおそろしいことは、もうたっぷり味わった筈だぜ、姐さん。じらさずに、泥——じゃねえ白珠を吐いてもらうよ。備前屋も、おめえのからだを見りゃ、白珠を渡したのも無理はねえ、と納得するだろう。……さア、吐き出しな!」

三

「おおっ——ご免よ」

揚屋五明楼の玄関さきへ、二梃の駕籠をかつぎ込んで、威勢よくどなったのは、金八であった。今日は、いつものやくざ態とはちがい、浅黄地に白く竜胆紋を染め抜いた法被に、同色の股引、白足袋はだしで、呂色塗り内朱蒔絵の馬柄杓を後に挿していた。

走り出て来た顔馴染の女中が、

「あら——」と、目をまるくした。

「ちょっ、蜻蛉が、豆鉄砲をくらったような面をしやがるねえ」

「だってさ、金さん、おまいさん、そのなりは、また、なんだって——?」

「べらんめえ。今日は、何日だと思ってやがる」

「十五日さ——七五三の お祝いじゃないか。おまいさん、いつから、どこのお旗本衆の馬丁になって、若様の産土神へお供をおしなの?」

「へへん——いいか、七五三に五分廻しの仕立といってな、身幅が合わずに、膝小僧を出して坐るいでたちが、おいらが年中の粋すがたよ。その七五三を今日は、お子

供衆にゆずったんだ。男女三歳髪置きで、男子五歳は袴着で、女子七歳は帯解きの祝いだ。おめえなんざ、三十歳になっても、毎晩、帯解きの祝いをやらかしてやがるだろう」

「ほんに——口のわるい。金さん、眠の旦那にご用なんだろう。では、ちょいと」

「おっと——ちょいとと針糸は、そそっかしくつかうな、と云わあ。あわてるない。なにも取次いでくれって、たのんじゃいねえ。ついでに、教えてやるがな、お玉さん、おめえは、いつも、立ちあがりがけに、左の膝頭をあげやがる。だから、裾がひろがるんだ。踏出しは、男ひだりに女右、これ陰陽の差別なり、ってな、操曲入門にもあらあ。どうだ、学があるぞ、学が——」

勝手なことを云いちらしておいて、金八は、駕籠のところへ戻って行った。

「猫がお玉か、お玉が猫か、のどを鳴らして、ねころんで、裾をひらけば、金になる——か。へい、ご到着でございます」

たれをあげて、お辞儀した。

中から、あらわれたのは、美保代であった。次の駕籠から、金八が、抱きあげたのは、新太郎であった。

美保代は、丁子茶の、和歌の浦の裾模様の晴着（はれぎ）をつけていた。新太郎は、振袖に麻裃をきせられていた。

玄関の式台に立った女中は、美保代の美しさと、幼児の神秘的な異相に、茫然となった。

金八は、得意げに、新太郎をたかだかとかかえあげて、

「七、七、七の七福神、はや乗り初めの宝船、かなたに見ゆるは五葉の松、そのまたむこうにそびゆるは、三国一の富士の山、いずれも目出度き七五三、親御は物入りご苦労さん」

と、でたらめをうたい乍ら、どんどん家の中へ通って行った。

離れにいた眠狂四郎は、新太郎の晴れ姿を見出し、そして、そのうしろに、つつましく坐った美保代と見くらべて、

「ほう——」と、微笑した。

「新太郎、ご挨拶を」

美保代にうながされて、新太郎は、ちいさな両手を、畳につくと、

「わたくし、かみおきのいわいのぎ、ほんじつ、かんだみょうじんさまへもうでて、とどこおりなく、すませてまいりました。これまでの、おいつくしみ、あつく、おんれい、もうしあげます」

と、ゆっくりゆっくり、のべた。

狂四郎は、何かこたえてやろうとしたが、言葉が見つからずに、ただ、じっと見まもった。

新太郎は、すぐに立って、ちょこちょこと狂四郎の前に来た。

狂四郎は、抱きあげて、膝へのせた。

新太郎は、つぶらな、青い瞳を、まばたきもさせずに、仰がせた。

やさしい一言を待っている——。

だが、狂四郎は、ついに、口をひらくことが叶わなかった。

「新太郎」

美保代に呼ばれて、狂四郎の膝からはなれた新太郎は、三、四歩あるいてから、くるりとふりかえって、狂四郎に、にこっとしてみせた。

狂四郎は、大きく、うなずいてやった。

「おいとまいたします」

美保代が、告げると金八が、苛立って、

「先生っ！」と、睨みつけた。

「金八さん——」

美保代が、たしなめた。ただ、新太郎に挨拶だけをさせるために行くのだから、そのつもりで——と、金八にくれぐれも念を押して来た美保代であった。

「お父上、さようなら」

新太郎が、かわいらしく、膝に手をそろえて、ぺこんと頭を下げるや、狂四郎は、

「さようなら」

と、こたえてやりつつ、かすかに、胸の裡に、きりきりと疼くものをおぼえていた。

「先生——」

金八は、出際に、おそろしく真剣な表情をつくって、

「今日はおとなしく引上げやすが、この次は、縄を持って来ますぜ。くびにひっかける縄を——。三世に縒合わせて、二世でちぎる、ってえしろものだあ。覚悟していておくんなさい」

と、云いのこした。

孤独にかえって、仰臥した狂四郎が、惘然として、暗い虚無を、おのれの内に見ている時、おとずれたのは、曽田良介であった。

挨拶もそこそこに、思いつめた面持できり出したのは、

「私は、死骸の腑分けがいたしたい。お手前様が、近くお断りになる者があれば、その死骸を下さるまいか」

その嘆願であった。

たったいま、人間らしい寂寥感によって、おのれが、これまで五官や脳髄や筋肉のみの反作用で犯して来た宿業の罪悪の、あんたんたる暗さ、深さを、ほんのわずかでも、遠くへおしやろうとした矢先に、こちらを冷血酷薄な人斬り魔ときめてしまって、その贄を欲しいと申込む者があらわれたとは、なんという皮肉であったろう。

　しかも、相手は、こちらが瞬間、凄じい憤怒の発作を眼光に煌かせたにも拘わらず、自身の一念のほかは一切無感覚になった図太い態度で、なんの怯えもしめさぬのであった。

　数秒が流れて——ふっと、狂四郎の口もとに、苦笑が刻まれた。

「では、これから、死骸でもさがしに出かけることにするか」

四

　月が中天にかかって、夜気は凍って、光っていた。地面は、塩を撒き敷いたように白かった。

　永代橋を渡りきるまで、狂四郎と良介は、ずうっと沈黙をまもって、濡れたように濃いおのおのの影法師を、一定の歩幅で、踏んで来た。

「あ——」

急に、思いついたように、良介が、右手を挙げて、彼方を指さしたのは、北新堀町にさしかかった地点においてであった。

「私の幼馴染が、あの麴屋の看板をかけた家で、夜鷹をやって居ります。もしかすれば、あの女が、斬りすててもよい人間を知って居るかも知れません」

　——あいにく、夜鷹の知合いなどというたぐいは、こちらが斬りたくはない。

　心で、云いすてて、狂四郎は、つと、豊海橋の方へそれようとした。

　このおりであった。

　左手の番所から、灯を背にして、恰幅のいい町人姿が、ぬっと出た。

「眠様じゃ、ございませんか」

　声をかけられて、視線を送った狂四郎は、

「備前屋か——」

と、眉をひそめた。——備前屋ともあろう男が、なぜ、番所などで、油を売っているのか？　秋のはじめ、野毛浦の浜辺で、朝鮮船を焼きすてて、備前屋の大規模な抜荷計画を頓挫せしめて以来の遭遇だった。

「何をしているのだ？」

「ふふふふ、柄にもなく、捕物をやろうと致して居りま

す。宿縁なじみに、貴方様のお力をお借りできれば、こんな幸いはございませんが、強いてはお願い出来ますまい」

「対手次第だな」

「おききおよびではございませんか。獅子頭と申す賊でございます。昨今、わがもの顔で、町々を跳梁して居ります」

「女のからだに、歯型をのこして行くという不風流な奴のことか」

「左様でございます。今夜は、てまえの女を、嚙み荒して参りましたわい。ついでに、五千両ばかりのねうちの真珠をさらって行きましてな。……乾分どもを動員してこの一郭へ追い込みましたが、さて、どうやって、いぶし出そうか、と思案中でございます」

「ふん——」

　狂四郎は、あらためて、あたりを見まわした。云われてみると、路地という路地に、備前屋の輩下が、ひそんでいる気配があるようだ。

「そいつを斬ったら、死骸を貰えるか？」

　唐突に、狂四郎に云い出されて、備前屋はあっけにとられて、

「どうなさる？」

「この御仁が、腑分けする」

　狂四郎は、良介とともに、番所に入ると、備前屋が用意の酒を受けた。

　小半刻が、移った。

　そのあいだ、幾人かの通行人が、物陰からとび出した備前屋の輩下につかまり、解放された。

と——。

　狂四郎は、一軒の家から、まんじゅう笠の托鉢僧があらわれるのをみとめて、

「曽田さん、あの麴屋は、夜鷹の家だ、と云ったな！」

「そうです」

「托鉢の坊主も、夜鷹を買うのか」

　独語めいた狂四郎の言葉をきいた時、備前屋は、だだっと外へ走り出ていた。

　他の通行人にそうしたように、僧の前後をはさんで、尋問しようとする輩下へ、

「そいつだ！　逃がすなっ！」

と、怒号した。

　そのひびきが消えぬうちに、正面に立ちはだかっていた者が、のけぞった。僧の杖から、白刃が噴いて、月光に躍ったのである。

　路地という路地から、黒影が、どっと跳び出して、殺

到して行くや、僧は、ころもをひるがえして、いま出て来た麴屋の中へ、駆け込んだ。

五

家の中で、けたたましい悲鳴が起り、つづいて、断末魔の絶叫がほとばしった。

備前屋の輩下たちが、なだれをうってとび込んでみると、牀の上に、女が、一太刀あびて、寝衣を蘇芳に染めて、仆れていた。

「屋根へ逃げやがったな！」

一人が叫んだ。

たしかに賊の姿は、屋根の上に在った。しかし、凝然として、そこに釘づけにされていた。

いつの間にか、狂四郎が、一間のむこうに、うっそりと、月を背にして、彳んでいたのである。

たたかいは、一瞬にして、決定した。

賊が、凍った夜気を亀裂(ひび)割って、猛然と瓦を蹴って、斬りつけた刹那、狂四郎の五体は、かろやかに斜面を滑りあがって、棟瓦の上に移っていた。

抜いたとも見えず、右手には、無想正宗が、携げられていた。

賊は、呻きのかわりに、鞴(ふいご)のような濁った呼吸をひとつ吹き出しておいて、がくんと膝を折り、首を徐々に、胸へのめり込ませると、動かなくなった。

狂四郎は、天窓から、ひらりと台所へ降りると、待ちうけていた備前屋へ、

「珠は持って居らぬ」

と、告げた。

「ご苦労でございました。……おい、お前ら、家さがしをしろ」

一斉に、皆が、いたるところへ血眼を向けた時、狂四郎は、ふと、牀に仆れている女の死体へ、目をとめた。裾も乱さず、きちんとした仰臥姿であった。形相だけは、凄じい恐怖の跡をとどめている。

――斬り仆しておいて、どうして、あの一瞬の間に、乱れを直してやる慈悲を働かせたのか？　なりが坊主になったからといって、性根までが仏心を起したとは思えぬ。

――そうか！

直感があった。

「おい、曽田さん――」

土間にいる良介を呼んだ。

良介が、上って来ると、狂四郎は、うすら笑い乍ら、云った。

「腑分けをするに、お誂えむきの死骸がここにある。誰にも咎められないばかりか、そこにいる備前屋が、たんまりお礼をはずんでくれることになろう。五千両の珠を孕んだ死骸だ。おまけに、あんたの幼馴染ときている。夜明けまでには、たっぷり時間もある――」

眠狂四郎

一

両国広小路——遊び場として江戸で、随一の繁華を誇るここは、朝のうちは、野菜市がひらく。市が退けてから、勤番侍や江戸見物の三太郎婆々をきょろきょろさせる賑わいがはじまるのが、正午刻。

本所側の東両国は、引っ張りの観世物で、こちら広小路は、多く高小屋物であった。百日芝居、女芝居、軽業、曲独楽、寄席、そして、土場と野天芸人。土場芸人とは、開き木戸で、一齣ごとに、聴衆から木戸銭をとった。野天芸人は、路傍で伎芸を演じて、投銭を乞う。米沢町一丁目から吉川町に入ると、煮売店と交互に、さまざまな香具師が並んで声をからして、客を寄せる。

山下の長太郎玉、山雀曲芸、早継の粉、鼠取伝授屋、武鑑売、五臓円、易者、大道天道干、薄荷売、読売など……。

今日も——。

どっとあふれた雑沓を縫って、勇み肌の兄哥たちが、わがもの顔で、ねりあるいて行く。

なかでも、いちばん陽気な声をあげて首をふり乍ら、うたって行く金八の姿は水を得た魚のように、いきいきしている。

雪の 夜中の 冷たくて、 初手はへだてて、 何時となく、 枕と枕、 顔と顔——ときやがらあ

意地の悪さのすき間から、アレ邪魔をする夜寒の風に、へへ

襟と襟とをひらいてあけて、肌と肌とをすりあわす

「おう、そこの姐さん、そっぽを向くにはおよばねえやな。とぼけていたとて、昨夜の牀の、肌のもだえのすすり泣き、人に知れずにいるものか、ってな。どうだ、ひとつ思い出させてやろうか」

ひょいと、娘の前へうしろ向きに立つと、

いやにからんだ、垣根のへちま

ぶらりと下った程のよさ、

風が落した赤手拭いに

くるりと巻かれて、吉原かぶり、

こいつは乙だと、ぶうら、ぶら

と、うたい乍ら、くるっと裾をまくって、赤ちりめんの褌の臀を滑稽にふって踊ってみせた。

娘は、まっ赤になって、あわてて、踵をかえすと、反対の方角へにげてしまった。

金八は、けろりとした顔つきで、裾をおろすと、

「逢いはしなんだか、横町の茶屋で、黒の着流し、竜胆紋、無想正宗落差し——」

と、小声で呟き乍ら、並び茶屋を一軒一軒のぞいていった。

やがて、とある店の床几に腰かけている眠狂四郎を見つけ出した金八は、にやっとすると、とっとと駆け込んで行って、そばについている茶汲女に、

「惚れてみたいは山々の——てえ風情でげすな。笑いものにならねえうちに、あきらめたがいいぜ」

「ちょいと、金さん。あたしが先生に惚れたら、どうして笑いものになるのさ?」

「へへん。惚れてみたいは山々の、一度に笑う雪解けに、そこは沓々、ここは下駄下駄、ってな——。柄じゃねえや」

女は、つんとして、立ってしまった。

「先生。もう、そろそろ、中野へもどって頂きてえや。……美保代様は、どうも近頃、ずうっとお加減がよろしくねえご様子でござんすぜ。かくしていなさるが熱もおあんなさるらしいし、ときどき、そっと、苦しそうに咳をしておいでになるんでさあ」

狂四郎は、しかし、黙って、暗い眼眸で宙の一点を刺している。

その表情は、すぐに、金八の神経へ敏感に反応した。

——おや? なにかあるな?

狂四郎が、ただ、ぼんやりと、この茶屋で油を売っているのではないと、読みとれた。

金八は、そうっと、まわりを見わたした。べつに、怪しい者の影は、どこにもなかった。客は、ほかに一人、渡り中間らしい男が、弁当をぼそぼそとつかっているだけである。

つと——狂四郎は、立ちあがった。

金八は、いそいで、そのあとにしたがい乍ら、もう一度、ぐるっと、視線をまわした。こちらの動きにつれてうごくなんの気配もなかった。

ふところ手で、すたすたと歩きはじめた狂四郎は、とある地点で、急に足をとめた。

瞬間、その後姿から放たれる目に見えない鋭気に、金八は、はっとなった。

すぐに、狂四郎は、歩きだしたが、金八は、少々うす気味わるくなった。

まさか狂気の前ぶれというやつじゃあるめえな、と—

—その不安が起って、あわてて、かぶりをふった。

突如として気が狂っても、その悲惨な末路を、われ人ともに肯定しなければならぬ宿運を背負っている狂四郎だったのである。金八のような男にも、漠然と、そうした予感めいた恐怖心は、胸の底にあった。

二

ずらりと並んだ髪結床の路地をぬけると、自身番を境にして、楊弓店が檐をつらねる。

勿論、女をかかえているが、のちの浅草の矢場のように猥らではなく、通人の姿もみえる、かなり品のいい遊びとされていた。

狂四郎は、なにを考えているのか、その一軒へすっと足を入れた。

——こいつは、珍しいや。

金八は、また、小首をかしげた。狂四郎が、矢場遊びするなど、絶えてなかったことなのである。ひろい射場の板敷には、勤番侍らしいのが三、四人、どうやら競技を終ったところらしい、しずかに、お茶をのんでいた。

狂四郎は、右端の位置に就くと、片脱ぎにもならず無造作に、弓をとって、矢をつがえた。

物間（射手と的との距離）十五間。的の霞は、狂四郎



がえらんだのが、いちばん小さく、一寸八分であった。

これは、普通の腕前では、まずあてることは困難である。

勤番侍たちも、女も、ややあっけにとられた面持で、いきなり最小の的をえらんだ異相の浪人者を見まもった。

弓道には勿論、他の兵法と同じく、整然たる要則がある。足踏み、胴造、取懸、手の内、弓構え、打起、延合、やごろ、離れ、残心まで、射技の動作は、一分の狂いもあってはならぬとされている。

たとえば——。

弓構えにおいては、自己の前三隅のところで矢束の三分の一を弓手で押開き、的を見込み、顔の方向はいずれの方にも偏せしめず、呼ぶにこたえるかたちに頭持を整え、これを最後まで保持する。打起において、かるく一呼吸して、弓を左右に偏せしめず、まっすぐに打起す。その際、約一貫目の物を持ち上げる心構えが必要で、その動きは、はじめは静かに、なかばは、やや早く、ふたたび静かに止まるごとくみえる。矢先は、矢筈の方より低く、水流れの形となる。そして弓懸が耳を越したところで止める。矢は眉毛の高さで水平となる。延合においては、左右両方へ、糸を引張る気持で、引分け、つい

に、自己の矢束の全部を引きしぼる。この時、拳が的に付くのと、矢が頬に付くのと、弦が胸に付くのと、まったく同時でなければならない。ここで、矢と顔は、十文字の形になる。更に、じりじりと左右両手に糸の両端を持って引延す気持で、その糸の切れんとする刹那まで、満を持す。

矢は、ひょーっ、とはなれる。

ちなみに、その所要時間は、弓構えの時、弓を押しひらいて的を見定め、打起にかかる迄の一呼吸が二秒、弓構えから打起しつつある時間が二秒、打起して停止せる如くみえる時間が二秒、打起から矢を眉毛の高さで水平にとめるまでが二秒、それから矢と顔を十文字の形にするまでが、一秒、ひきしぼって、放つまでが五秒――と、これだけの正確さを必要とする。

ところが、狂四郎は、その要則を、ことごとく、無視してしまった。

ふみひらいた両足の広さは、矢束にひとしく、その角度は扇子を八軒に開いたような形をよし、とされているにも拘らず、狂四郎は、普通に彳んだ姿のままだった。

さきに弓を立てておいて、あとから矢を添えたのもまちがっていたし、胴造も取懸も行わずに、いきなり、ぎゅっと、弦を引きしぼったのも、無法だった。

――射法を何も知らぬな。

眺めている勤番侍たちは、露骨に、軽侮の色をみせた。

弓道は、素引三年、巻藁三年といわれている。的を射るまでには、六年の稽古を積まねばならぬ。

射法の形も知らずに、一寸八分の的を射ようとする者に対して、心得ある射手が失笑を用意したのは当然である。

勤番侍たちは、矢がとんでもない方角へ逸れるに相違ない、と思った。

びゅん！　弦音とともに、矢は、十五間を翔けた。

勤番侍たちは、おのが目を疑った。

矢は、見事、的の黒星に射立ち、杉なり箆を、ぶるるんとひと顫いさせたのである。

つづいて、狂四郎は、間を置かずに、第二矢を放った。これもまた、第一矢に吸いつくように、黒星に的中した。

「へへんだ。たった一矢（夜）で胸射ぬかれてだ、弓（夢）のたまくら寝みだれ髪の、はっとめざめてはずかしや、そのあかつきのひと声は、的もあたごの山ほととぎす、とくらあ――」

金八が、ざまアみろ、とばかり、大声で調子づけた。

狂四郎は、第三矢をつがえた。

きりりっ、とひきしぼった――その刹那であった。

その弦から矢がきって放たれるよりも早く、突如、ちょうど的のまうえから、逆に、狂四郎めがけて、びゅん、と唸りをたてて、一矢が飛んで来た。

あっ、と皆が、仰天した。

ひとり、平然としていたのは、狙われた狂四郎自身だった。

ぱっと、弓をひと振りして、鏑籐（かぶらとう）のあたりで、その怪矢を、たたき落した。

「野郎っ！」

金八が、躍りあがって、十五間の物間をふっとんで行き、的置場から、裏側へ、とび込んだ。

狂四郎が、控所の畳敷へ腰を下すと、女が、いそいで、湯桶と手拭いを運んで来て、

「申しわけございません。とんでもない悪戯（わるさ）をする者が居りまして……すぐに、番所へ届けて、詮議して頂きます」

と、詫びた。

すると、狂四郎は、

「いや、かまわん。多分、こういう仕組みになるであろうと思って、ここへ入ってみたのだ」

と、こたえて、女を不審がらせた。

ほどなく、金八が戻って来たが、その面持は、なんとも奇妙なものだった。

「いやはや、さてはや――早野勘平早駕籠で、はや駆けつける赤穂城。先生、御注進！」

と、叫んでから、てのひらで顔をぶるんとひとなでした。

「いや、おどろいた。ひっくり、けえるに、あきれ、けえるで――ぎょっ、ぎょっ、となりやしたぜ」

狂四郎は、うすら笑い乍ら、

「追いかけてみたら、逃げて行くのは、このおれだったろう」

「へえ？　もうご存じなんですかい。そうでさ、先生とそっくりそのままの身なりで、ひょいと、ふりかえった面も、まったく寸分ちがわねえ。ときてやがるから、それ――、けえる、になって、目玉が背中に宿がえしたんじゃねえか、と面くらって、立往生でさ」

「ふふふふ、……眠狂四郎が射た矢を、また眠狂四郎が射返した、という趣向だな」

「いってえ、どういうんでござんす？　まさか、先生が、双児（ふたご）だったとはきいたおぼえがねえ」

「いたずらだ。少々あくどすぎる」

「よくもまあ、あれ程似せて、顔を造りやがった。眉毛一本ちがってやがらねえ。歩きかたまで、そっくりで——あ、そうだ、ちがっていたのは」
「刀を、右に差していたろう」
「ほほ、そこまで見とどけていなさるんなら——なぜ、たたっ斬ってしまわねえんです?」
「いや、実は、まだ、おれの目の前には、あらわれぬのだ。ただ、絶えずつきまとっていることだけが、わかっている。
……おれを慍らせようとしている。慍らせて、おれを踊らせてみたいらしい」
「いってえ、何者か、見当がおつきですかい?」
「およそは、ついているが……」

三

この十日あまりのあいだ——狂四郎の身辺には、異様ないやがらせが、頻繁に起っていた。
……朝、泊った根津門前町の小料理屋の二階で、雨戸を開いたとたん、飛礫が顔を襲った。躱して、視線をまわしてみると、うしろの襖へあたって落ちたのは、どすぐろい、しなびた人間の手くびであった。
それが投げられた路地の入口へ降りて行って、遊んでいる子供に訊ねてみると、怪訝そうに、まばたきして、
「小父さんが、じぶんで、抛りあげたんじゃないか」
と、こたえたのである。
これには、唖然としたことだった。
同じ顔をして、同じ黒い着物をきていたという。
「どこか、ちがったところは、なかったか?」
と、小さい頭脳の記憶力に期待すると、
「あ——そうだ。刀をはんたいに差していたよ」
これをきいて、狂四郎は、
——甲賀忍組の一人が、榊原政之助に斬り落された手くびを、挑戦状のかわりに投げつけて来たのか?
そう想像した。右手を喪えば、当然、刀を右差しにするであろうからである。それにしても、何故に、こちらとそっくりの風姿に化けねばならないのか?
その次の日の午さがりであった。仙台堀に沿うた途をひろっているおり、突然、彼方に、女の悲鳴が起ったので、近づいてみると、町娘が、帯を断ち切られて地べたに俯っ伏していた。
たすけ起そうとすると、娘は、こちらの顔をみとめるやいなや、前にも増した恐怖の絶叫をあげて、無我夢中で、前がはだけ散るのもかまわず、逃げ出したのであった。

それから、三日あまり置いた夜、和泉橋を左手に見る柳原堤を通り抜けようとすると、いきなり、星空から、ざあっ、と雨が降って来た。その臭気に、はっとなって、二間余奔るのと、右側の籾蔵の屋根から、火矢が飛来するのと、同時だった。路上、いちめんに、ぱあっと火焔が燃えたち、雨と思ったのが油であったとわかった。もし、濡れた不審に、立ちどまって、空でも仰いでいたとすれば、当然、火だるまとなっていたに相違ない。
昨日はまた、揚屋五明楼の離れで、いつものように、少女の三味線を肴に、盃を口にはこぼうとして、直感が働き、庭さきへ、その酒をすてて、犬になめさせてみると、果して、キリキリ舞いをして、ぶっ仆れてしまったのであった。
憤怒して、躍起になれば、それが影なき敵の思う壺にはまることになる、と知りつつも、狂四郎は、次第に、苛立たずにはいられなかった。
隠身遁形の秘術をそなえた忍者を、こちらから追うのは、愚であった。対手が、姿をあらわすまで待つよりすべはなかった。待つ忍耐には自信があったし、臆測になやまされる前に、こういう敵の存在をいつとなく仮定して、常にその日その日を、鋭い神経を、本能的に働かせる経験にしてすごして来ているのである。おのれの判断が、あやまっていないと悟った瞬間が、この男の、凄じい力の速度の発揮となるのであった。いわば、氷のような孤独感の中から生じせしめる暴力は、怖れとか怒りとかいった情熱とは全く異った性質のものなのであった。
忍者という、最も虚実転換の素迅い敵によって、狂四郎は、いまだ曽つてない冷静な予断を強いられている。
「先生、どうなさいますか?」
金八の真剣な表情に対して、
「すてておくのだな」
他人事のように云いすてたのも、こういう場合にこそ、人間というやつは、どういう風におのれを知っているかが解るのだな、と、あらためて自分に云いきかせたからであった。
無力であること——それが、どうやら、目下は賢明だ、というさとりであった。行為は、こちらから起さぬことであった。

四

しかし、敵は、あくまでも、その執拗ないやがらせの攻撃を、意外な手段であびせかけることによって、狂四郎の逆上を呼ぼうとした。

矢場の一件があって、四日後の黄昏どきであった。

狂四郎は、押上の竜勝寺へ赴こうとして、南本所出村町を抜けて、法恩寺の高塀が、数町もつづく淋しい往還を辿っていた。

竜勝寺住職空然から、使いがあって、離れに預っているお園という婦人が、病い篤いので、一度見舞ってもらえないか、という報せであった。

すでに狂四郎をこの世に亡いものと思いきめて、その位牌をまもってひとり佗しく生きている女のことであった。

これまでの狂四郎ならば、見舞う意志は動かなかったであろう。その報せをきいた時、美保代もまた同じ病いになやんでいることを思いあわせて、ふと、その気になったのである。

――おれは、おれの知るかぎりの女を、あの世へ見送ってやるつとめを課せられているらしい。

その自嘲で、腰をあげたのであった。

つるべ落しの形容通りに、つい今まで足もとから延びていた影が消えると、急に、あたりは、暗くなっていた。空には、もう、月も星も生れていた。

不意に、行手をさえぎった武士があり、放って来る殺気の凄じさは、思わず、狂四郎に、ふところから、両手を抜き出させたくらいであった。

「眠狂四郎だな」

「左様――」

狂四郎は、こたえつつ、

――どこかの道場主だな。

と、見た。

四十なかばであろうか。風貌も秀れていたし、恰幅も堂々としていた。

殺気の凄じさは、狂四郎だからこそ、それをおそるべきものとしてさとったのである。並の者ならば、殺気すらも感じなかったであろう。その顔つきも尋常であったし、剣にものいわせようとする身構えをとっていたわけではなかった。

「北本所番場町・神道無念流道場・黒崎源八郎。……いざ！」

左手を、刀のくり形へかけて、すっすっと草履を、うしろにぬぎすてた。

――岡田撃剣館の高足だな。

狂四郎はそう察した。

神道無念流をして、江府に熾(さか)んならしめたのは、岡田十松吉利である。神田猿楽町の撃剣館道場は、門弟三千人、試合剣術の隆盛において、比類がなかった。十松吉

利は、資性温厚で、子弟の教育に寛厳宜しきを得、頗る礼儀を尚んで、礼服着刀でなければ、戸外に出ない程、進退儀容を重んじたので、自然、門下も、その風に就いた。

当時にあって、行儀作法の正しい剣客に行き会ったならば、それは神道無念流の一門と考えてよいとされていたくらいである。

十松吉利の遺業は、目下、斎藤弥九郎によって嗣がれているが、この黒崎源八郎は、年齢から見て、おそらく、弥九郎の兄弟子格であろう。

「眠狂四郎！　抜けっ」

右手を、柄にかけて、源八郎は、底力のある声音で、叱咤した。

尋常の果し合いを望んで、同時に抜き合わさんとするものであった。

狂四郎は、しかし、ダラリと両手を垂らしたなり、

「意趣討ちならば、その理由をうかがおう」

と、云った。

「盗人たけだけしい！　拙者の姓名をきけば充分であろう。抜けっ！」

遽に、源八郎の全身から、剣気が噴いた。

「わからぬ。お手前とたたかわねばならぬ理由など――こちらにおぼえのないことだ」

「云わせぬぞっ！」

源八郎は、それまでの、抑えに抑えていた憤怒を、その形相と声に、炸裂させた。

「人非人！」

吶号もろとも、地を蹴って、躍りあがりつつ斬り込んで来た一刀に、狂四郎の五体は、あおられたように、一間余を後へ跳んでいった。

「うぬっ！」

刃風が搏った宙を、源八郎は、むなしい広さに感じて、呻いた。

狂四郎は、なおも、両手を空けたままで、構えをたてなおした敵を睨みかえしたが、

――そうか！

ふいに、頷くところがあった。

贋者のしわざが、この剣客を、こうも激昂させているのだ。

くるっ、と身を翻して、狂四郎は、奔り出した。

「待てっ！」

源八郎は、意外な対手の卑怯な振舞いに、かっとなって、躍起に捕捉をあせった。しかし、あくまで冷静であった者と、極度に昂奮した者との体力の消耗差が、みる

みる距離をひらいてしまった。
源八郎は、足を停めて、なお走りつづけている敵影へ、狂気をみなぎらせた眼光を送った。
一人にとりのこされると、急に、さむざむと、月あかりの寂寞が、源八郎の身のまわりを包んで来た。
「……逃した！」
はらわたをしぼって吐きすてると、刀を腰に納めた。
あれほど、満身に迸らせていた憤怒も殺気も、憑きものが落ちたように、消え失せて、悄然として歩き出していたのである。
寺塀が切れて、横川に架った法恩寺橋へむかう広い往還へ出ると、その広さだけ、月光もあかるくなったようである。
源八郎は、地上に濃いおのが影法師を、ゆっくりと追って行く――。
その姿を、月や星とともに、空から、じっと見おろしている者があった。
狂四郎は、いつの間にか、法恩寺の高塀の中の、阿弥陀堂の屋根の上に立っていたのである。

五

源八郎が、北本所番場町の、土井能登守の下屋敷の向いにある、さして大きくない道場へ戻って、玄関を上ろうとすると、色を失った内弟子の一人が、走り出て来て、
「先生っ！　奥さまが――」
と、叫んだなり、あとの句が告げられずに、驚愕の形相を凍らせた。
源八郎は、すでに、予期していたもののごとく、無言で合点して、妻の居間に入って行った。
居間には、幾炷かの香がうちまぜて焚きこめられていた。
その香炉を置いた経几の前で、緋のしごきで膝をしばった白無垢姿が、俯っ伏していた。顔と、梳き流した黒髪が、血潮に浸っていた。
凝然として、妻の遺骸を見下していた源八郎は、一瞬、顔中の筋肉を、ぴくぴくっと痙攣させたが、激動を奥歯で、嚙み怺えると、廊下へのがれ出て、自身の書斎へ足を向けていた。
狂四郎が、裏路地に彳んで、その書斎の下地窓の隙間から、源八郎の見事な割腹を見とどけたのは、それから、小半刻のちであった。狂四郎は、あえて、妻のあとを慕う者をひきとめようとはしなかった。
そっと、道場から忍び出て来た時、狂四郎は、小者と

女中との私語によって、その悲劇の原因を知っていた。
源八郎が外出していた昨夜、その妻は、素裸にされて、高手小手に縛りあげられ、道場の板の間中央にころがされていたのである。そして、その白い腹部に、墨くろぐろと、「眠狂四郎、これを犯す」と記しのこしてあった、という。
……腕を組んで、夜の道を歩き出した狂四郎は、しかし、贋者に対する激怒を、もはや鎮めていて、こうしたあくどい所業をなすりつけられても、あまんじて受けなければならない暗澹たる気持で、おのれが犯した過去のかずかずの凄惨な光景を、地獄の底を覗くように、心の内に瞶めていたのである。

忍者独白

一

おれには、名前はない。おれは、『甲賀忍組第十七番』と呼ばれている男だ。おれが、死ねば、また新しい第十七番が指命されるだろう。

蜉蝣にも似た儚ない存在だが、忍組全員は、おのが宿運を聊かも疑っては居らぬ。永年鍛えに鍛え、磨きに磨いた忍びの秘術を駆使することにのみ満足し、その目的を成しとげた時の喜悦に、生命を賭けて、微塵も悔いるところはない。すなわち、言語に絶する訓練がそういう人間を、つくりあげたのだ。

おれ自身は、といえば、もともと甲賀衆の家に生れたわけではない。

おれの親爺は、佃島の漁師であった。慶長のむかし、公儀が摂州佃島から、隅田川の川尻にある小島へつれて来た漁師が先祖だから、おれのからだには、骨の髄までも、魚の臭いがしみ込んで居る。

それが、近江国の北部にある甲賀の、山と谷ばかりの僻境につれて行かれて、沐猴宛然のくらしをさせられたのだから、皮肉なものだ。

それ故にこそ、子供の頃の海のくらしは、おれの生涯にとって、唯一のなつかしい思い出となっている。

おれの親爺は、毎夜、江戸城の外濠内銭瓶橋の番人を勤めるかたわら、橋下で網を打って、小沙魚をとり、これを佃煮にするのをなりわいとしていた。小沙魚というのは、普通のだぼ沙魚ではなく、俗におしゃらこ沙魚と称する、一寸前後のやつで、粟粒ほどの卵を四、五十ずつ抱いている。

佃煮は、江戸名物のひとつだが、おれの親爺のつくるのが、江戸一番の美味だと、蔵前の札差連から、折紙をつけられていた。佃煮というものを江戸市中ではじめて売り出した日本橋の料理茶屋伊勢屋でも、通人が来た時だけ、おれの親爺の作ったやつをさし出したものだった。

佃島には、住吉明神がある。その年の初づくりを、その神前に供えるのがならわしであった。そして、それを供えに行くのが、おれの役目であった。神官から、神酒の小樽をいただいて帰る。おれの親爺が、家で待ちかねていて、小樽を受けとり、栓を抜きとって、その芳香を

胸いっぱいに吸い込む——そのうれしそうな顔を眺めて、おれも、うれしかった。父一人子一人であった。

その親爺が、斬り殺された。おれが十四歳の時であった。

伊勢屋に呼ばれて、「蔵前の札差の中で筆頭のおひとが、今年は、江戸で一番目に、初鰹を食べたいと仰言っているので、たのまれてくれぬか」ということだった。

「初鰹飛ぶや江戸橋日本橋」

目に青葉、山ほととぎすの季節になると、初鰹をくらうために、たとえ嬶を質に置いても、その味を試そうとする。分限者は、一日半日をあらそって、人よりさきに口に入れたという自慢の種をつくるべく、千金を惜しまぬ。くだらぬ見栄だが、おれの子供の頃は、この風がひどかった。

で——おれの親爺は、舟を品川沖へこぎ出して、鎌倉もどりの鰹舟を、四昼夜待ちくらしたものだった。そして、やっと、一番もどりの押送舟を見つけて、漕ぎ寄せるや、十両を投げて、初鰹を手に入れた。

ところが、たまたま、夜釣に出ていた屋形舟が、その押送舟を、佃島沖で呼びとめて、一尾を購おうとした。すると、船頭が正直にこれは二番鰹になる、と教えたのだ。屋形の主は、闕所物奉行をつとめていた桑山なにがしという旗本だった。闕所物奉行というのは、幕臣および江戸市中の武家で、罪があって改易になった者の財産のうち調度を官没する役目である。したがって、常に、多くの役得があって、ふところはゆたかであるし、根性も強欲になっている。

桑山は、直ちに、おれの親爺の小舟を追って、豊海橋から掘割を漕ぎのぼって、小網町の鎧の渡し場付近で、やっと、つかまえた。夜があけそめた時刻であった。

勿論、おれの親爺が、承知する筈はない。押問答の揚句、桑山の脅し文句に、おれの親爺が、荒っぽい啖呵を酬いた。

結果は、云わずと知れている。

おれの親爺の死骸は、佃島の沖へすてられたらしい。桑山が、斬りすてたという、なんの証拠ものこらなかった。

しかし、おれは、一年後、その屋形舟を漕いだ船頭の口から、下手人の名前を、はっきりとき出した。それから、さらに一年すぎて、おれは夜釣に出た桑山の屋形舟へ小舟を漕ぎ寄せ、海中へもぐって底穴をあけて、沈めてやり、うろたえている桑山の背中へ、死んだ親爺が愛用していた庖丁をつき刺して、見事に讐を復った。しかし、供の者に顔を見られたおれは、それから数日後

に、捕えられてしまった。
札差や料亭や漁師仲間からの、必死の助命嘆願があったが、ついに、磔の刑が申し渡された。
その日、おれは、牢屋裏門から、裸馬に乗せられて、ひき出され、市中をひきまわされて、刑場へ至るまで、当然のことだが、本当に磔にされるものとばかり思っていた。
ところが、いよいよ罪人柱に縛りつけられた時、陣笠野羽織の役人が寄って来て、「よいか。槍で突かれたら、死んだふりをいたせ。そのまま、目蓋を閉じて命令のあるまで開いてはならぬ」
と、ささやいた。
おれは、何をほざきやがる、と思った。槍で突かれて、くたばらねえ不死身があるもんか。
罪人柱が、地上に立てられるや、おれは、白衣の突手非人たちにむかって、
「しっかりやってくれ！　まごまごして、突きそこなったら、化けて出てやるぞ！」
と、怒鳴ってやった。
縄襷をかけた非人たちは、妙な笑いを泛べ乍ら、槍を把って、左右にわかれた。
まず、おれの目の前一尺のところで、二本の穂先を、交叉させて、
「えい、えい、おーっ！」
と、掛声を放つ。これを見せ槍というのだ。
次に、五度ばかり、素突きを試み、畢って、右側の一人が、脇腹から肩先まで、ぶすっと刺し貫き、ひと捻り捻って、さっと抜きとるや、こんどは左側の者が、同じ方法で突く、という一定の式がある。
おれは、かっと目玉をひき剝いて、胸をはった。
右側の非人が、びゅっと突きあげて来るや、本能的に、全身の筋肉という筋肉が、ひきちぢまった。しかし、穂先は、脇腹をかすめて、背中と罪人柱のあいだへ、すっと挿入されたではないか。ここで、はじめて、おれは、役人のささやきの意味を納得したのであった。
おれは、瞑目して、首を垂れた。
咽喉を貫くと見せかける止め槍があってから、おれは、そのままに、うちすてておかれた。
やがて、夜に入ってから、おれは、罪人柱からおろされて、駕籠にのせられた。
おれが、運ばれたのは、宏壮な大名屋敷であった。
立派な庭を三つばかり通りすぎて、奥まった建物の広縁下へひき据えられて、しばらく待っていると、小柄な、どこといって特長のない人物が、一人で、頭上に立

ちあらわれると、冷やかな微笑をつくって、
「市中をひきまわされ乍ら、顔色も変えなかったそうだの」
と云った。
これが、本丸御老中の寵臣土方縫殿助殿であった。
山鹿素行が、松平越中守定綱のために記した、「武教全書」中に、忍びの定義が述べてある。土方縫殿助殿は、その定義に則って、忍者たり得る者をひそかに、選び出しては、甲賀の山中へ送っていたのである。

二

爾来、十余年、おれは、甲賀の山中ですごした。
忍びの修練が、いかに凄じい努力を必要とするものであるか、これは筆舌には尽せぬ。頭脳方面における諸科目も算えきれぬが、技術の習得となると、さらに、人間の力のぎりぎりの限界まで試されねばならぬ。剣術、居合、白打捕物、砲術、乗馬、水練、変装、隠身（五遁の術）、催眠、気合、飛躍、攀登、速歩、潜伏、断食、不眠、簡易療法、諸国の方言の真似、鳥獣の啼声の真似、そして虚実転換――ちょっと、かぞえただけでも、これだけあり、いずれの術にも長けねばならぬのだ。
脱落は、すなわち、死を意味する。堪え得た者だけが、一人前の忍者として、甲賀山中から出て来ることがゆるされた。
おれは、堪え得て、江戸に戻り、『甲賀忍組第十七番』となった。
その最初に、与えられた任務が、
「榊原左近将監の上屋敷に忍び入って、天皇御璽を奪いとれ」
それであった。
おれは、その命を受けた時、微かな動揺を、胸におぼえた。任務の困難さや重大さに対してではなく、おれは、間者となって、榊原邸にすでに住み込んでいる小夜を想ったからである。おれが、出府して、身を寄せたのは、小夜の家であった。まだ、小夜は、家にいて、おれの身のまわりの世話をしてくれた。おれが、生れてはじめて、親しく接した若い女であった。いつの間にか、小夜の面影は、おれの心の奥底で、忘れられないものとなっていたのだ。
おれは勇躍した。
「もしかすれば、眠狂四郎が一役買って、待ちうけているかも知れぬ。くれぐれも油断するな」
と、首領に忠告され、眠狂四郎という男が最もおそるべき当面の敵であることも充分きき知っていたが、おれ

は、聊かもおのれの成功を疑わなかった。

——小夜さんがいる！　小夜さんと、意を一にし、諜し合せて、事が成らぬ筈がない！

おれは、確信した。

その夜のうちに、おれは、榊原邸へ、忍込みを敢行した。

小夜は、期待通りに、天皇御璽は、左近将監の手より息子の政之助の手に移ったこと、それが、巻物の軸穴に秘められてあることを、紙飛礫によって報せてくれた。

——左近将監め、こちらの挑戦に応じて来たな。

応じて来るとみての挑戦であったのだ。

ここに、甲賀忍組が、公儀庭番によって組織される「親不知組」などとは、質を異にする面目があるのだ。

対手に油断させ、その虚を衝くよりも、対手に、水ももらさぬ警戒をさせておいて、そのはりつめた殺気の中点へふみ入る——これこそ、甲賀忍組の遺憾なき本領と云うべきなのだ。

榊原左近将監ほどの人物となれば、小夜が間者であることを看破せぬ筈はない。小夜一人に、天皇御璽の匿し場所をさぐらせたとて、到底つきとめられるものではない。

小夜が間者であることを、左近将監に看破させておいて、こちらから堂々と挑戦する。左近将監が、凡夫ならば、懼れてこれに応じはすまい。秀抜の賢者なればこそ、自らの智能が禍して、応ずる決意を生む。

よって——おれは、政之助の居間へ、音もなく忍び入った。

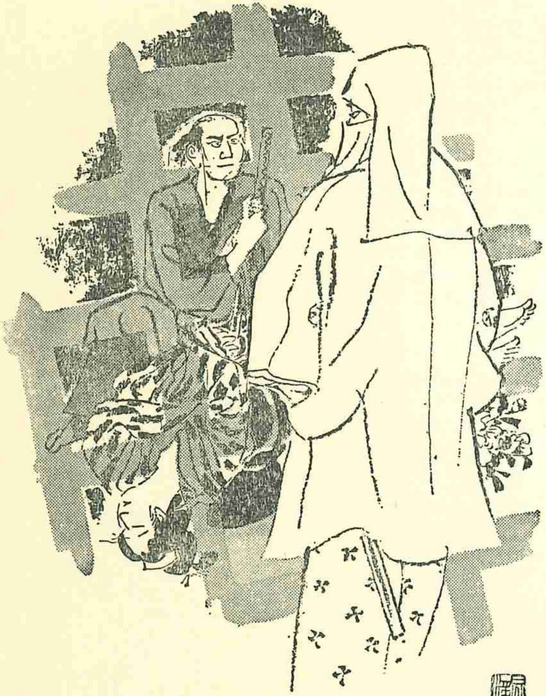
おれは、闇中の褥に、政之助が小夜を抱いているのを見て、はじめて、声なく呻いた。挑戦に応ずるに、これ以上の天晴れな態度はない。すくなくとも、このおれに対しては——。

政之助は、あたかも、小夜に対するおれの心を見透してでもいるかのように、そうして、侵入を待ちかまえていたのだ。

三無の術をもって、枕屏風の陰に入ったおれは、ついに、ここで、忍者にあるまじき五感の乱れを、整えなおすために、無駄な少時を費さねばならなかった。

小夜がすでに犯されたとは、考えられなかった。政之助に、小夜を犯す余裕があったろうとは思われぬ。政之助は、ただ、こちらは、すでにこの女が間者であることを看破しているのだぞ、と無言で威嚇するために、そうしていたのだ。

たとえ、意味は別としても、その威嚇に、ほんのすこしでも、動揺したならば、おれの方の負けなのだ。



が──おれは、やはり人間であった。動揺した。恋する女が、素裸で、若い逞しい男に抱かれている光景に、氷のように冷静ではあり得なかった。

この瞬間、おれは、おのれの左腕一本をすてる覚悟をきめた。

そして、左腕をのばした。巻物を掴んだ。褥の中から、白刃が一閃した。左腕は刎ねられた。

次の刹那、おれは、おれのからだから永久に離れた左腕を、口にくわえて、風のように奔って、次の間にすべり出した。

そのまま、通り魔のごとく、庭を掠めて、屋敷外へ脱出したおれは、傷口の痛みよりも、

──小夜さんは、どうなる？

その懸念で、胸中を疼かせていた。

三

おれが、ここ──羽田漁師町はずれ浦守弁天の裏手にある廃れた一宇の庵室に身をひそめてから、十日すぎた。

手当に専念したおかげで、傷の痛みも殆どなくなっていた。

あらかじめ、かかる場合の隠れ場所として定めておいたので、忍者兵食も用意してあった。干飯、梅干、搗栗、田螺の塩煎、打鮑、鯣、鰹節、干味噌、胡椒など──一月間の蟄居にも充分足るだけのたくわえがあった。

おれが、ここをえらんだのは、やはり、海への郷愁があったからである。夜、月が上ると、多摩川土砂の築いた砂洲のかなたに、くろぐろと引かれた水平線が望まれる。社の竜灯が、光の帯を波間に投げた景色も美しく、それを目じるしに、ゆっくりと過ぎて行く回船の影も、別世界の幻に似て、おれの心をなごませた。

風が送って来る汐の香が、漁師の血のめぐるおれの体軀を、みるみる恢復させたといえる。

ところで──

忍者の間には、忍香というものがある。それを焚けば、匂いは、一町余のかなたまで、漂う。しかも、普通の人々には、街なかのものの匂いとしか感じられぬ。ただ、忍者のみが、それを、意味あるものとしてかぎわけ、風向きを考えて、仲間の所在を知る。べつに、特殊な材料をつかうわけではない。切傷につける蝦蟇の油を、楮に漬して、燃やすだけのことである。一種を、幾途にも使いわけるのが、忍者の法なのである。

おれは、忍香を、今日になって、はじめて、焚いた。自分で出て行くことをせずに仲間をまねこうとしたの

は、忍者は、完璧なる健康をとりもどさない限り、外出をゆるされていないからであった。それに、おれは、当分のあいだ、ここで、海を眺めて、じっとしていたかった。

陽が落ちてから間もなくのことであった。

地底からひびいて来るような忍び笛の音が、おれの耳にとどいた。

──来たな。

おれは、すぐに、これにこたえて、人差指を曲げて、口にあてた。忍び笛とは、口笛のことだが、独特の吹きかたによって、虫の音や風の音や鳥の羽音に似せる。すなわち、対手が、蟋蟀の音で呼べば、こちらは、鈴虫の音で応える、といったあんばいである。

ひそかな跫音が、近づいて来た。

蔀戸ごしに、その姿をみとめて、おれは、はっとなった。

──小夜！

夢にも考えなかったことである。おれが、このあたりにひそんでいることは、小夜にも、あらかじめ報せてはあったが、よもや、無事に、榊原の屋敷から脱出して、たずねて来ようとは、考えられなかった。あるいは、不幸にして、もはやこの世には在るまい、と思って、その寂寥に堪えていたおれだったのだ。

咄嗟に──おれは、仰臥して、重体を装うことにした。

蔀戸が、音もなく開かれ、小夜は冷風とともに入って来ると、ちょっと沈黙をまもって、おれの寝姿を見まもっていたが、一間をへだてて、坐った。

「お加減がわるうございますか？」

「不覚でした」

おれは、蜘蛛の巣だらけの天井を仰いだままで、こたえた。

「いえ、お見事でございました」

おれが、ちらと一瞥をくれると、小夜は、おもてを伏せた。

月光が、蔀をくぐって、小夜のからだを、明暗の縞に染めわけていた。浮きあがった耳朶やあごや項の、繊細な仄白さが、一瞬、おれの息をのませた。

衝動があった。同時に、おれは、はじめて、忍者であるおのれに、微かな焦躁をおぼえずにはいられなかった。

「わたくしが参りましたからには、どうぞ、ゆっくりおやすみなさいませ」

小夜は、やさしく、云った。

おれは、どうして無事に脱出し得たのか、糺そうとしかけて、思い直すと、目蓋をとじた。
およそ、一刻が過ぎたろうか。
おれは、微動もせずに、睡ったふりをつづけた。小夜も、また、同じ位置で、身じろぎもしなかった。
と――。
小夜が、顔を擡げて、そうっと、室内を見まわすのを、おれの薄目はとらえていた。
小夜の視線は、片隅に置かれた兵食の器具類にとめられた。
「……もし……もし……」
小さく、呼びかけて、おれが睡入っているのをたしかめても、小夜は、なお要心して、しばらく、動かなかった。
やがて――。
小夜は、そろりと立って、そこへ寄った。ためらわずに、器具のうちから、桐製の水入筒を掴んだのは、慧眼であった。
それを袂にかくして、こちらを、屹っと見かえった。
――とたんに、小夜は、はっと、呼吸をとめた。
おれが、気配もなく起き上って、大きく、かっと、まなこを瞠いていたからである。
「天皇御璽を、どうなさるのだ？」
「……………」
「こたえられぬなら、こちらで、云い当ててごらんにいれようか。貴女は、それを、榊原政之助に、返そうとされるのだろう」
「………」
――この娘は、褥の中で、素裸で、政之助に抱かれているうちに、心を変えた。
――やはり、そうだったのか！
小夜の姿を見出した瞬間、脳中にひらめいた直感は、不幸にして、適中していた。
ぱっと身をひるがえして、外へのがれ出ようとする小夜へむかって、おれのからだは、野獣のごとく躍った。

四

おれは、小夜をねじ伏せるや、両足で、その双腕を蹦りつけておいて、有無をいわせずに、その上前、下前を撥ねて、柔らかな、ふっくらと弾力のある下腹へ、じかに、ぴたっと掌をおしあてていた。
どう踠（もが）く余地もないこちらの迅業に、小夜は、最大の恥辱に、唇を噛んで、観念しなければならなかった。
裏切り者に対する憤怒は、すこしもなかった。おれの

うちには、欲情だけが、音たてて滾りたっていた。そして、それは、じりじりと蠢く隻手の五指から、迸り出ていた。
……急に、小夜は、ぐったりと、全身から、力を抜いた。
おれは、にたりとすると、ゆっくりと、のしかかろうとした。
その刹那――。
おれは、弾かれたように、小夜の上から飛び立って、一刀を掴んでいた。
外に、人が立っている！
栗形を口に銜えて、抜きはなちざま、蔀戸を蹴開けた。
月光に濡れて、すっきりと浮き立った孤影は、彩りを翳にしつつも、ふしぎな妖冶（ようや）な匂いを漂わせていた。左手には、月のしずくにも似た白い花をひらいた山茶花の一枝を持っていた。
白縮緬の亀屋頭巾のかげの眸子（ひとみ）が、月かげを宿して、美しく澄んでいた。
おれは、かねて噂にきいていた「親不知組」随一の使い手を、眼前にしたのだ、とさとった。
「白鳥主膳だな？」
「いかにも、左様――」
「よくぞ、かぎつけた！」
おれが、気負って叫ぶと、主膳の眸子が、微笑を刷（は）いた。
「べつに、かぎつけたわけではない。今宵、榊原左近将監の屋敷をおとずれてみると、その娘が忍び出て行く様子に、あとを尾けて来たまでのこと――」
「よしっ！　見事、天皇御璽をとりかえしてみろ！」
「もともと、わしが所有の品だ。貴様が無駄骨折ったのを気の毒に思って居る」
「ほざくなっ！」
おれは、おのれの欲情を中断されたことに、狂気のごとく激昂していた。
おれは、勾欄を蹴って、くさむらへ跳ぶと、白刃を、頭上に、舞わした。
その鉈子から、幾万の蜜蜂の羽音にも似た唸りを生じて噴き出た分銅鎖が、一間の宙を、毒蛇のように飛んで、主膳に噛みつこうとした。分銅はただの分銅ではなく、鋭利な鉤になっていた。
間髪の危うさに、呻きを発しつつ主膳は、脚力の限度ぎりぎりで跳ね退って、これを躱（かわ）した。おれもまた、呻きを噛んで、分銅鎖を、びゅうびゅうと、空中を截りま

わして、肉迫して行った。
主膳は、跳び退くとともに抜いた一剣を、地摺りに下げ乍ら、一歩一歩、あとずさって行った。
ついに――。
崩れかかった土塀ぎわまで追いつめた。おれは、主膳が、さっと中段高めの位にとる反撃の構えをみせるや、
――勝った！
と、心中で狂喜の叫びをあげた。
事実、分銅鎖は、主膳の剣の鍔さき二寸あまりのところへ、きりきりっと巻きついたのである。
おれは、忘れたのだ、真剣勝負においては、勝たない前に、勝ったと驕ることが、すなわち自滅をまねくのを――。
おれは、勝ち誇って、鎖を、ぎゅっと一直線にひきしぼった。その刹那をはずさず、主膳は、自ら、両手を、柄から、離したのだ。
――しまった！
よろめいて、あっとなった時にはもうおそかった。主膳が、居合抜きに、抜きとばした脇差は、おれの胸板へ、ふかぶかと突き刺さっていた。
……どうっ、とのけぞって、ぶっ倒れたおれが、そのまま、息絶えたふりをしたのが、せめてもの忍者として後日のなぐさめとなった。おれは主膳が、脇差を抜きとってから、とどめを刺すのではないか、と恐怖した。主膳は、おれの疑似死を、見ぬいたかどうか――とどめを刺そうとはせずに、しずかな足どりで、庵室の中へ、入って行った。
おれは、腰の印籠をはずして、甲賀忍組のみが持つ波布の血と薬草の汁を練りあわせた秘薬を、胸の傷口に塗りつけた。起き上ることはしなかった。動かぬのが、最良の療法であった。主膳は、もはや、おれをどうしようとするものでもなかったから、おれは、いつまでも、そうして倒れていればよかったのだ。
それよりも、おれは、中天に冴えた月を眺め乍ら、べつの目に、庵室の中の光景をありありと映していた。
主膳は、おれがしようとしていたことを、小夜にむかって、成していたのだ。
敗れさった者の惨めな謙譲が、狂気からおれを救っていた。
……主膳が、出て来た。
おれは、目蓋を閉じて、遠ざかる跫音をきき乍ら、
――白鳥主膳を殺すのはこのおれだ！　この世で、おれよりほかはない！
かたく、わが胸に誓いをたてた。

この頃、ほかの場所では、おれを一人前の忍者に鍛えあげた『甲賀忍組第三番』が、贋眠狂四郎に扮して、本物を憤怒させるべく、執拗な、あくどい仕業を、つぎつぎと行なっていたのだ。

孤影両断

一

眠狂四郎に対する贋者の、あくどいいやがらせは、依然として、ひきつづいていた。

そのうち、市中に大きな噂となって拡がったのは、丹波篠山藩主青山和泉守忠成に対する言語道断の狼藉であった。

その日――十二月十三日、すなわち将軍家御営中煤払いの定日、青山家でも、総動員の大掃除をすませ、当主忠成は、伊勢よりとどいた皇大神宮御祓を受け、ならわしによって、微醺をおびたからだを、奥女中たちから胴上げされ、「目出た目出たの若松さまよ、枝も栄えて、葉もしげる」と、うち囃されたご機嫌で、にわかに思いたって、菩提所へ詣でることにしたのであった。

菩提所は、下谷の初音の森の霊梅院にあった。

初音の森は、また鶯谷と呼ばれ、その名のごとく、立春二十日頃から鶯が、美しい囀りをきかせるのであった。

その日は、四序のおわりとは思われぬ、ほっかりとした陽気で、和泉守が、参詣を終えて、境内の甃石を歩んでいると、その初音が、耳にとどいた。

そこで、和泉守は、駕籠に乗らず、そのまま、森の中の道を、ぶらぶらとひろい乍ら、さらに幾声かを愛でようとした。

その時――。

この森の中へ馬を駆け入らせて来る者があった。蹄の音で一騎と知れた。

当然、供の人々は、誰かが責め馬をしているのだな、と思い、行手をさえぎろうと急いで道をふさいだ。

曲り角に建っている藁葺きの稲荷の祠の陰から、さっと出現したのは、黒の着流しの浪人ていの人物であった。

「あいや――」

しばらく、と手を挙げて、とどめようとした者へ、いきなり、だだっと乗りかけざま、びゅっと鞭を打ち下したのは、狂気の沙汰というほかはなかった。

他の士たちが、

「無礼なっ！」

「痴れ者っ！」

と、激昂の叫びを口々から発した時には、もう、眼前を、矢のように飛び過ぎていた。

瞬く間に、供槍、茶弁当、徒士押え（足軽）、供侍、駕籠、長柄傘、挾箱、などを、左右になだれ退かせて、行列の間を走り抜けるや、

「ご免っ！」

鋭い掛声もろとも、白刃を、煌っと宙に閃めかせた。

その下に、和泉守が、恐怖の形相で、立ち竦んでいたのである。

奇怪な曲者が、風のごとくに、という形容がふさわしい迅さで、その場から消え去ったあとに家臣たちが見出したものは、褌ひとつの裸身を顫わせて、木偶宛然に、きょときょとと首をまわしている主君の惨めな状だった。

袴と帯は、足もとに落ち、熨斗目の表着や下着や襦袢は、樹枝へひっかけられてあった。

唖然とするばかりであった。

曲者は、馬上から、一刀をふるって、この悪戯を、凄じい迅業でやってのけてみせたのである。目撃し乍らも、殆ど信じられない手練であった。

なお、その脇差は、半町ばかりさきの樹枝へつりさげてあったが、それに短冊がむすびつけられていた。

「大名の先祖は野に伏し山に伏し」

皮肉な川柳の下に、「眠狂四郎」と署名してあった、という。

二

武部仙十郎が、五明楼の離れへ、眠狂四郎をたずねて来て、

「きいたかの？」

と、その言葉を、久しぶりの出会いの挨拶に代えたのは、それから三日後――昨日の午後のことであった。

眠狂四郎は、苦笑して、

「わたしなら、あんな下手な川柳など作らぬ」

と、こたえた。

青山和泉守は、水野越前守と、遠縁にあたっていた。

噂を耳にした忠邦から、問われて、仙十郎は、即座に、それは贋者の仕業に相違ないとこたえておいたものの、一抹の懸念があって、腰を上げて来てみたのである。

狂四郎の明快な否定に、仙十郎は、さもありなん、とにこにこと頷いてみせて、

「はてさて、武弁殺伐の風が没して二百年ともなれば、

大名も、陰間以下の腰抜けになり果てるものかのう。祖宗が、墓をゆさぶって、哭いておろうて——」
と、云った。
青山家は、三河譜代で、始祖播磨守忠成は、家康が封を関東に移した時、江戸町奉行となり、関東総奉行も兼職した傑物であった。二代伯耆守忠俊は、十四歳より秀忠に仕え、書院番頭となって、大阪前後の役にも目ざましい戦功を樹て、三代将軍にかわるや、土井利勝、酒井忠世とともに、その補傅の任を命じられた。忠俊は、家光が竹千代であった頃から、その教育にあたり、毎朝、千字文の課業をほどこしたが、一点一画のあやまちもゆるさず、たとえ一句を忘れていても、思い出すまで、小机の前から起たせなかった。竹千代は、屡々、俯向いて、泪を、草紙にしたたらせていた、という。当時、竹千代の弟国松（駿河大納言忠長）が、秀忠の偏愛を享けて、兄の方が廃嫡されるのではあるまいか、という風説があったので、忠俊の教育は、いちだんと厳格をきわめたのである。
忠俊の子因幡守宗俊もまた、稀にみる気骨を持った俊髦であった。
父の死後、あらたに書院番に任ぜられた若い宗俊が、はじめて、江戸城に登った日のことであった。
詰所の前を、加判の執政・老中堀田加賀守正盛が、通り過ぎようとして、ふと宗俊の姿をみとめて、傍の者に、
「それは、誰か？」
と、訊ねた。
「青山因幡守にございます」
というこたえに、うなずいた正盛は、
「伯耆守の伜か」
と、云った。
すると、その驕傲の態度を、じっと仰いでいた宗俊が、横の朋輩をかえりみて、
「これは、誰人でござる？」
と、大声で、問うた。
「加賀守殿じゃ」
と、ささやかれた宗俊は、さらに、いちだんと声をはりあげて、
「ああ——勘左衛門の子息か」
と、云いはなった。
一座の人々は、愕然として、色を喪った。宗俊は、ひとり平然自若として、正盛の睥睨を受けとめていた。
正盛が、突然、声をたてて笑って行き過ぎたので、人人は、ほっと胸をなでおろしたことだった。翌日、正盛

が、宗俊を、一躍、書院番頭に任じたのも、流石は、権威無雙の大腹中、として世の称讃するところとなった。
家名を惜しみ、威武に屈せず、剛毅清廉を旨とし、漫に意志を枉げず、義理を弁え、武士道の吟味のためにのみ魂をつらぬかんとした時代の大名たちであった。
この勇気ある祖宗を持つ和泉守忠成が、素浪人一騎に襲撃され、なすところなく、おののいて、素裸にされるにまかせたのである。
世間の嘲罵をあびて、あび過ぎるという次第ではなかった。
「ただ、和泉守が、わが君の従弟にあたるのは、ちとまずいの。……おぬしに、おのれのしわざでないあかしをたててもらわねばなるまいて」
仙十郎は、そう云いのこして、去ったのであった。
……狂四郎は、まだ、その贋者の姿を一度も見てはいない。
これまで出会ったいかなる強敵よりも、手ごわいであろうし、断じて斬らねばならぬ対手であることだけが、わかっていた。
——もう、そろそろ、おれの前にあらわれてもいい頃だが……。
敵が、いかなる意表外のいやがらせをやろうとも、すこしもおどろかぬだけの冷静さを持ちつづけている狂四郎であったが、それにしても、この忍耐は聊か長すぎる。
この離れに寝ころんで、憫然として、その時を待っているのも、あまりに芸がないというものである。
むっくり起き上って、
——そうだ、あの女を見舞ってやらねばならぬ。
と、想念を、そちらへかえた。
押上の竜勝寺の、狂四郎の古巣で寝ているお園という、薄倖の婦人のことであった。狂四郎は、住職の手紙を受けとって一度、赴こうとしかけて、贋者にその妻を犯された黒崎源八郎という剣客に、行手をはばまれ、それなりになっていたのである。
出て行こうとして、無想正宗を、床の間から把った時、女中が、田嶋屋の来訪を告げた。
甲府で、勤番支配松岡大内蔵から、家康作「天照大御神」という途方もない偽物を売りつけられた木場の材木問屋であった。あれ以来、はじめて顔を合せるのであった。
あいかわらず、しぶい好みのなりをした田嶋屋は、柔和な態度で挨拶をすませると、
「早速でございますが、てまえに、貴方様の影をお贈り

下さいますとか——」
「影？」
「はい。お手紙を頂きまして……どういう意味か、二日ばかり、考え込みましたが、一向に、解けませぬので、こりゃアひとつ、ご当人にお会いしておうかがいした方が、手っとり早いと——野暮を承知で、参上仕りました」
狂四郎は、
——またか！
と、苦笑して、その手紙を、所望した。
たった一行、達筆で。
「近日中に、それがしの『影』を呈上。眠狂四郎」
と、あるだけだった。
「おれにも、なんのことやら、わからぬ」
冷やかに云って、手紙をすてると、狂四郎は、もう立ちあがっていた。
「いたずらでございましたか？」
田嶋屋は、眉をひそめて、見あげた。
「ただのいたずらではない。おれから、まちがいなく、おぬしに、自身の影を贈ることになるだろう。贈るまでは、こっちも、おぬしも、影とはいかなるしろものか、見当もつかぬとは、なさけない話だが、こんどの敵は、行動力に於て、おれよりはるかに役者が上だ。おれを踊らせようときめたことは、確実にやってのける。こちらも、その気で踊ってみる。……お笑い草に、待っていてもらおう」

三

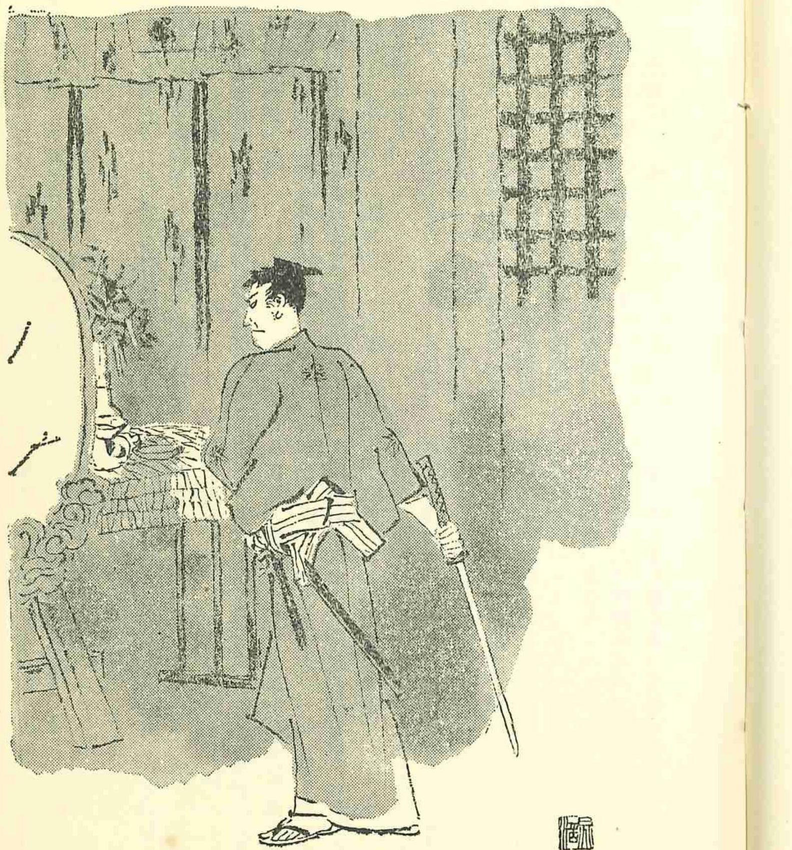
蕭条たる暮色を帯びた野の中のひとすじの往還をひろって行く狂四郎は、いつか、湿った感慨にとらわれていた。

過ぎ去ったいくつかの出来事が、夕靄に溶けて潤んでいる前方——白鷺の棲む疎林や、竜勝寺の屋根がのぞく竹藪に近づくにつれて、ありありと甦って来ずにはいなかった。

左様、四年前の秋、美保代の存在を知った静香が、うちのめされて、とぼとぼとひきかえして来るのに出会ったのは、丁度このあたりであった。

静香は、異常にこわばった表情で、こちらの顔を凝視したが、ふいに、風のように、脇を駆けぬけて行ったものだった。

静香が、左馬右近に犯されたのはその直後であり、哀れにも気が狂い、そして、ついには、自ら生命を断たねばならぬ悲運の道を辿って行ったのだ。



一縷の白煙が、ものうげに、蒼然たる暮色の中にゆれている世界へ、暗い眼眸（まなざし）を送り乍ら、狂四郎は、云おう様のない、生きていることの倦怠感に、次第に脳裡を空虚なものにしようとしていた。

このおり――。

竹藪の陰から、すたすたと急ぎ足に出て来た一人の武士が、街道から曲って来る狂四郎と、赤い前だれをかけた石地蔵の立っている三叉路で、すれちがった。

と――狂四郎が、目ざめたように双眸に冴えた光を生んで、その武士の後姿へ送った。

「おい、その御仁」

ふりかえった武士は、いかにもさりげない面持で、

「は――なにか？」

と、小首をかしげてみせた。

「甲賀忍組と見た」

いきなり、ずばり、とあびせた。

どことい って目立たない、凡庸そのものの武士ていを装っているが、それが本物ならば、当然こちらの異相に怯じけて、胡乱（うろん）臭げにぬすみ見る筈のところを、そうせずに、そ知らぬふりで行き過ぎようとした――それが、かえって、狂四郎のねむっていた神経をぱっとさましたのであった。

「左様でござる」

対手が、平然として頷いてみせたのに苦笑が湧いて、

「わたしが、竜勝寺へ行くとさとって、一足さきに、行っていたのだな？」

「という次第に相成る」

「わたしに対する何かの小細工をして来たと考えてよいのか？」

「見透された。いかにも、然り――」

しゃあしゃあとして、こたえたのである。

瞬間、狂四郎のふところ手の姿から、目に見えぬ凄じい剣気が、放射した。

間髪をいれず、忍者は、かるく、一間を跳んで逃げると、依然たる無表情で云った。

「貴公に挑戦しているのは、それがしではない。貴公の風姿を窃んでいる者は、われらが仲間で随一の手練（てだれ）者――」

ふん――と鼻で嗤って、狂四郎は、歩き出した。

忍者は、その後姿を、じっと見送っていたが、ひくく、

「……危かった！」

と、呟いた。危機が去って、はじめて、よくぞ斬られなかった、と全身に冷汗をおぼえていた。平気を装って

いた自分自身が、ふしぎなくらいであった。

「斬られるかも知れんぞ、第三番のやつ――」

狂四郎の姿が、竹藪の中に入るのを見とどけておいて、歩き出したその男の口からもれたのは、その独語であった。

それより、小半刻ばかりまえのことである。

竜勝寺の離れでは、住職空然と小春吉五郎が、お園の臨終を見まもったのである。

十八歳の春、狂四郎に抱かれて、瀬戸内海の波間へ飛び込んだ際に、すでに死ぬべかりし生命を、呂宋作兵衛という倭寇の頭に救われて、狂四郎の位牌に祈ることで十年をすごして来たのであった。

ようやく、その儚ない生命の残り火も消えはてる時が来たのである。

空然は、吉五郎と顔を見合せて、――もういかんな、と頷いてみせるや、立って行って、床の間にまつられた狂四郎の位牌を持って来た。

「空然さん――」

急に、吉五郎が、気色をあらためて、ささやいた。

「本当のことを、打明けちゃいけませんかね」

「………」

「そうすりゃ、ひょっとして、ここへお見えになるまで、持ちこたえる気力が出て――」

「おそいな、もう――」

空然は、いたましげに、死相濃い寝顔を見下して、かぶりをふった。

「おそうござんすかねえ」

吉五郎は、未練げに、こうしているあいだにも、庭に、狂四郎の跫音でもきこえるのではなかろうか、と振りかえってみたりした。

空然とても、同じ気持であった。しかし、狂四郎があらわれない以上、自分たちの口から、その人が生きていると教えて、垂死（すいし）のたましいに、おそろしい衝撃を与えることはできなかった。その歓喜で、生命の火をもう一度燃えたたせるには、もはや、あまりにもそのからだは冷たくなりすぎていた。

生命の火は、秒刻でかぞえることができるはやさで、しだいに、消え行こうとしていた。そして、その寝顔は、幸せの薄かった、辛い人生から、やっとわかれる時を迎えて、この上もなく安らいだものになっていたのである。

空然は、春葱にも似た白い細い十指に、そっと位牌を握らせてやった。

目蓋が、あるかないかに、顫えた。やや間を置いて、色褪せたくちびるも、かすかに、わなないた。

息をのんで見まもる空然と吉五郎は、その寝顔に、ほんのりと、微笑が刷かれるのをみとめた。

微笑は、そのまま、死顔にのこった。

吉五郎は、がくんと項垂れて、泪をのんだ。

ひくく、誦経をささげた空然は、

「では、葬儀の用意をして参ろう」

と、やおら立って、離れを出て行った。

——可哀そうに……お園さん、眠の旦那は、生きておいでてござんすぜ。もうしばらく待っていなさりゃ、屹度会えたんだ！

胸のうちで、呻いて、両のこぶしを、膝へにじりつけた。

この刹那であった。

突然、背後の障子が開いて、何者かが入って来る気配に、ひょいと視線をまわしかけた吉五郎は、対手の姿をみとめるよりさきに、脾腹へ、強い一撃をくらって、昏倒した。

どれくらいの時刻が移ったか——。

「吉五郎！……おい！」

ぐんと、活がくわえられるとともに、わが名を呼ばれて、はっと息をふきかえした吉五郎は、唸りを発して、はね起きた。

狂四郎の顔が目の前にあるのをみとめても、咄嗟に、錯覚と思って、ふところの匕首を掴んでいた。

やっと、その顔が狂四郎のものにまぎれない、と自身に納得させて、

「旦那！」

と、一言叫んで、大きく喘いだ。

「ひと足おくれた」

狂四郎は、そう云って、お園の死顔へ、目をあてた。

「旦那！　あっしは、いってえ、な、なにをされたんでござんす？」

「おれの敵の一人が、やって来た。お前が目をあけていたら具合がわるいので、ねむらしておいて、何か小細工をやって行ったのだ」

「へえ？」

吉五郎は、わけがわからなかった。

不幸な婦人の逝った部屋へふみ込んで来て、何をして行ったというのか？

……ようやく、心をおちつけて、わずか、一刻の差で、めぐり会えなかったお園の不運に、吉五郎が、唇を噛み乍ら、行燈へ火を入れていると、それまで、黙然と

して、枕頭で、腕を組んでいた狂四郎が、何を思ったか、その腕を解いて、すっと、掛具をもちあげた。

「吉五郎、灯を、ここへ寄せてくれ」

「へい——」

狂四郎は、自分の位牌を握った両手をはなすと、その襟を、ぐいとはだけさせた。

「あっ！」

吉五郎が烈しい驚愕の叫びをあげた。

不透明な白蠟の胸肌に、いつの間にか、墨くろぐろと、左の文字が記されてあったのである。

右の乳房には、「眠狂四郎殿」

左の乳房には、「眠狂四郎より」

そして、隆起と隆起のくぼみには、「今宵子上刻、上野山内忍岡稲荷社前にて、果し合のこと」

忍者の細工とは、これであった。

「ひでえっ！　畜生っ！　なんてえ真似をしやがるんだ！　仏をはずかしめやがって！」

吉五郎が、血相かえて、喚いた。

狂四郎は、表情こそ冷たくそのままであったが、内には、はじめて、贋者に対して勃然たる憤怒を沸騰させていた。

四

忍岡稲荷は、時鐘を鳴りひびかせる鐘楼の西南の低地にあり、穴稲荷あるいは浄雲稲荷とも呼ばれる。

ひろく江戸中の人々に信仰され、昼間の参詣人の数は、大変なものであったが、夜半三更の鐘が鳴り終ったいまは、耿々たる寒月の光をあびて、樹枝ひとつ凍てついたように動かず、寂寞たる冷気に、山はおしつつまれていた。

鳥居をくぐって、すぐ左側の石狐のかたわらに、ひっそりとして彳む黒影もまた、石像と化したように、微動もせずに、対手の来るのを待っている。

これは、贋者の方であった。寸分ちがわぬ風姿乍ら、大小は右の腰に帯びられていた。

不忍の池畔をひろって近づいて来る者の唄声が、遠い地点から、よく徹ってきこえた。

白妙に、雪の振り袖ちらと見た、様の姿のなつかしや、空に知られぬわがおもい、柳に雪のしっぽりと、枝もたわめるその上に、さも美しき白鷺の……

折戸の門の前で、その唄声が、ぴたっと止まるや、鳥居の陰で、黒影も、つと動いた。折戸をひらいて、ゆっくりと入って来た狂四郎は、そこで、ちょっと立ちどま

って、彼方に立つ贋者へ、眸子の矢を射込んだ。
——成程、よく似せた！
すたすたと歩をきざんで、無造作に、たたかうべき位置を占めると、
「稲妻や昨日はひがし今日は西——か。忍者という商売も、御苦労だな。おかげで、こちらは、たっぷり、濡衣をきせられたが、どうやら、今夜で、脱がせてもらえそうだ。あまりいい気持のものではなかったことだけは、つたえておく」
「……………」
「どうした？　声までは似せられぬか。ついでに、自分の声を、他人の口からきかせてもらう愉しみもあって来たのだ」
「……………」
「そうか。啞なら、やむを得ぬ。こんど生れて来る時は、鵺の声をもって来い！」
炳乎として動かぬ、殺気凄じいふたつの眼光が、月明の宙でぶっつかり、いくばくかの沈黙を置いた。
二剣が、鞘から噴いて出たのは、全く同時だった。ともに——これまた全く同じ、地摺り下段の構えであった。

それなりに、地上へ長く影法師を映して、月光に濡れたふたつの黒衣痩身は、じりとも動かず、吐く息すらもみせなかった。
切尖が、殆どふれあわんばかりに、鈍角を描いて、ぴたりと空間に固着した白刃と白刃が、時おり、煌っとひかったのは、月の方が徐々に移って行くためであった。
その月の運行路に中天の老松が在った。
ふっと……月が、その梢にかくれた。
刹那——狂四郎の両足が、大地を蹴った。満身からの気合は、双方の口から、同時に発しられた。
贋狂四郎の手から弾かれたその剣が、白い弧を描いて、背後へ飛んだ。
とともに、贋狂四郎もまた、翼でもあるごとく、後方へ、ひらっと、跳び退った。のみならず、舞い落ちるおのが剣を、ふたたび、さっと掴みとっていた。
次の瞬間、贋狂四郎の五体が翻転して、風のように、石段を駆けのぼるのを見た狂四郎は、
「うぬ！　卑劣っ！」
猛然と、追った。
贋狂四郎は、たちまちに、階を躍りあがって、祠の内へ消えた。狂四郎もまた、その五尺の高処へ飛んで、立った。

は、まさしく、この大鏡のことだったのである。

蔀戸の突き開かれたそこに——正面、半間の距離をもって、敵は、すっくと向い立っていた。
その全身から燃え熾る殺気の凄絶さに、狂四郎は、相討と直感する粛然たる神気のなかに、無想正宗を、真っ向から、斬りおろした。
敵もまた、同じく、狂四郎にむかって、その一剣を、振りくだした。
奇怪——鏘然たる音響とともに、敵影は、ぱっと消えはて、狂四郎は、微傷だに負わず、その場に健在だった。
一瞬の喪神ののち、狂四郎の顔が、自嗤のために、ひき歪んだ。
狂四郎が、真っ二つに断ったのは、巨大なぎやまんの鏡であった。すなわち、狂四郎は、悲惨、それに映ったおのれの影を斬ったのである。
ふたつに割れた鏡面が、うしろのささえで、左右に大きく傾いたまま、床に倒れて砕けるのをまぬがれているのも、あらかじめの工夫とみえた。
「……敗れた！」
はじめて、狂四郎の口から、血をしぼるように、その悲痛な一句が、呟かれた。
贋狂四郎が、豪商田嶋屋へ送ると約束した『影』と

甲賀忍組

¥ 360.
〈検印省略〉

落丁・乱丁の節は
お取替え致します

昭和46年5月15日　発行

著　者　柴田錬三郎
発行者　矢貴東司
印刷者　堀内文治郎
発行所　株式会社　桃源社
〔103〕東京都中央区日本橋蠣殻町1−12
電話（666）4001〜2番
振替東京64351番

（用紙特漉　北越製紙・市川工場）

(分) 0293 (製) 071122 (出) 5180